第五巻

女歌舞伎

殿様勘次

来山

鼓の里

裏表心曲尺

名工柿右衛門

PL Kawatake, Shigetoshi
767 Sewa kyogen kessaku shu
K32
v.5

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏 共編
渥美清太郎

第五卷

世話狂言傑作集

榎本虎彥の卷

東京 春陽堂發行

本卷は著作者の令息たる榎本茂氏の校閲を經たる定本也。是等の脚本を興行上演せんとする者は、必ず氏の承諾を得るを要す。

UNIVERSITY of TORONTO
LIBRARY
MAR 15 1971

PL
767
K32
v.5

目次

女歌舞伎（三幕）……一
殿様勘次（四幕）……八九
來山（一幕）……一七九
鼓の里（一幕）……二〇九
裏表心曲尺（二幕）……二三九
名工柿右衛門（三幕）……三〇七
榎本虎彦略傳……一
卷末に（榎本虎彦著作目錄）……七

挿繪目次

名工柿右衞門（有田皿山丸窯の場）……口繪

女歌舞伎（吉田御殿樂屋の場）……三九頁の前

殿樣勘次（染井大宮寮の場）……一二九頁の前

來山（來山庵の場）……一九一頁の前

鼓の里（鼓師勘兵衞内の場）……二一七頁の前

裏表心曲尺（藤井宮内宅の場）……二四五頁の前

挿繪に就て……本文の前

挿繪に就て

口繪の「名工柿右衞門」は、大正元年書卸の時の寫眞です。その後幾回もやつて、この大詰の窯の所も大分寫實になつて來てゐますが、反て風情がありません。おつうは歌右衞門です。

「女歌舞伎」は、二度目の時の二幕目吉田御殿樂屋の場です。大内藏が歌右衞門、弟子の菊技が福助です。肩の丸の中は、秀調の左近です。左近は、明治四十一年十月の書卸の時は宗十郎です。

「殿樣勘次」は二幕目の染井大宮寮の場です。駿河大納言に化けてゐる菊五郎の殿樣勘次に、大谷友右衞門（當時中村駒助）の莊司左内が槍を付けて、腕を試してゐるところです。

「來山」は書卸の大正三年十一月の歌舞伎座の時の寫眞です。片岡仁左衞門の來山の庵へ、市川松蔦の藝子小ふじが左團次の薩摩武士有村一學に手籠めに遭はうとして逃げ込んで來たところです。

「鼓の里」は、これも亦書卸の大正二年六月歌舞伎座の時のです。守田勘彌の弟子三之助が、尾上菊次郎（當時芙雀）の安房勘兵衞娘倉子と話してゐるところです。

「裏表心曲尺」も大正二年十月歌舞伎座の書卸の時のものです。序幕槇町藤井宮内宅の場で、歌右衞門の娘のおつやと市川中車の松波伊織が差し向ひで二人の間に出來た子の事を話してゐるのです。

女歌舞伎（をんなかぶき）

女歌舞伎

序幕

境町祇園屋の場
待乳山寮の場

役名　大納言烏丸通廣、本多中務少輔忠時、家臣堀口右京、醫者松崎周庵、歌舞伎役者都傳內、同江戸勘八、祇園屋亭主與兵衞、中務室千姫、歌舞伎太夫桐大內藏、同幾島左近、女舞小藤、同八重野、女中おふく、同おきよ、同おちせ、他女中數多等。

祇園屋座敷の場　本舞臺一面の平舞臺、正面上の方四間の處座敷の心にて、向う一間の床の間、掛物、香爐、續いて地袋、塗壁、丸窓、此の向う隅田川の遠見、上手折廻して襖の出入り、下手に境界の仕切緞子張りの障子、此の外廣板椽、手摺、正面下手へ折廻して同じく手摺、向う障子の出

入り、手摺の外中庭の心にて、雪吊りを成したる松の梢を見せ、都て境町の料理茶屋祗園屋座敷の體。此處に女中おふく、おきよの兩人燭臺に燈を點し、煙草盆を運び、客の支度をして居る體。流行唄にて幕開く。

ふく　サア〳〵、是で宜い。時に、おきよさん、あしたから始る彌生町の芝居は、大内藏さんと左近さんの顏合せぢやと、開かぬ前から、えらい評判ぢや御座んせぬか。

きよ　どちらも、名題の歌舞伎の太夫。左近さんはお屋敷方の御贔屓多い其の上に、本多樣の御氣に入り。

ふく　又、大内藏さんは町方に贔屓が多いばかりで無く、第一、藝道の名人。出雲のお國もあれ程では無かつたらうと思ふ位。

きよ　オヤ〳〵、お前は大内藏さんがきつい御贔屓ぢやが、私は又、左近さんが大贔屓ぢや わ いなア。

ふく　何の、お前のは贔屓の引き倒しぢやわいなア。

きよ　お前ぢやとて、矢張り引き倒し仲間ぢやないか。

ふく　さう言うなら、今度見物する時には、大氣張りで遣ひ物をするぞえ。

きよ　私とても、お前に負けては居ぬ。ハテ、遣ひ物は何がよからうか。
ふく　市川屋の蕎麥切か。
きよ　伊勢屋の壽司か。
ふく　それとも、越後屋の呉服ものか。
きよ　いつその事よしにしようか。
ふく　矢つ張り、其の方がよからうわいな。
兩人　ホヽヽ。

ト笑ふ。此の時、下手の襖を開け、女中おちせ出で來りて、

ちせ　お客樣で御座んすぞえ。
ふく　オヤ／＼、もうお越しかえ。

トあわてゝ二人はおちせと共に上手の奥へ入る。合方に成り、下手より亭主與兵衛、羽織、袴にて先きに立ち、烏丸通廣卿、茶筅髷、小袴、羽織、大小の拵へにて出で來り、上手に住ひて、

與兵　生憎今晩は本多樣のお忍び遊びで奥座敷は殘らず塞がり、お氣には召しますまいが、少々の間是にて御辛抱を願ひまする。

通廣　イヤ〱、是で結構ぢや。シテ、其方が申した本多樣とは中務殿か。

與兵　左樣で御座ります。歌舞伎太夫の幾島左近を殊の外の御贔屓で御座いますが、お屋敷には立派な奥樣がおありとの事。何が御不足で、茶屋小屋遊びを遊ばすので御座りませうな。

通廣　サア、身もよくは存ぜぬが、本多殿の奥方は誰あらう、當將軍家の姉君千姫殿とて、最初は豐臣秀頼殿の御臺所であつたが、大阪落城の後、江戸へ歸られて、今の本多殿へ片附かれたのぢや。さう言ふ譯ぢやに依つて、とかく、連合の本多殿、何かに附けて控へ目にして御座る。大方その憂さ晴らしの遊興であらう。

與兵　それで、樣子が分りました。あまり奥樣のよいのもよしあしで御座いますな。

通廣　それはさて置き、大内藏は如何いたした。

與兵　使ひを走せましたれば、程無く見えるで御座りませう。どうぞ御緩りと遊ばして下さりませ。

ト與兵衛挨拶して下手の奥へ入る。

通廣　大内藏が參る間、香でも焚いて待つといたさう。

ト是にて、下座の獨吟に成る。

〽同じ空なる影かと思うて、見ればあやしや、月さへ樣と共に見る目で變る

げな。

ト此の內、通廣卿香爐を前へ出し、懷中より香包を出して焚く。此處へ以前の女中酒肴を持つて出る。よき程に、下手より桐火藏、兵庫番、染物の宿附、歌舞伎太夫の拵へにて、女中おちせ案內して出で來り、女中は引返して直ぐ入る。

大內　通廣樣。

通廣　オヽ、大內藏か。待つて居たぞ。

大內　嘘で御座んせう。

通廣　イヤ、眞ぢや。眞の證據は此の香を見やれ。

ト是にて、大內藏下手へ住ふ。

大內　ホンニ、是は先達て變らぬ契の形見にと、あなたへお上げ申した香。

通廣　肌身離さず所持なして、焦るゝ時は柴舟を焚いて心を慰むる。是が嘘で無い證據ぢや。

大內　嬉しう御座んす。此の上ともに、結んだ契り仇にしては、誓に立てた神佛へ濟まぬぞえ。

通廣　ハテ、それは氣遣ひいたすな。われ等の運が向いて來て、都に歸る曉は二ツ連立つ雁の嬉しい旅路と思はれよ。其の替りに、此の通廣の貧しい暮しを承知か。

大内　それも承知で戀した仲。假令關白樣であらう共、焦る、私ぢや御座んせぬ。そもぬし樣と馴染んだはいつか芝居の歸り道、惡侍に取込められ難儀に及ぶ其處へあなたが御座つて、相手をば追散して下さんした。其のお情が身に染みて初めて覺えた戀ぢやもの。貧苦と富貴は最初から心に置いて御座んせぬ。唯ぬし樣と暮すならどんなに面白からうぞと今から樂んで居りますわいな。

通廣　さて〳〵此方は變り者。われ等が貧苦をすき好み、戀したとは忝い。三千世界に一人の君さま。

大内　テモ憎らしいお口ぢやわいなア。

ト又獨吟に成る。

〽玉の杯底無きとても、迚も契らば二世と結ばん〳〵常陸帶。さて好い仲。

ト此の内兩人よろしく有る。よき程に、下手より女中おちせ案内して都傳内、派手な着附、歌舞伎役者にて出來り、女中は直ぐ引返して入る。

傳内　エヘン〳〵、（ト咳拂をして、）太夫これにおわすか。傳内で御座る。

大内　傳内殿ならかまひませぬ。此方へ入らしやんせ。

傳内　さらば御免なされ。（ト障子を開けて入り、下手に住ひて、）何方かと存じたら、通廣樣、その後はとんと拜顏をいたしませぬが、何時も變らせられいで、重疊に御座りまする。

通廣　此方も健かで恐悅ぢや。

大内　傳内殿。一つ過しなさんせ。

傳内　忝うは御座れども、わしはさうして居られませぬ。此方に用があつて來ました。

大内　ナニ、私に用とはえ。

ト合方に成り、

傳内　通廣樣の御座る前で此方へ意見がましい話、差控へては居たいのぢやが、明日に迫つた芝居の初日、今度は此方の相手は左近。どちらも人氣の太夫株。開かぬ前から町中の評判。イヤ左近ぢや、イヤ〳〵大内藏ぢやと、最屓〳〵の見物が肩肱張つてゐらい息込み、二人に取つては大事の舞臺、其の前方に合間を見ての小隱れは油斷がすぎて氣が知れぬ。嫌でもあらうが、太夫殿。早う芝居へ行つて下され。

大内　私のためを思へばこそ、お前がわざ〳〵來ての意見、忝う御座んす。然し、舞臺に油斷はしませぬ故、安心して居て下さんせ。

傳内　其の安心が出來る位なら、こんなに氣は揉みませぬ。通廣樣にお斷りして、もう一度芝居へ歸つて下され。

通廣　傳内が親切、無にしては惡からう、少しも早う行きやれ。

大内　そんなら、私が歸つて來るまで待つて居て下さんすか。

通廣　ハテ、都育ちのわれ等、雲隱れの月の出るまで氣長に待つて居るであらう。

傳内　通廣樣もあの通りぢや。早う御座れ、

大内　デモたつた今來たばかり。

傳内　ハテマア御座れと言ふに。

ト傳内無理に大内藏を引張つて下手へ入る。

通廣　大内藏が歸つて來るまで斯うして居るも退屈ぢや。好い思ひ寄りがありさうなものぢや。

ト此處へ以前の與兵衞出で來り、

與兵　定めし御退屈で御座いませう。幸ひ數寄屋に釜も懸つて居ますれば、粗茶一服如何で御座りまする。

通廣　それは忝い。さらば案内頼み申す。

與兵　左様なれば斯うお出で下さりませ。

ト與兵衞先に立ち通廣卿附いて上手襖の內へ入る。此の時、松崎周庵坊主頭、醫者の拵へにて下手より出で來りて通廣卿の後姿を眺めて、

周庵　今のは烏丸　通廣卿。お忍びの茶屋遊びと相見えるわい。

ト此の時、下手より勘八、派手な着附、左近の弟子にて出で來りて、

勘八　モシ、周庵樣、よい處で御目にかゝりました。

周庵　誰かと思へば、左近が弟子の勘八。何の用かえ。

勘八　少し物がお聞き申したう御座ります。

周庵　シテ、何を聞かつしやるのぢや。

勘八　他では御座りませぬが、太夫の用で、（ト考へて）ハテ、なんとか申しました。何んでも枇杷葉湯の樣なお名前のお方をお尋ね申して居りますが、誰に聞いても知れませぬ。あなた御存知で御座りまするか。

周庵　それは烏丸　通廣卿であらうな。

勘八　それ〳〵烏丸樣で御座りまする。

周庵　さうして、太夫の用と言ふは、

勘八　手紙をお届け申すので御座ります。

周庵　ナニ、手紙を、（ト思入あつて、）よし〳〵、烏丸卿なれば今一寸出られたが、直に是へお歸りに成る。其の手紙愚老が預かり置いて、お渡しいたさう。

勘八　イヤ、お目にかゝつてお渡しせいと、太夫の言付で御座りますれば。

周庵　ハテ、餘人なら知らぬ事、日頃、太夫と懇意にいたす周庵、氣遣ひには及ばぬ。

勘八　左樣なれば、どうぞお願ひ申しまする。

ト勘八、懐中より左近の文を出して、周庵へ渡す。周庵〆めたと言ふ思入。

周庵　確かに愚老が預かり申した。

勘八　左樣なれば、周庵樣、

周庵　きつと御手渡しいたすであらう。

ト是にて、勘八引返して入る。

周庵　うまいぞ〳〵。通廣卿へ左近の手紙。どんな事が書いてあるか、一寸内見いたさうか。（ト手紙の封じ目をそつとはがし披き見る。）何に〳〵。急ぎ文して申上まゐらせ候さてとや、今宵五ツ時を

合圖に、待乳山の寮にて、お目もじ仕度候間、必らず〳〵お出で下され候やう首尾して待上まゐらせ候、廣樣まいる。御存じより。(ト手紙を讀んで元の通り卷き、封じ目をして、)さては、左近奴、本多殿より拜領の別莊で、通廣卿と忍び會はうとは大膽者。日頃、此の周庵を邪魔者扱ひにいたし、癪に觸る彼奴の素振。此の仕返しを仕てやるには、コリヤ、好いものが手に入つたわい。

ト手紙を懷中する。此の時、下手正面の障子を開け、小藤、染物の着附、歌舞伎女の拵へにて出で來りて、

小藤　周庵樣。殿樣がお立ちで御座んすぞえ。

周庵　南無三、お立ちの前方に申上げる一大事がある。

小藤　今、此處へお出でぢやわいなア。

ト是にて、合方に成り、本多中務、羽織、袴、忍びの形にて、八重野、歌舞伎女の拵へにて刀を持ちて附添ひ、其の後に、茶屋女二人附いて下手正面より出で來る。

中務　周庵、是に居たか。左近が參らぬので、遊興も盡果てた、今宵は是で歸るであらう。

周庵　其の左近の儀について申上げたい事が御座ります。

中務　然らば、是で承はらう。
周庵　恐れながら、お耳を拜借。
　　　　ト周庵、中務の側へ寄り囁く事よろしく。
　　　斯樣な譯で御座りまする。
中務　相手は通廣卿ぢやと申すな。
周庵　御意に御座りまする。
中務　然らば斯樣いたさう。耳を貸しやれ。
　　　　ト中務、周庵に囁く事あつて、
　　　相分つたか。
周庵　ハツ。畏りました。
中務　網は張らねど、計らずも囮にかゝつた烏丸、あはよくば只つた一討。
周庵　エツ。
　　　　ト驚き、中務の面を見る。中務氣を替へて、
中務　憎い女め、シテ、供の用意は、

周庵　ハツ。

八重　殿様の御立。

ト是にて、中務に周庵、女形附いて下手へ入る。此の合方にて、上手より通廣卿先きに女中おふく附いて出で來り、

通廣　亭主が手前結構であつたと申してくりやれ。

ふく　畏りました。

ト女中直に引返し入る。周庵、下手より出で一寸内を覗きて、

周庵　御滯在中の御憂さ晴らし、お忍びの御遊興とは恐れ入りましたな。

通廣　さう言ふ聲は。

周庵　松崎周庵で御座りまする。（ト障子を開けて入る。）

通廣　意外な所で面會いたし、赤面の至りぢや。

周庵　イヤ、何もかも天眼通にて承知の愚老、必ず御氣を措かれますな。卽ち、左近よりのお文、お手渡し仕りまする。

ト文を出して、通廣卿に渡す。

通廣　スリヤ、左近が此の文を貴老へお賴みいたしたか。
周庵　ハツ。
ト是にて、通廣卿は右の文を披見して、袂に入れ、
通廣　モウ、何時であらうな。
周庵　程無く五ッで御座りませう。
通廣　然らば、もう參らずば成るまい。
ト手を鳴らす。奥より女中おちせ出で、
ちせ　御用で御座りますか。
通廣　急いで駕籠を申附けてくりやれ。
ちせ　畏りました。
ト下手へ入る。
周庵　スリヤ、君には是より直に。
通廣　のがれ難ない手紙の面、參らねば相成らぬ。
周庵　然らば、その內、高倉屋敷へ。

通廣　ゆる〳〵話に參られい。

ト此處へおちせ出で來りて、

ちせ　お駕籠は裏口へ廻しまして御座りまする。

通廣　然らば、周庵老。

周庵　御免下さりませ。

トおちせ案内して、通廣卿上手へ入る。

周庵　上首尾〳〵。かう藥が利けば、樂しみなものぢやて。ドレ、愚老もそろ〳〵出かけるといたさう。

ト立ちかゝる。合方に成り、下手より桐大内藏、女中おきよ附いて出で來る。

大内　誰かと思へば、周庵樣。あなたも此處にお出での上からは、定めし御存知で御座りませう。烏丸樣は何處へお越しで御座んすか。それを敎へて下さんせ。

周庵　通廣卿なら、只つた今、待乳山の左近の寮へ、大急ぎでお出でなされた。

大内　何で、彼方が、左近の寮へ。

周庵　ハテ、戀ぢや。左近の文を見ると、其の儘、直に駕籠で參られた。

ト是にて、大内藏は嫉妬の思入よろしく、

大内　それ聞く上は、私も是から待乳山へ。

周庵　デモ、今宵は、此方にも都合がある故、よしにしやれ。

大内　都合があらうが、あるまいが、それに構うて居られぬわいなア。

周庵　さうでもあらうが、今宵は止しにしやれ。（ト止める。）

大内　エヽ、わたしや氣が氣で。

ト振拂うて突くを、道具替りの知らせ。

無いわいなア。

ト下手へ入る。周庵呆れて見送る。此の仕組よろしく。　道具廻る。

待乳山裏離座敷の場　本舞臺下手寄りに二間半の離座敷、常足の二重、藁葺屋根、正面床の間、塗壁、上下共障子、行燈を灯し、脇息、褥を置く、平舞臺上手寄りに奥深く中足二重位の築山、愛

に九尺の人丸堂、前の扉開閉あり、軒に金燈籠を吊し、燈をつける、築山の周圍泉水、正面に石橋、上下樹木の張物にて見切る、都て待乳山下寮離座敷の體。こゝに、千姫、下髮、白地縫模樣の着附にて、上手に住ひ、幾島左近、歌舞伎太夫の拵へにて、下手に住ひ居る。時の鐘、合方にて道具止る。

千姫　今鳴る鐘は、アリヤ、五ツ。もう見えられさうなものぢやなう。

左近　今宵は、境町の料理茶屋へお入りの由を聞きました故、文を差しあげましたれば、程無くお越しで御座りませう。

千姫　シタが、左近や。彼方は妾が事を何と仰しやつてぢやぞや。

左近　ハイ、御前樣の御情は忘れは置かぬと、それは〳〵悅んでゞ御座ります。それも其の筈、誰あらう、將軍家のお姉君樣に戀ひ慕わるゝ彼方こそ、世にも得難き果報なお方。

千姫　それでも、彼方はいつも打解けたお物語はなされぬわいの。

左近　そんな筈は御座りませぬが。

ト考へて、

夫れでは、かう遊ばして御覽じませ。彼方が所持の祕藏の品を何なりと御所望遊ばしませ。

千姫　ほんにさうぢや。男の心を引いて見るには、良い手段。
左近　必ずおぬかり遊ばしまするな。
　　ト此の時、薄き風の音に成り、相圖の礫の音する。
　お越し成されたと見えまする。ドレお迎へ申してまゐりませう。
　　ト左近平舞臺上手へ入る。
千姫　かうも、戀路は果敢無いものか。
　　ト待わびる。此の時、上手より前場の通廣卿、左近に案内されて出で來る。
左近　御前樣お連れ申しました。
千姫　太儀であつた。
左近　わたくしは是で御免を蒙りまする。お歸りは、何時もの切り戸から、よろしう御座りまするか。
　　ト千姫へ思入あつて、
　御ゆるりとお話し遊ばしませ。
　　ト左近下手へ入る。
通廣　左近が文に、駕籠を急がせ參りしが、如何なる御用で御座るよな。

千姫　サア、あなたへ妾が割無き無心、何と御聞き入れは下さりませぬか。
通廣　ハテ、奥方へ一大事頼み申した此の通廣。身に叶ふ事ならば、何なりとお望みあれ。
千姫　左樣なれば、お言葉にあまへ、あなたが御所持の名香を妾にお讓り下さりませ。
通廣　何事の御望みかと思ひの外なる香の御所望。いと安き事では御座れど、仔細あつて、此の香は他人に讓れぬ家の祕藏。是ばかりは御容赦下されい。
千姫　大方さうと存じまして、態と御無心申した名香。その仔細と仰しやるは、言ひ交はした女房より取り替はした戀の形見。何とさうでは御座りませうがな。
通廣　是は又、迷惑な御邪推、決して左樣な譯では御座らぬ。
千姫　イエ〳〵、それに違ひは御座りませぬ。それと知つて、望むはきつい情知らず、綺麗に思ひ諦らめました。其の替り、妾にも心得が御座りまする。
ト思入にて言ふ。
通廣　左程までに御所望なれば、身に替へ難き香なれど、差上ぐるで御座らう。
ト懐中より香包を取出し、千姫に渡す。
千姫　忝う御座りまする。是をあなたと思ひなぞらへ、大事に掛けるで御座りませう。

ト押戴いて、懐中する。

通廣　それはさて置き、奥方へ兼てお話し致した我等が存意、將軍家へ御申し入れ下されしや。如何で御座るな。

千姫　其の儀はお氣遣ひ遊ばしまするな。徳川家より京都への御仕向け改めらるゝ事は素より、あなたが御歸洛御許しの事までも詳しく文に認めて、將軍家の御手許まで差上げ置いて御座りまする。御存知の通り、妾は將軍家の實の姉。其の姉が一期の願ひとあれば、必ず良い御沙汰があるで御座りませう。シタガ通廣樣。お望み叶うた其の時は、是程思ふ此の身の願ひ。なア。

通廣　スリヤ、其の時は、通廣に、不義の契を。

千姫　戀ひ慕はれたが因果ぢやと、お諦らめ下さりませ。

ト扇を開き面を隱す。通廣思入あつて、

通廣　此の通廣を、それ程までにお慕ひ下さる御情、決して忘れは致さねど、何を隱さん、我等には二世と契りし女が御座る。

千姫　エツ。（ト驚き、）シテ、其の女は何處の誰で御座りまする。

通廣　通廣が忍び通へる女、明けて、其の名は申されぬ。

千姫　さては、此の香の出所も。フム。

ト思入。此の時、下手の奥にて、

中務　左近は何處に居るぞ。左近〳〵。

ト烈しく呼ぶ聲聞える。千姫驚きて、

千姫　アノ聲は、確に我夫。

通廣　此處にあつては、御身の大事。

千姫　見られぬ中に、裏口から。

通廣　少しも早う。

ト通廣卿は千姫の手を取り、平舞臺に下り、上手へ行かうとする。此の時、上手よりも人の來る足音する故。

千姫　裏口からも人の足音。

通廣　前後の道を塞がれては、最早、遁るゝに所無し。

ト此の內、千姫は四邊を見廻して、人丸堂を見て、

千姫　幸ひ、あれなる人丸堂。姿を隠すに屈竟の場所。

通廣　然らば、奥方はあれへ。我等はウム。

ト通廣卿は上手樹木の蔭へ入る。千姫は人丸堂の中へ逃込み、燈明を消し、扉をしめる。合方に成り、下手より周庵、雪洞を持ち先にたち、續いて中務、前場の拵へにて、家來揚口右京を從へ出て來りて、

周庵　此處には、誰も居りませぬ。

中務　さては、通廣、早くも逃げ失せ居つたるよな。然し、左近は人丸堂へ隠れる姿を見とめしぞ。周庵老には、彼處へ參り、錠前シカと致して參られい。

周庵　承知致した。

ト周庵、人丸堂の椽へ上り、錠を見つけて、錠前を下す。

中務　右京、近う參れ。

右京　ハヽッ。（ト前へ出る。）

中務　關東の御爲には、目の上の瘤とも思ふ通廣卿、兼て將軍家より内命の旨もあれば、只一討と思ひしに、逃げ失せたるは、殘念至極ぢや。

右京　假令、逃げ失せたればとて、まだ遠くは參りますまい。跡追駈けて引捕へん。

中務　斯る折は、又あるまい。必ず共に侄るまいぞ。

周庵　シテ、是なる鍵は如何いたしませう。

中務　其の鍵は貴老に預け置く。左近めを取逃がさぬやうに致されい。右京參れ。

ト中務に右京、周庵附いて下手へ入る。大內藏は上手より出で、

大內　通廣樣のお跡を慕ひ、急いで此處まで來て見れば、折よく裏口が開いて居た故、はいる事ははいつたれど、勝手知らぬ御庭內。人聲したを心當てに、忍んで窺ふ今の樣子。さては、左近は此の社へ隱れて、錠を下されたか。それにつけても、通廣樣、何處へお隱れなされたやら、エヽ、氣の揉めた事ぢやわいなア、

ト此の時、上手の樹蔭より通廣卿出で來りて、

通廣　通廣は此處に居るが、其方は如何して參りしぞ。

大內　エヽ、どうした處では御座んせぬ。貴方にお怨み申し上げやうと、お跡を追うて參りました。

通廣　其方の怨はさる事ながら、我等が是へ參りしは深い仔細のある事ぢや。

大內　仔細が無うてならうかいなア。私にあれ程堅い約束遊ばしながら、アノ左近と言ひ交はし、人

目を忍ぶお出會はお恨みで御座んすわいなア。

通廣　其方が左近と思ふは誤り。實は通廣が一大事を頼みたる女性にて、決して我等が戀ではないのぢや。

大内　そんなら、左近では御座んせぬか。

通廣　人目に掛るを憚かる御方、今の間に逃がさずば、通廣が大事の破滅。

大内　ナニ。大事の破滅と仰言りまするか。

通廣　如何にも何は兎もあれ、是へ參れ。

大内　シテ、大事と仰言りまするは。

通廣　大事と申すは、余の儀ならず。我等事は謀叛の御不審に依り、江戸へ召されて、はや、三年。屢々伊豆守にも面會なし、朝廷尊敬の名實を明らかにいたすやうと說き聞かせども、何故か將軍家にはお聞き入れ無く、如何はせんと思ふ折柄、さるべき女性に出會ひ、是幸ひと、大事を賴み申した。アノ祉に隱れたるが。卽ち、其の女性なるぞ。

大内　それまでお聞き申せし上は、さつぱり心が晴れました。シタガ、錠前おろしたあの扉、どうして開ける事が出來ませう。

通廣　然らば、扉を打破つて。

大内　イエ〳〵、扉を破る物音に、人が參らば、御身の上。（ト思入あつて、）人に盡すもあなたのため。此處は、私が引受けて、急度お逃がし申しませう。

通廣　スリヤ、其方が働きにて。

大内　一念こもる女の力。キツト仕遂げて見せませう。その代りに、あなたは此處を早う逃げて下さんせ。

通廣　其の志は嬉しけれど、事仕損ずる其の時は、其方に難儀がかゝるであらう。

大内　假令、難儀がかゝらう共、少しも厭ひは御座んせぬ。本多樣が、モシ此處へ引返して來らるゝ時は、折角の御心盡しも水の泡、少しも早う。

通廣　然らば、其方はわれに代り。まさかの時には一命までも。

大内　アイ、棄る心で御座んすわいなア。

通廣　それ程までに、通廣を。

大内　思はいで、何としませう。

ト兩人寄り添ふ。此の時、人の足音する故、

人の來ぬ中、少しも早う。

通廣　然らば、急度頼みしぞ。

ト通廣卿は上手へ入る。合方に成り、下手より周庵急ぎ足にて出で來る。

周庵　今、此方が話して居た相手の男は誰ぢや。

ト是にて、大内藏ギックリしたる思入あつて、

大内　アノ、私が話して居たは。

周庵　サア、誰ぢや。

大内　それは、アノ。

周庵　誰であつたか。

大内　サア、それは。

ト此の時、傳內、前場の拵へにて出で來り、

傳內　わしで御座りまする。

周庵　オヽ、此方は傳內、いつの間に來て居たのぢや。

傳內　太夫が此處へ來たと聞き、あとを附けて來ましたのサ。

周庵　イヤ、此方が話して居たのなら、何も咎める處は無い。シタガ、傳內が是へ參りしは、もつけの幸ひ、愚老は此處に居られぬ餘儀ない急用がある故、何んと傳內、替つて番をしてくれまいか。

傳內　お困りとあるなれば、わしが番をいたしませう。

周庵　ナニ、替つてくれるか。有難い〳〵。然らば、此の鍵は傳內へ預けて置くぞよ。

ト鍵を出す。大內藏是を見て、

大內　其の鍵は妾が預かつて置きませう。

周庵　然らば、其方に預けて置く。本多殿の來らるゝまで、必ず開けては成らぬぞよ。是にて、愚老は引上げると致さう。今にも本多殿が參られたら、宜いやうに取り成して置いてくりやれ。ヤレ〳〵、生き返つたやうぢや。

ト周庵下手へ入る。

大內　傳內殿、忝う御座んした。

傳內　何の其の禮に及ばうぞ。有りやうは、明日の芝居の事に付き、此方に敎へる事があつて、再び祇園屋へ行つた處、急相變へて、是々だと聞くより、直に駈付けて、木蔭で聞けば、此方の難

儀。とんだ狂言をしましたわい。

大内　そんなら、お前は通廣樣の話を聞いて居なさんしたか。

傳内　薄々聞いて居ましたが、必ず心配しなさんな。此方のためには、水火の中へもはいらうと言ふ傳内ぢや。金輪際此の事は人に話す事で御座らぬ。何は、ともあれ、此處は左近の寮。人の來ぬ中少しも早う。

大内　承知で御座んす。傳内殿。見張つて居て下さんせ。

傳内　合點ぢや。

ト傳内下手へ入る。

大内　人目を憚かるお方とあれば。

ト二重の行燈の火を吹き消す。本釣鐘。蟲の音に成り、大内藏再び平舞臺に下り、闇黒を探り歩く體にて、人丸堂の上にあがり、鍵を出し、錠前を開けて、

氣遣ひ無い者で御座んす。此處お開けなされませ。

ト此の時、扉を開けて、千姫顔を出し、

千姫　妾を救うてたもるのか。

大内　四邊に誰も居りませぬ。邪魔の無い中、お逃げなされませ。サア、お手を取りませう。

ト大内藏、千姫の手を取り、平舞臺に來る。

千姬　誰かは知らぬが、此の情忝いぞや。

大內　通廣樣が一大事をお賴みあつたあなたぢやもの。是しきの事に、何のお禮に及びませう。

ト是にて、千姬思入あツて、

千姬　それを知つた此方こそ。扨は、アノ。

大內　通廣樣と言替した者で御座んす。

千姬　スリヤ、其方が通廣樣と。

大內　恥しながら、二世かけて契を結んだ仲で御座んす。

千姬　だまりや〳〵。通廣卿には妾こそ言ひ替はした仲ぢやわいなう。

大內　エヽ、何と仰言りまする。

千姬　彼の卿とは未かけて、變らぬ誓を立てた仲ぢや。それを妨げする者は誰彼の用捨は無い。急度憂き目を見せるぞよ。

大內　スリヤ、あなたは恩を仇で御返しなさるお心か。

千姫　其方如きに恩の仇のと言はる可き妾で無い。後日の覺えに、其方の顏。

大内　あなたのお顏も。

トキツト成る。此處へ下手より傳内走り出で來り、

傳内　早くせぬと本多樣が、是へお出でぢや。

千姫　エツ、コリヤ、此處には。

ト驚き、上手へ行きかゝるを、大内藏留る。此の間に、傳内からみ、一寸だんまり模樣の爭ひあツて、ト、千姫扇子を落し、上手へ逃げてはいる。此の時、正面の書割ボーツと白み、月の上る體傳内扇子を拾ひて、

傳内　今の女が落した扇。

ト大内藏に渡せば、

大内　エヽ、見るも怨みの、

ト言ふた木の頭。

種ぢやわいなア。

ト扇子を見て、恨めしき思入。此の體よろしく合方にて。

幕

二幕目

吉田御殿楽屋の場
同歌舞伎舞臺の場

役名 烏丸通賢卿、本多中務少輔忠時、歌舞伎役者都傳內、同村山又兵衛、同玉川主馬之助、頭取大和屋重助、衣裳方、床山、中務室千姫、桐大內藏、同弟子菊枝　幾島左近、同弟子芳江、奥女中磯浪、同伏屋、同朝霧、同夕凪、同明石、同三吉野、其他腰元大勢。

吉田御殿座敷楽屋の場　本舞臺通し平舞臺、正面上下總て花の丸の金襖、同じ大襴間・舞臺一面に薄縁を敷き詰め、宜き處に衣裳葛籠を横になし、鏡臺を四臺程竝べ、臺の上に鬘を乗せ、小道具、大小等を取り散らしある。都て吉田御殿座敷楽屋の體よろしく。此處に上手に傳內、遠藤武者の顔

を拵へ、其の次に、玉川主馬之助、渡の顔だけして、兩人共部屋着の姿にて、立ち掛り、立廻りの稽古をして居る、此の次に、村山又兵衞、老母の顔だけして、是も部屋着、衣裳方を呼び附け談じて居る、其の下手に、鏡臺一ッ明けて、桐大内藏、臺下、部屋着姿にて、鏡臺の前に坐り、書抜を讀んで居る、傍に菊枝、弟子の拵へ、化粧の支度をして居る、男衆、衣裳附、床山等いづれも派手な着附にて、下手後へ下つて、茶を飲んで居る、此の體よろしく。大小入の鄙地にて幕開く。

傳内　ソラ、ヨイ〳〵〳〵。大きく割つて、ドッコイショで極まるのだ。どうもお前の呼吸が惡い。私は袈裟の首を渡の首だと思つて居るから、お前に後へ引戻され、少し變だと思ふ此處の息を呑込んでくれぬ故、合はぬのぢや。

主馬　お前はさう言ひなさるが、暗闇の立廻りで、おまけに、渡は宵に寐酒を飲み、よく寐入つた處だもの、急に飛び起きての立廻りに、盛遠の息などが何で分るものかい。

傳内　サア、其處が狂言ぢや、少しは嘘でも、面白う見せねばならぬ。

主馬　それでも、わしには此方の樣な誂へは出來ぬわい。

傳内　何んぢや。出來ぬ。コレ、お前も俳優ぢやないか。出來ぬではすむまいが。

主馬　どうせ私は俳優が下手故、お前の樣な譯には行きはせんのさ。

ト主馬之助は彼方を向く。

傳内　勝手にしをれ。

ト傳内も脇を向く。又兵衞聞き兼ねて、仲裁に入る。

又兵　是はしたり、どうしたもの。傳内さんもさう怒らずに、氣長に教へてやらつしやい。又、主馬さんも短氣を出さず、傳内さんの息に合ふやう幾度でも遣り直し、教はるのが、是、藝道の務と言ふものだ。

衣裳　親方、衣裳は是で宜しう御座りますか。

又兵　よくは無いが、今と成つては仕方が無い。それで我慢をして置かう。時に、傳内さん、今の内に御座敷を拜見して來ようぢや御座らぬか、

傳内　イヤ、わたしはもう最前拜見して來ました。

又兵　そんなら、主馬さんはどうぢや。

主馬　傳内さんが行かないなら、お前と一緒に行きませう。

傳内　エヽ、其の臺詞が癪にさはる。

ト立ちかゝるを又兵衞留めて、

又兵　ハテ、若者の言ふ事ぢや。打つちやつて置かつしやれ。(ト振り返りて、)サア、お前方も一緒に御座らぬか。

床山
男衆　ヘイ、お供いたしませう。

ト又兵衞、主馬之助に床山、男衆等附いて下手へはいる。傳内四邊に思入あつて、大内藏に向ひ、

傳内　時に、太夫、今度の芝居は褒めぬ者無い大出來し、相手の左近はひどい不評。見事に此方の勝となり、喜ばねばならぬ處、どうしたものだか、五六日此方は、ふさいでばかり御座らつしやるが、心配事が御座るなら、わしに話してお聞かせなさい。

大内　いつも親切によう尋ねて下さんす。わたしが心の内の苦勞、まア聞いて下さんせ。(ト合方に成る。)お前も知つての通廣樣、此の間の晩、待乳山でお目にかゝつたその翌日、高倉屋敷を引拂ひ、此のあき御殿へお移りなされ、それから後は御文も無く、人は死なうと生きようと、勝手にせよ、との御心かと怨めしいやら悲しいやら、さう言ふ内にも御無事か、お病ひでも出はせぬかと、其の苦勞まで一ツになり、憂身の遣る瀬が御座んせぬ。是を思へば、世の中に、戀程つらいものは無い。(ト菊枝に向ひ、)菊枝なども若い身空、必ず人に戀をしなしやるな。

菊枝　太夫さんのお胸の中、よう察して居りまする。修業中のわたし、そんな心は御座りませぬ。

傳内　わしも通廣樣が此の御殿にと聞いた故、さつきにから、御殿中を聞き合せて見ましたが、中々御番が嚴重で、いつかな逢はれる事ぢやないげな。事によつたら、是とても、此の間の扇子の主がさせる業では無からうか。

大内　それに付けても、通廣樣。お心までが移りはせぬか。

傳内　わからないのは、女の素性。

大内　どうぞ聞きたい。

傳内　ものだなア。

ト兩人よろしく思入。此の時、頭取大和屋重助、袴、着附にて出で來り、

重助　もし太夫さん、もう此の幕が切れるから、早く支度に掛つて下さい。傳内どのも早く衣裳を附けさつしやれ。それから、床山は、頭はどうしたのぢや。衣裳は着附をどうしたのぢや。エヽ、床山は衣裳をどうした。衣裳は床山、イヤ、忙しない〳〵。エヽ、氣の揉める。

ト額の汗を拭ひながら引返してはひる。

傳内　つまらぬ話で邪魔をしました。早く支度にかゝらつしやれ。ドレ、又兵衞さんを呼んで來ようか。

ト傳内下手の奥へはいる。

菊枝　もし、太夫さん、一寸襟を直しませうかえ。

大内　イエ〳〵、わたしが直すわいなア。

ト化粧にかゝる。此の時、止木の音聞え、シャギル。

菊枝　アレもう、切れたさうナ。

大内　切れたとは緣起でも無い。

菊枝　御免なされませ。

大内　手鏡を取つてたも。

菊枝　アイ〳〵、

ト言ひながら、鏡臺の傍を探し居る。

大内　何をしてぞ、早うしや。

ト叱られて、菊枝隣りの鏡臺の上に、のせてある手鏡を取つて、大内藏に渡す。大内藏氣附かずに使つて居る。此の時、上手の奥より幾島左近、染模樣の着附、名古屋帶、紫足袋、女舞の姿。次に芳江、弟子の拵へにて、小道具を持ち、そのあとに、片はづしの奥女中磯浪、伏屋、朝霞、夕凪附

いて出で來り、左近は鏡臺の前へ、奥女中はその左右を取卷いて坐る。

磯浪　時に、左近や、いつも愚はない中に、わけて今日の舞の出來榮へ詞にも言えぬわいの。

伏屋　此方程舞を舞ふ者、江戶はもとより京大阪にも又と二人はあるまいわいナ。

左近　それはあなたがの贔屓目と申すもの、大內藏どのがツイそこで嫌な顏をしてゞ御座んす。

ト大內藏の方を見て、自分の鏡を使つて居る故、ぐツと癪にさわつたる思入。

朝霧　大內藏とやら盆くらとやら、何程上手か知らぬけれど、千姬樣の御前では、歌舞伎太夫は左近一人ぢや。

夕凪　一度御殿へ召されると、歸りには長持幾棹、拜領物で一ぱいぢや。大內藏などもちつとあやかりや。

左近　それと言ふも、殿樣、御前樣、又皆樣の御贔屓故、よう御禮を申上げて下さりませ。其の拜領で思ひ出した、御前樣から戴いた大事の鏡、此の所へ載せて置いたが、見えぬわいナ。

トわざと探す事よろしく。

芳江　盜まれたら、知らぬ事、無くなる譯が御座んせぬ。

ト是にて、菊江はとんだ事をしたと言ふ思入にて、モジ〳〵して居る。左近、芳江思入ある。

まア、呆れた者ぢやわいなア。（ト大内藏の傍へ行き、）もし、太夫さん、此の鏡、誰に斷つて使ひなさんすえ。

ト是にて、大内藏初て心附き、

大内　ほんに、コリヤわたしの鏡では無い。コレ、菊枝、わたしの鏡はどうしやつた。

菊枝　ありやうは、內を出かけに、餘り急いで取り忘れて參りました。

大内　是は粗忽な。サ、早うお返し申しや。

菊枝　ツイ手近にあつた鏡、斷り言うにもどなたも居ず、あとで、おわびをする積りで一寸お借り申しました。どうぞ勘辨して下さんせ。（ト鏡を返してわびる事よろしく。）

芳江　何ぼお前がしほらしく詫言しても、人の物を斷り言はずに使ふ此方、此の後、何をしやるも知れぬ。油斷のならぬ事ぢやわいなア。

菊枝　ソリヤ、此方あまりぢや。是までたゞの一度でも横着な事をした身に覺えのない此の菊枝、油斷のならぬのなんのとは盜みでもする樣で、人の聞えも恥かしい。氣を附けて物を言や。

芳江　コリヤ、をかしいわいなア。盜みする者たけ〴〵しいと、己の横道は棚へ上げ、人前のよいつくろい事、柔和な顏はして居ても、恐ろしい此方の料簡、以後の懲しめ、いつそかうして。

ト前にある鏡を取つて立ち上る。

左近　芳江、待ちや。

芳江　デモ、日頃の恨。（ト言掛けて、心附き、）恨は無けれど、餘り小癪に觸る故。

左近　エヽ、立ち騷いて見つとも無い。控へて居や。

ト是にて、芳江下に居る。左近思入あつて、

大内　大内藏さん、一寸其處まで。

出よと言ひなさるのかえ。

左近　如何にも。

ト合方に成り、兩人前へ出て、

お前も立派な歌舞伎の太夫。其の道一ト通りの心得は知つて居るで御座んせう。鏡は女の魂とて、大切に扱ふもの。分けて、歌舞伎のわざをぎには侍の大小同樣、若しも武士の腰の物に斷りも無く手を附けたら命さわぎであらうぞえ。事は變れど道理は一ツ。お前が使つた私の鏡、その納りはどうつけるので御座んすえ。

大内　お前に何と言はれても、言譯の無いこちらの粗忽。私が手を突いて詫びる程に、どうぞ許して

下さんせ。

左近　イヽエ、お前が詫びた位では濟まされぬ。此の鏡は千姫樣より拜領品。言はゞ彼方の魂ぢや。それを此方の手に掛けて汚した事を表面向き御前樣へ申上げたら、コリヤ大事にならうぞや。

ト是にて、菊枝前へ出で、

菊枝　さう言ふ鏡とは露知らず手をつけたのが私の落度。舞臺の意趣を晴さんと言ひがゝりする喧嘩買ひ、詫言しても聞れぬなら、何處へなりと出ようわいな。

ト腹立たしき思入にて言ふ。左近は取り合はずに頁を呑んで居る。

磯浪　だまつて聞いて居れば、よい事と心得て。

伏屋　左近をさみする憎てい口。

朝霧　私等とても贔屓の太夫。

夕凪　コリヤ、聞き捨てには成らぬわいなア。

菊枝　ならずばどうなとなさんせ。太夫さんは知らぬ事。粗忽の主は此の菊枝。私が相手ぢや、相手で御座んす。（ト聲高に言ふ。）

大內　是はしたり、どうしたもの。爰を何處ぢやと思うて居る。吉田御殿の御座敷ぢやぞや。

菊枝　デモ、餘りで御座んす故。
大内　靜にして居やいなう。（ト制する。）
左近　何と皆さん、あれを御覽じたかえ。
磯浪　揃ひも揃つた。
四人　弟子師匠。ホヽヽヽヽ。

ト聲高に笑ふ事よろしく、此の時奥女中龍田上手より出で、

龍田　磯浪殿、今此處へ御前樣が御出で遊ばしますぞえ。
磯浪　それは大變ぢやわいな。
龍田　尤も役者は部屋着の儘で苦しからぬとの御詞で御座んす。

ト是にて、急に鏡臺を上下へ片寄せ、大内藏、左近、菊枝、芳江等は下手へ、奥女中等は上手へ分れて居竝ぶ。合方に成り、正面の襖を開け、千姫、下髮、裲襠。腰元四人脇息を持て附添ひ出で來り、千姫は眞中へ、腰元は正面へ居竝ぶ。

千姫　コレ左近、妾は芝居の樂屋と言ふ事兼ねて聞いては居たれ共、目に見るのは今が始めて。テモ興のある所ぢやなう。

左近　是は御殿の假の樂屋。眞は至つてむさくろしい粗末な所で御座りまする。
大内　左近の隣りに居るのは、聞き及ぶ大内藏なるか。
千姫　ハツ、お見知り置き下さりませう。
千姫　今日は大儀ぢや。
大内　數なりませぬ私まで、晴の御召に預つて有難う存じまする。
千姫　今日設けのお客と言ふは烏丸通廣卿。積る御憂さ慰めんと思ひ立つたる妾が持成し。尤も是には仔細のある事。此の館は妾が昔大阪より立歸り、暫しの住居に設けし所。其の後本多家へ輿入して住ふ者も無かつたを、今度臺命にて通廣卿の假の宿となされし次第。さすれば妾にも由緣あり、將軍家の御許受けて今日一日の歌舞伎の催し。皆も心を附けたがよいぞや。

ト是にて、大内藏思入あツて、

大内　大納言樣にも御覽とあれば、一入氣をつけ勤めまするで御座りませう。とは言ひ思ひがけない、（ト言ひかけて、心附き。）仕合せに御座りまする。

ト此の内千姫は大内藏が聲を聞いたやうぢやと言ふ思入。

千姫　妾はチト大内藏に尋ねたい事もあれば、磯浪始め女共は遠慮しや。

磯浪　ハッ。

　　ト奥女中下手へ、芳江、菊枝も共に入る。

千姫　左近は苦しう無い。そこに居や。

左近　ハッ。

千姫　大内藏に會ふは今が始めてなるが、聲は確に聞き覺へがあるやうぢや。ハテなア。

　　ト考へる思入。大内藏も聞いた樣な千姫の聲ぢやと言ふ思入にて、

大内　私もどうやら。

　　ト考へる事よろしくあつて、双方一度に思ひ出した體にて、

兩人　オヽ。

　　ト兩人顔見合せ、きつと成る。合方かはり、

大内　恥じながら戀路の妬み、燃え立つ心を抑へ兼ね、目指した宿の夕顔の、花にはあらで口無しの、匂ひばかりを心あて。

千姫　あやめもわかぬ宵闇に、姿は見えぬ夜の鳥、たゞ聲のみを覺えにて、留める袂を振拂ひ。

大内　見失ひたる秋の夜の、月無き怨。

千姫　心の闇。

大内　それにつけて、御前樣へ御覽に入れる品が御座りまする。

千姫　なに、妾に見せる品と言やるは。

　　　ト鏡臺の引出しより前幕の扇を出して、

大内　卽ち是で御座ります。

　　　ト千姫受取て、

千姫　ムヽ。

　　　ト思入。左近寄り添うて、

左近　コリヤ、御前樣の御扇子。

大内　お覺が御座りまするか。

千姫　妾の扇子に相違ない。シテ、此の品は何處で拾うた。

大内　只今仰せの七日前、左近の寮の庭先にて。

千姫　そんならあの夜出合ひたる。

大内　戀の敵と思ひしは。

千姫　さてはそなたでありしよな。

大内　御前樣にておはせしか。

千姫　テモまア意外な。（ト急度なるた。）

大内　アイヤ此のお扇子はお返し申上げまする。

　ト大内藏扇子を差出す。千姫は受取つて妬ましき思入。

千姫　此の禮は追つて遣はすぞえ。（トキッと言ふ。）

左近　さて呆れたと申さうか、法外と申さうか。大内藏風情が大納言家へ戀をするとはとんでもない身の程知らぬも加減のあるもの。まして御前樣と割無き御仲。それを知つた上からはふつつり此の戀捨てゝしまや。

　ト言へ共大内藏は默つて居る故、

千姫　返事をせぬは不得心か。イヤサ猶も彼方に楯を突き意地を通す心なるか。コレ左近、さう沒義道には言はぬものぞ。（ト大内藏に向ひ、）なう大内藏、其方は世界の果報者氏も系圖も無い身を以つて、雲井に近い御方の露の情を受くるは冥加に餘る喜ぞ。それに引替へ妾は又將軍家光の姉と生れ光りある身でありながら、何の因果で其方風情を戀の敵に持つた

る事ぞ。本多中務と言ふ夫なければ苦勞はせぬ。大納言でも關白でも思ふが儘に添うて見せろ。それがならぬは世の聞え人のそしりを氣遣ふ故、そなたにまでも心置く妾が不肖、それに引替へ其方の果報、ても下ざまは羨ましい。併し、所詮は及ばぬ戀、通廣卿の御事はあきらめたがよからうぞや。

大内　そりや御無理ぢや。御前樣、いやしい身でも上ツ方でも戀に變りは御座んせぬ。雲井に高い位貴い御名に眼がくらみ惚れた彼方ぢやないものを。たゞ捨てよと仰言るは御胴慾で御座んすわいなア。

左近　スリヤ、御前樣があれ程に、事をわけて仰言つても、其方はいやぢやと言やるのか。

大内　死なねば直らぬ戀の病、どうぞ許して下さんせ。

左近　御前樣、これでは迚も手のつけ樣が御座りませぬ。

千姫　モウよい〳〵。焦れ〳〵て望み通り焦れ死をするがよい。何ぼ其方が慕ふ共、其通廣卿は妾が手のもの。此の館へ移したは其方の通ひ路絶たんがためぢや。

大内　さては通廣樣を押込め、此の大内藏に憂目を見せ、意趣を晴らす御心ぢやな。

千姫　だまりや、大内藏、押込めとはなんの事。あなたがいとしい夫故に、惡い蟲のつかぬやう、家

來に張番させて置く。大抵でない妾が心勞。それも皆大内藏故、思へば憎い。（ト言ひ掛けて我が身に心附き、怒りを抑へて、）憎からぬ戀の道よなア。

ト優しく言ふ。大内藏は無念の思入よろしくある。此の時磯浪上手より出で來て、

磯浪　ハツ、申上げます。大納言樣にも御出座にてお待兼ねに御座りまする。

千姫　なに、妾をお待兼ねとや。

ト大内藏へ聞えがしに言ふ。

左近　左樣なれば設けの御席へ。

千姫　まゐるであらう。

ト是にて、磯浪は手を叩く。上手より以前の奧女中、腰元皆々出で來る。

左近は妾と一緒に來や。

左近　ハツ。

ト是にて、千姫立ち上がり大内藏を見やり、

千姫　コレ、大内藏、最前も申した通り今日のお客は通廣卿ぢや。一期の見納め。隨分心をつけたがよい。

磯浪　御前様には先づ。
皆々　入らせられませう。

ト唄に成り、千姫先きに奥女中、腰元皆々正面へ入る。左近、大内藏へにつたり思入あつて入る。大内藏あとを見送り立ち上りて、

大内　コリヤ、身を棄てゝも戀の怨みを。

ト言ひかける。菊枝下手より走り出て、

菊枝　太夫樣。勘辨して下さんせ。

トあやまる。大内藏氣を替へて、

大内　オヽ、衣裳方を。
　呼んでたも。

ト言ふを木の頭。

ト此の時以前の傳内、又兵衞、主馬之助、男衆、衣裳方、床山等皆々出て來り、口々に床山、衣裳附を呼ぶ。此の體よろしく拍子幕。

返し

ト幕引付けると誂へにてツナギ。道具出來次第直に引返す。

同歌舞伎舞臺の場　本舞臺平舞臺、中程より上手斜に金襖、花鳥の繪、中程より下手斜に三間の所常足の二重、板羽目の蹴込、二重の正面五色の幕を張り、下手に揚幕の出入り口、平舞臺一面高麗緣の薄縁を敷詰る、都て吉田御殿廣間假舞臺の體。此處に、平舞臺上寄に通廣卿、烏帽子、狩衣、指貫、中啓、下手に千姫、前場の拵へにて、何れも蓙の上に住ひ、奥女中磯浪を始め前場の女中、腰元其の他大奥の女中多勢何れも片外し、打掛姿にて左右に別れて住ひ、左近は千姫の傍に控へる。此の體片シヤギリにて幕開く。

ト直ぐに唄淨瑠璃になり、

〽去る程に、都のほとり鳥羽の里　葎が宿の破れ廂。あるじの老女は衣川、
よる年波に後世願ひ、珠數爪ぐりて歸らるゝ。

ト此の内に村山又兵衛、老女の拵へ、珠數を持て、橋掛より出で來り、

又兵　けふは袈裟が見える筈、御寺を急いで歸りしが、程無く是へ見えるであらう。ドレ待受けませうか。

ト二重上手に控へる。

〽爰に遠藤盛遠と音に聞へし勇者あり。心は猛き武士も、戀には溺る習ひにて包めど何時か穂に出づる、薄尾花を踏分けて、伯母が家をぞ訪づるゝ。

ト此の內、傳內、遠藤武者の拵へ、大小をさし、橋掛りより出で來り、よろしくあつて止る。

〽盛遠門に立ち寄つて、

傳內　伯母御前は內におはすか。

〽音のふ聲に伯母は立ち出で、

又兵　珍らしや甥の殿。折角の入來なれど、けふはちと取込みがある。重ねて來ませ。

〽入らんとなすを引き止め、

傳內　さても情無し。盛遠は早やけふあすの命に追つて御座るぞよ。其の敵は伯母御前よ。

〽渡邊黨の習ひにて敵はかうぞと太刀抜きそばめ、伯母が胸倉むづと取る。

トよろしくあつて、

又兵　コリヤ、わしを何とするぞ。

傳內　伯母御前が一命貰うた。

又兵　テモ理不盡な甥の殿。和主は氣ばし狂うたか。

傳內　氣は違はねど、盛遠こそ戀の病にかゝつて御座る。

ト又兵衞が胸倉取ッたる手をゆるめ、

イカニ伯母御前。盛遠が命助けんと思さば、御身の娘袈裟御前を我が妻に給はるべし。イヤと仰あらば盛遠が冥途の道連れ、伴ひ行かん。

〽返事如何にと眼を怒らせ、肩肱張つて詰め寄する。伯母は魂身に添はず、ガタ〳〵ふるへておわせしが、心を極めて言ひけるやう、

ト此の內兩人よろしくあつて、

又兵　兎にも角にも、和主にかうと見込まれた娘の袈裟、直に此方に進ぜうと言ひたけれ共、今にては渡と言ふ夫ある身。母が說得した上で。

傳內　返事をすると仰言るのか。

又兵　いかにも。

傳內　その挨拶が伯母御の生死。

又兵　後程來ませ。

傳内　急度吉左右待ちまする。

又兵　盛遠。

傳内　伯様御前。

兩人　さらば。

〽詞をつがへて、盛遠は己が宿へと歸り行く。

ト傳内は橋掛へ、又兵衛は上手の後見口へはいる。此の時、上手より奥女中三吉野出で來る。長唄暫時止める。

三吉　申上げます。殿様是へ渡らせられまする。

ト是にて、千姫案外の思入。

千姫　渡らせられずとも、よい事を、テモお物好きな事ぢやな。（ト不興の體。）

通廣　イヤ、都にも知らぬ者無き本多殿。我等もお近附きになり申度し。御斟酌には及び申さぬ。

ト此の時、上手より本多中務、肩衣、袴、小刀にて、前髪の小姓附添ひ出で來る。女中は褥を運び出て、通廣卿の下手へ座を設ける。

中務　御遊興の最中へ無禮の推參。御容赦下されい。
千姫　ようこそ渡らせられました。
通廣　其許が本多殿でおはすよな。我等は烏丸通廣。奥方が今日のお持成し忝う存ずる。
中務　ゆる〳〵御見物下されい。（ト左近に向ひ、）狂言始めさせい。
左近　ハッ。（ト舞臺に向ひて、）ソレ始めませい。

ト指圖する。是にて、又長唄始める。

〽寳にや、芙蓉の眥に丹花の唇麗はしく、姿は野邊の女郎花、人目をよける塗笠の中ぞ床しき袈裟御前。誰が妻菊と聞くさへも、未だ恥かしい森すぎて、何時か我が家の軒近く漸く歩み着き給ふ。

ト此の内大内藏、袈裟御前の拵へ、塗笠を持ち橋掛りより出で來り、道行の振よろしくある。此の間に千姫、左近を呼び、密かに文を出し、是を通廣卿へ差上げよと仕方にて言ひ附ける。左近呑込み文を懷中して上手通廣の後に住ふ。

大内　なう母上。袈裟にてはべるぞや。
〽娘の聲に母刀自は一間を走り出で、

ト又兵衛後見口より出で來りて、

又兵　待兼ねしぞや。是へ〳〵っ

〽奥へ通して聲ひそめ、

其方へ話は山々あれど、差掛つて尋ね度きは、幾程も無い母が命助けようと思やるか。又殺さうと思やるか。

〽思ひも掛けぬ問ひ事に、袈裟は母御を打守り、

大内　知れた事を問せ給ふな。須彌大海より恩多き母御の命を絶んと願ふ、不幸の娘のあるべきか。

又兵　其の詞眞ならば、遠藤武者盛遠に假の契を許してたべ。

大内　スリヤ妾に夫を重ね操を棄てよと仰るのか。

〽驚き給へば母御前は、

ト大内藏は千姫の方をきつと見る。

又兵　けふ甥の盛遠が久し振りで尋ね來て、和御前を宿の妻に寄越せ、いやと言はゞ刺殺さんと白刃を差附け無理難題。事を分けたる言ひ譯もいつかな聞かぬ無法者、否む時は母は素より此方までも殺す奴、一夜の逢瀬は母への情ぞ。

大内　曲も無や。母上、妾には渡と言ふ良人ある身ぞ。何として盛遠殿に會はるべき、許させ給へ。

又兵　そんなら母を見殺しにしやるか。

大内　さら／＼さうでは無けれ共、

又兵　さうでなくば、操を棄てるか。

大内　サア夫れは。

又兵　母を殺すか。

大内　サア。

兩人　サア／＼／＼。

又兵　娘、返事はどうぢやぞいなう。

〽母刀自怒り責めらるゝ。袈裟は思ひに搔き暮れて、何と岩間の流れ水、せかれて咽ぶばかりなり。稍々あつて顏を上げ、

ト此の內左近は千姫の文を誰にも知れぬやう通廣卿の膝の下へ入れる。舞臺にては大内藏急度是を見てよろしく思入あつて決心の體。

大内　なう母上、妾は心を極めて侍る。

又兵　スリヤ盛遠に會うてたもるか。

大内　あな淺間し、天に二ツの日輪おはさず、女に二人の夫無しとは、古へよりの人の道、其の教へを知りながら、晴れての夫と隱し夫、右と左に見較べて、嘘と眞の双面、遊び女のする業か何で妾に出來ようぞ。

ト千姫に當付けて言ふ。又兵衞は呆れたる思入。千姫は愈〻不興の體。

氏系圖と言ふ錦にて汚なき心は包む共、包むに餘る煩惱の不義の匂ひは沈香でも伽羅でもいつかな消えぬぞや。

ト是にて、千姫は自分の惡口と心附きて立腹と共に、中務へ知れては一大事と氣を揉み、左近と顏を見合せ兩人思入よろしくある。

榮華の光りを笠に被て、人の戀を横取りなし、人を見下す眼の中に夜叉の惡相顯はれて、すぎし昔、いとしの夫を焔の中に振棄て逃げ歸られた事までが思ひ出されて、身の毛もよだつ。ても恐ろしい如菩薩樣。

ト惡口する故、後見出て注意する。此方は千姫大いに怒りし體にて、

千姫　大内藏は狂氣せしぞ。左近〳〵。

ト烈しく呼ぶ故、左近文の事は忘れて前へ出る。

左近 ハッ。

千姫 狂言止めさしや。

左近 ハッ。

ト立ち掛るを中務止めて、

中務 止るなく。あれが狂言綺語ぢや。

左近 ハッ。

ト左近當惑の思入よろしく。舞臺にては大内藏愈〻落着たる體にて、

大内 切つない戀の仲をせく情知らず恩知らず、せかれて逢はぬ身になれば、晝は幻、夜は夢、其の夢さへも泣きあかす、夜毎の枕に結びもせず、身も世もあられぬ此の思ひ、此の苦しみは誰が業ぞ、此の苦みは。

ト言ひ掛けて、大内藏卒倒する。最前より心配して居た又兵衞悄りして介抱する。

中務 大内藏には何と致した。

通廣 誰ぞ介抱して遣はせい。

ト立ち上る。是にて、後見口、橋掛りより菊枝を先に渡の拵へしたる主馬之助、頭取重兵衛出て介抱する。千姫は妬ましき思入にて通廣卿の傍へよるを中務隔て、舞臺に落たる文を急度見る。左近右の文を拾ひ逃げんとするを中務取つて押へる。千姫は南無三失敗つたと言ふ思入。此の仕組よろしく木無しにて。

幕

二幕目返し　吉田御殿椽側の場

役名　烏丸通廣卿、將軍德川家光、本多中務忠時、中根伊豫守、堀口右京、近習等。

吉田御殿椽側の場　本舞臺通し中足の二重、六尺の本椽、正面雨戸を〆切り、上下の裾杉戸の

出入り、都て吉田御殿椽側の體。うすき風の音、蟲笛にて幕開く。

ト二重下手の杉戸より茶道雪洞を携へ先に立ち、後より烏丸通廣卿白の着附に小袴、中啓を持つて出で來る。

茶道　月夜なれば、お庭の景色はよい眺めで御座りまするが、生憎、今晩は暗夜にて眞に風情が御座りませぬ。

通廣　イヤ〳〵、月は無く共、千草にすだく蟲の音を聞くが樂しみ、われは此處等をさまよいて興が盡きなば、勝手に臥戸に就くであらう。其方はわれにかまはず休息致せ。

茶道　ハッ、それではお明りは是へ置きまする。御免下さりませ。

ト茶道雪洞を置いて上手へ入る。此の時、前幕の堀口右京、黒の覆面、凜々しき拵へにて平舞臺下手より忍び出で來り、石燈籠の蔭に佇立して窺ふ。日覆には雁が音笛。通廣卿は空を仰ぎて、

通廣　雁の聲が致すな。通廣江戸へ召されてより今年で三度目の秋ぢや。數ふれば月日の立つは早きもの、九重の都をあとに、吾妻の旅に上りしは昨日の樣に思ひしが、秋去り秋來り今日まで永へしが、當館へ移りしより諸事今までとは打つてかはり、守りの人數を數多つけ、いと嚴重なる有樣は近々に命を召されんためか。雲井を渡る雁が音も、心あらばわが便りを悲しき人に傳

へよかし。

ト此の時、右京拔刀にて二重へ上り雪洞の明りを吹き消す。

何奴なるぞ。

ト身構へる。右京切りつける。通廣中啓にて右京の眉間を打ち、左右に立ち別れて急度見得。これより臺詞を言ひながら、闇試合よろしくある。

通廣　われを闇討にせんとする曲者、聞く共名は言ふまじ。關東にはかゝる事もあるべしと兼ねて用心は致したるぞ。通廣が一命は公の道を以つて召さるべし。さもなくば、假令われを害す共この後數多の通廣が京都に跡を絶たじ。それを一々失はゞ、德川の政事は虐政。此の江戸城も狐狸の棲家とならん。眞、通廣如き痴者の跡を絶たんと思うなら、京都への御仕向改められねば相成らぬ。申すも恐れ多けれど、禁裏の御賄とては僅かに二萬三千石、小大名に及ばぬ御高、是が日の本の神の御末の御有樣か。苟も德川將軍君臣の道を正し、尊敬の意を表はされなば惜むに足らぬわが命、まづそれまでは朝廷へ捧げたる通廣ぞ。己等如きに討たれうや。（ト右京を組敷いて、）面體は知れね共、物腰格好まだ三十に成らぬ其方、中々健氣な者、通廣が膽を寒からしめしぞ。汝如き若者がせめて十人京都にあらば、又せん術もあらうものを。彼の弄齋が

謳うた通り、思ふが成らぬで持つた浮世ぢや。ハヽヽヽ。

ト通廣卿は右京を突き放し悠々として上手杉戸の內へ入る。右京は通廣の行きたる方を見送りて、

右京　今宵を期したる大事の君命。不覺を取つたる申譯。イデ此の處で切腹なさん。

ト腹を切らうとする。此の時、中務、袴、一本差、片手に手槍、片手に手燭を持つて下手より出で來り、

中務　コリヤ待て、右京。委細はあれにて聞いたるぞ。

右京　スリヤお聞き遊ばしましたか。

中務　オヽ、日頃は武勇自慢の我も槍を小脇に立ちすくみしぞ。誠忠無二の道廣卿。君を諫めて助けるが、討つに勝つた忠義であらうぞ。

右京　仰せには御座りますれど、上樣には烈しき御氣性、お聞入れが御座りませうや。

中格　兎角はわが胸にある事、氣遣ひいたすな。われは今宵の中に將軍家へ拜謁なし、申上る旨もあり、其方は直に屋敷へ歸れ。

右京　仰せを背くは恐れあれど、君命遂げざる某。おめ／＼お屋敷へ歸られませうや。弱年ながら武士の端くれ、兩刀手ばさむ身の本意相立てたう存じまする。

中務　スリャ其方は何處までも切腹いたす覺悟なるか。

右京　ハッ。此處にては憚りあり、父の墓前で腹かき切り不忠のお詫仕らん。何卒お許し下さりませ。

中務　健氣なり右京、汝が心次第にいたせ。

右京　有難う存じまする、左樣なれば我君樣。

中勘　行け〳〵。

右京　ハッ。

ト右京しほ〳〵として平舞臺下手へはいる。此の時、上手杉戸より中根伊豫守、繼上下、一刀にて出で來りて、

伊豫　それにおわすは本多殿か。

中務　さう言ふは伊豫殿。

伊豫　唯今是へ上樣のお忍びで御座るぞ。

中務　ナニお忍びとな。

ト此の時、正面の雨戸を三間程あける、二重正面張り壁、爰に家光、羽織、袴、小刀、繼上下の近

習二人、一人は刀、一人は手雪洞を持ち附添ひ居る。

家光　今宵の首尾心許無く是まで忍びでまゐつた。シテ、彼の一義は如何ぢや。

中務　不覺を取つて御座りまする。

家光　左樣に彼の卿は武勇勝れた方であるか。

中務　アイヤ武勇に恐れは致さねど、正義に向う刃は御座りませぬ。

家光　何と申す。

ト合方になり、

中務　朝廷尊敬の御爲には命を惜まぬ國家の忠臣、討取るに忍びませぬ。況んや忠時が帶せし刀は曇を生じ、物の役に相立ちませぬ。今日限り某へお暇下し給はる樣、何卒願ひ奉る。

家光　仕損じたる面目なさに退身願ふはさる事ながら、心得難き汝が言葉、仔細ぞ有らん、包まず語れ。

中務　アイヤ、忠時が身の恥辱、お聞きに入るゝは憚り有り、何事もお尋ね無く此のまゝお暇下さらば有難う存じまする。

伊豫　君へ直々の言上憚りが御座るなら、某へ内々にて仰せきけ下されい。

中務　忝うは御座れ共、某が一家の私事お話は相成りませぬ。

ト是にて、家光思入あつて、

家光　其方達は暫時遠慮せい。

伊豫
近習　ハッ。

ト伊豫守は近習両人と上手に入る。

家光　是にて餘人を交えざる身内同士ぢや。其方が内證われへ話して聞かせい。

ト打解けて言ふ。

中務　其の御懇の御言故に猶更ら申上げられませぬ。

家光　さては其方が妻の事か。

中務　ハッ。

ト平伏する。合方變り家光思入あつて、

家光　此の程より内々にて通廣御歸洛の儀をわれへ申迫る故、いかなれば斯くまでに心を盡さるゝ事なるかと密かに疑ひたるが、今日大奥にての噂を聞けば、桐大内藏が戀の意恨を狂言の言葉によそへて千姫殿を諷せしと申す事。さては姫には、彼の卿に欺かれて御座つたかと、始めてわ

中務　れも心附きしが、其の不義の相手をば何故其方はかばい申すぞ。

中務　イヽヤ、通廣卿に汚れたる心おはさぬは、此の文にて相知れまする。

ト懐中の手紙を差出せば家光は見て、

家光　言はうやう無い姉君の亂行、徳川の家の恥辱、キット成敗なさでは叶はぬ。

ト立腹の思入にて手紙を中務にかへす。

中務　アイヤ、妻の成敗は此の忠時が仕りまする、不貞の妻が血汐にて刀の曇り洗ふのが武士たるものゝ意地なれど、君には御一人の姉君なり、常より御愛慕深き御仲。武士の意地が立てばとて、君へ嘆きをかける時は主從の道相立たず、進退谷まつたる某が願ひと申すは外ならず、通廣卿歸洛の御許し、又京都への御仕向改めさせらるゝやう、此の兩條御聞き濟みの程願はしう存じまする。

家光　思ひ込んだる其の願ひ、シテ、假に家光が聞き濟むと申しなば、其方の道は相立つか。

中務　兩條お許しあるに於ては是わが妻が豫ねての願ひ、即ち、叶ひ申せしなり。一旦不義の戀にくらみ、あらぬ方へ迷ひし共、天下の賢才を愛し、朝廷尊敬の志深く、徳川家の御爲にこよなき功を立てたる千姫、討つべき刃は御座りませぬ。さすれば、君にも御連技を失ひ給ふお嘆きな

く、紅葉山の御廟所に眠らせ給ふ御方の御夢驚かす事も無く、某が家來の道も全うさるゝと申すもの。

家光　シテ又其方の武士道はいかゞ致して相立つぞ。

中務　某は通廣卿を打損じたる不覺の御詫、前にも申上ぐる如くお暇給はる心故、最早兩刀はたばさみませぬ。

ト是にて、家光思入あつて、

家光　忠勝以來傳へたる武士道棄てゝのわれへの奉公。家光禮を言ふぞよ。

ト家光よろしくある。中務は懷中の手紙を出して、

中務　此の上は跡に殘らぬやう。

ト引破り雪洞の火にて燒捨てる。家光は手を鳴らす。上手より以前の伊豫守と近習出で來る。

家光　伊豫。其方は是より直ちに伊豆守が屋敷へ赴き、千姫が願ひにより烏丸通廣卿歸洛の儀聞き屆けた。又京都の御賄自今三十萬石差上ぐるやう、此の兩條直に取はからへと申し傳へい。

伊豫　委細かしこまりました。

家光　千姫が願ひと言ふ事失念致すな。

伊豫　ハッ。

伊豫　スリヤ、十層倍にあまりたる御增高。

家光　京都にても御滿足であらうな。

中務　ハッ。千代田のお城は萬々歳。

家光　シテ、其方は是より如何いたすぞ。

中務　世を棄て坊主の雲水に。

家光　任せて諸國を行脚いたすか。

中務　ハ、ッ。

ト平伏するを木の頭。兩人氣味合の思入あつて。

拍子幕

三幕目　桐大內藏宅の場

役名　烏丸通廣卿、醫者松崎周庵、歌舞伎役者都傳內、頭取大和屋重兵衞、供

侍、歌舞伎太夫桐大内藏、弟子菊枝、同弟子玉枝。

桐大内藏宅の場　本舞臺四間の間常足の二重、廂、椽側附、正面上の方床の間、掛物、籠、花活に菊の花を入れ、續いて地袋、違ひ棚の上に小鼓を飾り、其の次に襖の出入り上手の軒に風鈴、二重よき處に爐を切り、自在に吊り釜、小机の上に書抜其の他茶道具、煙草盆等を備へ置く、上手に桐の立木、葉の落ちる誂へ、此の向う大川を見せたる朝の背景にて見切る、下手に枝折門、建仁寺垣、都て桐大内藏が濱町の住宅の體。此處に菊枝、島田髷、染物の着附にて三味線を彈き、玉枝は踊の稽古をして居る。端唄にて幕開く。

〽夕さみしき通ひ路、戀に朽ちなん袖の港の捨小舟、月はもとより隅田川、流れ〳〵ていざ言問はん都鳥。

ト玉枝踊る事よろしく。

菊枝　玉ちやん、夫れでは惡う御座んすぞえ、袖の港のと言ふ所はかう云ふ恰好に、ゆかねばなりませぬ。（ト菊枝踊つて見せる。）サア、も一度今の所をやつて御覽。

玉枝　アイ〳〵。（ト踊る事よろしく。）

菊枝　それでよう御座んす。其の振を忘れては成りません。

玉枝　有難う御座んす。

ト合方に成り、奥より傳內、好みの着附、羽織にて出で來り、

傳內　朝からもうお稽古かい。

菊枝　太夫さんの名代に私が稽古して居た處で御座んす。（ト玉枝に向ひて、）玉ちやん、三味線をしまつてお置きよ。

玉枝　アイ〳〵。

ト玉枝は三味線を持つて奥へ入る。兩人下手へ住ふ。

傳內　今朝太夫の言傳に太夫元まで行つて來たが、私が來た事を太夫へ知らせて下されい。

菊枝　一寸此處で待つて居て下さんせ。

ト立ちかゝる。此の時上手の奥にて、

大內　傳內さんが來なさんしたら、今其處へ行きますぞえ。

ト大內藏、玉枝に手を引かれて出て、

オヽ、傳內さん、御苦勞で御座んす。とても此の體では勤まりませぬが、太夫元の挨拶はどうで御座んした。

傳內　されば、太夫元も餘程困つた樣子で御座つた。代りと言つては、左近より外には無いが、常からの折合ひと言ひ、殊に昨日の御殿のいきさつに、左近へ手を摺り、頭を下げ頼んだ所が、どうあらうか。マア、何にしろ一應は話して見ようと言つてゞ御座つた。

菊枝　モシ太夫樣。私にお前の代りをば勤めさせて下さりませ。

太夫　何として其方の未熟でわしの代りが勤まらうぞ。傳內どのゝ手前もある。テモ、無遠慮な子ぢやわいな。

菊枝　其の未熟も知つては居れど、お前の病氣を案じる故、身の程知らぬ私のお願ひ、どうぞ許して下さりませ。

大內　又しても及ばぬ事、第一、太夫元さんが何で承知をなさらうぞ。

傳內　夫れにつけても、左近の挨拶を早う聞きたいものぢやわい。

ト皆々當惑の思入。此の時前幕の頭取大和屋重兵衛奥より出で來りて、

重兵　御免下さりませ。

傳內　オヽ、重兵衛さん、お前さんの來るのを待つて居ました。

重兵　傳內さん、左近の方はけんもほろゝの挨拶ぢや。夫れにつけても、今陰で聞いて居りやア、菊

傳内　枝さんが師匠思ひ、涙が出るやうな美しい話。コリヤモウ、他人の手を借りるよりは、菊枝さんに勤めさせて下さりませ。其處で、太夫元の方は私が内意を聞いて來ました故、大丈夫で御座ります。

大内　とは言へ、此の子の未熟では。

重兵　重兵衛さん、よく計らつて下すつた。さう言ふ譯なら、わしが後見をして、舞臺でヤンヤと言はせる故、安心したがよう御座るぞや。

傳内　ハテ、後見には傳内どのが附いて御座る故、少しも心配は入りませぬ。

菊枝　サア、是で代りの話は極つた。菊枝さん、悦ばつしやれ。

重兵　是も皆師匠のお蔭、有難う御座ります。

傳内　話が極まつたら、菊枝さんは私が連れてゆきませう。

菊枝　成程、稽古の都合もあるから、先へ行きなさい。私も直にゆきますから。

大内　アイ〳〵。（ト大内藏に向ひ、）太夫さん、行つて參ります。體を大切にしなさんせ。

菊枝　後の事を氣遣はず、早う行きや。（ト書拔を取つて、）ソレ、書拔を持つて行きや。

イヽエ、臺詞は空で覺えて居ます。

大内　それでも大役ぢや、ヨウ臺詞をくつて置きや。
菊枝　ではお借り申して參ります。
重兵　サア、菊枝さん、行きませう。

ト重兵衞は菊枝を連れて奥へ入る。

玉枝　モシ太夫さん、お藥をこしらへませうかえ。
大内　太儀ながら、さうしてくりや。
玉枝　アイ〳〵。

ト玉枝は奥へ入る。是より床の淨るりに成り、

へとつかは立つて入りにける。跡見送りて大内藏は心に餘る嬉しさを、包み兼ねたる師弟のよしみ。

大内　幼い時から仕込んだ菊枝、太夫元の手前を兼ね叱つては遣つたもの丶、師匠の替りを勤めるまでに成つたかと思へば、わたしや心で嬉しう御座んす。
傳内　イヤ、わしも斯んな嬉しい事は御座らぬ。何しろ年がゆかぬ故、此方の目には未熟の樣にも見えやうが、どうして〳〵行末は、立派な者になるに違ひは御座らぬぞや。時に、太夫、こなた

の病氣は當座の煩ひ、四五日經てば全快せうから、案じる事は御座らぬが、それより遙か大きな病を此方は求めさつしやつたの。

大内　ナニ、大きな病とは。

ト是を床の合方に成り、

傳内　昨日御殿の狂言に、此方が袈裟の臺詞にて千姫樣の內證を當こすつた大膽さ。不斷の柔和には似もやらず、樂屋で聞いて居た私までが思はず冷汗をかきました。花のやうなお顏でも、心は如夜叉の千姫樣。昨日の祟りはきつと今にあるであらうと、わたしや心配でならぬわい。

大内　どんな祟りがあらうとも、少しも厭はぬ覺悟で御座んす。それに私も思ふ存分怨を言うた上からは、早う死にたう御座んすわいな。

〽女心の遣瀨なく絕入る嘆きに傳內も萎るゝ心引立てゝ、

傳内　尤もぢや〳〵。誰しも戀は切無いもの。私の樣な者ですら、若い時には覺えが御座る。然し、其の苦しい所を我慢して月日が立てば、初めには死ぬる程の苦しみも、後には馴れて常となり、どうやらかうやら生きて居られる。此方も心を取り直し盛りの花をわれから散らさず、行末ある身を歌舞伎に盡し美名を末世に殘して下され。赤の他人のわしなれど、舞臺の上では娘

と呼び。

〽父と言はれて恩愛の絆は、變らぬ眞の血筋。

親子の樣に思つて居るのぢや。此の後ともに悲しい話をわしに聞かせて下さるな。

〽親身も及ばぬ傳内が意見に、大内藏氣を取り直し、

大内　嬉しう御座んす。傳内どの、お前の意見に從つて、ふつつり心を入れ替へませう。

傳内　そりや此方眞實か。

大内　通廓樣の事は、わたしやあきらめましたわいな。

傳内　よく聞き入れて下すつた。此の上は事無い內暫く江戸を去らねばならぬ。それはわたしが太夫元とよく相談をしませうわい。

〽先から先へ傳内が心を奥の一間より、玉枝は香箱携へて二人の前へ出來り、

ト奥より玉枝蒔繪の筐を持つて出で來りて、

玉枝　つひに見馴れぬお使ひが太夫樣へ此の箱をあげてくれいと言ひ置いて、其の儘歸りましたわいなア。

大内　シテ、其のお使ひはどちらからぢや。

玉枝　烏丸様で御座んす。箱は此處へ置いて行きますぞえ。

ト奥へ入る。

〽取る手おそしと打見れば、内ぞゆかしき高蒔繪。

大内　そんなら是を通廣樣から。フム。

〽開けんとするを止むる傳内。

傳内　其の中のは何か知らぬが、折角思ひあきらめた彼方から寄越した物、中を見ずと其の儘に返した方がよからうぞや。

大内　さうでもあらうが、一寸蓋を開けさせて下さんせ。

〽心ときめき蓋取れば、あたりに薫る香包。恨めしさうに打守り、

傳内殿、見て下さんせ。忘れもせぬ今年の彌生、通廣樣と言ひ交はし、戀の形見と此の香を彼方へあげしが、八日前お目にかゝつた其の時に其方が祕藏の名香故、桐壺と名を付けて、肌身離さず所持すると聞いた時の悦びが失せもやらぬに、ハヤ今朝。

〽秋風立ちて捨てられし扇の怨の夫れならで、

夕は主の枕に薫り、朝に灰とすがれゆく。

〽哀れの果てやと掻きくどく。聞く傳内も慰め兼ね、顔をそむけて居たりしが、氣を取り直し涙を拭ひ、

傳内　オヽ、話に實が入り肝腎の稽古を見てやるのを忘れて居た。私はもう行く程に、こなた氣をしつかりと持つて御座れよ。

大内　跡の事は氣にかけず、早ういて見てやつて下さんせ。傳内殿、何分頼みましたぞや。

傳内　わしが確かり請合ひました。いづれ歸りに又寄ります。

〽眞實こめし言の葉をあとに殘して出て行く。

ト傳内奥へ入る。

〽後姿を打ち眺め、涙にうるむ目を押拭ひ、

大内　傳内殿や菊枝までが親身も及ばぬ親切さ、忝うて涙がこぼれる。其の親切に引換へて、戀の形見の此の香まで返して寄越した通廣樣、かねての契りも皆僞り、今は見るさへいやな此の香、烟とすれば心は殘らぬ。

〽たゝう諸共火の中へ投げ入るれば、立ちのぼる香の煙に大内藏は暫し茫然たる折から、技折戸開けて通廣卿、椽先に佇み給ひ、

ト此の内、大内藏香包諸共に火の中へくべる。煙立ちて籠花活の菊萎れ、大内藏ウツとりとなる。

此の時、烏丸通廣卿、烏帽子、狩衣、指貫にて供侍を從へて出で來り、枝折戸を開けて、

通廣　オヽ、大内藏、これにか。烏丸通廣ぢや。

〽言ふに此方は心付き、見るもいぶせき御姿と立たんとするを止むる通廣。

ト大内藏驚き奥へゆかんとするを通廣止めて、

通廣　コリヤ、大内藏、そなたは何處へ。

大内　心の變つた通廣樣に詞かはすもいやで御座んす。

通廣　其の腹立は無理ならねど、今朝我等が來りしは其方に詫をなさんがためぢや。

大内　イエ〱、それは僞りぢや。お公家樣は色手歌と諺にも言ふ通り女をだますがきついお上手。もう大概にして下さんせ。

通廣　神以つて歎かぬ。われ等が意中を一通り聞いてくりやれ。大納言通廣が女の袖に取縋り大事を圖りしと後日の批判思はぬでは無けれども、是朝廷の御爲と千姫に大事を賴み色情の誘惑を愼みたるわれ等が苦心、其方が推量の及ばぬ所ぢや。きのふ御身が千姫の前にて怨を述べたる時は、聞き居るわれ等が心の中刺されるやうに思ひしぞ。それを忍びし甲斐あつて、今度京都の

大内　御賄三十萬石に增高せられ、また此の通廣今朝歸洛を許されたるぞ。

通廣　そんなら、あなたのお心は變つたのでは御座んせぬか。

大内　何の其方に噓僞り、神かけ變らぬ仲では無いか。

通廣　そんなら、眞實。

大内　盡未來まで變りはせぬぞ。

通廣　エヽ、嬉しう御座んすわいな。

〽俄かにかわる喜びの笑顏に、胸を撫下し安き心ぞ道理なる。

大内　われ歸洛と極る上はかねての契り、御身は通廣が宿の妻ぢや。

通廣　スリヤ、賤しい此の身を北の方に。

大内　都へ伴ひ歸る心ぢや。

通廣　テモ有難い思召。歌舞伎太夫が出世して、大納言樣の北の方とは昔が今に至るまで、いまだ例しの無い話。まるで夢の樣ぢやわいな。夢なら醒めな、醒めてくれるな。

〽勇める顏も何處やらに、沈み勝なる五音の調子。通廣卿は打案じ、

ト此の内、大内藏毒氣廻りたる思入。

通廣　いつもに似ぬ御身の顔色、いと惡しく見ゆるは氣分でも勝れぬか。

大内　氣分に變りは御座んせぬが、あまり泣いた其の後が天へも上る喜びに、一足飛びのわたしの仕合せ、お腹の中まで顚倒したか、少し動悸がする樣で御座んす。

通廣　案じらるゝ其方の樣子。病の起り心當りはあらざるか。

大内　別に心當りは御座んせぬが、最前あなたのお使ひが持つて來られた香箱の香を焚きしに、何時もと違ひいやな氣持で御座んした。

通廣　ハテ、合點のゆかぬ。われ等に於ては使を寄越した覺えない。シテ、其の香箱はいづれにあるぞ。

大内　是ぢやわいな。

通廣　ついぞ見た事も無き此の香箱。

大内　それでも中には覺えの香。あなたのお筆で疊紙へ桐壺と遊ばしたは切れる印と思はれて、腹立たしくもあつたれど、今から思へば吉左右を知らせの香で御座んした。

〽聞くに、若しやと通廣卿。

通廣　シテ、焚殘しの香はあるか。

大内　殘らず焚いてしまひました。
通廣　テモ殘念な事をいたした。
〽心の悔み、懸念の容體。立ちあがりて彼方に向ひ、
通廣が供の者は居るか。
供侍　ハッ。
ト門の外より侍一人出で來る。
通廣　御用に御座りまするか。
松崎周庵が宅は此の最寄りと聞き及ぶ。呼迎へて參れ。
供侍　ハッ。
ト侍下手へ入る。
〽毒氣の悩み、大内藏が見る間に變る息遣ひ。
大内　急に熱が出た樣子、わたしの顏を見て下さんせ。
通廣　脣の色變り、眼の中曇りて參りしは。（ト言ひ掛けて心附き、）イヤ、左したる事で無からうぞ。
大内　わたしもさうは思うて居たれど、急に變つた此の樣子、千筋の髪も一時に燃えるやうな頭の邪

熱。そればかりか、心まで常にもあらぬ狂はしさ、取りとめもない妄想が眼先にちら付き見えるのはコリヤ氣が違うたと言ふのか知らん。是では戀しい通廣樣の北の方には成れぬわいな。

オヽ、北の方ハテ、どなたの北の方であつたぞいなア。

通廣　コリヤ、大内藏には放心せしよな。

〽言へど大内藏呆然と。

大内　今あなたの仰言つたは何の事で御座んすえ。

通廣　われ等が顏を覺えて居るか。

大内　ソレ忘れて成るものぞ。百人一首でお馴染のお公家樣ぢやわいな。

〽取つても附かぬ挨拶に、不便いやます大納言。折から軒の風鈴の風につれて鳴る音に、大内藏すつくと立ちあがり、

ト風鈴しきりに鳴る。大内藏椽側に進み出で、

けたゝましく鳴るアノ鈴の音は鳴神上人が今勤行の最中ぢやの。アノ上人を墮落させる女は罪の深いもの、其の絕間姬を勸めるわたしは未來は地獄へ落ちやうぞ。其の落ちるが怖いとて此の戀がやめられうか。

通廣　是は何事ぞ。氣を確に持ちやれ。

大内　エヽ、邪魔しやんな、是から舞臺へ出る所ぢやわいな。

〽袂拂ひてゆかんとす。足もしどろに、氣は上ずり、何を目あてに幻の追へば消えゆく秋の霧。たゞうつとりと佇みて、

ト此の内に舞臺半廻しになり、屋體の横を見せ、桐の立木前へ出る。是と同時に奥より玉枝藥茶碗を盆にのせて持つて出て來る。大内藏は向うを見て、

大内　テモ夥しい見物ぢやわいな。

玉枝　申し太夫樣。お藥が出來ました。

大内　エヽ、舞臺ぢや。靜かにしや。

玉枝　エヽ。（ト驚く。）

大内　何驚く事があらう。忘れもせぬ今年の彌生。

〽櫻にまさるお姿を垣間見てより踏迷ふ、嬉しの森の下蔭に結ぶ契りも恥かしや。

ト大内藏は玉枝をとらへてサワリ模樣の振よろしくあつて、

二世をかけて契つたあなた、何處に見物して御座るやら。オヽ、あそこの棧敷に居てぢや。嬉しや〳〵。此方を見て御座るわいな。舞臺の棧敷、中を隔つる人の山。それでも眼と眼が物を言ふ。必ず脇目をして下さんすな。其のやさしいお前の眼が、わしの戀路の闇を照らす光明で御座んすぞえ。（ト後へ下りて、桐の木へ寄りかゝりてニツタリ。）

〽うつゝたわいも無き折柄、使と共に息を切り駈けつけ來る松崎周庵。

ト此の時、バタ〳〵になり序幕の周庵、侍の案內にて下手より出で來りて、

周庵　ヤア此の體は、大內藏殿。どうさつしやれた。

〽尋ぬる顏を打守り、

ト大內藏は周庵を見て、

大內　オヽ、あなたは上人樣。エヽ、つれ無いぞえ。何ぼ佛の御弟子でも竹や木では御座んすまい。是程こがるゝ妾が願ひをどうぞ叶へて下さりませ。

〽くどきたて〳〵、なげき縋れば、驚く周庵。

ト大內藏は周庵を鳴神上人と間違へて口說く事よろしく。

周庵　イヤどうも薄つ氣味がわるい。コレ大內藏殿。愚老が脈を見て進ぜやうから、彼方へ御座れ。

ト手を取れば、振拂ひて前へ出で、

大内　アレ〳〵あの棧敷へ女が一人見えた。男の膝によりかゝり四邊憚かる囁き話。見苦しい。置きや。何んぼ小聲で囁いても、此處までちやんと聞えて居る。エヽ、口惜しい。いつそ彼所へ踏込んで此の怨み言はいで置かうか。

〽忿怒の形相凄じく、行かんとなすを止むる周庵。玉枝は取りつきおろ〳〵聲。

周庵　大内藏殿には如何致した。

玉枝　太夫樣。氣をたしかに持つて下さりませ。

〽取付き嘆けど、氣はそゞろ、あなたこなたとかけ廻る。

ト大内藏物狂はしきこなし。玉枝よろしくからむ。床のメリヤスにて狂ひよろしく。周庵は呆れしこなしよろしく止める。

〽見るに堪へ兼ね通廣卿、大内藏の袖しつかと捉へ、

ト通廣も樹蔭を出で、周庵と共に大内藏を抱き止める。

通廣　コリヤ大内藏。何とて正氣には返らぬぞ。此の通廣が聲は最早其方に通ぜざるか。

〽心を籠めし一聲の耳に通じて、大内藏は二人の面を打守り、

ト よろしく思入にて、

大内　あなたは通廣樣。こなたは周庵殿。

〽力も拔けた空蟬の、

ト大内藏悶絶する。周庵容體を見る事よろしく。

周庵　最早存命は覺束無う御座りまする。斯して暫らく置く方が氣が落ちついてよく御座らう。併、餘程重體で御座りまする。

ト是にて、通廣玉枝に向ひて、

通廣　ゆかりの者もあるならば、疾呼びに遣はせ。

玉枝　アイ、承知で御座んす。

ト奥へ入る。

〽涙ぬぐうて急ぎ行く。周庵四邊を打眺め、圖らず目に入る蒔繪の香箱。

周庵　此の香箱は如何いたして此の所に。

通廣　仔細あつて大内藏が手に入つたる品なるが、貴老見覺えが御座るか。

周庵　いかにも存じて居ります。
通廣　シテ、いづれにて見られしぞ。
周庵　千姫樣の御前にて拜見したる覺えの香箱。中には南蠻祕法の毒藥。
　ト是にて、通廣思入あつて、
通廣　それで樣子が相分つた。ゆめ人に語りたまふな。
　〽受けし情を無にせざる、通廣卿がはからひは實に當代の賢者なり。斯る所へ傳內が立ち歸つて仰天なし。
　ト以前の傳內、玉枝附いて奧より出で來り、
傳內　コレ太夫、どうさつしやれた。傳內で御座る。此方には親兄弟も同然の傳內ぢや。
　〽われを忘れて呼び立つれば、大內藏は眼を見開き、
　ト大內藏は疲勞せし體にて傳內の顏を見て、
大內　傳內殿、悅んで下さんせ。わたしや通廣樣の北の方で御座んすぞえ。
　〽淋しき笑顏をつくづく見て、
傳內　出世をしたは嬉しいが、見違へる樣な此のやつれ。斯くも急に變るものか。もし、お醫者樣は

通廣　參りませぬか。

傳內　周庵老が見えたれども、存命覺束無しとの事。

大內　コリヤ太夫は此の儘に。とても叶はぬ命なら、わしが代つてやりたいわい。

〽嘆けば此方は近づく死期、次第につのる苦しみに、

ト此の內、大內藏段々疲れて苦しむ思入。

通廣様はいづれにぞ。わたしや今死ぬるはいや。切て五年か三年。それがならずば、一月なりと生きてお側に居たう御座んす。二十五の春秋を苦勞に送つて、是からさき戀しいお方と二人して樂しい月日を迎へる際に何で死んでゆかれやう。わたしや生きたい、生きながらへたい。

〽取り縋りては立ちあがり、又倒れては身をもだえ、輪廻に迷ふ儚さに。

ト大內藏よろしくある。通廣あけて言はれぬ切無き思入あつて、

通　其のくり言は尤もながら、最早此の世に賴み無き其方。冥土と娑婆は隔つるとも、變らぬ契りぞ。

大內　嬉しう御座んす。

〽悦ぶ聲を名殘にて、今を限りの斷末魔。

ト此の時、以前の菊枝奥より走り出で、

菊枝　太夫様、菊枝で御座んす。太夫様〳〵。

〽呼べど答へは枯れてゆく、桐の葉落つる朝嵐、覺めてはかなき夢の世や、哀れを後の物語、今に傳へて。

ト三重にて。

幕

殿様勘次（とのさまかんじ）

殿様勘次

序幕

根津權現社境内の場
本鄕追分けんどん屋の場

役名　神尾備前守、家來高木平馬、仲間角內、手沼刑部、犬山傳藏、猪上段六、浪人馬淵運平、同龍井銀藏、同猿島荒九郎、莊司左內、植木屋勘次、同太郎吉、同忠太、同文吉、彌宜伊織、大宮惣之助、同母お幸、同妹百合、乳母お峯、下女お梅、仕事師熊五郎、手代與助、奥女中七浦、亭主七兵衞、旅人、見物人、茶屋女等。

根津權現社境內の場　本舞臺一面の平舞臺、上手寄りに繪馬堂、いろ〳〵の額の中に駿河大納言忠長卿より奉納の太刀の額を目につき易き場所へかける、此の前に床几二脚程、茶店は額堂の上手に

有る心、舞臺下手に神樂殿を設け、正面社内の書割、地口行燈等よろしく、都て根津權現社祭禮の體。神樂殿には神樂師兩人二十五座の振よろしく、是を見物の仕出し思ひ〳〵の拵へにて平舞臺に立ちかゝり居る。此の體神樂囃子の鳴物にて幕開く。

ト二十五座一件りあつて、神樂師は奧へ入る。見物は捨臺詞を言ひながら上下へ別れて入る。鳴物になり、向うより手沼刑部、羽織、袴、大小、旗本の拵へにて、深編笠を被りて先に立ち、あとにつゞいて犬山傳藏、猪上段六いづれも小旗本の拵へにて出で來り花道に止りて、

刑部　今年の祭禮は影祭りと承りしが、思ひしよりは立派に出來ましたな。

傳藏　御意の如く、中々賑やかな事で御座る。當社の祭禮を謠ひました小唄節に、だん〳〵警固を引連れ〳〵、よるな觸るな塗笠、お手にしどけの無いのが、サツサ、見事と申す小唄が御座りまするテ。

段六　其の塗笠で思ひ出しましたが、江戸一番の器量よしと評判さるゝ大宮惣兵衛の娘が當社の祭禮見物に是へ參ると申す事。お祭よりは其の方が一段と見物であらうと專ら取沙汰。

ト云ふを聞いて、刑部思入あつて、

刑部　スリヤ、大宮の娘百合が是へ參ると申さるゝか。

傳藏　それは一段と好い都合。ともかく、あれなる床几へ。

刑部　何さま、左樣いたさう。

　　ト右の鳴物にて、三人舞臺へ來り、床几へ腰をかける。茶店の娘茶をくんで上手より出て來り、

娘　お茶一ッおあがりなされませ。（ト會釋して上手へ入る。）

段六　刑部殿には大宮惣兵衞の娘を御存知で御座りまするか。

傳藏　是はしたり、段六殿。刑部殿にはあの娘御存知所か。大の御熱心で、すでに緣談を此の方より申入れた位で御座る。

段六　左樣で御座つたか。分限者でも町人の大宮惣兵衞。お旗本の緣組は願つても無き身の幸ひ、早速承諾いたしたで御座りませうな。

傳藏　所が、今以つてよき挨拶が御座らぬので、再三足を運びますが、娘の病氣と申し立て、しかとした返事をいたさず。刑部殿よりお急ぎあれど、肝心の先方がさう言ふ次第で御座る故、橋渡しの拙者めもホト〳〵當惑いたして居るのぢや。

段六　それは定めしお困りならん。シタガ、今日其の娘が當社へ參拜なすこそ幸ひ、此の所にて待ち受けて、直に挨拶を承つては如何で御座る。

傳藏　いかさま。拙者も御同意ぢや。刑部殿思召は如何で御座りますな。

刑部　とかくは貴殿のお計ひにお任せ申す。

傳藏　左樣で御座るか、然らば拙者は此の所にて見張りいたせば、御兩所には此の方にはおかまひ無く、ゆる〳〵と御參拜なさるゝがよく御座る。

刑部　然らば、貴意に從ひ、われ等はお先へ參るで御座らう。

段六　斯樣な折は又無ければ、娘の口より有無の挨拶、是非共にお聞きなされい。

傳藏　承知いたした。いづれ後程吉報を。

刑部　必ずお待ち申すで御座らう。

ト右の鳴物にて、刑部先きに段六附いて上手へ入る。

傳藏　二ツ返事でまとまると思ひの外なる此の緣談。くたぶれ儲けの骨折損にならぬ樣にしたいものぢや。

ト是たら宮神樂に成り、向うより母お幸、町家女房の拵へ、次に娘百合、屋敷風に見える程の人品よき拵へ、下女お梅に日傘をさしかけさせ、乳母お峯、袱紗包をさげ、つゞいて仕事師熊五郎、手代與助出で來り、直に舞臺へ來る。

傳藏　是は〳〵、大宮の御家内。百合殿も御一緒にお祭見物で御座るかな。

お幸　どなた樣かと存じましたら、犬山樣で御座りまするか。あなた樣にも御同樣御祭禮御見物に御座りまするか。

傳藏　左樣で御座る。何は然かれ、まづ是へおかけなされい。

お幸　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

トお幸と百合は下手の床几へ、其の他は下に居る。茶店の娘茶をくんで持つて來る。

傳藏　百合殿は御病氣の由承はつたが、顏のやつれ少しも見えず、相變らず麗しい御器量にて重疊重疊。

ト思入にて言ふ。お幸も思入あつて、

お幸　見た所にては何の變りも御座りませねど、體内に故障がある、大事にせいとお醫者の話。いまだに服藥いたさせて居りまする。

傳藏　それは藪醫の見たて違ひ。此の方によい醫者が御座る故、早速見舞いたすやう申しつかはすで御座らう。

お幸　イエ、それには及びませぬ。御親切のみにて充分に御座りまする。

傳藏　然らば御隨意になさるがよい。それはさうと、先達中より足を運びし緣談一條。先方にても殊の外取急ぎ、どう相成つたかと矢の催促。かやうな場所にて失禮では御座れど、よい折柄で御座る故、御挨拶が承りたい。

お幸　段々と長びきまして相濟まぬ事で御座りますれど、病氣の故か、娘の心底今以つて定まりませねば四五日御猶豫下さりませ。とくと娘に承り御挨拶いたしませう。

傳藏　アイヤ、其の手はもはや喰ひあき申した。此の上は百合殿に直々の應對。先方は三千石のお旗本手沼刑部殿。文武兩道人にすぐれ。其の上代々高貴の家筋。失禮ながら、町人の娘が其の奧樣にならるゝは願うても無き身の出世。考へる事も何も無いでは御座らぬか。

ト言へど、百合は俯向いてだまつて居る故、

コリヤ、皆の居る前では恥かしいが先にたつて挨拶が出來ぬと見える。尤も千萬ぢや。コリヤコリヤ、男共や女共はあちらの方に行つて居やれ。

ト橫柄に言ふ。下女、手代、仕事師不承々々に立ちかゝる。

百合　ア、コレ、其方達、あちらへ行かずともよいわいの。

傳藏　然らば皆の居る前で返事をいたすと申すのか。

百合　サア、たつてと仰しやりまする故、私の心中申上げやうと存じまする。それには誰が聞いて居やうともかけかまいは御座りませぬ。

傳藏　イヤ、恐れ入つた。其の位の氣性で無ければ、天下お直參のお旗本の奥樣にはなられぬて。刑部殿のお目鏡敬服の至りぢや。

お幸　其方が直々お返事するはよけれども、先樣はお旗本。無禮があつてはならぬ故、今日は猶豫をお願ひ申し、明日にも此方よりお返事したがよいでは無いか。

傳藏　是はしたり。百合殿が直々に返事をすると申して居るを、何でとめさつしやるのぢや。（ト百合に向ひ、）サア、百合殿、挨拶は何とぢや。

百合　折角では御座りますれど、私にもチト考へが御座りまする故、若樣へよろしきやうにお斷り下さりませ。

傳藏　ナニ、斷るとな。（ト百合の顏をヂッと見て、）そちは正氣で申すのか。是程結構な縁組が何でそちの氣に入らぬのぢや。

お峰　モシお孃樣。三千石のお旗本なら立派なお家で御座りまする。其の奥樣におなりあそばせば、お乳をあげた私まで肩身が廣いと申すもの。

お梅　それに先の殿樣はお年が若うて嫌味が無い男振りで御座りまする。

與助　第一、お暮し向きがゆたかで、山吹色の大判小判お藏は黃金の花盛り。それが何よりで御座りまする。

熊五　金や男はどうでもよいが、鋲打の乘物で長刀に挾み箱。大小さした侍をお供に連れて里歸り、此の眞似ばかりは百萬兩の分限者にも出來ねえ事だ。

傳藏　一生涯是程の結構すぎた緣談は又重ねてはあるまいが、それを斷る上からは御身は寡婦で暮す心か。

百合　イエ〳〵、私の氣に入つた緣があつたら片附きまする。

傳藏　然らば御身の氣に入つた緣は如何なる所ぢや。

百合　大名の外の緣組はいたしませぬ。

傳藏　エツ。

百合　それも十萬石以下の大名ならば、此方からお斷りをいたしまする。

傳藏　テモ、恐ろしい氣位ぢや。然し、本氣の沙汰ではあるまい。若し又正氣で申すなら、夢よりも猶果敢ない望ぢや。

百合　ソリヤ、どうせ人の望は大方夢の樣なもの。中には現となるもあれば、夢の儘で消えるもある。皆其の人の心がけと運次第。町人と大名。種は變れど、同じ人間。町家の娘ぢやとて心一つで大名の奥方になられぬ事は御座りますまい。

傳藏　愈々以つて狂氣のきざし。今に扇を笹につけ鐘に櫻の物狂ひなどやらるゝ事であらう。偖々、笑止千萬。

お幸　お聞きの通りの次第故、先樣へあしからずお斷り下さりませ。

傳藏　イヤ、先方でも氣遣は眞平御免と申すであらう。

熊五　成程、コリヤア、三千石や五千石の旗本ぢやア、御神輿があがるめえよ。

傳藏　無禮者めが。

ト傳藏熊五郎を睨みつけて上手へ入る。お幸氣遣ひの思入あつて、

お幸　大層お腹を立てゝ行かれたが、後日に祟りが無ければよいが。

與助　さうで御座ります。小ツぱ旗本と沸藥鑵は手のつけやうが無いと申しますれば、御油斷はなりません。

お峰　傳藏樣が又此處へ引返して來ようも知れませねば、早うお參りなされませ。

お幸　ほんにさうぢや。サア、娘、おぢや。（ト百合の手を取つて立ちあがり、）與助、あとを頼みましたぞや。

與助　よろしう御座りまする。

　ト右の鳴物になり、お幸は百合の手を引き、乳母、下女、熊五郎附いて上手へ入る。

與助　大名の外嫁に行かぬと風見の烏よろしくで高く止まつて居るものゝ。當があると言ふぢやなし、まるで夢の樣な望ぢや。望と言へば、此の間に門前のおでん屋で一寸一つぱい遣つて來やう。（ト財布より錢を出し盆の上にのせ、）姉さん、お茶代は是へ置きますよ。

　ト是にて、茶店の娘出で來り、

娘　有難う御座ります。

　ト跡を片附ける。與助は下手へ入る。宮神樂になり、上手より七浦、片外し、帽子、奥女中の拵へ、彌宜伊織、神主の拵へ、仲間一人附いて出で來り、

七浦　駿河大納言樣より奉納の御太刀はいづれに御座りまする。

　ト額堂の額を見ながら言ふ。伊織指して、

伊藏　アノ額の御太刀が大納言樣の御奉納に御座りまする。

七浦　左樣で御座りまするか。アノ御太刀を奉納遊ばされました大納言樣の思召は只今申上げた通りに御座りますれば、此の上ともに御祈念を御願ひ申上げまする。

伊織　承知仕りました。

七浦　最早是まで御見送り下されば充分に御座りまする。

伊織　併し、お供の衆が御見えに相成りませねば、其處まで御送り申上げませう。

七浦　イエ、門前に控へて居るで御座りませう。どうかお引取り下さりませ。

伊織　左樣なれば、お詞に從ひ、是にて御免を蒙ります。

浦七　神職の伊吹樣へよろしう。

伊織　申し傳へるで御座りませう。

ト伊織は一禮して上手へ入る。七浦は仲間を連れて花道へ行く。是と同時に向う揚幕より馬淵運平、龍井鍬藏、猿島荒九郎、いづれも浪人者の拵へ、酒に醉ひたる體にて出で來りて、七浦を見て囁き合ひ、花道にてわざと突き當りて、

運平　エヽ、氣をつけ居らぬか。

ト言へども七浦はその儘行きすぎる。荒九郎は七浦の袂を摑み、

荒九　コリヤ、待て、女。人につきあたりながら、何で挨拶をいたさないのだ。

銀藏　詫言申さぬ其の中は、此處は通さぬぞ。

七浦　是は又迷惑な。私の方で避けて通るをあなたの方でつきあたり、詫言せいと仰言るは、コリヤ
お言葉が違ひはいたしませぬか。

運平　ほざいたりな、女め。大烏組の我等に向ひ。

銀藏　言葉を返す大膽者。イデ、手込めにいたした上。

荒九　宿許へ連れて行き。酒の酌でもいたさせくれん。

運平　それよく御座らう。ソレ、御兩所。

二人　心得申した。

ト兩人七浦の手を取つて舞臺に來る。仲間は向うへ逃げて入る。七浦兩人を振り拂ひきつと身構なして、

七浦　女と侮り聊爾しやると許さぬぞ。

運平　ヤア、ちよこざいな手向ひ立て。

銀藏　餘計な事して怪我いたすな。

七浦　なにを。

ト早めの鳴物になり、七浦は懐劍、三人の浪人者は手取りにせんと立廻る。七浦危ふくなりたる所へ、向う揚幕より大宮惣之助、羽織、着流し、一本差、若き町人の拵へにて出で來り、直ちに舞臺に來て、

惣之　七浦殿か。

七浦　惣之助樣。よい處へ來て下さりました。

惣之　譯は知らねど、一人の女に三人の武士。わしは女に加勢しますぞ。

運平　町人の分際で小癪な一言。

荒九　イデ、細腕を。

三人　切り下げくれん。

ト三人一緒に刀を拔く。惣之助は羽織をぬぎ、額堂の木太刀を兩手に取つて身構へ。

惣之　サア、何處からなりと切ツてくれ。

ト是より惣之助七浦をかばひ、三人を相手に兩刀の立廻り十分あつて、トヾ三人を下手へ追込み、

惣之　口程にも無い弱い奴等だ。

七浦　お蔭で危い所を助かり、有難う存じまする。
惣之　ナンノ、是しきの事に禮を言ふには及びません。然し、怪我は御座らぬか。
七浦　ハイ、何處も怪我はいたしませぬ。
惣之　それは重疊で御座つた。此の節は今の樣な浪人が徘徊する故、隨分共に氣を附けたがよう御座る。サア、少しも早うお歸りなされい。
七浦　ハイ、歸る事は歸りまするが。あなたは餘りで御座りまする。
惣之　何が餘りで御座りまする。
七浦　一寸是へかけて下さりませ。
惣之　斯うで御座りまするか。
ト床几へ腰をかける。七浦は羽織の塵を拂ひ、惣之助の後よりかける。
惣之　是はどうも憚り樣。
七浦　モシ、惣之助樣。あなたは私を何ぢやと思うてお出でなされまする。
惣之　ハテ、何と思ひませうぞ。駿河大納言樣のお奥のお女中七浦樣。
七浦　それはわかつて居りますが、私はあなたの何になるので御座ります。

惣之　母方の從兄妹同志で御座ります。

七浦　まだ其の外に何かあるでは御座りませぬか。

惣之　サア、何かゞあつたやうにも思ひますが、とんと忘れてしまひました。

七浦　それが餘りぢやと申すので御座ります。あなたと私とは許嫁の仲では御座りませぬか。それに、私がお屋敷へあがつた後は秋風立ち、道でお出會ひ申しても冷たいそなたのお顔はまるで他人の扱ひ。私に何の落度があつてなさるので御座ります。サア。其の譯聞かして下さりませ。

惣之　譯と言ふは外ぢやアない。其方のお屋敷奉公がわたしの氣に入らぬのぢや。

七浦　そりや、何故で御座ります。

惣之　私は町人の伜故、大名風が大慊ひ。自分の稼ぎで暮しを立てる心の清い町人と先祖の血汐で榮耀を盡す冥利を知らぬ大名とは比べ物になりませぬ。其の大名のお蔭にて錦を飾る其方の身の上、私の心に合はぬ故、それでよそ〳〵しくするのぢや。

七浦　さう聞く上は今日が日にもお暇願ひに歸りたけれど、當時大納言樣には上樣の御不審うけ、甲斐の國に御謹愼中。又、江戸お屋敷では御家老の鳥居殿忠義一途の御人故、それは〳〵きつい御心配、アノ額堂にかけてある奉納の御太刀は一日も早く御不審の晴れるやうにと祈願のため。

其の中でお暇は輕薄らしくて願はれず、殿樣について忠義を盡すか、夫について貞節を立てるか。二つに一つの妾が身の上、どうしたものであらうぞいなア。

ト思案の體よろしく。此の前より莊司左內、羽織、袴、大小、浪人の拵へにて上手より出來り、額堂の陰にて立聞きして居る。此の時、前へ出で、

左內　男へ詫びは追つての事。差あたり忠義の道を忘れては相成らぬぞ。

七浦　お前は兄上。何時の間に。

左內　只今、是へ參り合はせ、聞く共無しに立ち聞きいたした其方の話。お氣の毒なは駿河殿。隨分忠義を勵むがよい。（ト惣之助に向ひ、）イヤナニ、惣之助殿、貴殿は町人ながら氣骨のある男ぢや、妹に忠義の道を立てさせてやつて下されい。

惣之　どうとも勝手になさるがよい。

七浦　ソレ兄上、惣之助樣はあの通りで御座りますわいな。

左內　ハテ、惣之助殿が假令なんと申されうとも、此の兄が呑込んで居る程に早く其方は屋敷へ歸りやれ。

七浦　そんなら、きつと兄上が請合うて下さりますか。

左内　念には及ばぬ。

七浦　それで私も安心いたしました。

ト思入。此の時、向うより羽織、袴、股立の若黨三人、仲間四人出で來り、直に舞臺へ來りて、

若黨　お迎ひ。

七浦　大儀であつた。（ト應揚に言ふ。）

惣之　其の大名風が此ッ方の癪。

七浦　あれ又あんな。（ト歸りかゝるを、）

左内　ハテ、此所かまはずとお歸りなされい。

ト是にて、鳴物になり、七浦後に心の殘る思入にて、若黨仲間附いて向うへ入る。

左内　惣之助殿には叔母上や百合殿が先刻是へ參られたを御存知で御座るかな。

惣之　承はつて參りましたが、まだ社内に居りますか。

左内　今しがたまで神職方にお居でゞ御座つた。

惣之　あれも大名氣違ひで困つたもので御座ります。

ト此の時、上手にて、

熊五　おれと一緒にうしやァがれ。

ト鳴物になり、上手より太郎吉、股引、印半纏、草鞋ばき、年若き植木屋の拵へにて、以前の熊五郎に胸倉を取られ。その後よりお幸封じ文を持ち、百合はお峯に手を取られ、お梅に日傘を差しかけさせ出で來り、

熊五　植木屋風情の分際で、よくも大事のお孃樣に附文をしやァがつたな。形は小せえが太い野郎だ。

ト太郎吉を突き倒す。惣之助前へ出で、

惣之　三河島の忠太に附いて、庭の手入れに來る植木屋。手荒い事をしないがよい。（トお幸に向ひて、）さうして、お母樣、文と言ふのはそれで御座いますか。一寸お見せ下さいまし。（トお幸の持つた文を受け取り見て、）此の男には不似合な見事な手で御座りますな。（ト左内に向ひ、）左内さん、御覽なさいまし。

ト文を左内に渡す。

左内　松花堂の筆意を學び、眞に迫る此の筆蹟。コリヤ、手習師匠にでも賴んで書いて貰つたのであらう。

お幸　それとも、他にアノ文の主があるなら、包まず言や。

ト是にて、太郎吉思入あつて、

太郎　皆包まづ言ひますから、何事も此の場限り堪辨しておくんなせえまし。

愍之　堪辨してやる故に、文の主を早く言へ。

太郎　それぢやァ申しますが、それの主はわつちの仲間根岸の勘次で御座えます。

愍之　それぢやァ、矢つ張り植木屋仲間か。

ト此の内百合は、文を左内より受取り、宛名をぢツと見て、

百合　さうして、此の文は何者に書かせたるぞ。

太郎　勘次が自身で書いたので御座えます。

百合　アノ是を植木屋が。

太郎　植木屋ぢやァ御座えますが、わつちらと違つて、字も書きやァ、本も讀むし、劍術やら馬に乘るまで武士の道一通りは出來ねえ事のねえ男。其の上、氣風が應揚で大名らしい所があるので仲間の者は殿樣勘次々々と言つて居りますが、三年前からお孃樣に戀焦れて仕事もせず、あるものを賣り喰ひに日増に細る瘠世帶。一人の母親が氣を揉んで途方にくれて居るのを見兼ね、勘次に勸めて書かせた文。どうせ及ばぬ事ながら、お孃樣のお手に渡らば、勘次も本望だらう

と思ひ、友達のよしみにした仕事。とんだ事をやらかしてすまねえわけで御座えます。眞平御免なせえまし。

百合　譯を聞けば不憫ながら、植木屋風情の書いた文。手に取るさへ汚らはしい。

ト文を投げ返へす。太郎吉拾ひあげて、

太郎　スリヤ、一心籠めた此の文を讀んでやつては下さりませぬか。それ程までに植木屋がしがねえ者に見えるのか。餘りと言へば。（ト立ちかゝる。）

百合　アレエ。

ト聲をあげる。左内鐵扇にて太郎吉の眉間を打ち、

左内　土ほせり奴が。

ト是にて、太郎吉の額よりタラ〱と血汐流れるを手で押へる。惣之助見て、

惣之　ヤヽ、夥しい額の血汐。

ト言はれ太郎吉自分の手を見てキツト見得。向う揚幕の内にて大太鼓の頭を打ち込む。是と一緒に木遣りの聲勇ましく聞える。

お幸　お獅子があすこへ來た樣子、早う行つて見物しませう。

お峯　ほんに、それがよろしう御座りまする。
お幸　左内も惣之助も一緒におぢや。
惣之　それぢやと申して此の儘に。
お幸　エヽ、かまふ事は無いわいの。

ト　お幸百合の手を取り、皆に附いて向うへ入る。大郎吉は後を見送り無念の思入にてツカ〳〵と行きかける。此の時、上手より刑部、傳藏、段六出で來りて、

刑部　コリヤ、待て〳〵。（ト呼び止める。）
太郎　何ぞ御用で御座えますか。
刑部　唯今の一部始終あれにて承つた。
傳藏　それにつけ、其の方へ話があれば。
段六　われ等と同道いたして參れ。
太郎　それぢやア、あの、御一緒に。
刑部　ハテ、氣遣ひには。

ト　言ふを道具替りの知らせ。

及ばぬわい。

ト此の體よろしく、臺拍子にて。

道具廻る

本郷追分けんどん屋前の場　本舞臺一面の平舞臺、上手寄りに藁葺屋根の田舍家の表側、眞中六尺の入口、縄暖簾、軒に蕎麥切り、けんどんと書きたる看板を出し、草鞋を吊す、家の前に床几、舞臺下手より奥へ斜めに町家を見せたる書割、都て寛永時代本郷追分けんどん屋の體。床几に旅人兩人腰をかけて、椀に盛りたるけんどんを食し居る。流行唄にて道具止る。

ト旅人甲財布より錢を出し、

甲　モシ〳〵。姉さん。

ト呼ぶ。奥より娘お玉たすきがけにて出て來り、

お玉　お替りで御座りますか。

甲　イヤ、澤山ぢや。此の家のは盛りがいゝ故、一杯でけつそりした。

乙　實の所は、けんどんは拙いが、お娘が愛嬌者故、六文が所おごつてゆくと言ふもの。二人で十

二文是へ置きますぞ。

お玉　有難う御座ります。

甲　サア、行きませう。

ト兩人上手へ入る。お玉は膳を持つて奥へ入る。合方になり、向うより神尾備前守、羽織、袴、大小にて、家來高木平馬同じ拵へ、仲間一人を連れて出で來り直に舞臺に來る。

備前　コリヤ、とんだ粗相をいたした。

平馬　どう遊ばしまして御座りまする。

備前　唯今休息いたした所へ扇子を忘れて參つた。（ト仲間に向ひて、）角内。其方太儀ながら引返して參れ。

角内　畏りました。

備前　其の間、是なる床几で相待つであらう。

角内　それぢやア、一ッ走り行つて參りませう。

ト向うへ走つて入る。

平馬　誰ぞ居るか。是なる床几を暫く借りるぞよ。ハテ怪しからぬ。家の中にて笑ひ聲はいたしなが

ら誰も出て參らぬは無用心千萬。

備前　アイヤ、それも太平のしるしであらう。それはさうと、今日は久振りで野掛けをいたし、殊の外鬱氣を散じた。

平馬　お供をいたした私まで、よい保養をいたしまして御座りまする。

ト此の時、奥にて、

忠太　それぢやァ、殿樣、大きに御馳走になりました。

ト言ふ聲聞える故、備前守思入ある。

文吉　あぶねえぜ。しつかりしねえ。

ト合方になり、植木屋忠太醉つぱらひにて、文吉に介抱されながら奥より出で來りて、

忠太　大丈夫だ。おらァまだ醉つちやァ居ねえや。もう一合御馳走になつて來るから、手前先へ歸れ。

文吉　此の上呑んでたまるものか。今日は一緒に歸らうよ。

忠太　幾ら呑んだつて、殿樣のおごりだ。斯んな時に呑まなきやァ酒を呑む時はありやしねえ。

文吉　だつて、お前氣の毒だ。

忠太　何の相手は大納言樣だ。吝つたれた事言ふものか。

文吉　あれ丈け御馳走になりやァ澤山だ。ぐづ〳〵言はずに歸れと言ふに。

忠太　何だ、此の野郎。おれを小づいたな。覺えて居ろ。

ト是で、流行唄になり、兩人下手へ入る。

備前　當家の亭主を是へ呼びやれ。

平馬　ハツ。（ト入口より）亭主は居るか。亭主〳〵。

ト呼ぶ。奥より、

亭主　へイ〳〵。唯今それへ。

ト言ひながら亭主七兵衞出で來り、

ツイ取込んで居りましたのでおかまひもいたしませず、恐れ入りまして御座りまする。

備前　イヤ〳〵、左樣な事をとやかう申すのでは無い。唯今出て參つた植木屋共が話の中に其の意を得がたい言葉があつたが、奥に御座る御人は如何なるお方ぢや。

亭主　始めてのお顔故、お名前は存じませんが、年の頃二十三四で形こそ粗末だが、人品のよい柔和なお方で御座ります。

備前　年の頃は二十三四で大納言樣と申せば駿河殿より外に無い筈。（ト平馬に向ひて）平馬。其の方

亭主と同道なし透見をして參れ。若し駿河殿ならば、町奉行神尾備前がお目通りがいたしたいと申上げい。

平馬　ハッ。（ト亭主に向ひ、）亭主、案内いたせ。

ト是にて、亭主驚きながら平馬を伴ひ奥へ入る。

備前　駿河大納言家には甲府にお引籠り中なるが、お姿を變へさせられ、密かに江戸へ御座つたか。心得ぬ事共ぢや。

ト訝しき思入。此の時、平馬出で來りて、

平馬　大納言家とお見受け申して御座ります。

備前　然らば、お目通りいたすであらう。

ト立ちかゝる。此の時奥にて、

勘次　今、其處へ行つてお目にかゝりませう。

ト合方になり、植木屋勘次、着流し、三尺帶にて奥より出で來る。備前は下に居る。

勘次　モシ、殿樣、御常談なすつちやアいけません。どうかお手をおあげなすつて下せえまし。

備前　言葉遣ひまで下賤の者の御眞似は近頃恐れ入つて御座る。何はしかれ、御健勝の體を拜し、恐

悦に存じまする。

勘次　お奉行様。ソリヤアお門違ひで御座えませう。わつちやァ根岸の勘次と言ふ生まれぬ前からの植木屋で御座えます。

備前　アイヤ、何程お隠しなされても御顔に覺えの大納言家。お姿を變へさせ内々江戸へお入り。是と言ふのも當時御謹愼中の御身の上故と備前恐察奉ります。

勘次　それぢやア、お奉行様はわつちを駿河大納言様と見違へてお居でなさるので御座えませう。

備前　見違えたとは近頃迷惑の至りで御座る、併、斯る場所にて植木屋等をお相手に御酒を召あがるさへあるに、彼等をして大納言家より殿様よと高聲に呼ばしむるは御威光に關はるのみか、役人共の耳に入らば、由々しき大事に御座りますれば、間違ひの起りませぬ中、甲府へお引取りあそばされませい。

ト是にて、勘次讀めたと言ふ思入あつて、

勘次　それでやつとわかりました。

備前　然らば、某が御意見お聞き入れ下さりまするか。

勘次　マア、何でもよいから是へおかけ下せいまし。

ト無理に備前の手を取つて床几へかけさせ自分は下に居て、

植木屋仲間でわつちの事を彼奴ァ氣位が高いから殿樣だ。おつうすまして居やァがるから大納言だと、ふだん言つた惡口が異名となつて殿樣勘次。そのわつちの面體が駿河樣に似て居ると は世間によくある他人の空似、身替り首にやァ持つて來いだ。なんと殿樣、是で大方御得心が ついたで御座えませう。

備前　併し大納言家に面體生寫しの其の方。まだ〳〵眞の植木屋とは思はれぬ。

ト此の前より前場の太郎吉風呂敷包を抱へ上手より出で來り、立聞きして居たが此の時、前へ出で、

太郎　此の男が正眞正銘間違ひのねえ植木屋と言ふ事は、わつちが確かに請合ひます。

勘次　オヽ、太郎吉、さつきから手前の歸りを待つて居たのだ。

太郎　ちよつと道寄りをしたのでそれでおそくなつた。

備前　兩人の樣子では何樣眞の植木屋であらう。併し、能々似た顏もあればあるものぢや。

平馬　御意の通り寸分違ひませぬ。

ト此の時、亭主奥より出で來り、

亭主　それぢやァ本統の殿樣では御座りませぬか。

備前　神尾備前一代の粗忽ぢや。

ト向うより仲間角内急いで出で來り、

仲間　念を入れて尋ねましたが、お扇子は御座いません。

備前　ハテ、無い筈は無いが。（ト腰の廻りをさがして。）イヤ、是にあつた。重ね〴〵粗忽ぢや。ハヽ

勘次　ハヽヽヽヽ。（ト笑ひながら立ちあがり。）コリヤ、勘次。

勘次　ヘイ。

備前　大名にも稀なる男。是を緣に此の後は余が屋敷へも遊びに參れ。

勘次　有難う御座えます。

備前　サア、參らうか。

ト合方になり、神尾備前守先に家來、仲間附いて上手へ入る。亭主は奥へ入る。

勘次　何より先きへ聞きてえは、手前に頼んだ文の返事。早くおれに見せてくんねえ。

太郎　返事どころか。此の手紙は此のまゝ兄貴へ返しますよ。

ト以前の手紙を出して勘次に渡す。

勘次　封じ目も切らねえで、是を返すと言ふからにやア、話は駄目だと言ふ事か。

太郎　思ひ切つてしまひなせえ。

勘次　どうしたと。

ト是を合方になり、

太郎　たとひ相手は誰にもせよ。人の情のやさしい文を開けても見ずに投げ返し、まだそれのみか、側に居た左内と言ふ浪人が鐵扇振りあげ、打つたる此の疵。無念とは思つたが、兄貴に會つて話した上と、蟲を殺して歸つて來たのだ。

勘次　それぢやア、餘りひどい仕方。此の文書かうばつかりに、一心不亂にした手習ひも無駄と成つたか。エヽ、口惜しい事だなア。

太郎　それ程無念に思ふなら、此の仕返しをする氣は無えか。

勘次　仕無くつてどうするものか。

ト此の前より刑部、傳藏、段六上手より出で來りて、立聞きして居たが、此の時、前へ出で、

刑部　仕返しの分別、貸して遣わさう。

勘次　シテ、あなた様は。

太郎　天神下の御旗本手沼刑部様だ。

勘次　其の刑部様が、何で見ず知らずのわつちに、分別貸さうと仰言いますか。

傳藏　其の不審もつとも。實は是なる刑部殿より、大宮の娘百合へ申込んだる縁談を、身分不足の故を以つて斷はりに及びし故、同病相憐れむ諺の通り、其方に一臂の力を添へ、仕返しをする料簡なのぢや。

勘次　そこで、分別と仰言いまするは。

段六　大名の外は聟にとらぬと、身の程知らぬ娘の望に依つて、其方を駿河大納言家に仕たて、染井の寮へ泊り込み、娘を欺き連れ出し、其の方が家へ伴ひて恥辱を與へる我等が分別。

太郎　兄貴、此處は一番惡黨になつておくんなせえ。

勘次　ム丶、（ト思入あつて）いかにも大納言になりませう。

刑部　早速の承知忝い。然らば直に支度をいたせ。

太郎　衣裳はすつかり揃つて居るのだ。（ト風呂敷包をあける。）

勘次　コリヤア、結構な着物だなア。

傳藏　又、大小は身共が家の祕藏なれど、貸して遣はす。

段六　印籠は拙者が家の傳來、桃山遺物。

ト兩人用意の大小と印籠を取り出す。

勘次　是で何もかも揃うた。

太郎　それぢやア、兄貴。

刑部　ドレ、支度に。

ト言ふを木の頭。

かゝらうか。

ト此の模様よろしく。流行唄にて、

拍子幕

二幕目　染井大宮寮の場

役名　駿河大納言實は勘次、莊司左内、犬山傳藏、猪上段六、大宮惣兵衞、同
女房お幸、同娘百合、女中等。

染井大宮寮の場　本舞臺眞中に三間の常足の茶屋、此の後一面に菖蒲の花盛り、正面築山を見せたる中遠見の書割、平舞臺上下に竹床几を置く、都て染井大宮別莊の體。此處に女中三人拵、脇息等を茶屋へ運び、待受けの用意をして居る。此の體よろしく、琴の組唄にて幕開く。

甲　是でよいわいな。三日前からお泊り込みのお客人で落々休んで居る間もない。

乙　盆とお正月が一緒に來たと申さうか。

丙　ホンに忙しい事ぢやわいな。

ト是にて、唄になり、向うより前幕の勘次、羽織、袴、一本差、都て大納言家ふだんの拵へ、傳藏、總上下にて刀を持ち、段六同じ拵へ、惣兵衞、町人の拵へ、左內、浪人者の體にて、從ひ出で來り、花道にて止りて、

勘次　綠したゝる若葉陰、鳥の囀る靜けさは得も言はれぬ趣ぢや。

傳藏　殊に今を盛りの顏世花。

段六　麗しい眺めに御座りまする。

惣兵　殿樣にはあれなる茶屋にて。

左內　暫時御休息。

皆々　遊ばされませう。

ト唄になり、皆々舞臺に來る。

勘次　此の庭は誰が好みぢや。

惣兵　根岸の植木屋勘兵衛と申す者の丹精に御座ります。

勘次　ナニ、勘兵衛と申すか。

惣兵　左樣に御座りまする。御行の松の勘兵衛と申しますれば名代の植木屋で御座りましたが、其の伜は親に似ぬ身の程知らぬ愚か者。娘百合に文を附けまして大騒ぎをいたしました。

勘次　偖々呆れた愚か者ぢやなう。

左内　お言葉では御座りますれど、此の道ばかりは格別にて、其の勘次と申す男。文學武術の嗜み深く殿樣勘次と申す由、殊に手蹟が見事なりと承はつて御座りまする。

勘次　ナニ、手を能く書くと申すか、植木屋には入らざる事ぢやの。

左内　兼ねて殿樣にも入木道の極意を得給ひ、能書の御譽隠れ御座りませぬ、恐れながら是なる扇面へ御執筆が願ひたう存じまする。(ト扇子を差出す。)

勘次　悪筆ながら認めて遣はさう。硯は有るか。

惣兵　ハツ。是に御座りまする。

ト硯箱を出す。勘次筆を取り詩句を題して、

勘次　是でよいか。

ト差出す。左内押戴きジッと見て思入。

左内　殿様にも松花堂の手蹟をお學びに相成りまして御座りまするか。

勘次　其の通りぢや。

左内　植木屋勘次も松花堂、寸分違はぬ。

勘次　何といたした。

左内　アイヤ、松花堂と寸分違はぬ御出來に御座りまする。（ト扇子を納め）後刻御意を得まするで御座りませう。

ト唄になり、下手へ入る。是と同時に上手より女房お幸先に娘百合薄茶を立て持つて出て來り、

お幸　不束なる娘が手前。

百合　どうぞ召上り下さりませう。

ト二重へあがり茶碗を差出す。

勘次　百合が手前とあれば、又格別であらう。（ト茶を飲む事あつて、）近頃に無いよい服加減であつた。なにか其方に遣はしたいが。（ト腰に下げたる印籠を取り出し、）其方には用の無い品ぢやが、余が祕藏の印籠、緒〆の彫は祐乘の結び猿、結ぶと言ふに心を籠めて、是を其方に遣はす間、大切にいたして置きやれ。

ト百合に與へる。段六はびつくりして、

段六　アイヤ、其の印籠は大切のお品。人手に渡らば、甚だ迷惑、ナニサ、後日の迷惑になりませうから、お遣はしにならぬ方がよろしからうと存じまする。

勘次　偖々其方は氣の小さな者、駿遠甲三國の領主、斯樣な品は數限り無う所持いたす。苦しうない。取つて置け〳〵。

百合　有難う頂戴いたしまする。

ト勘次惣兵衞に向ひ、

勘次　惣兵衞へもなにか取らせたいが。（ト考へて、）是なる刀は鄕の義弘、世に稀なる名作ぢや、子孫に傳へて寶にいたせ、

ト刀を出せば、傳藏驚きて、

傳藏　其の御刀は御家の重寶、惣兵衛は追つて何なりとも遣はしますれば、御刀拜領の儀はお止り下さりませう。

勘次　又しても。其方達はわが物でも遣はすやうに、口うるさく申せども、余は大名ぢや、指圖はうけぬ。此の刀は惣兵衛に遣はす。

惣兵　結構すぎた御刀、家の寶にいたしまする。

ト押戴く。傳藏と段六顏を見合せとんだ事をしたと言ふ思入。

勘次　偖、百合、其方は余が妻となり、偕白髮まで添ひたいと母へ戀をもらせし由。余に於いても憎からぬ其方、契を許すまじきものでも無いが、同じくば眞の戀を望むのぢや。

百合　眞の戀と仰言りまするは。

勘次　其方の戀は大名と言ふものに心を奪はれ、榮華の上に築かれた、觸らば傾く高樓ぢや。余が望む眞の戀は貴賤貧富死す共變りなき堅固の戀なるぞ。

百合　そんなら、私の心の眞を今お目にかけませう。

ト勘次の刀に手をかけ拔かうとするを勘次止めて、

勘次　眞の戀の驗は見えた。伴ひ歸り妻にいたす。

百合　スリヤ、私の願をば。
勘次　聞き入れてつかはさう。
百合　お嬉しう存じまする。
惣兵　町人の惣兵衛が娘、運に叶ひて天下の御連技大納言家の北の方。
お幸　夢と思つた娘の望、眞と成つて此の樣な嬉しい事は御座りませぬ。
傳藏　それについて大納言家へ申上げたき儀もあれば、其方達は暫時遠慮いたしてくれい。
惣兵　畏りました。（ト勘次に向ひて、）左樣なれば、御殿樣。
お幸　御免なされて下さりませ。
　　ト惣兵衛夫婦百合を連れて女中附いて上手へ入る。勘次後を見送り思入あつて世話にくだけ、
勘次　モシ、犬山さん、わつちはもう願ひ下げだ。斯う氣が弱くなつてきちやア、娘を連れ出し恥かかせ唯今のお笑ひ草と言ふ樣な手際のいゝ仕事はとても出來ません。
傳藏　今と相成つて、左樣な事を申してすむと思ひ居るか。
段六　われ等へ約した言葉をば、そちは破る心なるか。
勘次　約束したとは仰言りますが、あの時には腹立ちまぎれ、いまくしいが一杯で性根は無かつた

ので御座えやす。

傳藏　然らば、只今と相成つて、眞の性根が出たと申すか。

勘次　有りやうは、不人情な女ならやつつけるつもりだつたが、死なうとまで覺悟した女の性根を見るにつけ、餘り罪の深い業とつく〴〵嫌になりました。何卒是で御堪辨なすつて下せえまし。

傳藏　堪辨せいなら、してもさうが、いづれにしてもあの娘、疵をつけずには置かぬのだ。

勘次　どうなさるので御座えます。

傳藏　其方が連れて出ぬと言はゞ、是非に及ばぬ次第故、段六殿と兩人で今夜當家より盜み出し、刑部殿のお屋敷へ連れて參る料簡。

勘次　それぢやア、矢張り娘をば。

段六　疵物にして恥かゝせ此方の意趣を晴らすのだ。

ト是にて、勘次思入あつて、

勘次　さう言ふ事なら、是非が無い。やつつける所まだやつつけませう。

傳藏　然らば、娘を此の家より連れ出す運びをつけるであらう。シタが、惣兵衛の甥左内と言ふ奴其方を疑ひ居る樣子。

段六　最早今日一日の事なれば、必ず樣子で悟られるな。

勘次　アノ左内と言ふ浪人は太郎吉の額を破つた、此方にも恨みのある奴。必ず共にお氣遣ひなせえますな。

傳藏　くれ〴〵も油斷いたすな。

ト兩人は上手へ入る。勘次四邊へ思入あつて、

勘次　手沼刑部の人喰馬に見込まれたあの娘遁しつこはありやアしねえ。おれが家へ連れて行きやア、まだ〳〵娘の仕合せだ。（ト氣を替へて、）誰そあるか。水を持て〳〵。

ト上手に向ひ手をならす。此の時、下手より以前の左内手槍を提げて出で來り、

左内　殿、うけて見られい。

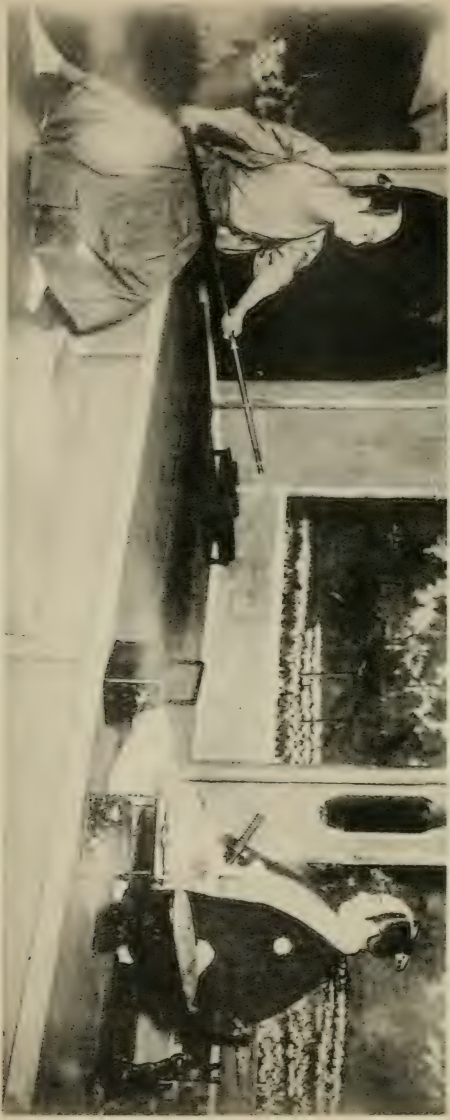
ト突いてかゝる。勘次は身をかはして、キツとなり、

勘次　コリヤ、われを何んといたすぞ。

左内　亞相公には刺賀流の奥儀を極められしと聞く。御手の内拜見したく推參いたした。

勘次　好い所へ、莊司左內。イザ、突いて參れ。

ト是より勘次は扇子にて左内の槍をあしらひ兩人立廻りよろしくあつて、終に左内は槍を叩き落さ



れ平臺舞に坐りて、

左内　命を召させられよ。

勘次　イヤ、武器を棄てた侍の命は取らぬ。も一度其の槍で突いて參れ。

左内　恐れ入つて御座る。大納言家の眞僞は知らず。とにかく、殿は文武の達人。今までの無禮の段は何卒御容赦下されい。

勘次　天晴れなる武士、恨みはあれど。

左内　エツ。

勘次　エ、裏無き武士の交はり、奥へ參つて杯せん。

左内　それは、此の方にても願ふ所。

勘次　然らば、左内。

左内　大納言家。

勘次　其の窮屈な大納言家も、

ト世話にくだけ、兩人顏を見合せ、キツと成り、

參るであらう。

ト勘次先に左内附添ひ上手へ入る。早めの合方になり、上手より傳藏手紙を持ち、惣兵衞お幸は附いて出で來り、二重に腰かけて、

惣兵　他聞を憚かる一大事出來したと仰言りまするは、如何なる譯で御座ります。

傳藏　されば、此の手紙を承はれ。（ト手紙を讀んで聞かす。）飛札を以つて内々申上候。陳者駿河殿密かに江戸表へ出府致され候由專ら噂致し、薄々臺聽に相達し候。然れば此の上御滯在は相叶ひ難く候。早々御本國へ歸らせられ、御謹愼遊ばされ候樣其處許より申上らるべく候。犬山殿。酒井雅樂頭。此の通りの譯柄故、大納言家には卽刻江戸をお立退きに相成らねばならぬ。

惣兵　さう言ふ事で御座りますなら、お立ちの支度をいたしませう。

お幸　お立ちになるはよけれども、まとまりかけた百合の緣組、ありやどうなりますのぢや。

惣兵　此の場合故、是非が無い。殿樣がお國表へ立のきに成つたその上で、お迎ひを待つばかりぢや。

お幸　イエ〱、又と得難い緣組、お大名を婿に取るかとれぬの境、しつかりして下さりませ。

傳藏　其の儀は氣遣ひしやるな、百合殿には殿樣御同道出立ある筈ぢや。

お幸　それでやつと安心いたしました。娘の支度をさせますれば、一寸御免下さりませ。

ト　お幸急ぎ上手へ入る。

惣兵　シテ、今宵殿樣はいづれへ御一泊に御座りまするな。

傳藏　今宵は夜通しお駕籠にて道を急がせらるゝ筈ぢや。

惣兵　せめてわたくしがお國までお供いたして參りませうか。

傳藏　アイヤ、お供は身共と猪上兩人、其の他は下部共、餘人は相許さぬ。

ト合方になり、上手より勘次、羽織、野袴、一刀、次に段六、羽織、野袴、大小にて、勘次の刀を持つて附添ひ出で來り、

勘次　コリヤ、惣兵衞。數日の逗留に厚き持て成し、過分に思ふぞよ。

惣兵　俄かのお立の仔細は、犬山樣より承はり本意無い事に存じまする。思ふ心の半分も行き屆きませぬお持て成し、平に御容赦下さりませ。

勘次　シテ、乘物の用意はよいか。

段六　萬端よろしう御座りまする。

ト此の時、百合半旅支度にて、お幸、女中附いて上手より出で來り、

お幸　不束なる娘百合、行く末御見捨てなきやうにお願ひ申上げまする。

勘次　決して心配せぬがよいぞ。

百合　さやうならば、父上樣、母上樣にも御機嫌よろしう。

惣兵　隨分共に道中氣を附けて。

お幸　お國許へ恙無く。

傳藏　片時も急ぐ御出立。

段六　イザ、お立遊ばされい。

勘次　オヽ、百合。

ト百合の手を取るを木の頭。

一緒に參らう。

ト此の模樣よろしく。靜かな合方にて。

拍子幕

根岸勘次内の場
同奥座敷の場

三幕目

役名　植木屋勘次、同母お常、太郎吉、手沼刑部、犬山傳藏、莊司左内、大宮惣兵衛、同女房お幸、同娘百合。

根岸勘次内の場　本舞臺四間常足の二重、藁葺屋根、椽側附、いつもの所門口、此の外に井戸側、向う三河島を見せたる月夜の遠見、都て根岸植木屋住居の體。二重に行燈を灯し、お常、老母の拵へにて木具膳を拭き、銚子、杯を古びたる箱より取り出して居る。序幕の太郎吉井戸流しにて小魚を料つて居る。此の體よろしく、狸囃子にて幕開く。

つね　コレ太郎吉殿。今夜伜が連れて來る嫁と言ふのは何處の娘で御座るのぢや。

太郎　何處の娘と言つて、たいしたものだぜ。おめへなんざア聞いたら悄りだぜ。

つね　それぢやア、いつか話のあつた名主樣の孃樣でもあるのか。

太郎　ムヽ、もつと上つ手だ。江戸で五本の指に折られ、世間に隠れのねえ大町人大宮のお孃樣です。てきな美い女だ。

つね　ソリヤ、まア、本統の事かえ。

太郎　本統にも何にも、今に來るから見て居りやァわからァ。

つね　それが本統なら、斯んな嬉しい事はないけれど、先樣で吾々風情へ下されう譯が無い。第一、前から話も無く、今夜伜が出し拔けに連れて來るとはわからぬ話。若しや拐帶でもして來るのぢや無いかえ。

太郎　なァにそんな氣遣ひは少しもねえ。先でも身分が違ふ故、內々で寄越すのだ。（ト小魚を串に差し、）是で燒き魚が出來た。然し、酒があるまい。酒屋の寢ない內俺が行つて買つて來よう。

つね　氣の毒だが、さうして下され。お錢は此處にあるから持つて行つておくれ。

太郞　なァに俺が出して置かう。（ト門口へ出て、）ドレ行つて來ようか。

ト急ぎ足に下手へ入る。

つね　伜が晴の身祝ひに着せてやらうと先達て仕立て置いたあの着物、ドレ出して置きませう。

トおつね奥へ立つて行く。是より床の淨瑠璃になり、

〽夏の夜も更けて稻田に風渡る、露の玉散る畔道を、二人連れ立ち幾曲り、小川傳ひに步み來る。

ト此の內、向うより勘次、前幕の姿にて、百合の手を取り、出で來り、花道に止り、

勘次　家來の中に其方をば橫取りせんとせし者あつて、われへ切つてかゝりし故、打拂うて此處まで來たが、彼所に余の知る邊があれば、むさくるしく共一泊いたさん。

百合　さうして、此處は何と申す所で御座りまする。

勘次　此處は名におふ根岸の里。今見た松は御行の松、向うに火の見ゆるが三河島の百姓家ぢや。

百合　殿樣には此の邊よう御存知で御座りまする。

勘次　サア、度々鷹狩に參つた故、それでよく存じて居るのぢや。

ト此の時、舞臺にて光りものする。

百合　アレ。（ト勘次に縋り附く。）

勘次　あれは稻妻ぢや。何も驚く事は無い。此の手をしつかり握つて居やれ。

〽いたはりながら先に立ち、軒端傾く草の屋の簀戸押し開き、內に入り、

勘次　知る邊と言ふは此の家ぢや。

百合　テモ、荒果てた家で御座りまするな。

〽內を覗いて不審顏、人聲聞きつけ母親は奥の一間を立ち出でゝ、

トおつれ蚊遣り火の火鉢を携へ出で來り、

つね　オヽ、戻りやつたか。委細を太郎吉殿から聞き、悦んで居ました。オヽ、門口に居るが嫁御か。サア、此方へ入らつしやれ。遠慮に及びませぬ。

百合　そんなら、御免なされませ。

ト合方になり、百合二重にあがる。此の間、勘次は蚊燻しをして居る。

つね　初めてお目にかゝります。わしは勘次の母で御座る。へ思ひの外の挨拶に此方は更らに合點ゆかず。

百合　勘次と言やるは、若しやひよつと植木屋勘次の事では無いか。

つね　いかにも、此處は勘次の内で御座るが、お前樣は此の内を何と思うて御座つたのぢや。

百合　サア、大方、殿樣にお乳をあげた乳母の内かと、今まで思つて居たわいの。

つね　さうして、殿樣と言はつしやるは。

百合　此處にお居で遊ばす駿河大納言忠長樣の事ぢやわいな。

ト是にて、おつれ勘次に思入あつて、

つね　さうで御座りましたか。それで何もかも解りました。さらば、大納言樣の正體を顯はして見せ

ませう。

〽言ふより早く、勘次の襟髮取つて引き寄せ、聲荒らげ、

つね　アノ此處な惡人奴が。

百合　コリヤ、あなたを何としやるぞ。

つね　此の野郎を殿樣と思はつしやるがお氣の毒、此奴はわたくしの倅にて勘次と言ふ不孝者。

百合　エツ。

ト驚く。床のメリヤスに成り、

つね　生れついての人柄に、植木屋仲間で殿樣と渾名を取つたは此奴の不仕合、氣位ばかり高く成り、及びも無い企して、人樣の娘御を拐帶した大騙り。身分は賤しい植木屋でも、正直律義と褒められた親父殿の名を汚し、生先短い此の婆に近所へ面出しならぬ樣、仕向けるおのれが惡心ぢやなア。

〽老の怒りの一徹に、小づきまはされ、言譯をせん方便も無き身の罪に、額を疊へ摺りつけて、

勘次　おつ母。堪辨してくんなせえ。重々おれが惡かつた。然し、おれが連れ出さねば、惡御家人の

餌に成り、恥をのがれぬ娘御の身の上。まだ〱おれが連れ出して、此處へ來たのは仕合だ。明日の夜明けに人知れず送り返す積りで居るのだ。

つね　イヤ〱。手前の言ふ事は一時のがれの嘘僞り。今夜一晩内へ止め、其の儘返さぬおのれが心と此の母は睨んで居る。言はう樣無い大惡人、親父殿に成り替り、わしが仕置きをせねばならぬ。

〽有合ふ竹割、手に取つて立ちあがるを留める娘。

百合　まア〱お待ちなされませ。お年寄の刄物三昧、怪我をしては成りませぬ。

つね　敵をかばうて下さりまするあなたが優しいお心は忝う御座りますが、口ではいかぬ此奴の根性、叩き割つて仕舞ひまする。留めずに置いて下さりませ。

〽留めても聞かぬ母親が手に振り上げし竹割は義理の折檻、世間の手前。歸りかゝりし太郎吉が斯くと見るより割つて入り、

ト此の内、百合おつねを留める。よき程に、太郎吉白丁下げて下手より出で來り、井戸端に立ち内の樣子を聞いて居たが、此の時、前へ出で、二重にあがり、

太郎　其の仕置はわしをしておくんなせえ。

勘次　オヽ、太郎吉。手前の知つた事ぢやねえ。

太郎　イヽヤ、事の起りはおれからだ。兄貴の手紙を持つて行き、額を割られた悔しさに、仕返しをしてやりてえと思ふ矢先へ、悪侍が戀の叶はぬ意趣返し、斯う〳〵して、恥をかゝせ、大宮一家の奴輩が世間へ面出し成らねえ様にしてやらうぢやァあるめえかと、思ふ壺の話故、此方でも乗る氣に成り、兄貴を駿河様に拵へ、染井の寮へ押しかけて、娘を此處へ連れ出した其の同類の此の太郎吉、兄貴の代りにどうかわしを仕置してくんなせえ。

つね　聞けば聞く程悪い奴、わしが手では仕置が足らぬ。お上のお手にかゝつて死に居れ。（ト竹割を投げ棄てゝ）斯くとは知らず、太郎吉が話した事を誠に受けて、心許りの支度をしたが、今となつては恥かしい。娘御の前、親の思はく、わしは此の儘死にたう御座る。大神宮様、阿彌陀様、婆が命を取つて下されいなう。

〽かつぱと伏して泣きけるは餘所で見る目も哀れなり。

ト百合は屹度覺悟をなして、

百合　勘次殿。わたしを殺して下さりませ。

勘次　何と言はつしやる。

ト床の合方に成り、

百合　駿河大納言樣と思ひの外に、其の人は身分の賤しい植木屋殿。わたしが男であつたなら、お前方を此の儘にして、置くのでは無けれども、かよわい女の言ひ甲斐無さ、此の上恥を曝らさうより一層手にかけ殺して下され。

勘次　途方もねえ事言ひなさんな。見るさへ汚い此の内へ此方を連れて來た丈けで此方の恨みは晴れて居る。此の上此方の肌身を汚し、恥をかゝせる樣な事は金輪那落しねえから、今夜は此處へ御泊りなせえ。

つね　エヽ、まだ／＼おのれはそんな事を言ひ居るか。此の上はわしがお送り申しませう。

勘次　そりや危ぶねえ仕事だ。わしが一緒に來てさへも、手沼刑部の手の者が横取りしようとした位。先は名に負ふ御旗本。中々油斷のならねえ相手だ。どうして／＼今夜は外へ出されねえ。

つね　それぢやア、手前はお孃樣を汚す心では無いのぢやな。

勘次　神かけてそんな心は微塵もねえ。

ト是にて、おつね少々機嫌を直して、

つね　さう聞いて見れば、親の慾目か知らぬけれど、惡心のみでも無い樣子。ともかく、夜の明ける

まで奥の一間を締め切つて、心置き無くお休みなされませ。
百合　それではお年寄の言葉に従ひ。
勘次　いぶせき夢も今夜一晩。
太郎　夜明けを待つてお内方へ。
勘次　御詫をしてもすまねえ身の罪。
つね　明日は何となる事やら。
百合　とくと此の身の行末を。
勘次　思案にあまる事だなア。
〽思ひ入つてぞ。
ト床の三重、時の鐘にて。

道具廻る

同　座敷の場　本舞臺四間常足二重、藁葺屋根、竹の椽側、正面前方床の間、鐘馗の掛け物、續いて襖の出入り、壁、襖共雨洩りの跡あり、行燈に燈火をとぼし、二重前面障子をしめ切る、都て植

木屋座敷の體。風の音、蛙の聲にて道具留まる。

ト合方に成り、向うより序幕の手沼刑部、羽織、野袴、大小にて種ヶ島を携へ、犬山傳藏同じ拵へにて附いて出で來り、花道にて、

刑部　勘次が宅はあれで御座るか。

傳藏　左樣で御座る。左へ參らば表口、右の方が裏口で御座る。

刑部　ウム。

ト諾き、兩人舞臺に來り、垣根を破り、二重の傍へ來て、内の樣子を窺ひ、囁き合ひて、障子を開ける。此の内に百合手紙を認めて居る。兩人を見て驚き立ちあがる。

刑部　アイヤ逃げるには及ばぬ。手沼刑部その方の迎ひに參つたのぢや。

百合　何と仰言る。

ト合方に成り、

刑部　軒端傾く荒家へ連れて來られて、今迄の迷ひの夢も醒めたであらう。此の上は身が屋敷へ連れ參つて妻にいたす。忝いと禮を申せ。

傳藏　迎ひの駕籠も參つて居れば、われ等と同道いたすがよい。

ト百合の手を取らうとするを振拂ひて、

百合　エヽ、汚らはしい。あなたの妻にならうより其の日暮しの植木屋に連れ添ふがまだしも仕合せ。側へも寄つて下さりまするな。

刑部　然らばその方は此の上に如何なる生恥曝らしても、三千石の旗本の妻には成らぬと申し張るか。

百合　三千石は愚な事。假令あなたが大納言五十萬石の大名でも連れ添ふ心は御座りませぬ。

刑部　イヤ、そつちで連れ添ふ心がなく共、此方で是非共添うて見せる。もう此の上は說得無益。

傳藏　引つかついで連れて參らん。

ト兩人百合の手を取り、引立て行かんとする。

百合　手込めにせうとは卑怯な侍、誰ぞ來て下さりませ。勘次殿々々々。

ト呼びながら、兩人と爭ふ。此の時、奧より勘次先に太郎吉出で來り、

勘次　誰かと思つたら、此方は手沼刑部樣。

太郎　犬山樣も御一緒にかつさらひに來なすつたか。

刑部　ヤア、入らざる所へ植木屋勘次。

傳藏　太郎吉まで出て來ずと、緣日へでも出て夜なを張り、知らず半値の商しろ。

勘次　その商の前方に花を荒しに來たおのれ等。

太郎　手足をおろして薪木にするのだ。

刑部　ウヌ小癪な一言。邪魔だていたすと命が無いぞ。

ト刑部が種ケ島を出して勘次に向ける。

勘次　そりや飛道具を持つて居るな。

刑部　いかにも、一筋繩で行かぬ其の方。邪魔いたさば面倒と用意をしたる種ケ島。手向ひいたすと一擊ちだぞ。

ト勘次は少しひるむ。百合前に立塞がり、

百合　其の鐵砲で此の百合の命を一擊ちにして下さりませ。

勘次　エヽ、危ぶねえ。其處のきなせえ。

ト押退ける。太郎吉割つて入り、

太郎　誰より先へおれを擊て。

勘次　エヽ、のいて居ろ。

ト押退ける。其の途端に刑部火蓋を切る。ドンと音がして玉は空を打つ。此の音物に百合は氣絶し

て倒れる。是を透さず勘次前へ出て刑部の種ヶ島を叩き落し、兩人組合ふ。傳藏は刀を拔き、

傳藏　ウヌ覺悟。

ト太郎吉に切り付ける。身をはづして、

太郎　うぬ等に切られてたまるものか。

ト有合ふ樫の棒を持つて立廻り、傳藏を追ひ駈けて下手へ入る。此の間、勘次は刑部と柔術の手の立廻り充分あつて、遂に刑部を組敷き、

勘次　斯うして仕舞へば手前の命はおれの物だ。併、手前も立派な旗本、今日は命を預けてやるから三拜して、（ト刑部を引起して、）歸りやがれ。

刑部　大層な事を申し居るな。植木屋風情と思へばこそ痛はつて遣はすのぢや。一流極めた手沼刑部、イザ眞劒の勝負とならば、其方如きに劣らうや。

勘次　聞くさへ嫌な負け惜しみ、御託を言はずと早く歸れ。

刑部　居よと言つても、此の荒屋になんで長居をいたすものか。（ト立ちあがりて、）併、勘次、今は此の儘歸るとも、思ひをかけた姫百合は何日か手折つて見せるから、其の時馬鹿な面いたすな。前後見ずの愚か者めが。

ト合方に成り、刑部は向うへ入る。あとに勘次は百合を抱き起し、帶の間より前幕の印籠を出し、中の藥を口に含ませ、ザツと顏を見て、

勘次　美しい器量だなア。（ト見惚れる事あつて、氣を替へて、）氣を確かにお持ちなせえ。お孃樣々々。

ト介抱する。百合は正氣附き起直りて、

百合　オヽ、勘次殿。こなたに怪我は無かつたかいなア。

勘次　なに、彼奴等の鐵砲玉がわつちにあたつてたまるものか。

百合　それは何より嬉しう御座んす。

ト思入よろしくある。早めの合方に成り、下手より太郎吉出で來り、

太郎　兄貴、今度は大變だ〳〵。

勘次　ナニ、大變とは。

太郎　大宮の旦那と御新造が其處へお出でなすつたから、その積りて居なせえよ。

百合　そんなら、私の此處に居る事が。

勘次　どうしてお內へ知れたらうか。

ト此の時、奧よりおつれ出で來り、

つね　それはわしが使ひを頼み大急ぎでお知らせ申したのぢや。

百合　ても恥づかしい此の有樣。どうしたものであらうぞいなア。

ト思案にくれる、此の時、奥にて、

惣兵　許さつしやれ。

ト奥より惣兵衞、羽織、着附、一本差、お幸後に附いて出で來り、

お幸　オヽ、娘、さぞ心配を仕やつたらうの。

百合　お二方へ顏向けが成りませぬ。

惣兵　顏向けならぬとは、其方より此の惣兵衞、此の事世上へ知れ渡らば、世間の附合ひが出來ぬ。（ト勘次に向ひて、）ヤイ勘次、それへ出い。町人ながら苗字御免、一刀帶する大宮惣兵衞によくも恥辱を與へ居つたな。

勘次　重々申譯が御座いません。お腹の癒へるやう御存分になすつて下せえまし。

惣兵　よく言つた。娘を疵物にされた仕返しに、其方の身體へ生涯消えぬ疵を附けるからさう思へ。

ト刀を取つて急込むを、おつれ前へ出て、

つね　まあ〳〵待つて下さりませ。斯んな奴でも伜は伜。矢張り不憫で御座りまする。伜の代りに私

を殺して下さりませ。
惣兵　邪魔せずと退いて御座れ。
つね　そりやどうあつても伜を切らつしやるか。
惣兵　疵をつけずは腹が癒えぬわい。
勘次　腕なりと足なりと勝手次第にお切りなせえ。
惣兵　よい覺悟だ。
ト刀を拔きかける。百合その手にすがりつき、
百合　父上、お待ち下さりませ。
惣兵　何で留めるのぢや。
百合　人の身體に疵をつけず、又、わたしには疵のつかぬ樣思案して下さりませ。
惣兵　思案も分別も此の惣兵衛には最早出ぬわい。
百合　そんなら、わたしが言ふ事をどうぞ聞いて下さりませ。
惣兵　シテその分別とはどんな事ぢや。
百合　勘次殿と夫婦にして下さりませ。

惣兵
お幸
百合　何と言やるぞ。

お幸　最初より勘次殿と縁組したと思ひあきらめ、此の儘一緒に添ふ時は女の操に疵もつかず、人をあやめる事も無く、世上の噂も苦勞にならず、まして情ある姑に仕へ、優しい夫にかしづかば、此の上も無い身の幸ひ。今まで心に思つて居た夢の樣な望を棄て、地道に暮す痩世帶。どうぞさうさせて下さりませ。

惣兵　分別があると言ふ故、どんな事かと思うたに、とんでも無い其方の望。どう世の中が變らう共喰ふや喰はずの植木屋へ、そなたを嫁には寄越されませぬ。サア、わしと一緒に内へ御座れ。

ト百合の手を取つて引立てる。

お幸　ア丶、コレ、待たつしやれ。娘が言ふ處も尤もだとは思はれるが、せめて武士の端くれでゞもあつたなら。

お幸　それぢやによつて娘を連れて歸らうでは御座らぬか。

ト此の前より前幕の莊司左内、羽織、野袴、大小にて下手より出で來り、門口に立ち止り、聞いて居たるが、此の時、

左内　アイヤ、勘次は此の左内が立派な武士に出世させるで御座らう。

ト簀戸を押開き、内に入る。

惣兵　其方は左内。どうして此處へ。

左内　勘次に談ずる仔細あつて、是まで尋ぬ參つて御座る。

勘次　思ひがけ無い左内樣。どうぞおあがり下さいまし。

左内　然らば、許しやれ。

ト左内二重にあがり、惣兵衞の下手に住ふ。

勘次　面目も無え此の身の始末、穴へでも這入りてえ樣で御座ります。

左内　なんの〳〵。其方が駿河殿に成りすましては居たれ共、拙者はさうで無い事を扇面の手蹟で見極め申した。（ト百合に向ひて、）それはさうと百合殿には三國一の婿を見立てお仕合せ。伯父御伯母御もお目出度う御座る。それについて伯父御へ御相談。若し勘次が出世して兩刀帶する身分にならば、百合殿と添はせておやりなさるか。

惣兵　そりや其方が言はずとも出世をしたら添はせませう。

左内　しかと左樣で御座るな。（ト勘次に向ひて、）然らば、勘次、其方は拙者と同道し肥前國島原表へ出立いたせ。

勘次　へイ、出世のためなら何處へでもお供いたして參りますが、合點の行かぬ肥前島原。どんな御用で御座えますか。

左内　用と言ふのは外でも無い、一揆の討手に向ふのぢや。

勘次　なんと仰言りまする。

ト替つた合方に成り、

左内　今度切支丹宗門の者共島原城へ立籠り、天草四郎大將にて、侮り難き勢ひと俄かの注進江戸に達し、すでに板倉内膳正殿討手の大將蒙りて手勢引具し出發いたした。其の外細川、黒田の諸侯も追々下國の手筈にて、日頃武勇の增荒男等手柄をせんと走せ加はる。出世をせんと望む者此の機を置いて又あらうや。拙者も討手の人數に加はり、是より直に向う筈。文武の道に優れし其方、錦を故郷に飾らせたく、それ故同道促すのぢや。

勘次　有難う御座ります。腕はあつても、折は無く、何時出世が出來るかと思つて居たが、此の仕合せ。

百合　目覺しい働して、立派な武士に取立てられ、どうぞ歸つて下さりませ。

勘次　イヤ、歸るとも歸らねえとも、それは分らねえが、武名は立派に揚げるつもりだ。

太郎　段々話を聞いて居たが、是で兄貴の願ひも叶ひ、斯んな嬉しい事はねえ。ついちやァお袋はおれがしつかり預かるから安心して行きなせえ。

勘次　さうしてくれりやァおれも安心だ。（トおつれに向ひて、）したが、おつ母、聞いての通りの譯だから、どうぞ遣つてくんなせえ。

つね　遣ら無いでよいものか。サア早う支度をしやれ。

勘次　ナニ此の儘でよう御座えます。

つね　それぢやァ一寸待つて居や。

トおつれ奥へ入る。太郎吉新しい草鞋を持ち來り、紐を通して居る。勘次は戸棚より脚絆を出して穿く。

左内　シテ、伯父御は百合殿を如何なさるゝおつもりで御座るか。

惣兵　勘次が出世して歸るまで、百合は連れて歸るつもりぢや。

お幸　さうで御座いますけれ共、まだどうなるか分りはしません。

ト此の時、おつれ脇差と守り袋とを持つて出で來り、

つね　此の一ト腰は親父殿が祕藏の刀。又、是なるは大事の守り袋ぢや。首へシツカリかけて居やれ。

勘次　有難う御座えます。

ト此の時、鷄笛を聞かせる。

左内　支度がよくば同道いたさん。

勘次　お供いたすで御座りませう。

ト平舞臺に下りる。

惣兵　此方も夜の明け放れぬ中に染井の寮へ歸りませう。

お幸　サア、娘、立ちや。

つね　それぢやァもうお歸りで御座りますか。

百合　お袋樣、色々お世話になりました。

ト會釋する。勘次は草鞋を穿く。

太郎　さうして、兄貴、おめへはどなたの手について戰に出なさるつもりだ。

勘次　どなたのお手につくやら分らねえが、敵の強い攻口にやァいつもおれが先陣だとさう思つて居てくんねえ。

左内　ム、、小氣味のよい事を申す男だ。

ト此の時、下手の奥にて投節を聞かせる。

〽親は他國に、子は島原に、櫻花かや散り〴〵に。

ト此の内、惣兵衞夫婦百合を促し平舞臺に下りる。

惣兵　あの唄はありや何んぢや。

太郎　箕輪通ひの馬方が謳つて通る此節はやる。

左内　あれが投節か。

つね　親は他國に。

勘次　子は島原に。

百合　櫻花かや散り〴〵に。

勘次　翌の便りを。

ト言ふを木の頭。

皆々　待ちまするぞ。

ト百合は立ちあがる。左内、勘次は花道へかゝる。是を又、投節に成る。

〽空に啼く音は皆うそ鳥よ。闇の中こそ時鳥。

ト此の唄に時鳥笛を冠せて、よろしく皆々引張りの見得にて。

幕

中橋廣小路の場
大宮惣兵衛宅小座敷の場
同　座敷の場

大詰

役名　神尾備前守、手沼刑部、豐島一刀、莊司左內、妹お浦、同家來藤三郎、犬山傳藏、猪上段六、大宮惣兵衛、同女房お幸、同伜惣之助、同娘百合、同手代市兵衛、同判助、植木屋太郎吉、職人、町人等。

中橋廣小路の場　本舞臺一面の平舞臺、下手斜めに丸物の橋、正面上の方に御城を見せたる書割、上手に歌舞伎芝居小屋、木戸口を〆切り客留めと言ふ札を貼る、下手に葭簀張りの茶店、簾、提灯などよろしく、此の前に床几二脚程、都て中橋廣小路賑ひの體よろしく。此處に町人、職人、行商人の仕出し大勢立ちかゝり居る。此の體賑やかな鳴物にて幕開く。

町一　モシ、今日はなんで斯んなに多勢人が立つて居るので御座います。何か珍らしい物が此處を通るので御座りますか。

職一　おめへは知りなさらないのか。去年中から騷いで居た肥前島原の天草一揆が今年に成つてやつと治まつたのだ。

行商　その天草一揆と言ひますのは切支丹伴天連の騷ぎの事で御座いますか。

職一　さうさ。そこで去年江戸から繰り出した大名衆が追々歸つて來る中にも今日は總大將の松平伊豆守樣がお歸りなさると言ふ事故、それで斯んなに多勢人が立つて居るのだ。

町一　さうで御座いますか。それぢやア私もお通りを見て行きたいが、程無くで御座いませうか。

職二　夕は神奈川お泊り故、もう程無くお通りだらうよ。

ト是を鳴物に成り、向うよりお浦（序幕の七浦）やつれし形、風呂敷包みを提げて出て來り、花道にて、

お浦　昨日に變る今日の身の露の命をつないで居るも心に願があつての故、聞けば兄上は伊豆守樣の御人數に加はつてぢやと言ふ事故、あれにてお通りを待ち受けようわいなア。（ト舞臺に來る。）

町二　去年は色々な騷ぎが續いた其の中にも駿河大納言樣のお取潰し。專ら御謀叛ぢやと言ひますが、

全くで御座りませうか。

町三　どうで御座りますか。眞實の所はわかり兼ねますな。

職三　それにやア色々入組んだ譯もあるだらうが、死ぬ者貧乏で仕方がねえや。

ト是を聞き、お浦人陰へ隱れる。合方に成り、向うより前幕の左内、陣羽織、裁着、草鞋、大小、家來藤三郎、切半天、裁着、仲間槍を持ち、具足櫃を舁いで出て來り、直ちに舞臺に來る。

お浦　それへお出でなさるは兄上では御座りませぬか。

ト聲をかける。左内振り返りて、

左内　其方は妹お浦。

お浦　おなつかしう御座りました。

ト寄り添ふ。仕出しは兩人を取りかこみ囁き合ふ。バタ〳〵に成り、上手より職人四走り來り、

職四　伊豆守樣はあちらの道をお通りだ。皆早く來なせえ。

職一　何だ。あちらの道をお通りか。馬鹿にしてやアがらア。

ト皆々捨臺詞にて上手へ駈けて入る。

左内　ともかく、床几へ。

ト兩人腰かける。

藤三　コリヤ、藤三郎。其方達は先きへ參り、一刀殿に申さうは左內事は途中にて身內の者に出合ひ、少々遲れまする故に、おかまひ無くお出で下されいと申上げい。

左內　委細畏りました。シテ、私共は。

藤三　一刀殿のお供いたして參れ。

左內　ハツ。然らば御免下さりませ。

ト藤三郎に仲間附いて上手へ入る。

左內　一別以來の挨拶は後の事。承はれば駿河殿には去年十二月高崎城にて御生害遊ばされたとの事ぢやが、さぞ其方も力落しであらうなう。

お浦　お察しなされて下さりませ。私は大納言樣御最期の時までもお供いたしました。

左內　よくお供いたした。シテ、其方は唯今にてはいづこに身を寄せ月日を送るぞ。

お浦　お玉ケ池の琴の師匠吉岡と言ふ內で世話に成つて居りまする。

左內　さやうな處へ參らずと、大宮の伯母方へ何で其方は參らぬのぢや。

お浦　その大宮のお家でも大納言樣の御事で降つて湧いた一家の災難。

左内　何と申すぞ。

ト合方に成り、

お浦　去年五月染井の寮で大納言樣のお宿をした上、娘百合を差上げて奧方にせんとしたは惣兵衞親子御謀叛に荷擔いたした故であらうと、思ひの外のお咎めにて伯父樣も惣之助樣も手錠をはめられ、町內へ預けられて御座りまする。

左内　初めて聞いた大宮の災難。何故伯父御にはありの儘に申されぬぞ。お宿をした大納言家は根岸の植木屋勘次で御座ると申上げたら、何事も明白に分るであらうが。

お浦　其の事も伯父樣より申上げたさうなれど、御加役の手沼刑部樣一向にお取り上げが無く、理非にはかまはず、大宮一家を潰さうと言ふ彼方の計らひ、それ故伯父樣は途方に暮れてで御座ります。

左内　スリヤ、手沼が加役と成り、吟味いたして居ると申すか。

お浦　刑部樣のお屋敷へ三日にあげず、お呼び出し。

左内　それにで大方樣子は知れた。

ト此の時、上手より太郎吉仕事着にて出で來り、

太郎　左内様ぢやァ御座いませんか。

左内　オヽ、太郎吉か。

太郎　御無事でお目出度う存じまする。

左内　其方も息災で重疊ぢや。

太郎　さうして、兄貴も無事で御座えますか。

左内　されば、勘次は手疵を負ひ、歩行も自由ならぬ故、いまだ江戸へは歸へられまい。

太郎　シテ、手疵は深手で御座えますか。

左内　さしたる事でも無ければ心配いたすな。

太郎　それで安心いたしましたが、兄貴が今日中に歸つて來ぬ時はとんだ事に成りませう。

左内　なに、とんだ事とは。

太郎　今夜大宮のお内で祝言があるとの事。

お浦　それは百合殿か、但しは惣之助様か。

太郎　孃様さ。誰にも隱して居るさうだが、わつちは確かな筋から聞きました。婿と言ふのは手沼刑部だ。

お浦　そんなら、百合殿が刑部殿と。

左内　祝言するには仔細があらう。

太郎　仔細があらうがあるめえが、餘りそでねえ仕方故、勘次に代つて此の怨みわつちァ言つてやるつもりだ。

左内　然らば斯様いたせ。

ト太郎吉に囁く。

太郎　それぢやァ先の様子をさぐり。

左内　早速身共に知らせてくりやれ。

お浦　さうして、兄上には是から何方へ。

左内　伊豆守殿のお屋敷へ。

太郎　それぢやァ左内様。

左内　きつと知らせを。

ト立ちあがると道具替りの知らせ。

相待ち居るぞ。

ト此の體よろしく。芝居の鳴物にて。

道具廻る

大宮惣兵衛宅小座敷の場　本舞臺眞中四間の常足の二重、土庇、正面床の間、茶壁、一間二枚襖の出入り、下の方建仁寺垣、枝折戸、上の方後へ下げて土藏にて見切り、平舞臺に飛石、蹲、庭樹等よろしく、都て大宮惣兵衛宅小座敷の體。二重の上手に犬山傳藏、猪上段六、羽織、袴、下手に惣兵衛は手錠にて、女房お幸と住ひ居る。此の體よろしく、合方にて道具止まる。

傳藏　娘百合に於ても今宵の內祝言得心いたしたと、刑部殿へ申した處殊の外喜ばれたぞ。

段六　屋敷では憚りあれば、今夜五ツ時刑部殿をお連れ申せば、支度萬端調へておきやれ。

惣兵　承知仕りました。

お幸　刑部樣のお言葉に裏は御座りますまいな。

傳藏　其の儀は必ず心配いたすな。

段六　是にて、話は目出度く整うた。一獻御馳走に相成らうか。

惣兵　すつかり心つかずに居りました。此處は餘り狹くるしう御座りますれば、此方へお出で下さり

ませ。

傳藏　然らば案内頼む。

ト是にて、惣兵衞先に三人附いて奥へ入る。此の時、下手の奥にて、

太郎　用があるんだ。通しておくんなせえ。

ト言ひながら、市兵衞、利助の留めるを振拂ひ、枝折門より出で來る。

市兵　顏に覺えのある植木屋、用とは一體何の用だ。

利助　一朱か二朱の無心なら聞いてやるから、早く歸れ。

太郎　イヽヤ、そんな事ぢやアねえ。此處の孃さんに話があつて來たのだから通す事が出來ねえなら、此處へ呼んでおくんなせえ。

市兵　こいつァ氣違ひだ。叩き出して仕舞はう。

利助　それが手つ取り早でいゝ。（ト下手より竹箒を持ち來り、）

市兵　サア、出て失せろ。

太郎　イヽヤ、孃さんに會はねえ内は出て行かねえ。

利助　行かざアかうして。

ト左右より竹箒で打つてかゝる。

太郎　エヽ、ふざけた眞似をしやァがるな。

ト二人を見事に投げる。此の時、二重の襖を開け、序幕の惣之助、羽織、着流しにて出で來り、

惣之　誰かと思つたら植木屋の太郎吉殿。まァ是へかけなさるがいゝ。

太郎　それぢやァ御免なせえ。

ト二重に腰をかける。

惣之　二人共彼方へ行くがいゝ。

市兵　何の事だ。

ト兩人下手へ入る。

惣之　サァ、太郎吉殿。今日は餘儀無い取込みで妹はお目にかゝり、お前さんのお話を承る譯にゆかねば、わしが代つて聞きませう。それともわしぢや話相手に成りませぬか。

太郎　孃さんの名代に若旦那なら結構だ。

惣之　シテ、此方の話と言ふは。

太郎　モシ、若旦那。いくら堅氣の女でも當にやァ成らねえものだねえ。

ト合方に成り、

七面鳥と言ふ鳥は一日幾度顏色が變るか知れねと言ふ話、それを譬に引くぢやアねえが、去年勘次と別れた時、夫婦約束して置きながら、まだ一年と經たねえに、手沼へ内縁極まり、今夜祝言するとやら、都合次第で變るのが當世かは知らねえが、それぢやア大家の孃さんとか育ちがいゝとか言ふ事は慾に迷ふと言ふ符諜だ。斯うした譯とは不知火の筑紫の先の天草で勘次は明け暮れ戰の中。その一揆も治まつて故鄕へ飾る錦の裏、ボロに等しい女の根性矯め直して今宵の祝言止めにするか。但し又、勘次へ言譯立つ樣に道を立てゝくんなさるか。二つに一つの挨拶をどうか聞かせておくんなせえ。

忠之 其の恨みは尤もだが、是には深い譯のある事。勘次とは兄弟分の此方だから聞かせるが、まア斯う言ふ話ぢや。意地の惡い手沼刑部勘次に鼻をあかされて、折がなあらばと狙ふ中、火附盜賊改役に昇進したを笠に着て、駿河樣の御謀叛に一味と言ひ立て、大宮一家を罪に落し親子諸共此の通りぢや。太郎吉殿、見て下され。

ト是にて、太郎吉忠之助の懷をあけ手錠を見て、

太郎 手錠までかけるとはいまいましい刑部めだ。

惣之　愈々言譯立たぬ時は親父も私もお仕置受け、大宮の家は缺所。それが嫌なら妹を寄越せと退引させぬ刑部が仕向け、家の爲め、親の爲め、是非無く手沼と祝言せんと覺悟した妹の心中察してやつて下されい。

太郎　お話を承つて成程會得しました。是れぢやア、勘次も思ひ切らざア成りますめえ。よく〱薄い緣だなア。

ト此の時、二重の奥より市兵衞出て來り、

市兵　若旦那樣。今お店へ豐島一刀と言ふお方がお出で成されて、勘次から手紙を頼まれて來た。孃樣に面會がしたいと申されてゞ御座りますが、どういたしませう。

惣之　其の一刀と言ふ人は天草の總攻めに目覺ましい働して天下に武名を揚げた勇士。ともかく、是へお通し申すがよい。

市兵　畏りました。

惣之　太郎吉殿には急ぎでなくば、私と一緒に奥へ來て下さらぬか。

太郎　チツト他に急ぎの用事が御座えます故、それを濟ませて、又あがりませう。

惣之　それぢやアどうぞさうして下さい。

太郎　そんなら、若旦那。

惣之　後に又會ひませう。

ト太郎吉は平舞臺下手へ、惣之助は二重へ入る。下女兩人丸行燈、煙草盆等を運ぶ。よき程に奥にて、

市兵　此方へお通り下さりませ。

ト言ふ聲して、以前の市兵衞先に立ち、豐島一刀面半分に黑き痣、陣羽織、大小にて出で來り、上手に住ふ。

唯今孃樣はお目にかゝりまする。暫時お待ち下さりませ。

ト市兵衞引返して入る。よき程に百合前幕より少しやつれて見ゆる拵へにて奥より出で來り、一刀の顔を一目見て、

百合　アレ。(ト叫びて、袖にて顔を隱す。)

一刀　驚き給ふは尤もながら、醜きは顔ばかり、心はずんと優しいもので御座る。

百合　此の頃は憂き事ばかり續きし故か、物に怯える癖が附き、何事でも無いに今の樣なけたゝましい聲を上げ、お氣に觸りし無禮の段御免なされて下さりませ。

一刀　言はるゝ如くお顏のやつれがひどう御座る。それはさて置き、勘次より御身への書面イザ御覽なされい。(ト懷中より手紙を出して百合に渡す。)

百合　おなつかしい此の手紙ようお屆け下さりました。御免下さりませ。

　ト會釋して披き見る。一刀はジツと見て居る。百合は氣遣ひの思入あつて、

一刀　さしたる疵でも御座らねば、其の氣遣ひには及び申さぬ。

　手疵少々受けた故、江戶へ歸るが遲れると是に書いて御座りますが、深手では御座りませぬか。

百合　今までは此の世にてもう一度お目にかゝれる事と心の張りも梓弓。歸るには未だ間があると此の手紙の文面に賴みの弦も切れ果てました。シテ、あなたには勘次殿に重ねてお會ひなされまするか。

一刀　いかにも面會いたすで御座る。

百合　左樣なれば、勘次殿へ御傳言が願はれませうか。

一刀　苦しう御座らぬ。遠慮無くお話しなされい。

百合　お恥づかしうは御座りますが、お聞きなされて下さりませ。去年の五月根岸の里で勘次殿に別れてから一日千秋の思ひにて送りし月日もはや一年。其の甲斐も無う手沼の聞くさへ嫌な宿の

一刀　妻。浮世の義理に身を棄てるとも、今度の世には夫婦ぢやとお傳へなされて下さりませ。

百合　スリヤ、此方には自害をなさる心ぢやな。

一刀　アヽ申し、私が心の奥底を誰にも言うて下さりますな。今宵の祝言すんだなら、生きて益無い此の體。翌日は烟になるとても、此の身に滿ちた戀だけは片時も忘れはせぬ。勘次殿へ形見に殘して置きまする。

一刀　それ程までに勘次の事を。

百合　思はいで何としませう。二世かけた夫婦ぢやもの。もう一度逢ひ度ひ見たいわいなア。

ト是にて、一刀たまらぬ思ひにて、

一刀　その勘次こそ。（ト言ひかけて、心附き、）勘次も一目見たう御座らう。

ト涙を飮込む思入よろしくある。此の時、二重の奥よりお幸出で來り、

お幸　お話が濟んだなら、早う支度をしやれ。

一刀　何樣、御當家でもお取込みならん。拙者は是でお暇申す。

お幸　眞にお匆々で御座りました。

ト此の内、一刀立ちあがる。百合呼び止めて、

百合　ア、申し、未來で待つと。

ト一刀と顔見合せるを木の頭。

仰言つて下さりませ。

ト此の仕組よろしく。合方にて拍子幕。

鳴物にてツナグ

同　座敷の場　本舞臺一面の平舞臺、正面の方九尺の床の間、其の次ぎ地袋、違ひ棚、續いて銀地に畫の襖、上下共同じ襖、舞臺一面に薄縁を敷き、眞中に島臺、杯、銚子、左右に燭臺、金屏風を立廻し、都て大宮座敷祝言の體。上の方に手沼刑部、犬山傳藏、猪上段六、いづれも麻上下にて住ひ、下の方に惣兵衞、惣之助兩人共羽織、袴、此の下手に莊司左內、以前の拵へにて住ひ居る。

此の體よろしく、合方にて幕開く。

惣兵　偖、刑部樣、是なるは甥の左內、今日天草より歸りしとて尋ねて來たを幸ひ、列席いたさせまして御座りまする。

刑部　珍らしや莊司氏。島原の城責めに分捕物でもいたされたか、大層立派に成られたな。

左内　是は〳〵刑部殿、命を賭けて戰場で働いた身共より、貴殿は居ながら身にすぎた獲物をなされて、さぞ御恐悦で御座らう。

刑部　如何にも、年頃望んだ花がわが手に入つて今宵より某が宿の妻。斯樣な悦ばしい儀は御座らぬ。（ト傳藏に向ひて、）傳藏殿。親子の手錠を解いてお遣りなされい。（ト鍵を出して渡す。）

傳藏　よろしう御座る。（ト惣兵衞親子の手錠を外して、）兩人共大慶であらう。

惣兵　有難う存じまする。

段六　それはさうと、嫁御寮は如何いたした。早く此の席へ連れて參れ。

惣兵　何をいたして居りますか、伜見て來やれ。

ト此の時、上手にて、

お幸　唯今其處へ參りまする。

ト合方に成り、上手の襖を開けて、百合、白無垢の振袖、お幸に手を取られ、女中兩人附いて出で來り、眞中に住ふ。

お幸　お待たせ申しました。モシ、傳藏樣。今夜の娘が器量見てやつて下さりませ。

傳藏　何樣。唯美しいとばかりでは此の器量が言ひ盡されぬ。斯る時に用ひる言葉を身共は未だ存じ

申さぬ。

段六　彼の竹取の爺夫婦が祕藏娘の赫耶姬。それにも優つた好い器量ぢや。

お幸　是ぢやによつて、ツイ夢の樣な望が起るので御座りまする。

惣兵　ア、コレ、其の望み言はぬ事ぢや。娘がお蔭で父子共手錠の苦痛を遁れました。

刑部　猶、此の上に惣兵衞父子お咎めの廉々申開き相立つ樣某が計らひ得させん。

お幸　左樣なれば、娘よりお杯を。

ト差圖する。百合杯を取り上げ、女中前へ出て酌をする。此の間、左内は下手へ思入ある。百合飲畢りて、杯を刑部に指さうとする。此の時、下手の奥にて、

一刀　其の杯待つた〳〵。

ト聲をかけながら、以前の一刀下手の襖を開けて出て來る。

百合　あなたは最前の一刀樣。

刑部　噂に聞いた豐島一刀。何んで杯を留めたのだ。

一刀　其の杯外に受ける者が御座る。

刑部　シテ其の者は。

傳藏　いづくの誰だ。
一刀　外ぢやアねえ。わつちで御座えます。
刑部　何と申す。
一刀　唯、わつちぢやア分るめえ。島原攻めの先陣に烟硝庫へ飛び込んで顔は半分焼けたざれ、相格こそは變つたが、變らねえのは男の性根。おらア植木屋の勘次だ。
傳藏
段六　エツ。（ト驚く。）
一刀　此處の娘とは、去年から夫婦の約束した仲だ。其のおれに斷らず、上の威光を笠に着て、往生づくめの内祝言。そりやア蟲がよすぎるだらう。おれが歸つて來たからにやア此の杯はさゝせねえから、牛や犬の畜生仲間。人に叩かれねえ中に尻尾を卷いて歸るがいゝ。
刑部　偖は豐島一刀とは勘次手前の事であつたか。戰の中を稼いで來た丈け齒ごたへがして面白い。然し、われの力にて大宮一家が無事安穩に立つて行くなら重疊ぢや。身共は高見で見物いたさう。
傳藏　左樣々々。後で吠え面かくのを御覽なさるも一興だ。
段六　斯樣な所に長居は無益。イザ引取りませう。

ト三人立ちかゝる。

惣兵　お腹立は御尤もに御座りますが、今刑部樣にお願ひせずば大宮の家は破滅。脊に腹は變へられませねば此方の話を付けまする間、暫時お待ち下さりませ。

刑部　然らば、話を早くいたせ。

左內　アイヤ、此の方の話は疾くについて御座る。

惣兵　そりや又どうして。

左內　惣兵衞父子お咎めの廉々老中伊豆守殿より赦免の御書付卽ち是に。

ト懷中より奉書の書付を取り出して見せる。

傳藏段六　其の書付を。

ト左右より取らんとするを見事に投げ、

左內　疑ひも無き豆州殿のお書付。御念には及び申さぬ。

刑部　勘次、左內兩人にて裏の裏行く計略によくも身共をはめ居つたな。返へすぐも憎き奴めが。

傳藏　イデ素首を。

傳藏段六　刎ねてくれん。

ト刀の柄へ手をかける。下手より以前の太郎吉出て來り、

太郎　其の奴等おれに任せてくんねえ。

一刀　オヽ、手前は太郎吉。

太郎　兄貴の歸るを待つて居たのだ。

刑部　又、蛆蟲めが飛び出し居つたか。

太郎　何を。

ト双方キッと成る。此の時、以前の利助下手より出て來り、

利助　町奉行神尾樣がお出に御座りまする。

刑部　奉行が參らば面倒だ。御兩所お出でなされい。

ト刑部先きに傳藏、段六附いて上手の奥へ入る。

太郎　口程にもねえ弱え奴等だ。ハヽヽヽ。

ト合方になり、下手より序幕の神尾備前正勝、繼上下、一刀、羽織、袴の侍に刀を持たせ出て來り、上手に住ふ。

惣兵　思ひもよらぬお奉行樣のお越し。お出迎ひも仕りませず恐れ入つて御座りまする。

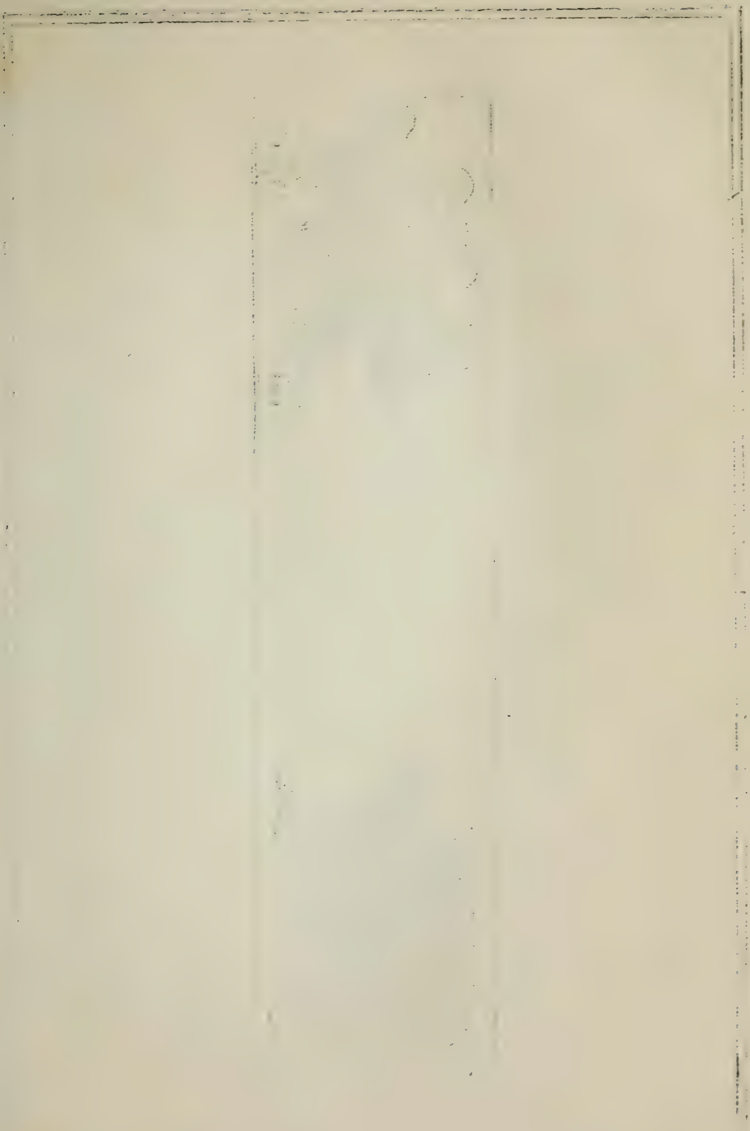
備前　其の酌斟無用ぢや。此處に手沼刑部が居ると承はり、案内も無く參つたが、姿の見えぬのは如何いたした。
惣兵　刑部樣にはお奉行のお越しと聞き、早々お歸りに相成りました。
備前　それは殘念な事をいたした。先達來刑部が當家の仕向きにつき、取糺す次第あつて、是まで出張いたしたが、早くもそれと勘付いて逃げ出せしものならん。なには格別惣兵衛父子御赦免に相成りまづ以つて重疊ぢや。是と申すも左内殿や一刀殿が働きに依る處ぢや。シタが、一刀殿には如何いたして大宮一家をおかばひはなさるゝな。
一刀　一刀とは假の名。眞は去年本鄕追分のそばやでお目に懸りました植木屋勘次で御座えますよ。
傳前　左樣であつたか。いかい出世をいたされたなう。
左內　然るに、勘次と言ひし頃當家の娘と緣談の約束いたせしかどに依り、戰場の功名を大宮一家の難に替へ、義を立て通した一刀殿。
百合　スリヤ、それ程までに此の百合を。
惣之　思つて下さる勘次殿。よい婿を取りましたな。
備前　とてもの事に、此の備前仲人役をいたすであらう。

一刀　それぢやァ殿様があの仲人を。
百合　有難う存じまする。
左内　斯様な目出度い折柄なれば、惣之助殿にも妻をお迎へなされぬか。
惣之　シテ、その婦人と申しまするは。
左内　唯今連れて参りまする。（ト下手へ入る。）
太郎　おらァすつかり忘れて居た。兄貴が無事に歸つた事をお袋に知らせて來よう。
一刀　御苦勞ながら一ト走り。
太郎　合點だ。皆樣御免なせえ。
ト挨拶して下手へ入る。左内お浦を連れて出で來り、
左内　婦人と申すは此の者で御座る。
お浦　惣之助樣。おなつかしう御座りまする。
惣之　昔は大名の奧女中、今は唯の女。
左内　妻に持つて下さるか。
惣之　氣に入りました。妻に持ちませう。

惣兵　それでは、此處で双方一緒に。
お幸　祝言するとは目出度い話。
一刀　とは言へ、斯んな化物面ぢやァ。
百合　なんの、まァ、お顔の痣は勇士の譽。
備前　其の身を飾る生きた記錄ぢや。
一刀　それで、わつちも。
　　ト杯を取り上げるを木の頭。
　本望で御座えます。
　　ト杯を飲み干し、百合に指す。一方にては惣之助お浦と杯事をする。此の仕組よろしく。目出度き
　唄にて、

拍子幕

来（らい）山（さん）



來山

今宮十萬堂來山庵の場

役名　土岐伊豫守、有村一學、小西來山、甥清兵衛、番頭忠右衛門、大鼓持頓八、五人組九兵衛、平七、長助、作藏、彌吉、藝子小ふじ、仲居おまち、子守おまつ、駕籠屋兩人。

今宮來山庵の場　本舞臺眞中に四間常足の二重、三方竹椽、藁葺屋根、よき處に白字にて、十萬堂、と書いた木の額、正面上手床の間、續いて塗壁、下手二枚の襖、光琳の繪、竹椽、上手へ折廻して九尺の附屋體、障子を〆切る、矢張り藁葺屋臺、風雅を極めたる建物、平舞臺いつもの處に枝折戸、垣根、此の外正面今宮の在家を見せたる秋野の書割、枝折戸の內、庭の心にて飛石、燈籠、

秋の七草の下草等よろしく、二重に文臺、料紙、硯箱、茶道具等を置く、よき處に燒物の女人形な置く、都て今宮の來山庵の體よろしく。時刻は七ツ下り、古風な唄にて幕開く。

ト下手より仲居おまち、太鼓持頓八菱藁の住吉踊を持ってウロ〳〵しながら出で來り、

頓八　なア、おまちはん。有村の旦那は小ふじはんを連れて駕籠でさきへ急がせ、島屋の寮を尋ねてあとから來いと言やはつたが、此方その島屋の寮を知つてか。

まち　あたいも來た事が無いに依つて知らんのや。

頓八　なんのこつちやいな。私は又お前がよう知つて居るのやと思うたに依つて聞かずに附いて來たのや。そんなら、此處で問うてやらう。

ト枝折戸の傍に立寄りて、

モシ、一寸お尋ね申します。此の近所に島屋と言ふお茶屋の寮がある筈。其處へ行く道を敎へて下さいませ。モシ〳〵。

ト枝折戸を開ける。此の時、奥より忠右衛門、商家の番頭の拵へにて出で來りて、

忠右　此處の主人は今留守で、私は他所から來合せた者故、此の界隈の事はとんと私には分りません。

まち　頓八はん、聞いてか。此のお方も知らぬと言やはるが、どうしたものやらうな。

頓八　かう成つたら、もう仕方がおまへん。一軒〳〵聞いて歩きませう。

ト行きかける。此の時、子守おまつ子守唄を唄ひながら出て來る。

まつ　ねんねこ〳〵ねんねこせい、ねんねのお守は何處へ行つた。

頓八　ア、コレ、其處へ行く子守はん。此方島屋の寮を知つて居やるか。

まつ　ア、知つて居ます。其の家ならツイ此の後ろぢや。

まち　其處へ行くにはどう行けばよいのか。

頓八　賢い子ぢや。敎へておくれ。

まつ　敎へても上げやうが、徒ぢや嫌だなア。

頓八　テモ慾張つた守ッ子ぢや。

まち　一寸お待ち。是を上げる。

ト錢を出して遣る。

まつ　おばさん、是をわたいにくれるのかえ。

まち　なんなと買うておあがり。

まつ　有難う。飴を買はうか、饅頭にせうか、何方にせうか、思案橋、ホイ。

ト節を附けて唄ふ。聽ておまつは二人を連れて下手へ入る。

忠右　廓の人を見るにつけ、困つた者は家の若旦那樣。愈々募る御放埒。今日は旦那樣のお歸りを待つて是非共若旦那へ御意見をお願ひ申さねばならぬ。

ト待ち受ける。合方に成り、向うより來山、光つたる坊主頭、黒の十徳の拵へにて、手錠をはめ、五人組九兵衛、平七、長助、作藏、彌吉、いづれも平袴、羽織にて附添ひ出で來り、すぐに舞臺へ來りて、

九兵　來山殿。それでは私等は是で別れませう。

來山　まア、內へ入つて茶でも飲んで歸つて下され。

平七　イヤ〱、此の內で造作になるのは氣の毒ぢや。

長助　此方もさぞ口惜からうが、昔から泣く子と地頭には勝たれぬ譬。

作藏　いくら此方に理があつても、相手がお奉行樣故、仕方が無いと諦らめさつしやれ。

彌吉　是からもある事ぢや。發句をするにも隨分共に心を附けさつしやれ。

來山　イヤモウ、心の無いお奉行に出られては閉口ぢや。

九兵　サア、それが惡い。とかく何事も言はざる見ざる聞かざるぢや。

平七　そんなら、來山殿。
來山　御苦勞で御座りました。
九兵　サア、歸りませう。

ト五人は打連れて下手へ入る。來山は技折戸を開けて入る。是にて、道具半廻しになる。

來山　花に唄ひ月に嘯く此の身にも思はぬ災難で此の手錠。別に辛いとも思はぬが、明日から自炊が出來ぬので是ばかりが當惑ぢや。

ト此の時、忠右衞門奥より出で、

忠右　旦那樣、お歸りなさいまし。モシ、其の手錠はどうなされたので御座ります。
來山　此の手錠は俳句のために受けた戒めぢや。
忠右　何と仰しやります。

ト合方に成り、

來山　今日番屋へ此の來山を呼び寄せ、お役人が出張して、コリヤ、來山、其方はお奉行を罵つた科に依り七十五日の手錠申付けると寢耳に水の申渡し。何故のお咎めと聞いて見たら其の譯と言ふのは去年の暮、お奉行の名さへ覺えず年暮れぬ、と言ふ句を詠んで人に見せたが噂となり、

遂にはお奉行の耳に入つて以つての外のお怒り。大阪三郷に往居して奉行の名さへ知らぬとは上役人をさみする寓意の俳句と、思ひ設けぬ難題。イヤ、左樣では御座りませぬ。世を遁れた俳人の心を詠んだ句で御座りますると言譯しても、其の甲斐無く此の通り手錠を受けて歸つて來ました。

忠右　とんだ御災難で御座りました。とは言へ、あまり分らぬお奉行故、手蔓を求めて御城代樣へお願ひをして御赦免に成るやうにいたしませう。假令何程金錢を費してもお助け申さねばなりませぬ。

來山　其の心配は止しにさつしやれ。浮世遁れた來山、木の端か石の缺に等しい命。貴い金錢を費し、人に心配を掛ける値打は御座らぬ。番頭どん、棄てゝ置いて下され。

忠右　どうして棄てゝ置かれませう。小西のお家には今でも大黒柱のあなた樣で御座ります。それに又お棄てなされた浮世の面倒を、もう一度見て頂かねば成らぬ事が出來て參りました。

來山　よく〳〵心配らしい其方の樣子。一體まアどんな事で御座るぞ。

忠右　其の譯と申しますは斯うで御座ります。あなた樣が御身代を今の旦那樣にお讓り遊ばして、此の今宮へお引籠りなされてより、後は及ばずながら此の忠右衛門内外に心をつけ、お店も繁昌

いたして居りますが、若旦那には先達中より廓通ひ。それも唯のお遊興なればとや斯う申すのでは御座りませぬが、近頃では追々お遊びに實が入つて、島の内の小ふじと言ふ藝子を受け出し、御家内に直さうとの思召し。取り敢へず其の藝子の素情を調らべて見ますると、母親は知れてあれど、父親は何處の誰とも知れぬとの事。いかに若旦那の御執心でも、父無し子の御新造様は小西のお家の瑕瑾で御座りますとお止め申上げましても、一向にお聞き入れが御座りませぬ。此の上はあなた様の御意見より、外に良いお藥が御座りませねば、お願ひに上がりまして御座います。

ト思入あつて賴む。來山は首を振つて、

來山 あの小西の身代はわしが大方仕上げた身代。一旦甥の清兵衛に讓つたからは倒さうと起さうと清兵衛が心次第ぢや。藝子でもおやまでも氣に入つた女を内へ入れたがよい。世間離れた此の來山そんな事にはとんとかまはぬ。

忠右 何程、一旦讓つた御身代。どう成らうとかまはぬとは、あなた様の御氣象、御尤もでは御座りますが、道修町の藥鋪で一二を爭ふ小西のお家。人に指さし笑はれぬやうにいたしますが、憚りながら御先代へ盡すあなた様の義理では御座りませぬか。

來山　イヤ、浮世に交らねば、人に立てる義理も無い筈ぢや。
忠右　それでは、どう成らうと構はぬと仰りますか。
來山　ハテ、成行に任しておかつしやれ。
忠右　困つた事で御座りますなア。

ト腕組して思案に暮れる。此の以前より土岐伊豫守、羽織、袴、大名微行の拵へにて、下手より出で來たり、枝折戸の外に佇みて居たが、此の時、内に入る。

伊豫　來山殿。御免下され。
來山　誰かと思へば雨江殿。ようお出で下された。

ト是にて、伊豫守二重に住ひて、

伊豫　承はれば、此方には思ひ掛け無い今日の災難。町奉行の暗愚にも驚き入つて御座る。
來山　イヤ〳〵、俳人が俳句のために、お咎め受けたは本望で御座りますぢや。ハヽヽ、ハヽヽ。
伊豫　其の推量が無うては風流の娯みは分りませぬ。併し風流もあまり深入いたすと、遂には家も人も忘れるやうな事に相成るもので御座る。
來山　さては雨江殿には兩人の話をお聞きなされたか。

伊豫　唯今、是へ參り合はせ垣根越しに思はず承つた。番頭殿の眞心感心いたした。

來山　それで、今の樣に當つけて言はしやつたか。

伊豫　來山殿。假令浮世を他所になすとも、義理の絆は斷たれませぬぞよ。

來山　何と言はつしやる。

伊豫　此方が受けたるそれなる手錠こそ、世間のほだしは切つても切れぬ證據では御座らぬか。世外に遊ぶ俳人と自ら極めて居られても、町奉行の支配を受け、其の下知には背かれぬ如く、此の世の義理は棄てられませぬ。それ共其の手錠斷ち切つて棄て召さるゝか。

來山　サア、それは。

伊豫　いかに心强い來山殿でも其の戒めはよも切れまい。さすれば、世間の義理とても生ある身には棄てられず。番頭殿が主家を思ふ忠義に愛で、再び浮世の面倒を見てお遣りなされずば、眞の風流人では御座りませぬぞ。

ト是にて、來山默つて居る。忠右衛門前へ出で、

忠右　私事は小西の召遣ひ忠右衛門めに御座ります。段々お言葉をお添へ下され有難う存じまする。シテ、あなた樣は何方樣で御座りますか。

伊豫　われ等事は月に一兩度づゝ此の庵を訪ねて、風月を樂しむ雨江と申す者。心安だてら入らざる口出しをいたした。來山殿。惡う思うて下さるな。

ト此の時、來山は自分の非を悟つた思入あつて、

來山　イヤ、雨江殿の御意見で心得違ひを覺りました。

忠右　そんなら、お願ひ申した事をお聞き入れ下さりますか。

來山　清兵衞が迷ひの夢の覺めるまでは、又元の小西四郎兵衞。浮世の夢を又見ようわい。

忠右　忝う御座ります。是と言ふも、雨江樣のお蔭、なんとお禮を申上げてよいやら、有難う存じます。

伊豫　何の禮に及ばうぞ。然し、來山殿が兩手を戒められて居ては不自由で御座らう。われ等が解いて進ぜよう。

ト來山の傍に寄るを、

來山　アイヤ、此の手錠は町奉行のお許しが無い中はいつかな取れませぬ。

伊豫　其の町奉行へはわれ等より既に申談じて赦を受けて參つた。

來山　そんなら、あなた樣が御厚情で。

伊豫　必ず共に心配召さるな。

ト伊豫守來山の手錠を外してよき處に置く。

來山　お蔭で戒めが取れて、天地の間に自由の身となりました。

忠右　重ね〳〵のお情け有難う存じまする。シタが、唯今のお言葉の樣子と言ひ、お羽織の御紋と言ひ、モシヤ御城代樣ぢやござりませぬか。

伊豫　ホヽオ、番頭殿は天晴れ目がね。如何にもわれ等此の日頃俳名の雨江にて來山殿と心安くいたしたが、實は城代土岐伊豫守ぢや。

ト來山、忠右衛門は驚く。

伊豫　風流の友垣は大名町人隔ての無いが樂しみぢや。

來山　流石は雨江殿、感心いたしました。（ト忠右衛門に向ひて、）時に、番頭どん。其方は大急ぎ家に歸り、清兵衛を連れて來さつしやれ。わしが會うて、まづ意見をしてやりませう。

忠右　大方若旦那樣は今日も島の內で御座りませうに依つて、直ぐお連れ申しまする。（ト伊豫守に向ひて、）左樣なれば、御城代樣。

伊豫　イヤ、此の庵で城代は申さぬ事ぢや。

忠右　是はうつかりいたしました。雨江様、御ゆるりと遊ばしませ。ドレ一走り行つて參りませう。

ト忠右衛門一さんに向うへ入る。

伊豫　小西の家では良い番頭を持つて仕合せぢや。とかう言ふ中最早夕景。われ等もお暇いたさう。

來山　お構ひ無くば、薄茶でも獻じませう程に、御ゆりとなされませ。

伊豫　折角ながら、又こそ參るで御座らう。

ト平舞臺に下りる。蟲の音聞える。

ハテ、床しき音がいたす。

ト來山一寸考へて、

來山　今宮は蟲所なり聾なり。

伊豫　ウム、感吟ぢや。

ト此の時、下手より供人多勢挾箱等を持ち出で來り、

供人　お迎ひ。

伊豫　オヽ、大儀ぢや。

供人　ハツ。

ト平伏する。伊豫守は花道附際まで行く。

伊豫　今宮は蟲所なり。

ト後句を考へる。來山引取りて、

來山　聾なり。

ト兩人顏見合せ、

兩人　ハヽヽ。

ト笑ひながら伊豫守は供を随へて向うへ入る。來山思入あつて、

來山　浮世を棄てた來山も、又俗人に成らねばならぬか。

ト文臺を脇へ寄せる。此處へ下手より小ふじ、蓑子の拵へ、跣足にて走り來り、枝折戸を開けて、内に入り、

ふじ　少しの間隱して下さんせ。モシ、お願ひで御座ります。

ト跡を氣遣ふ思入。

來山　見れば廓の人さうなが。どうして、逃げて御座つた。

ふじ　お客に連れられて島屋の寮へ來ました處、其のお客が嫌がる私を手込めにせうとしました故、

逃げ出して參りましたが、あとから追駈けて來るかも知れませねば、何處へなと隱して下さんせ。お慈悲お情で御座んす。

來山　それは氣の毒な。さう言ふ譯なら隱して進ぜませう。其處に雜巾があるに依つて足を拭いて此方へ御座れ。

ト道具半廻しに成る。小ふじは足を拭いて、來山に附いて上手の附屋體に入る。此の時、下手より有村一學、大小、袴、薩摩侍の拵へ、小ふじの跡を尋ねる體にて出て來り、思入あつて、内に入る。

一學　チト物なお尋ね申す。此の内へ若い女が逃げ込んで參りはいたさぬか。返答を聞き申したい。

ト此の時、奥より來山行燈を下げて來り、

來山　イヤ、女と言うては女猫一疋も參りはいたしませぬが、外口をお尋ねなさりませ。

一學　確かに此の方角へ逃げて參つた女め。隱れる所は此の庵より外には無い。某が念晴らしに家捜しのさせておくりやれ。

ト二重へあがるを來山止めて、

來山　それは成りませぬ。火打箱の樣な家でも小西來山が住居ぢや。踏込めるものなら踏込んで御覽なされ。

一學　吹けば飛ぶ樣な老爺め、入らざる留立てせずとすつ込んで居よ。

來山　女に眼のくらんだ侍、一足も奧へはやらぬぞ。

一學　小癪な事を。

ト留める來山を突きのけ足蹴りにする。上手の障子を開けて以前の小ふじ走り出で、

ふじ　有村さん。待つて下さんせ。

一學　其方は小ふじ。遁れぬ所と觀念して、某が戀を叶へてくれるか。

ふじ　イヽエ、主さんに此の身を任す心は少しも御座んせぬが、お慈悲深い此處のお方に怪我をさせてはすまぬ故、それで私が出て來たのぢや。お年寄を足蹴にせずと、私を存分打たしやんせ。死んでも主さんの心には從はぬぞえ。

ト小ふじ一學に身體を突きつける。

一學　可愛さ餘つて憎さが百倍とは、小ふじ其方の事ぢや。某が腰に差した氷の刃よりもそつと冷たい其方が胸を一突きにしてくれう。

ふじ　そんなら、主さん。私を切る氣で御座んすか。

一學　オヽ、おいどんも國の習ひ。仕かけた戀が叶はずば一思ひに切つて仕舞ふのぢや。

ふじ　イエ、わたしや外に戀しい殿御が御座んす故、一學さんの刃にはかゝりませぬ。

一學　おのれ、その頬げたを切り下げくれん。

ト刀を拔く。小ふじ平舞臺に下りる。來山刃の下を掻くゞつて一學を留め、

來山　まア／＼待たつしやりませ。武士の嗜み重代の業物は、女を切るためのお差料で御座りますか。

一學　ヤツ。

來山　侍の意地づく、乘りかけた舟。女めを一打ちとお心早るは御尤もなれど、よう考へて御覧じませ。女一人を切る時はあなたは切腹。親御は人に笑はれて、先祖代々の御位牌に瑕が附きませうぞや。それ程高價な代物を拂ふ程の女はめつたに御座りませぬ。世間一通りの女は此の人形の樣に上に五色を彩つて美しう見せかけても、中は土塊同然。それに男の魂を打込んであたら命をさゝげるは大きな阿呆。此の來山も譯あつて浮世の女は皆水臭いものぢやと見限つて土人形の色娘、此の方が餘程罪が無うて良う御座ります。あなた樣もまだお年若、お國には親御さんも御座らう。さりとては御不料簡、拔いた刃は血を見ずに元の鞘へ納まらぬと云ふ事なら、此の人形を眞二ツ、それで御勘辨なされませ。なんとで御座りまする、お武家樣。

ト此の內、一學だん／＼氣が碎けて、果ては頭を垂れ、下に坐りて、

一學　よく相分つた。然らば其方が言葉に任せ、おいどんはまかり歸る。
來山　そんなら、御會得が參りましたか。
一學　眞二ツにと存ぜしに命冥加な女めぢや。
ト唄に成り、向うへ入る。
ふじ　お蔭で危い所を助かり、命拾ひをいたしました。お禮は言葉に盡されませぬ。
來山　どう成る事かと心配したが、流石は薩摩の武士。竹を割つた樣な氣象ぢや。それはさうと、此方は何方の藝子ぢや。
ふじ　アイ、私は島の内の小ふじと言ふ者で御座んす。
來山　あの此方が小ふじ。ムヽ。
ト思入。行燈をつける。此の時、向うより小西清兵衞、商家の若旦那の拵へにて、駕籠に乘り、以前の忠右衞門附いて出で來り、直ぐに舞臺に來り、
忠右　此處でよい〳〵。
清兵　モウ此處が今宮か。考へながら來たせいか、何時もより近かつた事なア。
ト言ひながら、駕籠を出る。忠右衞門酒手を駕籠屋に遣り、

忠右　御苦勞であつた。

駕一　有難う御座います。今にも泣出し相な空工合ぢや。

駕二　降らぬ中に早く歸らうぜ。

ト駕籠屋は空駕籠を舁いで向うへ入る。

清兵　泣出し相とはわしの心を言うたのか。

忠右　イエ、今に晴れて參ります。（ト枝折戸を開けて、內に入り、）旦那樣をお連れ申して御座ります。

來山　丁度好い處であつた。サア、此方へ通らつしやれ。

ト此の時、清兵衛は小ふじと顏見合せて、

清兵　ヤツ、其方は小ふじ。

えじ　若旦那。

ト兩人寄添ふを、來山中に割つて入り、

來山　ア、コレ、二人共必ず傍へ寄るまいぞ。所詮添ふ事ならぬ緣と諦めて、綺麗に別れて下され。思ひ思うた若い同士、別れる今は辛からうが、つまりは矢張り二人のためぢや。コレ、清兵衛。まづ其方から返事を聞かう。

清兵　長年の其の間小言一つ仰言らぬ叔父樣が御意見背いては濟まね共、小ふじとは堅い／＼約束した仲、其の言葉を反古にしては此の清兵衞男が立ちませぬ。

忠右　御尤もで御座りますが、素性も知れぬ流れの女を御家内になされましては、それこそ世間へお顏向けが成りませぬ。約束した義理が立たぬとなれば、金で話はつきまする。取返へしの成らぬお家の名折、ようお考へ遊ばしませ。

清兵　いくら考へても、わしの心は一つぢや。どうあつても、小ふじを女房に持つ事が出來ぬと言ふなら、コリヤ、一層わしが小西の家を出て行かう。さすれば、差支ひは無い筈ぢや。忠右衞門、其方から叔父樣にわしの勘當を願うてたも。

忠右　そんなら、あなたの方からあの御勘當を。

清兵　オヽ、其の方が餘程氣樂でよい。サア、小ふじ、行かう。

ト清兵衞小ふじの手を取る。來山思入あつて、

來山　清兵衞、待つた。おのれ勘當受けて女を連れ、明日からなにをして口過ぎをする積りぢや。勘當せいと言ふおのれに涙は無からうが、此の叔父が胸は一杯ぢや。藥屋の商ひ一ィ通りの道は知つて居ても、腕一本で稼いだ事も無いおのれ。何をして命を繫ぎをろうかと思へば、涙がこ

ほれるわい。今更ら言ふまでも無いが、此の來山はおのれが父淸右衞門の弟ぢや。兄が無くなつた時、おのれはまだ年齡が行かなかつたので、わしが家督を相續したが、兩親共に失うたおのれを不便に思ひ、忙しい中で人手にかけず育て上げ、二十五に成るを待ち兼ねて身代讓つて、ヤレ、安心と思ふ間も無く身持放埓。よからぬ噂も度々聞けど、成行次第と棄てゝ置いたが、忠右衞門がたつての賴みに、二度ともう世間の事にはたずさわらぬと心で極めた誓を破り意見をするは何のため。更々身代の減るを惜しんでするでは無い。おのれを人に笑はせまいと思ふ眞身の情ぢや。いくら勘當してくれと其方で賴まう共、此の叔父は勘當せぬ。身代減らす極道の淸兵衞何故叩き出して仕舞はぬ。來山は阿房ぢやと笑はれても大事ない。是程思ふ叔父の心が少しでも其方の胸に通ふなら、小ふじ女郞を思ひ切り、堅氣の嫁を迎へてくりやれ。遊女の淚が身に浸みて、叔父や番頭が眞の淚は身に浸まぬか。さりとては、情けないぞよ。

ト落淚の體。小ふじ思入つて、

ふじ　エヽ聞えませぬ。叔父御樣。遊女の淚と眞身の淚出る所が違うてか。同じ眼から出る淚を別け隔てするは餘りな。とは言へ、父樣の素性も知れぬ私は、所詮若旦那と添はれぬ緣と諦らめました。今日から綺麗に別れまする。

清兵　それでは、今までの約束が皆嘘の皮ぢや。
ふじ　イヽエ、嘘では御座んせぬ。私は今までの睦言を明日からの思ひ出に生きる積りで御座んす。
清兵　今までの事を思ひ出にして生きようとはよく言うてくれた。嬉しいぞや。わしは其處に氣附かず、其方と一緒に暮せるだけは暮し、愈々つまつた其の時こそは共に死ぬ積りであつたが、頼みにならぬ來世の契り。それよりは互ひに永へてさへ居たら、花の匂ひだけは何時までも樂しめやう。
ふじ　そんなら、お前も諦めて。
清兵　今後ふつつり逢ひませぬ。とは言へ、比翼と契つた二人が仲、今より後は獨寢の。
ふじ　夢だけは許して下さんせ。（卜泣伏す。）
來山　そんなら、あの得心して下さるか。
ふじ　アイ。眞實得心ぢやわいなア。
來山　よう聞き分けて下された。忝い〳〵。
忠右　若旦那も天晴お出かしなされました。小ふじ殿、何にも言はぬ。是ぢや〳〵。
　　卜忠右衞門小ふじに向ひ手を合せて拜む。

來山　斯う語が極つた上は一つ所に居無いがよい。清兵衞は忠右衞門と一緒に奧へ行きやれ。又、小ふじ女郎は島の內へ。わしが其處まで送つて進ぜませう。

忠右　イエ、私が送つて參りませう。

來山　イヤ、道々話したい事もあれば、わしに駕籠屋まで送らせて下され。

忠右　それでは、お願ひいたしまする。サア、若旦那、奧へお越しなされませ。

ト是にて、清兵衞立上り、奧へ行きかけて、

清兵　コレ、小ふじ。もう一度顏を見せてたも。

ふじ　アイ。

ト兩人寄り添ひて思入。此の內に雨の音。

忠右　名殘りは盡きねど、大降りにならぬ中。

來山　小ふじ女郞、出かけようか。

ト奧より雨傘を持つて來る。小ふじを連れて、門口に出る。此の內、雨益々降り出す。

是はえらい降りぢや。少し止めて行かつしやれ。

ト兩人二重に上る。

坊主頭をして、譯の分らぬ老爺ぢやと、今こそ腹も立たうが、わしも若い時に覺えのある事。謠講の歸るさ、友達に勸められて、北へ遊びに行つたが病つきで、ある女と深う成つた。所が其の女が心變りからふつつり思ひ切つて、商ひに身を入れ身代を直した。後で思へばよう別れたと思うた。然し、わしは二十越しての上の事。此方は若いに似合ずよう聞き分けて下された。せめて、此方の心を慰めるやうにして進ぜたいが、望みがあるなら言はつしやれ。

ふじ　有難うは御座んすが、何にも望みは御座んせぬ。若旦那に別れたは悲しいが、私が母さんの事を思へば、まだ／＼諦らめよう御座んす。

來山　そんなら、此方の母御も同じ様な憂き目に逢はしやつたのか。

ふじ　アイナア、母さんも流れの身。私の父さんと夫婦約束した丈けで、浮世の義理に迫られて、心にも無い愛想盡し。あきもあかれもせぬ仲を別れた後で私が生まれ苦勞を重ねた儚い母さん、それによう似た私の身の上。義理を立てゝ若旦那に別れ、是から先を寂しく暮す涙がせめての心遣り。義理程辛いものは御座んせぬ。

ト此の内、來山昔を思ひ出す事よろしく。

來山　全體此方の母御は何所で勤めをして御座つた。

ふじ　曾根崎で浪花屋小梅と言うた藝子とやら。

ト是を聞いて、來山吃驚した思入。

來山　そんなら、此方は小梅の娘で御座るか。

ふじ　さう仰言るからは、私の母さんを御存知で御座んすか。

來山　此の老爺が若い時分小梅には度々逢うた。

ふじ　そんなら、もしや私の父さんを見知つては居やしやんせぬか。

來山　オヽ、知つて居る共、朝夕逢はぬ日とては無い。

ふじ　扨は御無事で居やしやつたか。シタガ、私の生れた事は夢にも知らぬ父さん。必ず言うて下さんすなえ。それが私の母さんの遺言。

來山　何で又其方のある事を、父御へ知らしては成らぬのぢや。

ふじ　其の譯は母さんが無くなる前に私へ寄越した此の手紙。是に委しう書いて御座んす。

ト守袋より手紙を出して見せる。

來山　わしに見せてはたもらぬか。

ふじ　讀んで見て下さんせ。

ト手紙を來山に渡す。來山眼鏡をかけて、

來山　なに〳〵、今度の病氣所詮全快の見込み無く、近き中には此の世のお別れと存じ候まゝ、お前樣に日頃隱せし事を書き殘し候。私事二十年以前にお前樣の御父樣と別れ候事私の心からにては無之。實は父樣の兄御より內々の賴みにつき、義理に迫りて心にも無き愛想盡しはいたし候へ共、未だに其の人を慕ふ心に變りは御座無候。嘸や御身無き後は世に便り無きお前樣、誰を力に世を送るべきと思へば、胸迫り、一層御父樣にお前樣を設けし事を打明けたいと思ふ心は山々なれど、それにては賴まれた人にも義理立たず。又、何にも知らぬ御父樣に生涯苦勞をかけるが痛はしく候まゝ、今以つて知らさずに置き候。母の心を汲みて、此の身無き後も御父樣に知らす事堅く御無用に御座候。此の一事言ひ殘し度。あら〳〵かしく。

ト幾度も目を拭きながら讀み終りて、

そんなら、わしに苦痛をさせまいとて、娘の生れた事を知らさなんだのか。エヽ、斯うと知らず、薄情な女めと怨んだ昔が恥かしいわい。

ふじ　手紙を讀んで泣かしやんすお前は、モシヤ私の父さんでは御座んせぬか。

來山　オヽ、此の老爺が其方の父ぢや。

ふじ　そんなら、父さん。

　　ト思入あつて、立ちかけると、

來山　ア、大事無い。此方へ寄りや。よう母に似やつたなう。

ふじ　アイ。

　　ト兩人手を取り合うて泣く。此の時、清兵衛先きに忠右衛門奥より出て來り、

清兵　委細の樣子はあれにて承はりましたが、さては、小ふじは私の從妹であつたか。

來山　此の來山が若氣の誤り、斯んな娘を設けた事は今まで少しも知らずに居た。番頭どん、笑つて下さるな。

忠右　笑ふ所か、お悦び申します。斯う小ふじ殿の胤が分つたからは一家同士の御緣組、若旦那と御夫婦になされては如何で御座りませう。今度は私から此の事をお願ひ申し上げまする。

來山　番頭どんの心盡しは嬉しう御座るが、それではわしが餘りわが身勝手になるに依つて、小ふじを内へ入れる事は成りませぬ。

忠右　其處を何卒忠右衛門が一生のお願ひ、是が叶ひますればどんな御奉公でもいたしまする。

來山　何と言はしやつても、此の來山が不承知で御座る。

ト此の前より以前の一學下手より出で來り、門戸口にて立聞きして居たるが、此の時、内に入り、

一學　イヤ、小ふじはおいどもが妹にして、清兵衛どんの嫁に遣はしたいが、なんと御承引は下さらぬか。

來山　オヽ、此方は最前のお侍様。

ふじ　打つて變つた今のお言葉。

一學　不審に思ふは尤もぢやが、一學前非を後悔いたしした。先刻來山殿が留めて下さらずば、小ふじを打ち果たし、おいどもも腹搔つ切る所であつた。イザ、鎌倉と言ふ時は君の御馬前で討死すべき此の命、女故に棄てずに濟んだのは、全く來山殿の情、千萬忝う存ずる。（ト丁寧に辭儀をして）取り敢へず、一禮申さいではと引つ返して是へ參つて、計らず聞いた此の場の樣子、小ふじをおいどもが妹にいたさうと言ふも、來山殿へ聊か返禮の心ぢや。

清兵　今までは戀の敵の一學樣が小ふじを妹にして、此の清兵衛に添はせて遣らうとは、二人のためには命の恩人。

忠右　初めてお目にかゝるお武家、よい處へお越し下されまして有難う存じます。是では旦那樣も御得心で御座りませう。

來山　一學殿が妹とあるからは、いかにも嫁に取りませう。
一學　スリヤ、御承引下さるか。
忠右　それで、私の願ひも叶ひ、有難う存じます。
　　　ト皆々喜ぶ。
來山　一學殿、私は今日まで女と言ふ者はむさい者とのみ思うて居ましたが、それは私の思ひ違ひ、優しい姿の中に立派な心を持つて居る者ぢや。此の手紙を見て下さりませ。（ト以前の手紙を一學に見せる。）
一學　シテ、此の手紙の主は何人。
來山　是なる小ふじが母の遺言。
　　　ト是にて、一學讀んで見る。
一學　スリヤ、此の手紙が。（ト思入あつて、）一字々々皆涙。
忠右　所で、お二人樣は嬉し涙。
來山　二色に氷らぬ袖の涙かな。（ト淸兵衞に向ひて、）淸兵衞。
淸兵　ハイ。

來山　此方は生きた女房、わしは土人形の色娘、ア、浮世の夢は、

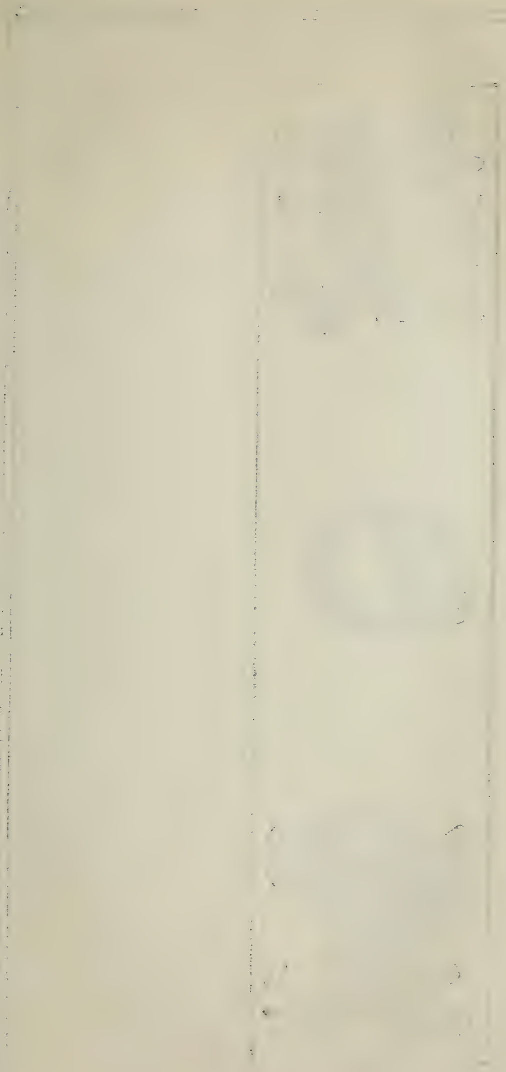
ト言ふを木の頭。

味なものぢやなア。

ト土人形を見て思入。清兵衞と小ふじは嬉しき思入。忠右衞門は安心の思入。一學は手紙を繰り返へし見る體よろしく。

幕

鼓(つゞみ)の里(さと)



鼓の里

大和櫻井鼓師內の場
同　本陣座敷の場

役名　綾小路三位有信卿、諸太夫白川監物、金春六之亟、鼓師安房勘兵衛、同娘倉子、弟子捨藏、弟子三之助、下女おさん、名主十市兵衛、鼓の職人多勢、青侍多勢。

鼓師勘兵衛內の場　本舞臺上寄りに四間常足の二重、上の方二間は疊を敷く、正面暖簾口、棚に新木の鼓の胴を並べたる書割、下手二間は一段低く板間の細工場、正面に戸棚、その中に道具箱、櫻の用材等を置く、何時もの處に門口、是に御鼓師安房勘兵衛と書いた看板を掛ける、平舞臺上手に櫻の古木、井戸、刎釣瓶、門口の外遠く多武峯を望み、近く倉梯川を見せたる書割、時候は彌生

半頃、所は大和國櫻井の片端れ鼓師安房勘兵衛内の體。此處に所の若者多勢いづれも縞の着附、中には股シキを穿きし者も交り、鼓の職人の拵へにて、二重に腰を掛け、或は立掛り居る。此の體よろしく在郷唄にて幕開く。

皆々　老爺どのは内にか。勘兵衛殿々々。

ト皆々口々に呼び立てる。奥にて、

勘兵　勘兵衛は内に居るが、多勢で何の用ぢや。

ト言ひながら、主人勘兵衛、老けたる髪、何事にも頓着せぬ名工の拵へにて、暖簾口より出で來り、

晝飯に一杯やつたら、思ひの外によう利いて、好い心持に浮世の苦患を忘れて居た所を、意地わるひ、火のつくやうな聲を出して、何でわしを起したのぢや。

○　ソレ見た事か。老爺どんが腹を立てゝぢや。是ぢやに依つて、わしは大きな聲をするなと言うたのに。

□　嘘を言はつしやれ。其方が一番大きな聲を出した。（ト他の者に向ひ。）ナウ、皆の衆。

○　イエ〳〵。われが銅羅聲をあけたのぢや。

□　何をぬかすぞい。おぬしの破鐘聲が。

ト言ひ爭ふを勸兵衞うろさ相に、

勸兵　エヽ、喧しい和郎達ぢや。そんな爭ひより用向を先へ言はつしやれ。

○　ホンニ、さうであつた。偖、老爺どの、かう皆が打揃うて來ましたは、此の春中から皆が骨を折つて居る大内御用の鼓、誰の作が一番になるか。愈々今日中にきまるのぢや。

□　それに就ては、此の家の娘御の婿樣も愈々きまると言ふ譯ぢや。

△　そこで、其の婿殿が誰ときまつた曉に、アノ男はいやだとか、アノ和郎は蟲が好かぬとか、親子の衆が言ひ出して、變更されては一大事ぢや。

×　誰が何と言はうとも、娘はきつとやると言ふ老爺どのの誓言をもう一度。

◎　皆の前で。

皆々　聞かして下され。

勸兵　それなら安心しやれ。わしは此の年に成るまで一度も嘘をついた事は無い。言ふまでも無いが、此の櫻井は鼓の細工で名高い所。千年前の百濟と言うて、今の朝鮮ぢや。其の國の樂人味摩之と言ふ人が、日本へ來て勅命うけて、此の地で吳樂を傳授したのが、抑も我が國に鼓の傳はつた始まりぢや。其の時分から、吾々の先祖が鼓の胴を打つ事に心を籠め、其の技術が段々と進

んで、世の寶と言はれるやうな好い鼓を造つた名人も、此の土地に生れた。私が、此の節の細工人は、利慾に走つて、腕を磨かうと心がける者が無く成つた。ア、、是では、土地の由緒もすたつて仕舞ふと、明暮、苦勞にして居た所、先達、綾小路三位樣が、わしを召されて、世の寶とも成る好い鼓を打つて差上げい、大内の御物に成さるのぢやとの御言葉。いや私は老年でも御座りますれば、土地の若い者共に打たせませう程に、其の中で、出來の好いのをお取り下されませと申上げたれば、然らば、百日中に打たせろとの仰せであつた。其處で、皆に其の譯を話して、好い鼓を打つた者には、わしが娘もわしが家も皆やらうと約束したは、和主達を勵まして、廢れ行く業を盛り返さうためぢや。何の噓を吐くものか。

○　さうであららとは思うたが、此の家にも捨藏、三之助と言ふ二人の弟子がある事故、若しや其の中の一人を婿にする内心ではあるまいかと、それで、皆が氣をもんで、念を押しに。

皆々　來ましたのぢや。

勘兵　和主達は、何を言ふぞい。皆が打つた胴をお見分けなさるのは、三位樣。それがため、わざわざ櫻井までお越しに成つて居る。彼方樣に依怙贔屓があつて好いものか。それにまた、此の勘兵衛とても、親子の情を先にして、家業を後にする程に、まだ耄碌はして居ぬわ。

△　此方は、さうでも、一人娘の倉子どの、選り嫌ひをしまいものでも無い。

勘兵　オヽ、其の時は、娘を追ひ出して仕舞ひ、わしが魂皆に見せう。

皆々　きつとそうぢやな。

勘兵　念には及ばぬ。

○　それ聞いて、皆も安心しました。そんなら是から三位様のお宿へ行き。

□　丹精籠めて打た胴を御覧に入れ、誰のが大内の御用に成るか。

△　皆揃うて出かけやう。さうして内の弟子達に。

勘兵　後から、わしが連れて行かう程に、かまはず行かつしやれ。

○　そんなら勘兵衛殿、本陣で。

皆々　會ひませうぞや。

ト在郷唄に成り、六人の若者は下手へ這入る。奥より、倉子、華手な振袖、年若き娘の拵へにて、出て來り、

倉子　モシ父さん。お前は、どんな悪人でも、鼓の胴さへ上手に打てば、娘の連合にするお心かえ。

勘兵　悪い奴に上手は無い、何故と言や、細工は腕でするのぢや無い、心でするのぢや。

倉子　それでも、死んだ母さんが、名人に怠け者が多い、乾寝をして、酒ばかり飲んで遊んで居て、家の暮しのためにはならぬと常々に言うてゞ御座んした。

勘兵　そりや、遊んで居るのぢやない。考へて居るのぢや。我が身は、いかう不足らしい顔をして居るが、娘と家を投出して、さびれ行く土地の名を盛り返さうと言ふわしが志、誰一人賞めぬ者はないぞよ。

倉子　父さんは、褒められてよからうが、わたしやつまらぬ。わたしや矢ッ張りいとしい人に添いたう御座んす。

勘兵　アノ三之助に添ひたいか。

倉子　あいなア。

勘兵　あいつもわしが弟子故、仕事は下手ぢやないが、まだ至らぬ所がある。あれよりもモット優れた細工人がまだ外にあるかも知れぬ。わしはさう言ふ隠れた名人が欲しいに依つて、家と娘を投出したのぢや。

倉子　その替り、父さんは私を殺すのぢや、娘の戀を殺すのぢや、私の樣なお多福でも、それ相應に望が御座んす。ひよつと内の捨藏見た樣な片輪が養子に極つたら、わたしや何としませうぞ。

勘兵　さうなれば、至極結構ぢや。

倉子　エツ。

勘兵　何、驚く事があるものか。成程、彼奴の片足は短い、併し腕は揃うて居る。鑿を持たせば、神の子ぢや。山猿見たやうな顔はして居るが、胸には立派な魂を持つて居る。寶を入れた箱はどんなに汚なからうとも、價値は中の寶にあるのぢや。瓦を入れた蒔繪の箱がいかに立派であらうとも、何で貴い。わしは捨藏位立派な男は此の村にあるまいと思うて居るのぢや。

倉子　そりやア、私も常々捨藏を褒めて居ます。八年前の大雪の日、アノ捨藏が破れ鼓を打つて門に立ち物貰ひに來たを、父さんが呼び込んで、夫れから内へ置いてやり、お前の弟子にして、仕事を教へ、上達はしたけれども、あれは乞食ぢや、孤子ぢやと皆が嫌ふ其の中で、私一人が不便を加へ、痛はつてやつては居ますが、戀のあらう譯は無し、あんな男と夫婦になるのは私はいや。

勘兵　モウ〳〵、我が身の言草聞きたう無い。戀があらうがあるまいが、親の決めた男を夫としてかしづくが、是子たる者の道ぢや。我のお蔭で、酒の醉がさめた。ドレ奥へいて、呑み直さうか（ト奥に向ひ、）おさすや、酒の燗をして置けよ。

ト言ひながら奥へ這入る。在郷唄に成り、向ふより三之助、色白の優男にて、黒塗の鼓箱を提げて出で來り、枝折戸を開けて内に這入り、

三之　倉子さん、どうしたのぢや。又、親方が酒の上で無理を言はつしやりましたか。

倉子　ムヽ、好い處へ來てたもつた。今、父さんに割つ口說いつ賴んで見たれど、父さんは誰彼の差別無く、好い鼓を打つた者を、婿に取るのぢやと言ひ張つてぢや。

三之　それでは、大方、わしが望も。（トがつかりした思入。）

倉子　エヽ、其方は水臭い。わしが望と言はずに、わしら二人が望と、何故言うてたもらぬぞ。

三之　コリヤ、私が惡かつた。成程、わしら二人が望ぢや。其の望を繫ぐ是なる鼓の胴、見て下さりませ。（ト箱の中より鼓の胴を取り出して、）櫻の木にも心を用ひ、鑿のクリ一ツにも命を縮めた苦心の仕事。篤くと見て下さりませ。

ト鼓を倉子に渡す。

倉子　私の魂と此方の魂を一ツにして出來た鼓、何處に一ツの疵も無い好い出來ぢやなア。

ト嬉しき思入。

三之　イエ〳〵、安心は成りません。

倉子　そんなら、是に優つた鼓がまだ外にあると言やるか。

三之　誰のにも負ぬ積りで心に誇つて居ましたが、只恐ろしいは、アの捨藏。

倉子　何と言やるぞ。

三之　昨夜多武の峯へ參り、その歸りに、倉梯川の渡しへ來ると、月もおぼろの遲櫻、花の陰で、捨藏が聞く人ありとも知らずして、自作の鼓を調べて居たが、更け行く夜半に、音も冴へ渡り、流れに響く鼓の音に、思はず聞とれ、後でわしは獨りで泣いた。どうしても彼奴は鑿で仕事をする者よりは遙かにすぐれた職ぢや。とてもわしの敵では無い。多分、此方は捨藏と夫婦にならねばなりませぬぞや。

倉子　心細い事を言うて下さんすな。假令、捨藏の打つた鼓の胴が今日の一番であらうとも、何の夫婦に成らうぞ。又。捨藏とてもそんな夢を見ては居ぬ。只名を揚げたい一心であらう。

三之　イヤ〳〵、さうでは御座りませぬ。彼奴が此方を見る目附はどうしても戀があるのぢや。

倉子　ハテ、さう見えるは其方の邪推、若い男が私に物を言ひかければ、其方の目には皆戀人と見えるのであらう。安心しや。年頃不便を加へて世話をした捨藏ぢや。私がいやぢやと言へば、それても夫婦に成らうと迫まるやうな道知らずでは無い。

三之　イヤ〳〵、一心凝つた男の戀は義理も絲瓜もかまうては居ぬ。摺つた揉んだの揚句の果が、此方が折れて祝言する。何時の間にか子供が生れる。わしは忘れられて仕舞うて、身投をするか、坊主になるが落ぢや。

倉子　コレ、我が身は私をそのやうな弱い女子と思うてか。父さんが不承知で其方と夫婦になれぬ時は、一生外の男は持たぬ。

三之　サア、今は其の心で御座つても、捨藏が譽を擔ひ、里人に持て囃されて歸つて來るを見たなれば、アノ跛も滿足に見えやう。石のやうな堅い心もツイとろけて仕舞ふ。

倉子　エヽ、聞えぬ三之助、此の胸に燃ゆる思ひが。（ト自分の胸を指さして、）此方のすゞしい目には見えぬか。（トジツと男の顏を見上げ、）神かけて、何時までも仇し心はわしは持たぬ。此の優しい手でいつものやうに。（ト三之助の手を取り、）シツカリと抱いてたも。

ト男に縋りつく。此の時、向う揚幕の内にて多勢の子供の聲聞える。

子供　跛が逃げる樣を見イやい。

皆々　ワアイ〳〵。

ト口々に言ふ聲聞える。合方に成り、向うより捨藏、ポツト裝、至つて醜男、木綿の着附、草履な

はき、跛を引きながら、走せ來り、門口に驅け込み、ホツと息を吐く。此方の二人は、忙てゝ飛び退き、

三之　オヽ。我が身どうしたのぢや。

捨藏　又、村の惡太郎どもが大勢寄つてたかつて、わしをからかい居つた。是も片輪に生れた不承ぢや。

ト額に手をあてる。血紅少し流れる。

倉子　其方は怪我をしやつたか。

三之　何處で其の傷を受けて來た。

捨藏　子供に追はれて逃げた時、轉んだはずみに石で打つたのであらう。

ト是にて捨藏手に附いた血を見て、

三之　いま／＼しい餓鬼共ぢや、以後の懲しめに引摑まへて來てやらう。

ト行きかゝる捨藏止めて、

捨藏　よして下され。わしさへ勘辨すれば、それで濟む。

倉子　私が其の血を拭いてやりませう。

ト手水盥に水を汲んで來て、自分の手拭を濡らし、額の血を拭いてやる。後で、捨藏右の手拭たそつと戴く。是を三之助ジッと見て居て腹の立つ思入。

捨藏　エヽ、もう何とも無い、有難う御座いました血は止まつたが、痛みはせぬかや。

ト此の時奥より下女おさん出で來りて、

さん　三之助さん、親方が呼んでぢや。早う奥へ行かつしやれ。

三之　今直に參りますと、さう言うて下され。

さん　直に行かぬと叱られるぞや。

ト言ひながら、引返して入る。三之助思入あつて、

三之　コレ、捨藏。今一時か二時の中には、わし等が身の行先が定まるのぢや、是までのやうに友達同士で居るか、又、敵同士に成るか。それまでは、オヽ、さうぢや、傀儡師の人形箱ぢや。

捨藏　相弟子同士で角の立つた物の言ひやう。仕事の敵は不斷の友達ぢや。

三之　イヽヤ、わしが言ふのは、此の仕事の敵ぢや無い。（ト鼓の箱を叩きて、）戀の敵ぢや。

捨藏　エツ。（ト思入。）

三之　鬼になるか、佛になるか。運次第でわからぬが、大方、おぬしとわしとは、手を取つては歩かれまい、一つ道は行かれまい。

ト言ひ乍ら、奥へ這入る捨藏は跡を見送りて、

捨藏　何の事か、わしには薩張わからぬ。

倉子　今にわかる時が來る。それはさうと、其方の打つた胴はよい出來ぢやと言ふ噂ぢやが、私に一寸見せてたもらぬか。

捨藏　サア〳〵、見て下さりませ。

ト細工場の戸棚より白木の鼓箱を取り出し、蓋を開けて、鼓の胴ばかり出し、

陰陽の鑿のくり方、今までの鼓の胴に斯う言ふくりは一つも無い。四つの調子を調べて　天地の間のあらゆる聲を此の中に潜ませた。年頃、晝夜の別ち無く學び、試み、考へたわしが苦心で、やつとの事、此の胴が出來たので御座ります。

ト此の中、倉子ジツと鼓の胴を見て、

倉子　名人と言はれる父さんでさへ、及ばぬやうな鑿の使ひやう、今日の勝は其方の物ぢや。

捨藏　喜んで下さりませ。是も皆、親方や此方のおかげぢや。わしのやうな片輪者でも、事に寄つた

ら、櫻井一番の人に成れるかも知れませぬ。

倉子　オヽ、其方は一番の人に成つてよからうが、アノ人は、

ト小聲で言ひかけ、思ひ迫つて、ワツと泣く。捨藏は氣を揉みて、

捨藏　此方は何で泣かつしやるのぢや。今、わしの言うた事が氣に障つたのぢや御座らぬか。

倉子　イエ〱、さうでは無い。打遣つて置いてたも。

捨藏　譯も無いに、泣かつしやるは。アヽ、わかつた。コリヤ、嬉し涙であらう。わしの鼓が思ひの外によう出來た故、それで泣いて下されたか、アヽ忝い。此方の涙を倉梯川へ流して、わしを惡く言ふ奴に飲ませてやりたい。周圍は皆敵の中に、此方はたつた一人のわしの味方ぢや。八年前に、わしが此所へ來た始めから、親身も及ばぬ此方の親切に、わしは人の情の味を覺えました。シタが、こんな片輪の生れに恥ぢて、今日まではおくびにも口へは出さ無んだが、倉子さん、わしはとうから此方に憧れて居たのぢや。

ト是を聞いて、倉子驚きたる思入。

サヽ、其の驚きは尤もぢやが、わしは片輪の上に、此の通りの醜男故、此方から可愛しがつて貰はうと思ふのは、無理かも知れぬ。然し、わしのために泣いてまで喜んでくれた此方、涙は

嘘に出ぬものぢや。

倉子　待つてたも〳〵。其方は思はく違ひをして居やるのぢや、私が涙は其方のためでは無い、外に泣かねば成らぬ殿御のためぢや。

ト是を聞き、捨藏びつくりして、

捨藏　エヽ、何ぢや。外の男のためぢや。

倉子　腹を立てゝたもるな。私はとうから言ひ替した男がある。其の男も同じ鼓の胴打ちなれど、其方より劣りし業に、われを忘れて泣いたのぢや。

捨藏　オヽ、それで漸くと謎が讀めた。許して下され。わしは今まで此方と三之助が深い仲と言ふ事は知らなんだ。(ト絶望落膽の思入。)

倉子　そんなにふさいでたもるな。皆、私が悪いのぢや。此の上、我身の力で三之助と添はせてたもと、何として頼まれうぞ。腕の優れた其方の勝はあたり前ぢや。どうぞ名を擧げ、譽を顯はしてたも。(ト立ち上る。)

捨藏　さうして、此方はどうさつしやる積りぢや。

倉子　私はアノ尼寺へ。

ト振袖を額にあて、泣きながら奥へ這入る。

捨藏　アヽ、わしは足だけが片輪ぢやと思うて居たら、二ツの眼も見え無かつた。どうでもわしの戀は棄て、三之助と倉子さんを夫婦にせねば、道が立たぬ。

ト考へながら、三之助の鼓箱に目を附け、

オヽ、此處にあるは三之助の鼓箱。此の中の胴とわしの胴とを入れ替へて置いたなら、三之助の勝となり、倉子さんの戀も叶ふわけぢや。

ト四邊を見廻し、黒塗の箱を開け、中の鼓の胴を取出して、跡へ自分の鼓の胴を入れ、稍暫らく眺めて、

わしが一心籠めて打つた胴、人のためにならうとは、今朝までも知らなんだ。

トホロリと思入あつて、蓋を成し、自分の箱へは三之助の鼓を入れる。此の時、宮神樂を遠く聞かせ、上手の座敷より勘兵衛、小紋の羽織に袴をつけ、一本差して出で來り、

勘兵　もう時刻ぢや。出かけねば成らぬ。捨藏も支度はよいか。三之助は何處に居る。三之助々々。

ト呼ぶ。三之助奥より出で來り、

三之　親方、お待ち遠うで御座りました。

勘兵　我身達の鼓はよいか。

三之　此の黒い箱に入れたのがわしので、あちらの白木の箱が捨藏ので御座ります。

勘兵　多くの數の中で、たつた一ツの鼓の御用。成らう事なら、わしの弟子の二人の中から出したいものぢや。（ト耳をて〻、）アリヤ、氏神のお神樂。他所でも祈誓を凝らすと見える。我身達も出がけに寄つて、祈りをあげて行くがよいぞよ。

三之　そんなら、わしは一足先へ出かけます。（ト捨藏に向つて、）捨藏も一緒にゆきやるか。

捨藏　わしは足が惡い故、行くのは止めにしませう。此方太儀ぢやが、わしのも一緒に持つていて下され。

三之　安い事ぢや。持つていてやりませう。

捨藏　忝い。そんなら賴みます。名前は紙に書いて箱へ貼り附けて置いた。

ト自分の鼓箱を三之助に渡す。

勘兵　おくれぬ中に早うゆきやれ。

三之　それぢや、お先きへまゐります。

ト三之助は二つの箱を提げ、向うへ這入る。

勘兵　今日のやうな大事の日に、何で我身はゆかぬのぢや。
捨藏　サア、斯んな身體で高位の前へは恐れが御座ります故。
勘兵　イヤ〳〵、苦しう無い。わしと一緒に來やれ。
捨藏　デモ、斯んな片輪で。
勘兵　ハテ、職人は姿より、腕ぢやわい。
ト是にて。

道具廻る

同本陣座敷の場　本舞臺四間の間常足の二重、三方折廻して本緣、正面床の間、地袋、違ひ棚金砂子に山水の繪の襖、平舞臺に飛石、石燈籠、樹木等よろしく、下手に枝折門、都て本陣座敷の體。此處に綾小路三位有信卿、茶筅髷に指貫の拵へにて、中啓を持ち脇息の上に坐り、下手に金森六之丞、着附、袴にて住ひ、鼓を打つて居る。その前、烏帽子狩衣の諸太夫白川監物、青侍一人、二重のよき所に住ひ、名主十兵衞は緣側に平伏し、平舞臺下手に幕開きの若者六人名々鼓の胴を持つて控へ居る。此の鼓の音、合方にて道具止まる。

有信　もう、好い〳〵。

ト是にて六之丞、鼓を下に置き、

六之　唯今のは如何で御座りました。

有信　其方は上手に打つたが、其の割に音の好く無かつたは、胴のくりに疵があるのであらう。改めて見よ。

六之　ハッ。

ト六之丞は調べの緒を解き、胴をよく見る。

□　何と作十、今のを聞いたか、和主が自慢の鼓も御用には成らぬやうぢや。

○　ならずばならぬまでぢや。一ト割に叩き割つてくれうと思ひ、此の通り鉈を持つて來た。

△　よせ〳〵、御前ぢや。

ト若者○の鉈を取り上げる。此の内、六之丞は鼓の胴を改め見て、

六之　御前の仰せられました通り、胴のへりに些細な疵が御座ります。

有信　さうであらう〳〵。其の鼓下げて遣はせ。

六之　ハッ。

ト右の鼓を名主に渡せば、

十市　是も御用には成らぬ。

〇　なんとせう。是非が御座りませぬ。

ト若者〇は名主より鼓を受け取り、怨めし相に眺めて居る。

太夫　先程より御覧に入れた鼓の數は百に近いが、最早是で終りか。

十市　イエ、此の外に安房勘兵衛の弟子に捨藏、三之助と申す二人の者が御座ります。

太夫　其の者共は如何致したか、見せに遣はせ。

十市　畏りました。直ぐに使の者を遣りませう。

ト立ちかける。此時、下手の奥にて、

三之　イエ、お使には及びませぬ。

ト合方に成り、三之助が兩手に鼓箱を持つて出づ。

十市　オヽ、三之助、待つて居た。さうして、捨藏はどうした。

三之　多分、是へはまゐりますまいが、彼の打ちました胴は私が持つてまゐりました。どうぞ御前に御覧に入れて下さりませ。

ト二つの箱を緣側にのせる。

十市　何方の箱が其方のぢや。

三之　其の黒い箱が私ので、白木の方が捨藏ので御座ります。

ト指さして言ふ。十市兵衞うなづき、二つの箱を御前に差出し、

十市　此の二番が勘兵衞の弟子共の作に御座ります。

ト是にて六之丞は黒塗の箱より鼓の胴を取り出し、

六之　是は、三之助、其方の胴ぢやな。

三之　左樣で御座ります。

有信　調べて見よ。

六之　ハツ。

ト皮を掛けて〆める。此の間に、

○　愈々あと二番と成つた。三之助と捨藏との勝負ぢや。

□　聞けば、三之助と倉子さんとは、日頃、相惚の仲ぢやと言ふ噂が立つて居る。そこで、勘兵衞どのが内々手を貸して、其方の胴の仕上げをしてやつたらうと言ふ噂もあるのぢや。

三之　何を言はつしやるのぢや。アノ物堅い親方が何で其の樣な事をしてくれるものか。よしんば、手を貸してやらうと、親方が言うても、わしは斷はる。自分の腕一つで我物にしたと思へば、嬉しいが、人の手を借りて遂げた戀は嬉しう無い。下手は下手ながら、魂こめて打つた胴ぢや、鳴るか、鳴らぬか、よう聞いて居て下され。後日に親方の手を借りたなどゝ言はれてはわしの恥ぢや、斷はつて置きまする。

△　さうなら、さうで好い、さう向きに成つて怒らずとも好い。

三之　それでも、お前方はわしを疑ぐるに依つて。

△　それも太郎吉が心安だてらに言うたのぢや。堪辨さつしやれ、堪辨さつしやれ。

ト三之助を宥める。此の中に、六之丞鼓の調べをかけてしめ、支度をして打つ。是を有信聞きて、

有信　流石は勘兵衛が弟子の作ほどあつて、天晴れ鼓ぢや。今までの中では一番是が名作ぢや。今度はそちらのを試みて見よ。

六之　畏りました。（ト今度は白木の箱より鼓の胴を取り出し）是がそちの相弟子捨藏の作か。

三之　左樣で御座ります。

ト思入にて言ふ。六之丞は皮を掛ける。此の間に、

△ 三之助の打つた胴が、今までの中で一番の名作ぢやと仰せられた。

◇ 大方、札は三之助に落るであらう。倉子さんとの戀が叶うてお目出度い。

◈ イヤ〳〵、今一番でどうなるか知れぬわ。

ト此の中、六之丞、鼓を〆めて打つ。すぐれて能く鳴る。

六之 如何で御座りますか。

有信 今、一度打つて見よ。

六之 ハツ。

ト又右の鼓を打つ。有信卿感心の思入にて、

有信 なんと言ふ名作なるか。是程に調子の整ひし鼓はまだ嘗て聞いた事が無い。誠に天下の寶ぢや。調べの緒を解いて、我に見せよ。

六之 ハツ。

ト是を聞き、三之助は吃驚したる思入。六人も呆れたる思入にて、

○ 何と聞いたか。捨藏の鼓が今日の一番ぢや。

⊡ アヽ美しい倉子どのの花婿は。

△人並外れた醜男の片輪ぢや。

皆々　片輪ぢや〳〵。

ト此の内六之丞は鼓の胴を有信卿に見せる。

有信　巧妙を極めた鑿のくり目。人間業とは思はれぬ。奈良の雷師や有名な瓦胴にも劣らぬ希代の名作ぢや。是なる鼓、大内へ差上げるであらう。

三之　スリヤ、其の鼓が御上の御用に。（ト思入。）

十市　打人の譽れ、土地の面目、樣斯な有難い事は御座りませぬ。

ト此の時、下手より勘兵衛、捨藏出づ。

オヽ、勘兵衛どの。其方の婿は捨藏ぢや。

勘兵　何と言はつしやるぞ。

十市　捨藏の鼓が御用に成つた。

ト是を聞いて、捨藏は吃驚する。

勘兵　そんなら、アノ捨藏の鼓が一番の出來で御座りますか。

十市　奈良の雷師や瓦胴などと言ふ、世の寶にも劣らぬ名作ぢやと、三位樣の仰せぢや。

勘兵　それほどに捨藏の胴がよく出來ましたか。

捨藏　アイヤ、親方、わしは懺悔を致しまする。其の胴はわしの打つたのでは御座りませぬ。眞實は、此處に居る三之助の作で御座りまする。

三之　どうして、我身はそれを。

ト驚いて、尋ねる。

捨藏　此方に勝を取らせやうとて、我身の胴とわしの胴を入れ替へて置いた。

三之　エツ。（ト又、驚く。）

捨藏　わしは我が技に誇つた。此方の腕よりもわしの方が遙かにすぐれて居ると思うた。それ故に、鼓を入れ替へて、此方達の切無い戀を遂げさせてやらうとしたは、皆、わしが慢心の成す業ぢや。されど、惡意では無い、思ひすぎてのわしが罪、どうぞ許して下され。

十市　そんなら、アノ鼓は三之助の作であつたか。

ト名主を始め六人の胴打皆々呆れる。此處へ下手より倉子走り出て、

倉子　コレ、三之助、わたしや生き返つたやうぢや。父さん、私の戀が叶うたぞえ。

勘兵　是はしたり、高位のお方の御前ぢや、控へて居ぬか。

ト叱る、此の間、三之助思入あつて、

三之　イヤ〳〵、倉子さんは矢つ張り捨藏に添はねば成りませぬ。

倉子　何を言やる。我が身の打つた鼓が一番と極つたからは、父さんの誓言通りわたしやお前の女房ぢや、天下晴れて宿の妻ぢや。

三之　イエ〳〵、あの鼓はわしのでは御座りません、矢ッ張り捨藏のぢや。

倉子　何と言やるぞ。

三之　アツ、悪い事は出來ぬものぢや。唯、倉子さんに添ひたい〳〵の一心から、先刻、捨藏に頼まれて、二つの胴を提げ、此處へ來る途すがら、フト悪い企みが浮び、倉梯川の渡し小屋、人の居ぬを幸に、中へ這入つて、薄くらがりで、手早く鼓を入れ替へて、御前へ差出したわしの罪は卽ち罰ぢや。折角、捨藏が入れ替へて置いてくれた情を仇にして、わしは又、元の通りに入れ替へたのぢや。とは知らずして、捨藏が此處へ來て、我が身を捨てた打明け話に、初めて知つた人の親切、つく〴〵悪い事は出來ぬものぢやと悟りました。わしは戀に眼が眩んで、人の眼まで眩まさうとした。わしは人の手柄を盗まうとした盗賊ぢや。わしは我が手で我が戀を破らうとした。倉子どのは捨藏に助けられて、わしのために殺されたのぢや。アヽ、濟まない。

濟まない。サア、捨藏、おぬしの心のいくやうに、わしを仕置してくれい。

ト捨藏の前に身を投げ出す。此の時まで默つて居た勘兵衞は思入あつて、

勘兵　われが仕置は追つての事ぢや。（ト向き直りて、）弟子共の不埒、恐れ入つて御座ります。

有信　苦しう無いぞ。三之助が惡心も、戀故なれば、優しう聞える。さまで咎むるな。

勘兵　御情すぎた御言葉で、尚々痛み入りまする。就きましては、それなる鼓は矢張り捨藏の作に御座ります。御用に相成りませうならば、有難い仕合せに御座ります。

有信　いかにも、大內へ差上げるであらうぞ。

ト是にて六人の胴打ちは思入あつて、

○　サア、勘兵衞殿、此の上は約束ぢやに依つて、倉子殿は、何と言はうと、親の威光で、捨藏に添はせて、跡式一切を讓るであらうの。

□　先刻、あれ程立派に言うた此方、言葉は反古になるまい。

△　今夜は一同で悦びにゆきますぞや。

ト是を聞いて、倉子思入あつて、

倉子　父さん、わたしや捨藏に添うのは嫌で御座んす。どうぞ尼寺へ遣つて下さりませ。

勘兵　又しても、我儘を言ひ居るか。大内御用の鼓を打つた捨藏を亭主に持てば、女の果報ぢや。

倉子　イエ〳〵、わたしや名人より戀人に添ひたう御座んす。父さんは鼓が命であらうが、女子は戀が命ぢや。アヽ、母さんが生きて居たら、頼みやうもあらうものを。

勘兵　エヽ、だまれ。娘、口が横に裂けたればとて、ようも〳〵死んだ嬶を不孝の引合ひに出し居つた。情を知るは死んだ親ばかりで、此の世にある親は慈悲を知らぬと思ひ居るか。名人上手を夫に持たせようとするも、おのれを人に褒めさせたい親の情ぢや。戀を捨てよと言ふ親の言葉は、おのれを殺す劍では無い。我子可愛い〳〵の餘りに出づる心の叫びぢや。酷い〳〵言葉の中に甘露のやうな涙があると知り居らぬか。三之助を思ひ切つて、捨藏と添ふとぬかせ。高位の御前ぢや。里人の見る前ぢや。流石は勘兵衛の娘、立派に言ひ居つたとお褒めに預つてくれ。サア、何とぢや〳〵。

ト言へ共、倉子は泣いて居るのみで、返事なければ、

是程言ひ聞かせても、返事の無いのは、不承知か。憎さも憎し。どうしてくれう。オヽ、さうぢや。

ト其處に在つた鉈を手に取り立ちあがる。此の時まで默つて居た捨藏きツと思入あつて、

捨藏　親方、待たッしやりませ。其の鉈は他に使ひ道が御座ります。

ト勘兵衛の手より鉈を取りツカ／＼と二重の側に寄り、自作の鼓を二ツに割る。勘兵衛驚き、

勘兵　何をするのぢや。

ト捨藏を突退ける。捨藏ドウとなり、又立ち上らんとするを、

エヽ、おのれ、氣が違うたか。（ト睨みつける。）

捨藏　イヽエ、正氣で御座ります。わしが鼓は不祥の前兆があるに依つて、こはしました。なんで是が世の寶に成りませうぞ。（ト下手に下つて、）何卒、三之助の丹精こめて打つた胴を都へお持ち歸り下さりませうなれば、有難う存じます。

有信　オヽ、相分つた。捨藏は腕ばかりか、心までがすぐれた細工人ぢや。いかにも三之助の鼓、御用に相なるぞ。

三之　スリヤ、此の身の犯せる罪を。

倉子　上には何のお咎め無く。

有信　無事に結ぶ鼓のしらべ。

勘兵　とは言へ、あたら名作を。

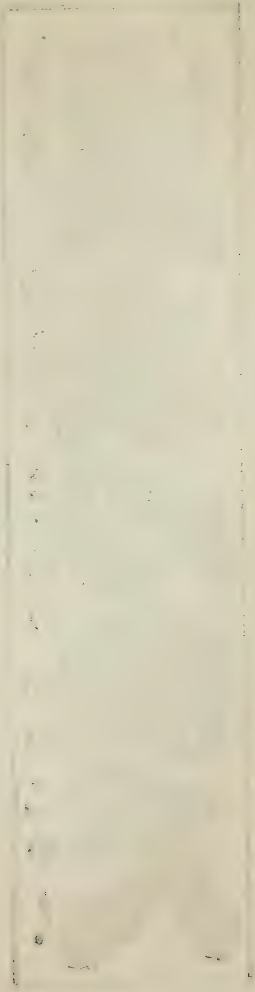
拾藏　なアに、鼓は割れても、人間二人助かりました。

ト是を聞いて、勘兵衛は手を合せて拜む。六人の胴打ちは立ち上る。倉子、三之助は切無き思入。拾藏淋し氣に笑ふ。

幕

裏表心曲尺

うらおもてこころのかねじやく



裏表心曲尺

序幕

槙町藤井宮内宅の場
八丁堀指物師內の場

役名　指物師淸次、父藤兵衞、弟子吉藏、弟子芳松、藤兵衞姪おしげ、占者藤井宮內、娘おつや、同下女、門人星川鶴卜、松波伊織、お店者三之助、田舍侍石橋利金太、近江屋後家おゑい、女髮結おかつ、老婆おくろ、丁稚長太等。

槙町藤井宮內宅の場　本舞臺上手四間常足の二重、正面上の方床の間、掛物、續いて石摺の襖、出入りあり、下手二間の玄關、向う襖の出入り、式臺の左右に土御門家御用と書いた高張提灯を立てる、上手の二重に唐木の机、此の上に書物三四册、筆立に孔雀の羽根等の飾りよろしく、都て槙

町の占者藤井宮内宅の體。此處におつや、人品よき占者娘の拵へにて褥に坐り、筮竹を算へ、算木を並べて居る、此の向うに至つて醜男の田舎侍石橋利金太、おつやの容色に見惚れて坐つて居る、玄關の所に門人星川龜卜袴を穿いて控へ、式臺に折助腰を掛け、その他相場師、失せ物を尋ねる人、町家の女房等玄關狹しと詰めかけて順番の來るのを待つて居る、小女は札の番をして仕出の町人に渡して居る。此の體よろしく、本町二丁目に台屋の鳴物を冠せ幕開く。

相場　此の四五日は易のおかげで、トン／＼拍子に出來がよいので、今日も買ひか賣りかを見てお貰ひ申さうと思つて居るので御座いますが、まだ大分間が御座いませうか。

小女　あなたは三十六番、今三十三番で御座ります。

星川　モウ二三人であなたの番だが、何なら私が代占ひをしてあげませうか。

相場　イエ、成らう事なら、延喜のよいお孃樣に願ひたいものです。

星川　それでは其處なお上さん、お待遠のやうだが、私が占つてあげよう。

女房　イエ、急ぎませんから、先生に占つていたゞきたう御座います。

星川　左樣か。それでは他のお方はどうぢやな。

町人　私達も同樣、是非評判のお孃樣に占つてお貰ひ申したいので。

男　かうして朝から詰めかけて待つて居るので。

皆々　御座いますよ。

星川　私だつて易に變りは無いが、どうしても女の方には叶はないな。

ト嘆息の思入。此の内、おつやは算木を見て考へるこなしある。

侍　拙者が易はどう出ました。

つや　此の卦は澤雷隨と申しまして、馬に乘つて鹿を逐ふの象。われ動いて彼悦ぶの意で、女の男に隨ふ卦で御座ります。

侍　ナニ、女の男に隨ふ卦ぢやと申さるゝか。

つや　けれども、水を以つて車を押すと云ふ意も御座りまするに依つて、此方から誘はねば先きでも動きませぬ。

侍　然らば、此方からせつせと通つた方がよろしいかな。

つや　牛馬に物を附けて遠方へ通ずる意が御座りまするに依つて、此方から物を運ばねば願ひは叶ひませぬ。

侍　さては、今まで望が叶は無かつたは、進物が足り無かつたと相見える。

つや　併し此の卦に當る方は女難が御座りまする故、おつゝしみなされませ。
侍　アノ身共に女難が御座るとか。
つや　慾に從ひ不義に動く心が御座りますれば、主ある女に戀をされる恐れが御座りまする。
侍　主があらうがあるまいが女に惚れられるとは忝い。
ト此の內見料を紙に包み、玄關に來て、扇子にのせ差出し、
些少ながら見料で御座る。お納め下されい。
星川　受納仕りまする。
ト扇子を返す。小女は天目臺に茶碗をのせておつやに持つて來る。おつや小女に耳打ちをする
小女　畏りました。
侍　然らば、お暇をいたさう。（ト一禮して、折助を從へて花道まで行き、）コリヤ、可內。
折助　ネイ。
侍　あの美しい娘が某に女難の相があると申したぞ。
折助　アノ旦那樣に。
侍　優男には生れたくないものぢやなあ。

ト兩人向うへ入る。此の時、小女玄關へ來て星川を呼んで何にか囁く皆々に向ひて。

星川　皆樣にお待たせ申して甚だ相濟みませぬが、今日は神の御心に叶ひませぬか、同じ卦が出てなりませぬ故、是でよしにいたします。明日又早くお出で下さりませ。

相場　朝から待つた甲斐も無く。

女房　明日又出直しとは緣談の忌言葉。

町人　コリヤ、失せ物も今日はまだ出ないと見える。

小女　今日はお氣の毒で御座ります。

相場　とんだ暇潰しだつた。

ト皆々捨臺詞を言ひながら下手へ入る。

星川　朝早くから詰めかけられるのでホッとした。易者の玄關番も中々樂な者ぢやない。サア、お前も奥で休息しなさい。

小女　奥へ行つて、讀みかけの草双紙でも讀みませう。

ト兩人奥へ入る。松波伊織、着流し、一本差、京家の浪人の拵へにて奥より出て來りて、

伊織　土御門家の別れぢやなぞと勿體を附けて女の占ひ者。人柄で物柔で水の垂れるやうな美しさ

男の迷ふも無理は無い。

ト言ひながら上手へ住ふ。

つや　松波さんのおだてに乘つたは昔の事。もう今では乘りませぬ。

伊織　さうであらうとも、京で別れで二年振、お前も餘程修行なしたらう。

つや　お前さんではあるまいし、そんな常談は置いて下さんせ。

伊織　是は大きにしくぢつた。昨日此所へ着いて、今日はその愛想の無い顏附きが此のわしへの持て成しか。さりとては興がない。

つや　モシ松波さん、其の恨みは誰に言うてぢやぞえ。よもや私に言へた義理では御座んすまい。そんな事言ふ口で坊はどうしたと何故聞いてはくれませぬ。昨日から今に聞いておくれかと心の中で待つて居ました。お前さんは本統に水臭いお人ぢやなア。

伊織　堪忍してくれ。そりや私が惡かつた、シテ、坊は達者か。

つや　催促されて聞いてくれても嬉しうは無いけれど、お前さんも親ぢやに依つて、話して聞かせます。あの子は里に遣つて無事で御座んす。

伊織　さぞ大きく成つたであらう。

つや　お前さんによう似てぢや。
伊織　其の子の親の此の伊織、餘り憎くもあるまいがな。
つや　サア、憎いと言ふ譯では無いけれど。
　　ト伊織を流し目に見て思入。
伊織　其の美しさで子供があるとは誰も思ふまい。
　　ト此の時、藤井宮内、惣髪の易者の拵へにて奥より出で、
宮内　玄關近くで若い男と差向ひの内證話、人に見られたら、浮名が立たう。チト氣を附けたがよからう。
つや　松波さんに久し振りでお目にかゝり、ツイ話に實が入つてうつかりして居ました。
伊織　それも拙者の思慮が足りぬ故ぢや、御免下され。
　　ト下手へ來て佇ふ。
宮内　小言を言ふ譯では無いが、おつやは看板娘ぢや。（トおつやに向ひて）話が濟んだら、奥へゆきやれ。
つや　デモもう少し此處に。

宮内　エヽ、何をぐづ〳〵、早く行きやれと言ふに。

ト是にて、おつやは奥へ入る。

宮内　時に、伊織さん、昨日から聞かうと思つて居たが、傍に此方の連れが居るのでだまつて居たが、何と思うて江戸へ來なすつた。

伊織　されば、今度江戸へ來たは深川の正米問屋伊勢屋の相續人の事に付き遁れぬ譯あつて參りましたが、首尾滯りなく相濟まば大金の禮を受ける筈で御座る。

宮内　伊勢屋と言へば深川で指折の大身代。先達て主人利兵衞が死亡したと聞いたが、どう言ふ譯で、伊織さん、掛合ひが御座るのぢや。

伊織　拙者は利兵衞に由縁は無いが、昨日から御厄介になつて居る連れの男が卽ち利兵衞の實子、善之助とて伊勢屋の相續人、幼少の時から田舍に居た者で御座る。

宮内　併し伊勢屋程の大家故、一家親類もあらうが、それ等が異存を言ふ懸念は御座らぬか。

伊織　其の心配は御座りませぬ。伊勢屋利兵衞と言ふ男は伊勢の桑名から裸で江戸へ出て來て、一代で拵へた身代。悴は善之助一人、又親類と言うては八丁堀の方に指物師が一人あるばかり、是とても其の日暮しの職人、そこで伊勢屋の身代を預かつて居るのは小網町の近江屋と言ふ太物

問屋。すでに昨晩同家の女主人に面會して委細話して置いたれば、一兩日中には善之助が相續いたす事になるで御座らう。

宮內　さうなれば、是を緣にわれ等も伊勢屋へ出入りをいたし、事に寄つたら、娘おつやを。

伊織　エツ。（ト思入。）

宮內　コリヤ、好い話を承はつた。

ト此の時、奧より僞の善之助實は三之助、お店物、病人の體にて出で來る。

宮內　オヽ、善之助さん、顏色が惡いが、どうか成すつたか。

三之　今朝から胸の動悸が强くいやな氣分で御座ります。

宮內　それは惡い。大事の身體ぢや。直に醫者を迎ひにやりませう。暫らくお待ちなされ。

ト宮內は奧へ入る。伊織も心配の思入にて、

伊織　今日は後に指物師の藤兵衞に會ふ筈ぢや。氣をしつかり持つて居てくれ。

三之　サア、それが昨夜から心配になつて、胸の動悸が止まないので御座います。善之助の幼顏をよう知つて居る藤兵衞、首尾能く胡麻化す事か出來ませうか。

伊織　大丈夫ぢや。幾ら幼顏はよう知つて居ても、九ツの時別れて二十五まで一度も逢うた事のない

藤兵衞。それにお前ほど善之助に能く似て居れば、僞か本物か見分けの附く氣遣ひはない。

三之　でも、先で色々な事を私に尋ねはしますまいか。

伊織　お前の知つて居るべき事は殘らず教へて置いた。其の他に先で聞く事はない筈ぢや。それよりは大切な此の手紙。（ト懷中より手紙を取り出して、）是をお前が持つて居て、話の中に出すのを忘れてはならぬぞ。

ト三之助に渡せば、

三之　此の手紙は。

伊織　伊勢屋利兵衞から善之助に寄越した手紙で、一番大事の證據ぢや。

三之　そんなら、是をお前さんが。

伊織　善之助が胴卷に入れ所持して居たを盜んで置いたのぢや。

ト是にて、三之助は薄氣味惡き思入にて、

三之　モシ松波さん、あの善之助は本統に死んだでせうか。

伊織　お前も樹蔭で見て居た通り、〆殺して谷間深く矢を射るやうな早川へ投げ込んだ善之助、疾くの昔に十萬億土へ行つて居るわ。

三之　生き返つて來る氣遣ひは無いでせうか。

伊織　何でお前はそれを氣遣ふのぢや。

三之　何だか心配で成りません。

ト此の時、下手にて銅羅の音。

三之　エヽ。

ト震へあがる。伊織は立つて外を見て、

伊織　フヽム。

ト笑ふを道具替りの知らせ。

アリヤ。飴屋ぢやや。

ト笑ふ。三之助は胸を押さへて苦しむ。伊織介抱してやる。此の模様よろしく、銅羅の音、合方にて。

道具廻る

八丁堀指物師清次内の場　本舞臺少し上寄りに三間の間常足の二重、緣無しの疊を敷き、向う上

の方佛壇、戸棚、續いて一間の障子の出入り、下の方鼠壁、神棚、二重の前所作舞臺程の高さ、道具箱、檜の木地等を置き、上手の羽目は木定木、鋸等を掛け、下手勝手口、此の外町家の普請、都て八丁堀指物師淸次内の體。仕事場にて弟子吉藏は鉋を研ぎ、同芳松は板割を挽いて居る。此の體大拍子にて道具止る。

吉藏　オイ、芳、手前居眠りをして居るんぢやァ無えか。音がしねいぜ。

芳松　吉さん、お前耳を何所へくつ附けて居るんだ。お前こそ昨夜品川へ行つて遊んで來てぼんやりして居るくせに。

吉藏　ぼんやりして居たつて氣は確だ。

芳松　其の替り手はお留守だ。

吉藏　生意氣な事をいやァがるな。手めへも早く大きく成つて女郎買をしろ。おれが手引きをしてやらう。

芳松　眞平だ。お前なんぞに手引きをされちやァ年中振られ通しだ。

吉藏　口のへら無え小僧だ。

芳松　どうせ口から先きへ生れたのだ。

吉藏　手めへ兄弟子を馬鹿にするのか。

芳松　兄弟子も可笑しいや。裏目を見る事も知らねえくせに。

吉藏　ナニ。

と芳松の持つて居る鋸を取りあげやうとする。

芳松　イヽヤ、やらねえ。

吉藏　寄越しやアがれ。

芳松　いやだ〳〵。誰だと思ふ。エヽ、つがもねえ。（ト急度見得に成る。）

吉藏　何をしやアがる。

ト立廻りに成り、トヾ芳松隱れる。

やア、どこへ逃げやアがつたなア。たとへ逃げたつて追附いて仕置きを仕にやアならねえ。ヤイヤイ待ちやがれ。

ト吉藏向うへ入る。芳松出て四邊を見て、

芳松　ヤイ〳〵、何處まで追駈けたつて居やアしねえわい。此處にお居でなさるぞ、馬鹿野郎め。

ト下手へ入る。向うより女髮結おかつ、モジリ袢纒、前掛にて手をくるみ出で來り、門口よりおし

げたを呼ぶ。おしげ奥より出で來りて

かつ　おしげさん、序があつたから寄りましたよ。

しげ　オヽ、おかつさん、折角寄つて下さいましたけれど、今日は後に髪を洗はうと思つてますから明日の朝私の方からあがります。

かつ　それぢやア、どうぞさうして下さい。

しげ　お氣の毒で御座いましたねえ。

かつ　ナアニ序でだから構やアしません。

ト下手へ行きかける。おしげ思入あつて呼び止める。

しげ　おかつさん、一寸待つて下さいまし。

かつ　何か用かえ。

しげ　折入つてお聞き申したい事があるのですが、一寸此方へあがつては下さいませんか。

かつ　何の話かは知らないが、私の知つてる事なら、お安い御用だよ。

しげ　それぢや、どうぞ此方へあがつて下さいまし。

かつ　御免なさいよ。

ト二重へあがる。おしげ火入に火を取らんとするを止めて、

およしよ。煙草好きはいつでも長火鉢の傍がいゝのだよ。

ト長火鉢を中におしげと向ひ合ひて坐る。

父ッさんは内かえ。

しげ　夕、お藥師樣の緣日で植木を買つて來て、それを植ゑ直すのだと言つて裏に居ます。

かつ　清さんは留守かえ。

しげ　兄さんは朝から出かけたのですが、近頃はまるで仕事もせず、ぼんやりして居るので父さんや私が氣を揉んで、幾ら聞いても何にも言はず、さつぱり樣子が知れないのですが、世間廣いおかつさん。もし兄さんの事に付き聞き込んだ事があるなら、どうぞ話して下さいまし。

かつ　なんの事かと思つたら、清さんの一件かえ。其の事なら私も聞き込んでは居るけれど、別に心配な譯でも無いから、話す事はよしにしようよ。

しげ　イヽエ、其の譯を聞かせて下さらないと、猶更心配でなりません。おかつさんから聞いたと決して言ひませんからかくさずに言つて下さいまし。

かつ　お前さんがそんなに賴むなら話して聞かせてあげるが、その替り腹を立てゝはいけないよ。

しげ　何の私が腹を立てますものか、安心して言つて下さいまし。

かつ　色は思案の外と昔から能く言ふやつだが、清さんが此の頃ぼんやりして居るのは矢張り女故だよ。

しげ　さうして、其の女と言ふは何處の誰でせうか。

かつ　それを聞いてお前はどうする積りだえ。

しげ　サア、兄さんがそんなに思ひ込んだ女なら、父さんに話してお嫁に貰ふやうにしたいと思ひますの。

かつ　さうして、言名付けのお前はどうする積だえ。

しげ　私は兄さんの妹で何時までも獨りで居ます。

かつ　あゝお前は感心な子だ。併、おしげさん、其の心配にや及ばないよ。清さんが惚れて居る女と言ふのは、身分違ひの立派な易者藤井宮内さんのお孃樣おつやさんと言ふ看板娘。職人の内から貰ひに行つたつて、くれる氣遣ひはありやアしない。どうせ及びも無い高根の花さ、今に御覽、夢が覺めるに違ひないよ。

しげ　それでやつと樣子がわかりました。どうでせう、おかつさん、兄さんの望が叶ふ良い思案はあ

りますまいかねえ。

かつ　さうねえ、清さんがお藏の五戸前もある大家の旦那にでも成らなけりやァ、先で見向きもしなからう。それよりはお前と夫婦になつて仕事に身を入れるやう、お前からよく意見をしたがいいぢやないか。

しげ　どうして私の口から、そんな意見が出來るものですか。

かつ　ほんにお前の口からは言へなからう。ぢやァ、私が藤兵衛さんにさう言つて、意見をして貰つてあげよう。

しげ　イエ〳〵、父さんにそんな話をしようものなら、大騷ぎが始まります。お願ひですから此の事は父さんに言はずに居て下さいまし。

かつ　それほどまでに思つて居るおしげさんをかまはない清さんも清さんだ。是だから、わたしや男が嫌ひなのだよ。

ト兩人思入。此の時、奥より藤兵衛、着附、平ぐけの拵へにて出で來る。

藤兵　オヽ、おかつさん、お出でなさい。相變らず忙しくつて結構だ。

かつ　有難う。父つさんも何時も元氣だねえ。

藤兵　イヤもう年を取るとカラいくぢが無え。（ト火鉢の傍に坐る。）
かつ　それぢやア、私はそろ〳〵出かけよう。
しげ　お引き止め申してお氣の毒でした。
かつ　おしげさん、明日の朝來るなら、早く來て下さいよ。
しげ　起きぬけにあがります。
かつ　待ぼうけは眞平だよ。
　　ト　おかつは下手へ入る。
藤兵　あの女も亭主無しの一人暮しで、大分溜めたと言ふ噂だ。
しげ　私もいつそおかつさんの弟子になつて女髪結にならうか知らん。
藤兵　何を言ふのだ。今に淸次と祝言すりやア直に子供が生れる。赤兒を抱へて髪結の梳手でもあるまい。ハヽヽヽ。
　　ト笑ひながら仕事場へ下り、鉋を出して見て居る。おしげはふさいで居る。流行唄に成り、向うより近江屋の後家おゐい、日傘を差し、丁稚長太に、袱紗包を持たせ出て來り、花道にて、
ゐい　八丁堀の三ツ角と言ふからは此の邊であらう。

長太　いづれケチな借家で御座いませう。

ゑい　大きな聲でその樣な事を言うて、人樣に聞えては惡い、嗜みませうぞ。

長太　へイ。

ト兩人舞臺に來り、

ゑい　御免下さい。藤兵衞さんのお家は此方で御座いますか。

藤兵　ハイ、藤兵衞は私だが。（ト振り向いて、）オヽ、是は近江屋の大きいお上さんで御座いましたか。汚い內で御座いますが、どうぞ此方へお通り下さいまし。

ゑい　それでは御免下さりませ。（ト二重へ通る。）

藤兵　お久振りで御座いますが、何時も〳〵お變りなくお目出度存じます。

ゑい　お前さんもお達者で何よりで御座んす。（ト丁稚に向ひて、）長太、其の包を此方へ。

長太　へイ。

ト袱紗包を渡す。おゑい受取りて、

ゑい　其方はもう歸つたがよい。それから道ぢやに寄つて一寸寄つて用を達して行きや。

長太　へイ、よろしう御座ります。

ト駈け出す故、

おゐい　コレ、長太、何處へ寄るのか知つて居やるか。

長太　へイ。（ト考へて）

おゐい　ハテナ、私の行先は、何處であつたか忘れました。

長太　あわて者が、まだ行く先きも用も言ひつけぬに、さう言ふ事では用を言ひつけても覺束ない。

おゐい　それぢや、もう寄らなくともいゝのですか。

長太　直に歸りや。道草を喰つてはいけませんよ。

おゐい　へイ。

ト向うへ入る。おゐいは目錄盆に切手をのせて差出し、

藤兵　是はほんのお土産の印で御座います。

おゐい　どういたしまして、御用があればお使を下さりますと、直にお店へ出まするのにこんな汚い家へお出で下すつた其の上に、お土産まで戴きましては何と言うていゝか、御挨拶のしやうが御座えません。

おゐい　そんな辭退するやうな物ではありません。どうか納めて置いて下さいまし。

藤兵　それぢやア、折角の思召し、有難く戴いて置きます。

　　　　ト目録盆のまゝ押戴く。此の内、おしげは茶を注いで出す。

ゐい　藤兵衞さん、此の娘さんは。

藤兵　わつしの姪で御座いますが、兩親とも早く無くなりなしたので引き取つて世話をいたして居ります。無くなつたと言へば、先達伊勢屋の葬ひの時は色々御心配をかけたばかりか、跡目のきまるまでおうちの御厄介ださうで御座えますが、どうかよろしくお願ひ申します。

ゐい　亡くなられた利兵衞さんが、昔、私の家で草鞋をぬいだ緣により世話を頼むとの遺言故、引き受けはしましたが、筋道を言へば藤兵衞さんが世話をせねばならぬ筈。何故と言ふのに、無くなつたお前さんの御家內は利兵衞さんの實の妹。其の間に出來た淸次さんは利兵衞さんの甥、遁れぬ仲ではありませんか。

藤兵　仰言る通り、悴の淸次と利兵衞とは血を引いた伯父甥の仲では御座えますが、一代分限の强慾親爺と宵越しの錢を遣はぬ職人とはどうしても肌合が合はず、たうとう大喧嘩をやつて往來をせぬ事に成りました。それに、今となりわたしや悴が伊勢屋へ出入りをしちやあ、片見分けでも欲しくつて行くやうで、世間の口がうるせえから、立ち寄らねえやうにして居ります。

ゐい　私も藤兵衛さんの氣質を知つて居る故、お前さんの心任せにはして置きましたが、伊勢屋の跡目の事に付き今日は是非共お前さんに頼まねばならぬ事が出來ました。其の譯と言ふのは、利兵衛さんが病中手紙をやつた實子の善之助さんが昨日出て來ました。

藤兵　ヘエ、善之助が歸つて參りましたか。

ゐい　京家の浪人松浪伊織さんと仰言るお方が同道して歸つては來ましたが、私もお目にかゝるは初めて故、愈其の人に違ひ無いか、確な見極めを附けた上で無ければ、伊勢屋の相續はさせられませぬ。それで、善之助さんの幼顔を見知つた者は、藤兵衛さんの外に人はあるまいと思ひます。

藤兵　そりやア、幼顔は能く知つて居りますが、善之助の母親が利兵衛と夫婦別れをして子供を連れて田舍へ歸つた時は善之助がやつと九ッ。それから十六年立ちますから、今では二十五の男盛り、大方昔の俤は無くなつてゐで御座いませう。

ゐい　いくら變つて居ても、幼顔と言ふものは失せぬものです。後に此の家へ同道して來ますに依つて、どうぞ逢つて下さりませ。

藤兵　なんなら、御一緒に參りましてもよろしう御座います。

ゐい　イエ、さきは槇町の藤井宮内と言ふ易者の家故、私が行つて連れて來ます。此方は内で待つて居て下さいまし。（ト平舞臺に下りる。）

藤兵　それぢや、お待ち申して居ります。

ト是にて、おゐいは外に出る。

直に槇町へお出でなさいますなら、此の露路をお拔けなさる方が近道で御座います。幸ひ近所まで參りますから御案内をいたしませう。（ト外に出で、）泥溝板が破れて居て、危なう御座います。お氣をおつけなされませ。

ト藤兵衞先におゐい下手の奥へ入る。

しげ　珍らしいお客樣が來るなら、此處等を片附けて置きませう。

ト四邊を片附けて居る。下手よりおくろ、質屋の使ひをする老婆の拵へにて出で來り、勝手口の障子を開けて、

くろ　おしげさん〳〵。

しげ　ハイ、どなたですか。

くろ　私だよ。

しげ　オヽ、おくろさんかえ。丁度よい處であつた。此方へ入つて下さい。

ト是にて、おくろ婆ア勝手口よりあがり來り、

くろ　誰も内に居ない時來てくれとお前さんの賴みであつたから、先刻から餘程の間行つたり來たりして待つて居ましたよ。

しげ　それはまァお氣の毒でしたね。外ぢや無いが、又、堺屋のお使をして下さいましな。

くろ　アヽ、よう御座んす。直に行つて來るから品物を出して下さい。

しげ　一寸待つて下さいまし。

トおしげ葛籠より單物と帶を出し、針箱より鼈甲の櫛を取り出して、

此の三品で一杯に附けて貰つて來て下さい。

くろ　おしげさん、其の櫛は本物らしいねえ。

しげ　是はおつ母さんの形見で御座んす。

くろ　道理で今時分流行らない形だと思つた。

ト此の内、おしげ以上三品を風呂敷へ包み掛ける。流行唄に成り、向うより指物師淸次、着流し、三尺帶、麻裏の突つかけにて出で來り、すぐに舞臺に來り、二重にあがる。おしげは驚きあわてゝ

風呂敷包を隱す。

しげ　兄さん、お歸りなさい。

清次　何でその包を隱すのだ。

しげ　是は兄さんにも見せられない私の包。

清次　おれに見せられ無いと言ふは。（トおくろに思入あつて）おくろさんに頼んで曲にやり、内證の小遣ひ錢にしやうと言ふ積りだな。其の包はおれが預かつて置かう。

しげ　それでも、此の中には兄さんに見せて惡い物がある故。

清次　エヽ、ぐづ〳〵言はずと此方へ寄越せ。

トおしげの隱した風呂敷包を取りあげる。

くろ　是ぢやア、此處に私が居ても無駄なこと。又、使ひがあつたら、言うて寄越して下さい。（ト勝手口より出で、）併し、おしげさん、今日の埋合せは此の次に貰ひますよ。

ト言捨てゝ下手へ入る。

清次　此の包の中にやおれに見せては惡い物が入れてあると言つたが、一體何を入れてあるのだ。

しげ　兄さん、その包はあけずに返して下さいまし。

ト取らうとするはずみに包ほどける。清次は手早く櫛を取りあげて、

清次　コリヤア、お袋がお前にくれた形見の櫛。これまで曲げて小遣ひ錢にする料簡か。呆れ返つたものだなア。

ト是にて、おしげきつと思入あつて、

しげ　モシ、兄さん、此の櫛をおつ母さんの形見と知つて居るからは、其の時のおつ母さんの遺言忘れては居なさるまいねえ。

清次　お前をおれの女房にしろと言つた事か。

しげ　あいなア、こんな事を私が言ふと悋氣のやうに聞えるか知れないが、此頃は外へ出てお酒ばかり飲んでお尻が家に落附かねば、父さんの機嫌も惡し、近所の口もうるさい故、せめて半日は家に居て下さいまし。

清次　よしてくれ。おれに意見をする手前がなんで內證の小遣を遣ふのだ。

しげ　なんで私が內證の小遣を遣ひませう。それも皆兄さんのため。

清次　なんだと。

しげ　お前が外へ出かける度に、いつも財布に二朱か三朱の小遣錢の無い事のないは、父さんに內證

で私が都合して入れて置くので御座んすぞえ。

清次　それぢやア、今まで親の情の露だと思つて居た財布の錢は手前の情であつたのか。(ト思入あつて)さうとは知らず、詰まらねえ事を言つて、さぞ腹が立つたらう。勘辨してくれ。ヨウ、おしげ。

しげ　勘辨の何のと、他人行儀はよして下さい。併し兄さん、わたしやおつ母さんの遺言通り、兄さんのおかみさんになりたうてするのでは御座んせぬ。兄に盡す妹の實意と思うて下さいまし。

清次　一枚の餘所行きを曲げてまでも、おれを思つてくれる手前の情決して忘れはせぬ。忝い。

しげ　さう言うて下されば私も嬉しう御座んす。それに甘へて言うでは無けれど、たつた一言兄さんに言ひたい事が御座んすが、どうぞ聞いては下さいませんか。

清次　どうせおれのために成る事だらうから、遠慮せずに言つてくれ。

しげ　そんなら、言ひますが、兄さんは横町の方に好きな人があるのでせう。

清次　誰が手前に言つたか知れねえが、そんな事はありやアしねえ。

しげ　兄さんは何故そんなに私にかくすのでせう。今も言つた通りわたしやお前の妹のつもりで居ます。此の後とても生涯妹で暮さうと心をきめた私に何の遠慮が御座んせう。どうぞ打明け

て下さりませ。

清次　手前にさう言はれて見ると、隱す譯にもゆかねえが、實はかうだ。此の春、身の上を見て貰ひに藤井さんの所へ行つた處、娘のおつやさんが判斷をしてくれた。それが病附きで、晝となく夜と無く、おつやさんの顏が眼の前にちらつき、お袋の遺言や手前にすまぬと思つてもあきらめられぬが煩惱の犬とやらだ。

しげ　よう言うて下さいました。兄さんが打明けて下すつたからは、私も共々心配をして兄さんの望の叶ふやうにしてあげたいは山々なれど、先は身分のある易者とか聞きましたから、おつやさんは思ひ切り、職人は職人同士相應な緣をさがして下さいまし。兄さん、お願ひで御座います。

清次　外の事なら何でも手前の言ふ事は聞くが、是ばつかりは聞かれねえ。

しげ　それでは世間の人が皆兄さんを笑つて居ても、お前はかまは無いのかえ。

清次　其の世間と言ふ奴をおらァ嫌ひだ。そんなうるせえ小姑が假令何とぬかさうとも、打遣つて置くがいゝ。それにおれは今に大店の旦那になる相があると占ひ者が言つたのだ。

しげ　そんなら、兄さんは占ひを本統にして、

清次　時節の來るのを待つて居るのだ。何も職人は生涯職人で終らねばならぬと、きまつた者ぢや

アねえ。

ト是を聞いておしげは呆れた思入。此の時、藤兵衞下手より出で、淸次の臺詞を立ち聞して、

藤兵　ヤイ、淸次、生意氣な事をいやアがるな。（ト二重に上り、）親の職を受け繼いで身を入れてさへ骨の折れる世の中に、あての無い事をあてにして遊んで居て暮せるものか。早く心を入れ替へて、親に安心させてくれ。

淸次　イヽヤ、父つさん、私は出世をするつもりだから、指物師は今日限りやめだ。

藤兵　手前可笑しな事を言ふ。職人が仕事をやめて、明日から何をして喰ふつもりだ。

淸次　一度に大金儲けをするつもりだ。

藤兵　アヽ手前は何時そんな根性に成り居つた。資本も無けりやア、働きもねえ手前が何で大金儲けが出來るものか。大間違を仕出かさねえ中、其の曲がつた根性骨を眞直な親の定木で叩き直してくれう。

ト傍にあつた木定木を振りあげる。

しげ　お父さん、堪忍して下さいましヽ。（ト取りすがる。）

藤兵　手前が彼奴をかばふから、增長するのだ。放せ〳〵。

ト爭ふ。此の時、以前のおゐい下手より足早に出で來りて、二重にあがり、

ゐい　モシ、藤兵衞さん、ゐらい事になつたぞや。

藤兵　近江屋のおかみさん、ゐらい事になつたとは、何で御座いますか。

ゐい　伊勢屋の相續人善之助さんがたつた今頓死をしました。

藤兵　エッ、善之助が頓死をした。

ゐい　さすれば、利兵衞さんの殘した身代十萬兩は甥の清次さんに讓るのが當前ぢや。

ト清次割つて出で、

清次　それぢやア、私が伊勢屋の跡を繼ぐので御座いますか。

ゐい　明日とも言はず、今日から直にアノ身代はお前さんの物ぢや。

清次　それぢやア、私は大金持の旦那樣だ。

しけ　占ひもあたればあたるもの。

藤兵　イヤ、伊勢屋の身代を悴に繼がす事は私が不承知だ。

清次　父さんは不承知でも、私が相續をします。

藤兵　それぢやア、手前は職人の意地も腰もねえのだな。

清次　私は意地よりも金が欲しい。アヽ私が夢は本統に成つた。

ト一人で無性に悦ぶ。

藤兵　おしげ、聞いたか。清の野郎は。

ト思入。木の頭。

氣がふれたぞ。

ト呆れて見て居る。此の模様よろしく。

幕

深川伊勢屋奥座敷の場
同　　小座敷の場
八丁堀指物師内の場

二幕目

役名　指物師清次、同父藤兵衛、藤兵衛姪おしげ、松波伊織、藤井宮内、同娘おつや、伊勢屋悴善之助、同手代佐七、同手代治助、同手代太藏、近江屋後家

おゑい、師匠今村正齋、女中等。

伊勢屋奥座敷の場　本舞臺眞中四間常足の二重、土庇、正面上手床の間、地袋、違ひ棚、下手襖の出入り、平舞臺上手に茶室の樣を見せる、下手忍び返し附の黑板塀、飛石、石燈籠、枝振よき松の樹等よろしく、都て伊勢屋奥座敷の體。二重に座蒲團を敷き、煙草盆を出し客設けなしてある。木遣りくづし樣のものにて幕開く。

ト平舞臺下手より手代佐七案内して、藤兵衞、着附、短き羽織、おしげ、銀杏返し、小ざつぱりした形にて出來りて、二重にあがり座蒲團の脇に坐る。

佐七　どうぞお敷き下さりませ。たゞ今、旦那は諸禮のお稽古中故、濟みまするとすぐにあなた方がお出での由を申上げます故、御ゆつくり遊ばして下さりませ。

ト佐七會釋して下手へ入る。

しげ　父さん、諸禮のお稽古とは何のお稽古で御座んせうか。

藤兵　おれも何の事だらうと考へて居るのだ。

ト おしげは座蒲團をさわつて見て、

しげ　何だか知らぬが、結構さうな座蒲團だねえ。

藤兵　古渡り更紗と言ふものだらう。（ト敷いて見て、）宜い氣持だ。お前も敷いて見な。

ト　おしげもそッと敷いて見て、

しげ　内の座蒲團とは大分違ふわねえ。

藤兵　當り前だ。一枚何兩と言ふのだらう。

ト此所へ島田髷の女中兩人茶と菓子を持つて來り、鄭寧に辭儀をする。藤兵衞もおしげも座蒲團よりすべり下りて辭儀をする。女中は笑ひながら入る。

しげ　今のは女中さんでせうか。

藤兵　大方さうだらう。餘り鄭寧にお辭儀をされたので、ツイ此方も釣込まれてのけた。

ト此の時奥にて、

正齋　それではいけませぬ。襖は斯やうに開けるもので御座ります。

ト言ふ聲する。總て正面の襖を左右に開き、清次、着附、袴、白足袋、扇子を持ち、後より今村正齋、坊主頭拵へにて出て來る。

清次　父さん、よう來ておくんなすつた。おしげも變りが無くつて結構だ。

しげ　兄さんもお達者でお目出度う御座んす。

滑次　達者な事は此の通りピン〱して居るが、職人とは違つて、是からは方々のお屋敷方へお出入をせねばならぬ。それには諸禮の心得が無くつちやァいけ無えので、毎日朝から晩まで立つたり坐つたり、イヤモウやり切れたものぢやァ無え。どうして〱儀式と言ふものは六かしいもので、一寸立つにも作法のあるものだ。お辭儀一ッするのだつて容易なものぢやァ無え。斯う扇子を前へ置いて、兩手を突いて頭を下げる。此の頭の下げやうにも伊勢流、小笠原流といろいろ流儀があつて中々故實のあるものだ。幸ひ此所に宗匠も居る故、座禮と言つて坐る時の儀式をやつて見るから、父さんも見てくんねえ。宗匠、賴みますよ。

正齋　ハア、宜しう御座ります。お始あなされませ。

滑次　斯んな鹽梅に立つて、摺足と言ふ奴でソロリ〱と前へ出て、右の足を折つて坐る。此所が中々六かしいのだ。

ト汗を拭きながら、諸禮の稽古をして見せる。是を見て、藤兵衛苦々しさうに笑ふ。おしげも脇を向いて笑ふ。

清次　オイ、おしげ。笑ひ所ぢやァ無え。此方は一生懸命だ。

しげ　それでも、兄さんがお袴を着けて、白足袋を穿いて小笠原流とやら伊勢流とやら、おかしいでは

ありませんか。

藤兵　餘り馬鹿々々しくつて笑はずにや居られねえ。

正齋　是は怪しからぬ。無作法なお方ぢや。諸禮の稽古は中々にやかましいもので御座る。サア、お始めなされませ。まづ右の膝から折りまして坐りまする。

ト正齋立つてして見せる。清次もおかしくなつて、

清次　宗匠、今日はもう止めにしませう。

正齋　何故で御座りますな。

清次　何だか皆が笑ふので、私もおかしくなつて來た。

ト清次自分の姿を見て、クス／＼笑ひ出す。

正齋　それでは、後程又お稽古をいたしませう。愚老は此の間に風呂に火を入れて置きませう。御免下さりませ。

ト正齋は一禮して奥へ入る。清次は待兼ねて膝を崩し、

清次　父さんも樂に居なせえ。イヤモウ大店の旦那も中々樂なものぢやアねえ。番頭を呼んで小遣を寄越せと言ふと、お買物の代金なら店で拂ひますると、ぬかして容易に出しやアがらぬ。氣が

閉ぢるから緣日でもひやかしに行かうと思ふと、手代が供をして來て自由には成らねえし、くさやの干物が喰つて見たいと思つても、そんな下品な物はあげられねえと臺所番頭が承知をしねえし、イヤモウ遣り切れたものぢやァねえ。其の代りにや　明日喰ふ米に困るやうな苦勞はねえ。父さんも堅意地な事を言はねえで、今の家を疊んでしまひ、早く引越して來なせえ。此所へ一緖になるのが氣が張つていやなら木場あたりへ隱居所を拵へるから、どうぞさうしておくんなせえ。

藤兵　おらァいやだ。手前が度々迎へを寄越してくれたが、伊勢屋の敷居を跨ぐのもいやだから、今まで來なかつたが、今日はもう我慢がし切れ無いで、おしげを連れて出かけて來たんだ。手前、此のおしげを何時女房に持つてやるつもりだ。

清次　それぢやァ、矢張り父さんはおしげをおれに見合はす心かえ。

藤兵　知れた事だ。何時おれがやめにすると言つた。

ト此の間、おしげは氣を揉んで居たが、

しげ　お父さん、其のやうな事は言はないで居て下さいまし。わたしや家でも言つた通り淸さんのおかみさんになる氣は更にありません。

藤兵　手前は思ひ切つても、おれが思ひ切れねえのだ。死んだ嚊の遺言もある事だから、手前を清次に添はせ無い中はおれも安心して目をねむられぬ。年頃の娘だ。早く引き取つてくれ。今日は其の返事を聞かねえ中は歸らねえつもりだ。然し、此所の厄介にやアなるめえと思つて、此の通りおしげに握り飯を拵へさせて持つて來たんだ。

ト小風呂敷包を出さうとするとおしげ止めて、

しげ　そんな物を出すのはおよしなさい。

藤兵　宜いから打遣つて置け。

ト振り拂ふ。おしげは清次に氣の毒と言ふ思入。此の時下手にて、

宮内　イヤ〳〵、御案内に及びませぬ、

しげ　お父さん、お客様ぢやぞえ。

藤兵　イヤ、誰が來てもかまはねえのだ。

ト是にて、清次は當惑の思入。下手より藤井宮内、おつやを伴ひ出で來り、藤兵衛を尻目にかけて二重にあがり上手へ住ふ。女中奥より座蒲團、煙草盆を持つて出る。

清次　どうかあちらの座敷へ通つて下さいまし。

宮内　イヤ、此所で結構ぢや。中々風通しがよい。

つや　庭樹の御手入が出來まして晴やかに成りました。あの燈籠は矢張り遠州で御座りますか。

清次　遠州だか何だか、わたしにやァわかりません。どうか宗匠に聞いて下さいまし。（ト汗を拭く。）

宮内　此方の御主人はまだ左樣な事は御存知無い筈ぢや。（ト冷やかに笑ひ、藤兵衞の方を見て、）其處に居るは御出入の職人衆で御座るかな。

清次　イエ、私の親父と從妹で御座えます。

宮内　ナニ。御尊父とな。是はとんだ失禮を申上げた。御容赦下され。

清次　どういたしまして。御覽の通り其の日暮しの職人で御座えます。さうして、あなた樣は。

宮内　拙者は藤井宮內、是なるは娘つやと申す者で御座る。

ト是を聞き、おしげ思入有つて、

しげ　そんなら、あなたがおつや樣で御座んすか。

つや　ハイ、私がつやで御座ります。

宮内　幸ひの折柄、御尊父にも御耳に入れて置くが、娘つやと清次殿の緣談、まづ大方は調つて御座る。

ト是にて、藤兵衞思入有つて、

藤兵　そんな話も噂に聞いたが、よもやと思つて居たが、矢張り本統であつたのか。もし且那え、此の清次にやア此處に居るおしげが言名付けだ。それを差措いて、外から緣組は此の老爺が不承知だ。イヤサ、藤兵衞が祝言させねえのだ。

宮内　そなたが何と言はうとも、肝腎の清次殿が一方ならね執心故、此方でも大切の娘なれど遣はす事にいたしたのぢや。實父とは申せど、職人風情の其方が、土御門家に由緣あるわが娘を、悴の嫁と呼びすてにするさへ分にすぎて居るに、承知をせぬの何のとは失禮千萬ぢや。

藤兵　そんな六かしい理屈は知らねえが、おしげを清次に添はせ無いぢやア嗚の位牌へ申譯が無え。(ト清次に向つて、)ヤイ、悴、まだ結納が濟んだと言ふ譯でも無からうから、手前の口で斷つてしまへ。おしげを棄てちやア手前義理が立つめえがな。

ト言へども淸次だまつて居る。

しげ　お父さんの樣に言つては、兄さんも困るばかりでは御座んせう。兄さんがまだ家に居る時分から思ひに思つたおつやさん。望が叶うて夫婦になれば、私に取つても此のやうな嬉しい事は御座んせぬ。どうぞ兄さんの思ひの通りにさせてあげ、私には女の道とやらを立てさせて下さん

せ。モシ、お願ひで御座んす。

ト手を合せて頼む。藤兵衞もホロリと成り、

藤兵　やさしい手前に引き替へて義理も情も知らねえ奴。モウ／＼愛想が盡きた。是から道で逢つても口を利いてくれるな。おらア手前を子だとは思つて居ねえ。サア、おしげ、歸らう／＼。

ト立ちあがる。

しげ　一寸待つて下さんせ。わたしやおつやさんに言ひたい事が一言御座んす。

藤兵　言ひたい事があるなら、遠慮はねえ。思ふ存分言つてやれ／＼。

しげ　アイ。（トおつやに向ひ、）

しげ　わたしは兄さんと幼い時から一つ家に暮してよう兄さんの心を知つて居ます。曲つた事一ツせず、影も曇りも無い人で御座んす。どうぞ行末大事にしてあげて下さいまし。其の代りお父さんは私が大事にいたします。あなたは兄さん。私はお父さん。行く道は分れても、心は一つで御座んすぞえ。

藤兵　怨みでも言ふかと思つたら、悋氣一つせずいぢらしい事言ひ居つた。モウ／＼おれを泣かしてくれるな。サア、おしげ、來い。

しげ　そんなら、兄さん、

清次　もう歸るのか。

しげ　お目出度の日が極つたら、知らせて下さんせ。

藤兵　エヽ、人で無しの清次にかまふな。

ト藤兵衞、おしげを連れて下手へ入る。

宮内　おしげ殿は若いに似合ぬ思ひ切りがよい。それに引替へ藤兵衞殿は得心の悪るい人ぢや。

つや　お父様、わたしや胸が痛んで參りました。

宮内　ハテ困つたもの。又持病の差込みか。

つや　さまでの事でも御座りませぬ。

清次　それぢやァ奥で少しお休みなさいまし。

つや　それでは、さうさせて戴きませう。

ト宮内、おつやを連れて奥へ入る。清次も續いて行かうとする處へ、平舞臺下手より松波伊織、羽織、着流し、大小にて出で來り、

伊織　御主人、一寸お待ち下され。

清次　是は松波樣。此方へおあがりなせえ。

伊織　御免下され。（ト二重へあがり上手へ住ひ、）早速ぢやが、おつや殿から此方への手紙を賴まれて參つた。御覽下され。

ト伊織懷中より手紙を出し清次に渡す。

清次　おつやさんは宮內さんと一緖に奧に來てお居でなさるのに、何であなたへ此の手紙を。

伊織　おつや殿が自分の口からは話し兼ねる此方への賴みがあつて、それで手紙に認めて拙者へ渡されたのぢや。

清次　自身に言ひ兼ねるとは何の用か。兎も角も、手紙を讀んで見ませう。若し私にわからねえ字があつたら、伊織さん、代つて讀んでおくんなせえ。

伊織　易い事ぢや。讀んで見やれ。

ト是にて、清次手紙を開き、

清次　エヽ、一筆申上まゐらせ候。誠に申兼候へ共、サア、此處の一件りが讀めねえ。

伊織　差迫る難儀出來ぢや。

清次　成程、今日中に差迫る難儀出來いたし候まゝ金二百兩御用立下され度候。（ト心配の思入あつて、）

伊織　差迫る難儀とはどんな事だか、松波さんは御存知で御座えますか。
イヤ、拙者も存ぜぬが、餘程の心配事と見える。其の後を讀んで見られよ。

ト清次又手紙を讀む。

清次　日頃のやさしき御言葉が眞にて御座候はゞ、何とぞ内々にて松波樣へ金子お渡し下され度候。女の口よりかやうな御無心申上候は、如何にも〳〵お恥かしく存じ候。何とぞ右の金子お返し申上候までは私がお目もじいたし候とも何も仰せられぬやう願上候。

ト伊織にわからぬ字を聞きながら讀み終り、

此の手紙ぢやアよく〳〵の事と見えるが、金は番頭が預かつて居て、私の自由に成らねえのだ。併し、棄て置けぬおつやさんの難儀、何とか言つて金を請取りきつとお渡し申しませう。

伊織　此處にてお待ち申せば、必ず拙者へお渡し下され。何分ともにお頼み申す。

ト是にて、清次奥へ入る。

アノ宮内の目をぬすんで濡手で粟の二百兩はよい内職ぢや。

トニツタリ笑ふ。この時、平舞臺上手より治介出て來り、

治介　藤井樣があなたにお話がある故、茶室まで早速お越し下さるやうとの事に御座ります。

伊織　イヤ、拙者は清次殿に用談中故、それが濟んでから參ると申して下され。

治介　何か存じませぬが、お急ぎの樣子故、是へ藤井樣をお連れ申しませうか。

伊織　それでは、猶以つて迷惑いたす。然らば一寸參つて逢うであらう。

ト伊織治介に附いて上手へ入る。此のあとへ清次金包を持つて奥より出で來り、

清次　松波さんは何所へいつたか。此の金を早く渡したいものだ。

ト此の時、奥よりおつや出で、

つや　其のお金を何で松波さんへお渡しなさるので御座いますか。

清次　サア、此の金は。

つや　松波さんが内證で拜借に參りましたか。包まず仰言つて下さりませ。

清次　此方がさう言ふなら言ひますが、此の金はさつき手紙で言つて寄越しなすつた二百兩だ。

つや　誰が私の手紙を持つて參りました。

清次　松波さんが持つて來ました。

つや　一寸お見せ下さりませ。（ト清次より手紙を受け取つて見て、）此の手紙をアノ松波さんが。

清次　身に差迫る心配事と聞いたので、何で此方が是々の譯でと私へ明して下さらねえかと、實は怨

んで居ましたよ。サア、二百兩受け取つておくんなせえ。

ト金包を出す。おつや思入あつて、

つや　有難う御座います。此のお金は少しの間私が拜借して置きます。

清次　拜借も何もあつたものぢやアねえ。此方と夫婦に成りやア、此の家の身代は二人の物だ。

ト是を聞き、おつや切無き思入あつて、急と心を極め、

つや　モシ、清次さん、私の事は今日限り思ひ切り、アノやさしいおしげさんを御家内に持つてあげて下さりませ。

清次　何で此方はそんな事を言ひ出したのだ。

ト合方に成り、

つや　サア、私は今日おしげさんに初めて逢ひ、やさしい心に感心しました。それに引替へ汚い〳〵私の心、紅白粉の厚化粧で木地は綺麗に塗隠せど、一皮下は雪と墨、比べ物には成りませぬ。ぢやによつて私の事は思ひ切つて下さりませ。

ト是を聞いて、清次は笑ひ出し、

清次　ハヽヽヽ、そりやア嘘だ。おしげに義理を立て、私に思ひ切らせようと言ふ此方の狂言だ。

つや　イエ〲、狂言でも何でもありません。あなたは自分の眞な心に引較べ、世間の人は皆善い人とのみ思つて居らつしやるやうなれど、表面は飾つて、内心では恐ろしい企みを持つて居る人は幾らも御座りますぞえ。

清次　そりやア廣い世間には惡い奴もあるだらうが、此の家へ出入りする人に限つてそんなのは一人もありやし無い。

つや　それがあなたの思ひ違ひ。わたし達が此の家へ繁々參りましては必ず良い事が御座りませぬ。どうぞ私の事は思ひ切つて下さりませ。私が出入りをしませねば、父も松波さんも此方へあがる用は御座りませぬ。

清次　モウ〲そんな事はよしておくんなせえ。おつやさんと言ふ心の目當があればこそ私も此の家を相續して窮屈な思ひも辛抱して居るのだ。お前さんに別れて一日だつて暮せるものか。

つや　すりや、今のやうに申しましても。

清次　誰が本統の事だと思ふものか。此の清次にや一に大神宮樣、二におつやさん、三に命だ。

つや　清次さん、わたしやあなたの人の好いのに釣込まれて心までが變つて來ました。

清次　そりや、おつやさん、全くか。

つや　モウ、嘘も僞りもありません。

清次　此方に附合つて三月目で初めて聞いた今の一言。私はまるで天へも昇るやうだ。

ト悦ばしき思入。此の前より伊織上手より出で樹木の陰に隱れて聞いて居る。此の時、奥より佐七出で、

佐七　近江屋の大きいおかみさんがお出でに成りまして、旦那樣に内々お目にかゝりたいと仰しやつて中の間に待つてお居でゝ御座ります。

清次　肝腎の話の所だ。後で行くから、さう言つてくれ。

佐七　デモ御座いませうが、お急ぎで御座いますから。

清次　エヽ、仕方が無え。おつやさん、一寸御免なせえよ。

ト清次に佐七附いて奥へ入る。是にて、伊織前へ出で、

伊織　おつや、何をそんなに考へて居るのぢや。

つや　オ、お前は松波さん、何時の間に。

伊織　さきにから庭樹の蔭で清次とお前の面白さうな話を聞いて居た。

つや　エツ。

伊織　お前はアノ清次に惚れたな。

ト是にて、おつや思入あつて、

つや　アイ、惚れました。わたしやお前さんがいやになりました。

伊織　何だと。

つや　此の手紙は誰が書いたので御座んすえ。(ト以前の手紙を伊織の前に突き附けて、)私の手には似せたれど、一目で知れるお前の細工。人の善い清次さん、私の難儀と聞いた故、二言と言はず二百兩。よく／＼私を思へばこそ。騙す人と騙される人。中に立つた私の目には餘りお前の淺間しさが見えすいて、ツク／″＼いやになりました。

伊織　お前の腹立は尤もだが、アノ金子は差急ぎ據處無い入用があつて、お前に話す間も無かつたのぢや。

つや　もう其の言譯はよして下さんせ。此のお金は私が清次さんから借受けてお前へ手切れに上げまする。是を持つて好きな所へ行つて下さんせ。

ト金包を出す。此の前より宮内上手より出て二人の話を聞いて居たが、此の時ツカ／＼と二重にあがり、

宮内　娘の名前で騙つた金擡にわしが。

ト金包を取るを道具替りの知らせ。

預つて置かう。

ト笑ひ、他の兩人呆れる。此の模樣よろしく合方にて。

道具廻る

同小座敷の場　本舞臺一面の平舞臺、正面床の間、地袋、續いて一間襖の出入り、下手折廻して根岸壁、六尺の處襖の出入り、上手斜に緣側、此の向う中庭の書割、平舞臺薄緣を敷き、都て伊勢屋小座敷の體。此處に、前幕の近江屋後家おゑい、清次差向ひにて坐る。合方にて道具止る。

ト清次は驚きたる體にて、

清次　それぢやア、善之助だと言つて尋ねて來た者があるので御座えますか。

おゑい　眞僞はどうか知りませぬが、私の店へ來たによつて連れて來ました。

清次　そいつはいか物に違え無え。善之助は三日前に頓死して居るのに、今時分善之助だなどと言つて出て來た奴は喰はせ者だ。

ゑい　私も怪しい者では無いかと思つて居ますが、兎も角も、逢つて御覧なさいまし。

太藏　サア、此方へお出でなされませ。

ト此の時、下手の襖を開け手代太藏案内して善之助、羽織、着流しにて出で來りて下手に坐る。

お連れ申しまして御座ります。

ト引返して入る。

ゑい　清次さん、此の方が今お話した善之助さん。

清次　それぢやア、お前さんが九つの時に家出をした善さんか。子供の時分の面影はまるつきり無く成つてるので、名を聞いてさへわから無えやうだ。

善之　さう言ふお前さんが清さんで御座いますか。是ではお互ひに道で逢つても知れませぬ。

清次　顔に見覺えが無いからは、本統の善之助さんだと言ふ何ぞ確かな證據がありますか。

善之　サア、その證據となるべき親父の手紙は人に奪はれ、私の手には何一ツ是が印と言ふ物もありません。

清次　シテ見りやア直に此の身代をお前さんに渡すと言ふ譯にも行きますまい。モシ、近江屋さん、さうぢやア御座えませんか。

おゐい　成程、是は清次さんの言ひなさる通り、さきに頓死した善之助が偽者か本物かをまづ極めねばなりませぬが、何しろ死人に口無しで困つたもので御座んすなア。

ト是にて、善之助思入あつて、

善之　人を見たら泥棒と思へと言ひますが、うつかり氣を許して大事の手紙を盗まれた一通り、マア聞いて下さりませ。

ト合方に成り、

十六年別れて居た親の手紙を見ると直に出立なし、足に任せた道中で連れに成つた浪人者。見るから柔和な人柄に此方でも氣を許し、ウッカリしやべつた身の上話、聞いた相手は心に一物。奥底無く持ちかけて、油斷を見澄まし箱根山で只一息に締殺し、大事の手紙を盗み取つた大惡人。私は一旦息絶えて谷川へ投込まれたを運好く樵夫に救はれて、その介抱で生返つたが、手足に受けた疵のため、樵夫の小屋で世話に成り、やつと歩けるやうに成つたので江戸へ歸つて來ましたが、現在の善之助が偽物だと疑はれ、親の身代を繼ぐ事も成らぬとは、是も皆因緣で御座いませう。

ト是を聞いて、おゐいは不審の思入あつて、

ゐい　今、此方のお話では浪人者ぢやと言ひなすつたが、此の前善之助ぢやと言つて來た人はそんな人體では無く、失禮ながら、此方によう似て居ました。

善之　ハテ、合點のゆかぬ。私の言ふ浪人は色白で鼻筋通り口許締つた好い男。年の頃は二十七八。

清次　そんなら、もしや。（ト奥へ思入あつて、）其奴の名前は何と言ひました。

善之　杉原左京と言つて居ましたが、大方それも假の名で御座いませう。其奴が活きてさへ居りやァ私の僞りで無い何よりの證據人。草を分けても搜し出し引摑へて身の明りを立てねばなりませぬ。

清次　そこで、其の左京の居所を私が知つて居たならば、お前さんはどうするつもりだ。

善之　それを敎へてさへ下さりますれば、其のお禮として私が相續する此の家の身代を二つに分け、一部はお前さんに差上げます。

清次　禮を貰ひたくは無いが、チッと私にも望がある故、杉原左京とやらを此方に突合せ、いよ〳〵其奴が騙りと知れたらお貰ひ申す事にしませう。

ゐい　どうして、又、清次さんは左京の在所を知つてお居でゞ御座んすか。

清次　大方それと睨みを附けた浪人者。奥に來て居るのがテッキリ其奴に違ひ無いのだ。

善之　それ聞く上は命の敵引捕へて。

ト立ちあがるを清次止めて、

清次　そいつはいけ無え。一旦約束したからは左京は私が引捕へお前さんに手渡ししよう。五萬兩を手放しちやア番狂はせだ。

善之　何樣お前さんに約束した言葉は反古に成りますまい。

清次　さうして、其の左京には一目でそれと知れる、何ぞ確かな目印はありませんか。

善之　目印と言つては、オヽ、さうぢや。咽を〆められた時、其奴の腕に喰ひ附いて遣りましたが、其の傷の痕がある筈。確か右の手だと思ひます。

清次　さう言ふ目印があれば猶更だ。其奴を白状さす間、お二人とも奥で待つて居ておくんなせえ。好い時分に私が聲をかけませう。

ゐい　それでは奥で待ちませう。併し清次さん、其の浪人は善之助さんに取つては大事の證據人。必ず逭がしてはなりませぬぞえ。

清次　そりやア承知して居ますから、御心配には及びません。

善之　きつとお頼み申します。

トお忍い先きに善之助附いて奥へ入る。

清次　アノ松波伊織が人殺しをした惡人とはどうしても思はれねえ。

ト疑ふ思入。此の時、伊織腹立たしき體にて上手より出で來り、

伊織　清次殿、お客人は歸られたか。

清次　まだ奥に居ますが、それについてお前さんに逢ひたいと思つて居た所だ。

伊織　拙者も其方に内々話があつて參つたのぢや。あれ程拙者が頼んで置いたに何故おつや殿へ直々に金子を手渡しいたされたか。それがために拙者は面目を失ひ、又、おつや殿は折角手に入れた二百金を宮内殿に取り上げられ、却つて金子の出所を詰められて殊の外迷惑いたした。何とも以て申し兼ねるが、今二百金おつや殿のために拙者にお貸し下されい。

清次　おつやさんのためとあれば、直にも金をあけてえが、モウ此の身代は私の物ぢやア無え。

伊織　とは又何故ぢや。

清次　先達てお前さんが連れて來た善之助の外に又一人善之助が出て來たのだ。

伊織　然ば奥に居る客人と言ふは其の者か。（ト思入あつて、故と落着き、）それは喰はせ者であらう。拙者が同道した善之助の外に伊勢屋の伜善之助のあらう筈が無い。よしんば前の善之助が騙りで

あつたにいたしても、拙者は只同道して參つただけぢや。僞物か正物かは亡者に聞かねば相分るまい。

清次　イヽヤ、さうはいか無え。死んだ善之助が騙りであつたらお前さんは人殺しだ。

伊織　何と申す。

清次　箱根山で善之助を〆殺し、大事の手紙を盗み取つた、京家の浪人杉原左京は松波伊織さん、此方の事であらうがな。

伊織　イヽヤ、知らぬ。左樣な覺えは無い。

清次　それぢやァ、奥に居る善之助を此處へ呼んで突き合はすが、それでも知らぬと強情張るか。

伊織　面白い。其の僞者を是へ呼べ。化の皮をひんむいてくれん。それとも、其奴が眞の善之助と言ふ何ぞ確かな證據があるか。

清次　こつちの善之助に證據は無いが、此方が杉原左京と言ふ證據はそつちにある筈だ。

伊織　然らば其の證據是へ出せ。

清次　證據と言ふのは、此方の右の手に善之助が喰ひ附いて、無念の跡を殘した疵。失禮だが、右の手を私に見せておくんなせえ。

伊織　イヤ、武士が刀を持つ手は其の方共には見せられぬ。

清次　手を見せるのを嫌がるのは、此方の肘に疵があるのか。

伊織　サア、それは。

清次　そんなら見せるか。

伊織　ウム、それは。

清次　オイ松波さん、腰にさした大小の手前立派に言つてしまいなせえ。

トきつと言ふ。伊織思入あつて、

伊織　さう知られては仕方が無い。清次、是を見てくれ。

ト右の腕をまくつて見せ、

モウ、何もかも言つて聞かせる。マア斯うぢや。京都を喰ひつめて江戸へ下る道すがら、残らず聞いた善之助が身の上話。持つたが病の悪心に罪を造つた地獄谷。證據の手紙を捲上げて、死骸は早瀬の水葬禮。誰知るまいと思ひの外、樹蔭から見て居た男は主人の金を遣ひ込み上方を夜逃げして來た三之助と言ふお店者、善之助に似て居たが物怪の幸ひ、歩合をやる約束で連れて來た甲斐も無く頓死したので損牛菩提。揚句の果に死んだと思つた善之助が歸つて來たは

清次　よく〳〵廻り合せが悪いと見える。併し清次、拙者を騙りで突き出す時は其方も此の家を出て行かずばなるまいが、それよりは拙者を此のまゝ見のがさば、善之助に取つては大事の證人を失ひ、其の方が身の上は安泰ぢや。

清次　成程私が商人なら算盤珠から割り出して徳な方に附くだらうが、根が職人の慾知らずだ。曲つた事は眞平だ。

伊織　然らば、拙者を善之助に引渡すつもりか。

清次　氣の毒だが、さう思つておくんなせえ。

伊織　それ聞く上は清次、其方が命は刀の錆だ。

清次　時代な臺詞でおどしても、ビクともする清次ぢやア無え。切れるものなら切つて見やアがれ。

ト片肌ぬぎに成る。

伊織　ウヌ、其の頰けたを。

ト拔打ちにせんとするを押へて、

清次　巫山戯た眞似をしやアがるな。

ト突放して飛退き、兩人一寸立廻つて見得。此處へおつや上手より走り出で兩人の間に入りて、

つや　マアノ〳〵待つて下さいまし。モシ清次さん、どうぞ松波さんを遁がしてあげて下さいまし。
清次　おつやさんの頼みだから、ウンと言ひ度いのだが、是ばかりはいけ無え。
つや　それでは聞いて下さりませぬか。
清次　此方の頼みを聞か無えのも、此の家の身代半分と釣替の松波伊織。此奴を縛つて金に替へ、此方を女房にしたいからだ。
伊織　火鉢や茶棚を指す腕でなんで武士が縛れるものか。しやらくさい事ぬかしをるな。おつやも其處を退いて居よ。
つや　イヽエ、退きませぬ。私はあの子が不便故、お前さんを無事に逃がしたいが願ひ。どうぞ此處は私に任せて下さりませ。
伊織　然らば、勝手に致すがよい。どうせ拙者は成行次第ぢや。
つや　モシ清次さん、お前さんの志は身にしみて嬉しう御座んすが、私は汚れた身體故、清次さんの様な美しい心の人と夫婦にはなられません。
清次　何で此方が汚れた身體だ。
つや　今までは隱して居ましたが、私には内縁の夫が御座んす。

ト此の時、宮内上手より出て來り、

宮内　娘の申す事は嘘ぢや。ありや清次殿の心を引いて見んために拵へた事。

つや　イエ〳〵、お父樣は何と言ふとも、此處に居る松波さんは私の亭主で御座ります。

清次　すりや、伊織が此方の亭主か。

ト驚く。宮内は氣を揉み、

宮内　それは先年伊織からおつやをくれいとの話もあつたれど、氣に入らねば斷つたので、娘は決して瑕物では御座らぬ。

つや　イエ〳〵、私の體は疵だらけぢや。それに、二人は恥しながら子まで出來た仲で御座んす。

清次　それぢやア、伊織は矢つ張り此方の亭主か。

宮内　清次殿、娘は逆上致して居る。決して眞と思うて下さるな。

つや　もう斯う成つたら、私は何もかも言つてしまひます。實はお父樣と松波さんが腹を合せ、私を此の家へ嫁入らせ、二人で身代を分けて取る豫ての企み。

宮内　とんでも無い事を申居る。左樣な企みは毛頭御座らぬ。

ト言譯するを清次は耳にも入れず、

清次　お前方がそんな非道な企みをしたも、おれに金があつた故だ。其のおれも今日からは一文無しの貧乏人だ。

宮內　然らば、此の身代を此方は棄てる氣か。

清次　今日來た善之助が、本物と知れたからは、伊勢屋の身代を相續するは當り前だ。

宮內　偖は其方は又元の木阿彌か。それを聞いたら、もう此所に用は無い。娘。來やれ。

つや　イエ、私はもう家へは歸りません。

宮內　そりや又何故ぢや。

つや　占ひを看板に色仕掛けで人を欺し、お金を取つた今までの境界がシミ〲いやになりました。是からはそれに引替へ身は薄暗い長家に居ても、心は人に恥無いやう明るく持つて居たいが私の願ひ。それともお父樣が私を傍に置いて下さるお心なら、あなたも改心して下さいまし。

宮內　イヤ、おれは改心せぬ。善人の眞似をして飢死するやうなまだ耄碌はしないのだ。

つや　それでは、私が身體は私の思ふやうにさせて下さいまし。隨分今までお父樣の喰物に成りました。せめて是からは私の自由にさせて下さいまし。

宮內　イヽヤ、おれが目の黑い中は滅多にそちの自由にさせぬ。

つや　そんなら私は此處で自害をして果てまする。

ト宮内の刀に手をかける。

宮内　エヽ、あぶ無い。放しをれ。（トおつやの手を振放し）娘のをどかしを怖がるやうな親では無いが、其方も一旦言ひ出したからは容易な事では得心しまい。いたし方が無い。當分の間は思ひ通りにさせてやらう。其の替り懐中の二百金無く成つたら、又連れに行くぞよ。ドリヤ方位を變へて又一占ひいたして見ようか。

ト言ひながら下手へ入る。清次ジツと思入あつて、

清次　アヽ、おれも今やつと目が覺めた。心の迷ひも半年越し。すつぱり思ひ切つたからにやア、伊織は此の儘逃がしてやらう。

つや　すりや、私が頼みを聞入れて下さりますか。

清次　此方の頼みの聞き納めだ。

伊織　併し拙者を逃がしては此の身代半分を棒に振らねばならぬが、承知か。

清次　惚れた女を思ひ切りやア、百萬兩も石瓦だ。此の上は伊織さんも心を入れ替へ、又、おつやさんも氣を取り直し一緒に成つて子供を育てゝやるがいゝ、凡そ世の中に父親の無え子程不便な

者はありやアしねえ。

つや　よう言うて下さんした。清次さんのお情が松波さんに半程でもあつたなら、何で私が愛想を盡しませうぞ。

伊織　身共も清次殿の意見に從ひ改心いたした。今後情ある良人ともなり父ともなるであらうぞ。

つや　そりや、ほんまの事で御座んすか。

伊織　此の伊織が生れて初めての誠ぢや。

つや　それも皆清次さんのお蔭、生涯忘れはしませぬ。

清次　私もお前方のお蔭で本は讀まねえが好い學問をした。（ト氣を替へて、）サア、人の來ぬ中、裏口から、ちつとも早く逃げなせえ。ソレ、裏木戸の鍵だ。

ト二人を促して、立たせて鍵を渡す。

伊織　此方の情は忘れはいたさぬ。

つや　そんなら、清次さん。

清次　夫婦仲よう。

ト言ふを道具替りの知らせ。

暮しなせえ。

ト額を背むける。伊織はおつやを連れて上手へ入る。奥より善之助走り出て追掛けんとするを淸次、おさへ止める。此の仕組よろしく合方にて。

道具廻る

八丁堀指物師淸次内の場　本舞臺都て序幕の淸次内の道具。行燈に燈火を點して二重に置き、藤兵衞仕事を仕かけては打遣つて考へ込んで居る、おしげ勝手にて夜食の膳拵へをして居る。此の體よろしく、題目太鼓にて道具止る。

トおしげ膳を持つて出て、

しげ　父さん、お夜食が出來ました。サア、おあがりなされませ。

藤兵　今夜は酒はもうよしにしようよ。

しげ　デモ、お前が好きな鰯の三杯酢が出來て居ますから、一ツおあがりなされませ。

藤兵　手前がさう言つてくれるなら、欲しくも無いが、一口やらうか。

ト猪口を取上げる。おしげ酌をする。藤兵衞一口飲んで下に置きふさぐ。

しげ　何をお前は考へて居やしやんす。又、兄さんの事を思つて居るので御座んすか。

藤兵　イヤ、彼奴の事はおらァ何とも思つちやァ居ねえ。手前こそ塞いで居るぢやァ無えか。

しげ　イエ、わたしや兄さんの事なんか少しも思つては居ません。

藤兵　さうならいいが、あんな不孝な奴の事は夢にも思はねえがいゝ。おらァ腹が立つてくやしくつて堪へられねえのだ。

しげ　さうでも御座んさうが、機嫌直して一ツあがつて下さんせ。

ト猪口を取りあげる。題目太鼓聞ゆる。

藤兵　外は題目太鼓で賑やかだが、家はなんだか淋しいやうだ。

しげ　それは兄さんが内に居無い故で御座んせう。

藤兵　なアに、彼奴の事はおらァ何とも思つちやァ居ねえ。手前がありやァ心丈夫だ。おれよりは手前の方が塞いで居るぢやァねえか。

しげ　あいなァ、わたしや兄さんが居無いので淋しくつてなりません。

藤兵　もう／＼彼奴の事は夢にも思はねえがいゝ。それはさうと燗がぬるいやうだから、熱くして来てくれ。

しげ　アイ〳〵。

　トおしげ燗徳利を持つて上手へ入る。清次向うより出で來り門に來てはいり兼ねる思入。藤兵衞は膳を見て、

藤兵　コリヤア變だ。あんなに澤山買つた鰯がたつた是つぱかりしきやねえ。おしげは鰯が嫌ひだから喰ふ氣遣ひは無えが、ハテナ。

　ト立つて仕事場に据ゑてある影膳を見て思入。此所へおしげ燗徳利を持つて出で來り。

しげ　サア、お燗がつきました。

藤兵　おしげ、アノ膳は誰のだ。

しげ　あれはアノ、實は兄さんが鰯の三杯酢が好き故、父さんに内證で影膳を据ゑて置いたので御座んすが、何時も兄さんが好きな物がある度毎に、あゝして置くので御座んす。父さん、腹を立てずに居て下さんせ。

藤兵　なアに、腹を立てるものか。

しげ　そんなら据ゑてもよう御座んすか。

藤兵　宜い處ぢやアねえ。彼奴のすきな物を据ゑてやつてくれ。

しげ　有難う御座んす。そんなら、改めてお膳を据ゑませう。

　ト膳を据ゑ直す。此の時、清次門口の格子口を開ける。

藤兵　おしげ、誰か來たやうだ。

しげ　さうですね。（ト下手へ來て、）オヽ、兄さんぢや御座んせぬか。父さん、兄さんが歸つてゞ御座んす。

藤兵　なに、歸つて來た。（ト立ち掛けて、）イヤ、彼奴が歸つて來る氣遣ひはねえ。

しげ　イエ〳〵、本統で御座んす。（ト清次に向ひ、）サア、兄さん、此方へはいりなさんせ。

　トおしげ清次を連れて二重にあがり。

藤兵　オヽ、清次か。手前何しに來た。

清次　父ッさん、勘辨しておくんなせえ。（トおしげに向ひ、）おしげ、おれが惡かつた。

藤兵　どうして手前歸つて來たのだ。

清次　譯は後でゆつくり話をしますが、世間の裏表をおらァすつかり見て來た。

藤兵　手前夢が覺めたか。

清次　一升袋は矢張り一升だ。

しげ　そんなら、本統に兄さんは歸つて來て下すつたので御座んすか。

清次　おらァ本統に歸つて來たのだ。

藤兵　ウム、さうか。それぢやァ全くだな。サア、久振りだ。水入らずの差向ひで一ツやらう。

ト猪口を清次にさす。おしげ酌をする。

しげ　父さん、なんで泣いて居るのだえ。

藤兵　コリヤァ嬉し涙だ。

しげ　兄さん、お前も泣いてお居でだねえ。

清次　さう言ふ手前も泣いて居るぢやァねえか。

ト三人顏を見合はせて泣笑ひに笑ふ。

木無しにて幕

名工柿右衛門

めいこうかきゑもん

名工柿右衞門

序幕

肥前伊萬里有田屋の場

役名　有田屋五兵衞、同女房おいま、同悴平三郎、同娘おしげ、番頭與九郎、手代傳六、寅助、榮吉、下女おまる、丁稚松太郎、松浦舊臣中里兵太夫、同妻淺茅、同娘おちよ、柿右衞門娘おつう等。

肥前伊萬里有田屋の場　本舞臺上手に倉の戸前を見せ、入口より裏口突通して向う明るき海の遠見、土藏に續きて一間の暖簾口、此の下手四間常足の屋體、正面陶器を陳べたる戸棚、眞中大阪格子の錢入、下手へ折廻して襖の出入、二重に火鉢、座蒲團等の設備よろしく、都て肥前伊萬里の陶器問屋有田屋中の間の體。手代傳六、二重のよき處に住ひ、仕切の書附を書き、手代榮吉、寅助、

倉の前にて荷造りをして居る。流行唄に祭禮の鳴物を冠せて幕開く。

榮吉　寅助どん、あのダンジリの囃子を聞かつしやれ。餘所はお祭で遊んで居るのに、用をして居るのは内ばかりぢや。

寓助　こなたは先刻にから澄してばかり居るが、横町の女とお祭を見に行く約束でもしたのであらう。

榮吉　そんな意氣筋ぢやァ無いが、あんまり内のだんながわからないから、愚痴も出るのさ。

寅吉　モウ少しだ我慢さつしやい。

傳六　榮吉どん、大黒丸は今夜出船の筈だ、大儀だが、船へいて、長崎へ送る荷物がまだ殘つて居ると、さういうて下さい。

榮吉　承知しました。

ト榮吉は荷物をかつぎ、倉を通り拔けて入る。下女おまる銚子を持つて、正面暖簾口より出て、二重の奥へ往きかけるを呼び止めて、

傳六　お客樣はまだ中々歸りさうにも無いかな。

まる　どうしてどうして、大旦那とおかみ樣が下へも置かぬお持成し、夜にならねば、お歸りには成

るまいわいな。（ト言ひ捨てゝ入る。）

寅助　奥のお客様はありやどなたで御座いますな。

傳六　もとは平戸の松浦様の權臣中里兵太夫様で、御一緒に來て御座るのがお孃様と奥様ぢや。

寅助　そんなら、アノ振袖が若旦那のお嫁様と極つたので御座いますか。

ト此處へ下手より丁稚松太郎出で來りて、

松太　うまいなうまいな。あのほちやほちやとした美しい振袖と若旦那とが御祝言の杯。モシ傳六さん。やけますなく。

傳六　エヽませめ。何をぬかすのぢや、やけてからが、どうなるものか。

松太　だからお前様はアノおつうさんになされませ。氣立もよし、器量もそし、好いお家さんで御座りますぞえ。但しさきでうんといふか、どうだか、一寸考へものだ。

傳六　おのれ、どこでそんな生意氣な事を覺えてうせをつた。

寅助　今時の子供は是だから仕様がない。私も年中内の餓鬼に馬鹿にされて居ます。シタが傳六さんアノ振袖が若旦那のお嫁になるはよいが、おつうさんはどう成るのでせうな。

傳六　サア氣の毒なはあの子だ。もとは大旦那もおつうさんを嫁にするつもりで、柿右衛門の家から

引き取つて來たらしいが、身上がよくなるにつけ、内の職人の娘を嫁にするのがいやになつたのだらうよ。

松太　怪しからん譯ですな。一體内のだんつくが惡い。（ト思はず大聲をして、）オツト内證々々。

ト口の端を抓りながら下手へ入る。此の時奥にて、

いま　おつうは何をしてぢや。おつう〳〵。

寅助　やかましやのお家さんが又怒鳴つて居ますぜ。

傳六　きまりをやつて居る。寅助どん、手を貸して下さい。

ト兩人は荷物を運びて、倉の中へ入る。合方になり、下手の正面よりおいま、四十五六の女房の拵へにて、娘のおしげを連れ、キヨロキヨロしながら出で來り。

いま　奥はお客で忙しいに、おつうは何處へいつた。おつう〳〵。

しげ　モシお母樣。おつうさんは臺所で用をしてゞ御座んせう。そんなに呼ばないがよう御座んす。

いま　何をして居るか、わかつたものぢやない。おつう〳〵。

ト呼ぶ。正面の暖簾口よりおつう、島田髷、縞物の着付、前垂掛にて、出で來りて、

つう　ハイ、おつうは此處に居ます。

いま　此處に居るも、よう出來た。もちつと目端を利かしたが宜い。お祭りの時などは、常の日よりも忙しいが、奉公人の習ひぢや。サア〳〵、早う奥へいて、お給仕をしや。

ト追ひ立てる。此の時、奥より平三郎、羽織、着流し、商家の息子にて、出て來り、

平三　お母樣。おつうは内の奉公人ぢや御座りませぬぞえ。

いま　平三郎、お前はおかしな事を言ふ。おつうが、奉公人でなくて、内の何ぢや。

平三　此の有田屋には、大の恩人、柿右衛門の娘御、内のおしげと同じ扱ひに致さねば成りませぬ。

いま　何を言やるぞ。おしげは内の娘、おつうと同じやうには成りませぬ。

平三　すりや、お母樣は、此の身代が誰のお蔭で出來たと言ふ事を忘れておしまひなさいましたか。それでは濟まぬでは御座りませぬか。

ト是にておいまはぐツとつまる。おつうは前へ出で、

つう　アヽまうし、私の不束から、お家樣にお腹を立てさせては濟みませぬ。私が奥へ參り、お給仕をしさへすれば、宜しいので御座ります。

ト立ちかけるを止めて、

平三　おつうさんばかり行く事は無い。おしげも一緒にいて、お客の取持ちをしやれ。

しけ　ほんにさうで御座んした。奥は私一人で澤山ゆゑ、おつうさんは仕かけた用をして下さんせ。
つう　イエ、私がお給仕にまゐります故、お前樣は矢ッ張り此所に。
しけ　ハテマア、臺所へ御座んせと言ふに。
つう　それではお願ひ申します。
　　ト　おつうは暖簾口へ、おしげは奥へ入る。入違ひに、五兵衛、羽織、着流し、老ひたる町人にて出で來りて、
五兵　コレ倅、今聞て居りやア、柿右衛門を有田屋の恩人ぢやと言うて居たな。
平三　ハイ、左樣申しました。
五兵　たわけ奴、柿右衛門の燒いた皿を長崎へ持つて行き、オランダ人に賣つたは、此の五兵衛の眼が利いて居たからだ。そのお蔭で、異國までも名を知られるやうに成り居つた。それに又十五年此の方は、明朝の萬歷赤繪を日本で造らうと言ふ及びもない望を起し、月日を送る柿右衛門其日の糧に困り、餓ゑて死なぬは、五兵衛が情だ。
いま　其の上に、娘まで引取つて、世話をしてやつて居るのぢやもの、下女同樣にこき使はねば合ひませぬ。

平三　それはお母樣、餘りで御座ります。お父樣だつて、おつうさんを内へ引取つて來た時には、下女にして使ふと言ふ約束では無かつた筈。

五兵　エヽ　それをおのれが知つた事か。

平三　デモ、あなたのおため故、申さねば成りませぬ。

トキツとなる。此處へ、奥より中里兵太夫、羽織、袴、身分ある武士にて、出で來り、

兵太　是は、お内輪の御内談中へ罷出で、お邪魔致した。

五兵　イエ、とんと差構ひは御座りませぬ。（ト奥に向ひ）コレ誰ぞお蒲團を持つて來ぬか。

兵太　イヤ、構はつしやるな〳〵。

ト此の時下女おまき、座蒲團を持つて來る。兵太夫着座して、

偖、今日はお手厚きお持て成しにて、娘も愚妻も、殊の外喜んで居りまする。

五兵　土地の祭禮に付き、お招ぎは致しましたが、何の風情も無く、御迷惑で御座りませう。

いま　どうぞお心置き無く、御ゆるりとお遊び下さりませ。

五兵　奥樣もおちよ樣もさぞお退屈であらう。そちも伜も奥へ行つて、お相手したが宜い。

いま　ほんに、私とした事が、御客樣を捨て置き、申譯が御座りませぬ。

平三　私は一寸店に用が御座りますゆゑ、お後からまゐります。

いま　それでは御免下さりませ。

トおいまは兵太夫に會釋して奥へ、平三郎は店の方へ別れて入る。

兵太　偖、五兵衛殿。先日もお話し致した通り、娘ちよは家内の連子にて、武名かくれ無き成松遠江守の曾孫にあたり、立派な系圖を所持致して居る。今度御所望に依り、娘を差上ぐる御約束はいたしたが、此方よりも申し出でたる箇條は御承知下すつたで御座らうな。

五兵　箇條と仰しやりまするは、お支度金の事、並びに御兩親樣へ御養老金を、差上げまする事で御座りますか。

兵太　眞に赤面の至りぢやが、我等が不如意、お察しが願ひたい。實は娘ちよには、相當な武家から縁談も屢々御座つたが、主君より頂戴の知行にて暮しを立てゝる武家へ嫁がせ、不自由を致させるよりは、縱へ町人でも、富裕な方へ縁付かせるのが、當人のためと存じ、妻にも得心致させた樣な次第で御座る。

五兵　願うても無き今度の良緣。かやうな仕合せは御座りませぬ。身分こそなけれ、金錢には事を缺きませねば、すべて仰せの通り差上げまするで御座りませう。

兵太　それは千萬忝けなう存ずる。然らば、系圖の一卷は婚禮の節、お手渡し致さんが、一應御覽に入れて置かんと、今日是へ携へ參つた。イザ御披見なされい。

ト包みの中より系圖を取り出して、五兵衞に見せる。

五兵　成程、立派なお家筋で御座りますな。

兵太　遠江守事は、鍋島家に取つては大の忠臣。この系圖を以つて願ひ出づる時は、武士にお取立あるは必定で御座る。

ト見て居る。此の時、下手より以前の平三郎出で來りて、

平三　唯今、南川原の柿右衞門さんが店へ見えられました。

五兵　又、金を貸せと言ふのであらう。

平三　ハイ急に入用ぢやと申しました故、私が持合せを用立て返しました。

五兵　いくら貸してやつたのか。

平三　十兩貸してくれと申しましたが、それでは不足と存じまして、十五兩持たせて返しました。

五兵　名人貧乏とは彼奴の事ぢや。時に伜、よい折柄ぢや。是を拜見しやれ。

平三　コリヤ系圖で御座りますな。

五兵　オヽさうぢや。其方の妻と呼捨てにするのは勿體ないが、此方からお願ひをして、御承知下すつたおちよ樣の系圖ぢや。ナント町人には過ぎた嫁女であらうがな。

平三　仰しやる通り結構すぎた緣談。是は拜見せずともよろしう御座ります。

ト系圖を返す。

兵太　然らば輿入の節まで、我等が預かり置くで御座らう。

ト懷中する。奧よりお丸出で來りて、

まる　奧樣がお待兼ねで御座りまする。

兵太　いかさま、此方の話に氣をとられ、とんと忘れて居た。然らば、五兵衞殿。

五兵　どうぞ奧へお出で下さりませ。

ト兵太夫におまるついて奧へ入る。

平三　お父樣。おちよさんを嫁に貰ふのは、私が不承知で御座りまする。

五兵　そんなら、まだおつうを思ひ切れぬのか。意氣地の無い奴だな。

平三　ハイ、私は意氣地が御座りませぬ。兼々お願ひした通り、どうぞおつうと夫婦にして下さりませ、迚も私にはお父樣の仰言る樣な不人情な眞似は出來ませぬ。

五兵　わりや不人情と言ふ事をば、知つて親に不孝と言ふ事を知らぬか。中里さんのお孃樣をわれの嫁に貰はねば、五兵衞が望みは叶はぬが、それでも親に楯を突くか。

平三　あなたのお望みを破るのは、重々不孝では御座りまするが行末どのやうにも孝行をつくしませう程に、おつうと添はせて下さりませ。

五兵　スリヤどうあつても親の詞は聞かれぬか。

平三　是ばつかりは、許して下さりませ。

五兵　モウ宜い。勝手にせい。おつうと添ひたけりや、添へ。其の替り、勘當ぢや。二度と内へ足踏みはならぬぞ。たつた今出てゆけ、置く事は成らぬ。トツト此所を出てうせい。

平三　出て行けと仰言るなら、出てまゐります。

五兵　可愛いおつうを連れて、乞食をしろ、其の時に成つて、アヽ親の言ふ事を聞けば、我身のためにも、おつうのためにも、よかつたと後悔するなよ。

ト言はれて、平三郎は差俯いて居る。五兵衞は言葉を和げて、

さうは言ふもの丶、われが憎うて言ふのぢやない。胸に手を置いて親の言葉をよく聞けよ。二十年來仕合せよく、分限には成つたものの、町人は何處まで行つても町人ぢや。此の上は身分

をたかめ、ゆく〳〵はそちを侍になさんものと、隨分金を使つて見たが、素性系圖が無い故に何時も望みが叶はなかつた。處が、アノ中里さんが浪人なさつて、伊萬里へ御座つた。そのお孃樣は、成松遠江守と言ふ豪い武士の血筋で、鍋島家のお家にもゆかりのある家柄と聞きお勝手向の不如意を幸ひ、系圖を目當てに申込んだ今度の緣談。大事の〳〵緣談ぢや。それをわれが厭ぢやと言へば、日頃の望みは打ちこわれた。親の志破るも、遂げさせるも、われの心一つ、おつうは五兵衞が引き受けて、爲になるやうにしてやるから、否でもあらうが、聞いてくれ。コリヤ平三郎。親が賴む〳〵。

ト說得する。平三郎はだまつて居る。此の時上手より以前の榮吉出で來りて、

榮吉　今大黑丸まで行つてまゐりましたが、潮時の都合で、直に出すと言つて居ました。

五兵　オヽ大黑丸は長崎へゆく筈であつたな。(ト五兵衞思入あつて)平三郎今の返事はどうするのだ。否か應か。早くしろ。

平三　お父樣の仰言る通りに致します。其の替り、おつうが行末を、何分よろしうお願ひ申します。

五兵　そりや、わしが引受けた。能く承知してくれた。(ト店の方に向ひ、)番頭どん〳〵。

ト呼ぶ。店の方より番頭與九郎出で來りて、

與九　御用で御座りますか。

五兵　直に大黒丸へ使ひを走らせて、長崎へ便船する者が一人あるに依つて、それがゆくまで、船を出しては成らぬと言つてやつて下さい。

與九　畏りましたが、長崎へは誰がゆくので御座りますか。

五兵　當分、伜をあちらの店へやつて置くつもりぢや。

平三　そんなら、私は長崎の店へ。

五兵　そちの料見がきまつたからは、離れて居るが互ひのためだ。

與九　サア若旦那、すぐにお支度をなされませ。

　　ト與九郎、平三郎を促して奥へ入る。おいま此の前より立聞して居たが、此の時出て來りて、

いま　どうなる事かと心配しましたが、よい鹽梅に平三郎が得心して、是で私も安心をいたしました。

五兵　わしの腕前はこんなものぢや。ハヽヽヽ。

いま　それでは、平三郎が出かける前に、おちよ様に一寸逢はせておかねばなりますまい。奥へいつて申し上げて來ませう。

ト おいま奧へ入る。上手より與九郎出で來り、

五兵　番頭どん、平三郎の支度はモウ出來ましたか。

與九　今奧でお支度中で御座ります。就ては私は船までお送りいたしませう。

五兵　どうぞさうしてやつて下さい。

ト此の時下手より兵太夫先に、妻淺芽、武家の女房、娘おらよ、振袖姿、おいま、おしげ、おまるついて出で來り、

兵太　平三郎殿には、俄に長崎へお立の由。今日はゆつくりお話をいたさうと存じたに、殘念な事で御座る。

淺茅　連合よりは、娘がどのやうに本意なう思うて居るか知れませぬ。

ちよ　平三郎樣は何時頃お歸りなさるので御座んせうな。

五兵　二三ケ月經てば、キット歸つてまゐりまする。

兵太　いづれ祝言は、今年の暮。

淺茅　娘、嬉しからうなう。

ちよ　アイ。

ト此の時奥より平三郎、裃をして出で來り、

平三　それぢや、お父様。お母様。暫くお目にかゝりませぬ。兵太夫様。奥様。おちよ様。是で失禮いたします。（ト挨拶して思入。）コレ妹。おつうさんが見えぬ様だが、見て來てくれ。

しげ　ハイ。おつうさん／＼。

五兵　おつうなどは何うでも宜い。出船を急ぐ。早うゆきやれ。

ト急き立てられて、平三郎立上る。暖簾口よりおつう泣顔をかくして出て來り、

つう　平三郎様、御機嫌よろしう。

ト精一杯に思入あつて言ふ。

平三　おつうさん。

ト言ひながら近寄る。此の時おちよ香箱を持つて前へ出で、

ちよ　此の香箱を私と思うて持つていつて下さりませ。

ト差し出されて、平三郎當惑の思入。

兵太　娘の餞別、お氣には入らぬか。

五兵　何故、頂戴してゆかぬのだ。

平三　忝う戴きます。（ト餘儀なく受取る。）

與九　サアお出でなされませ。

ト與九郎、平三郎について上手へ行きかける。一同は見送る。おつうは脇を向いて泣き入る。此の鐙よろしく木無しにて。

幕

二幕目　柿右衛門内の場

役名　酒井田柿右衛門、同姉おつう、同妹娘おたね、弟子栗作、有田屋五兵衛、番頭與九郎、丁稚松太郎。

柿右衛門内の場　本舞臺眞中四間の處草葺屋根、上手二間常足の二重、琉球表の疊、正面暖簾口、續いて一間の戸棚、中仕切、上は二枚の小襖、下は陶器を亂雑に入れてある、横手壁、二段に棚を設け、素焼の陶器を置いてある、下手二間落間、正面壁、此の處にも架を設け、上の架には古葛籠下の架にはまだ燒かぬ壺茶碗等を並べる、横手に竹の櫺子窓、落間の隅に轆轤を据ゑ、その傍に土

を搗く臼杵、平舞臺上手に後へ下げて雑れ家の入口、眞中三尺の開き戸、上手の窓は障子を締め切ろ、此の前に赤く熟した實のなつて居る柿の樹、其の下に板を横にして轆皿や鉢の形をした土器を干してある、いつもの所に門口、竹の編戸、柴垣、此外奥の方へ坂道、向う紅葉したる雑木林、都て有田柿右衞門内の體。午後三時頃、爰に栗作轆轤の正面に居座り、仕事をやめて土を見て居る、おたね臼の上に上り竹竿、五布風呂敷を括りつけたるを架と鴨居の間に渡しかけて居る。此の體よろしく在郷唄にて幕開く。

栗作　おたねさん。うつとしいからお止しなさい。

たね　それでもお前が私の方ばかり見て、嫌な話をしかける故、見えぬ樣に斯うして置くのだよ。是で宜い。（ト下りやうとして、）オヽ、あぶない。

ト臼の上にしやがむ。栗作立つて、おたねを親切に助けおろす。

たね　かうして置けば、お前の方から見へツこはない。日が短い故、精出して仕事をおしな。

トおたねは二重の上手へ坐り、素焼の花瓶へゴスで畫をかく。

栗作　なんぼ精出せと言つても、おたねさんの顔が見えないぢやア、仕事をする張合が無い。

たね　ぐつ〳〵言つて居ないで、彼方へいて仕事をおしと言ふに。

ト栗作を風呂敷の蔭へ連れ行き、元の所へ坐りて、花瓶を取り上げ、畫の位置を見て居る。栗作風呂敷の綻び目より覗き、

栗作　おたねさん。モウ一言いわせて下さい。是つきり話はしないから。
たね　まだ何か言つて居るのかえ。
栗作　お前に此方向かせやうと思つて、それで聲をかけたのぢや。
たね　アレ綻びから覗いて居るのだね。本統に困つた人だ。そんなら斯うしやう。今日の夕方まで一言でも話をしかけたら、是から一月の間お前と口をきかない故、さう思つておいで。
栗作　それは大變だ。仕方がないから、壁と睨みつこだ。

ト轆轤をまわして居る。おたねは花瓶に畫を描いて居る。向うより有田屋五兵衛、羽織、着附、ぱつち、雪駄にて出で來り、直に舞臺に來りて、

五兵　ハイ御免よ。(ト内へ入る。)
たね　有田屋の旦那樣。ようお出でなさいました。
五兵　親爺は内に居りますか。
たね　ハイ、細工場に居りまする。

五兵　又赤絵の工風か。無駄な事を。(ト苦笑ひして、)時に利右衛門の内へ使ひをやりたいのだが、誰ぞいつて來ては呉れまいか。

たね　内の栗作をやりませう。栗作。

ト呼ぶ。風呂敷の蔭より栗作出て、

栗作　お出でなされませ。

五兵　利右衛門の内に番頭の與九郎が來て居る故、わしが此處で待つて居る事を一寸知らせて來てくれ。

栗作　承知しました。(トおたれに向ひて、)それぢやアおたねさん。一ツ走りいて來ます。

ト下手の坂道へ入る。

たね　むさくろしうは御座りますが、此方へおあがり下さりませ。

ト平舞臺へ下りて、離れ家の開戸を叩き、

父さん〳〵。お店の旦那樣がお出でぢやぞえ。父さん〳〵。

ト幾度も叩き、此方へ來りて、

今に出てまゐるで御座りませう。どうぞお敷き下さりませ。

ト座蒲團を出して、

ドレお茶でも入れてまゐりませう。

ト奥へ入る。下手の坂道より番頭與九郎、羽織、着附、ぱつち、尻端折にて出で來り内へ入り、

與九　お待遠うさまで御座りました。

五兵　オヽ番頭どん、例の談はどんな工合であつたな。

與九　お喜びなされませ。有田中の窯主を買ひ占める談が出來ました。此の上は約束書へ判を捺せば宜しいので、一同利右衞門の内へ集まり、旦那のお出を待つ事になつて居ります。

五兵　それは御苦勞であつた。併し番頭どん。俺も身代半分をかけてする大仕事故、よく考へてかゝらねばならぬ。

與九　御尤で御座りますが、兼て申上げました通り、有田の陶器を積み出す高は年々十萬あまり、此の利得の何萬兩を一手で握らうと言ふ旨い話。危い所は御座りませぬ。

五兵　今日の所では少しも氣遣ひは無いが、此處の親爺が工風を凝して居る赤繪の皿が本統に出來た日にや、今の樣な有田燒は二束三文ぢや。それを考へると買占めも中々危いものぢやて。

與九　失禮ながら、旦那樣のお言葉とも覺えませぬ。あのうつそりの柿右衞門に赤繪が出來てたまり

ますものか。又出來たなら、其の時は金の五十兩もやつて祕傳を傳授さすのは譯の無い事で御座ります。そこらは此の與九郎におまかせなされて下さりませ。

五兵　成程こなたの言ふ通り、金に渇へて居る柿右衛門、どう共話はなるであらう。

與九　其の替りには此の與九郎に今度の御褒美として、店をお出し下さりませぬか。

ト言ふ顏をヂッと見て、

五兵　番頭どん、好い加減にして置かつしやれ。有田屋の暖簾の光りを頂いて居るだけで澤山ぢや。店などはとんでも無い。嗜まつしやれ〳〵。

ト右の唄にて下手より有田屋の丁稚松太郎出て來りて、

松太　旦那樣。此處にお出で御座りましたか。

五兵　オヽ松太郎、何ぞ急な用でも出來たのか。

松太　ハイ、利右衛門さんの内に皆の顏が揃うたによつて、早う旦那に來てくれと云つて居ました。

五兵　オヽさうであつたか、御苦勞々々。そなたは使が早くつてかしこいによつて、今日は褒美をやりませう。

ト紙入より小錢を出し、紙にひねつてやる。

松太　これは有難う。それではお供いたしませう。

五兵　イヤ供には及ばぬ。わし一人で行く程に、おまへはすぐ何なりと好きなものを買うて、先へ歸るがよい。

松太　大きに、お供は旦那に限りまするなア。

ト喜んで足早に下手へ入る。五兵衞思入あつて、

五兵　今聞く通り松太郎が呼びに來たによつて、わしはこれから利右衞門の内へ行き窯主一同に逢つて來ます。此方は此處に殘つて居て、柿右衞門が赤繪の樣子を篤と探つて見て下され。

與九　よろしう御座ります。細工場へ押込んで見定めてまゐります。

五兵　それぢやア、頼みましたぞ。

ト五兵衞下手へ入る。

與九　あの樣子では、いつまでたつても、店を出してくれそうにも無い。若し柿右衞門の赤繪が出來たら、先廻りをして金儲けをせねばならぬ。

ト此の時奧よりおたれ茶碗を盆へ持て出て、

たね　番頭さん、お出でなされませ。さうして旦那はもうお歸りなすつたので御座んすか。

與九　たつた今出かけてお出でなすつた。お茶はわしが戴きます。

ト茶碗を取つて飲む。此の時開戶をあけて、坂井田柿右衞門、老ひたる拵へ、仕事着にて考へ乍ら出で來り、柿の木を見上げて、

柿右　秋が來れば、自づと柿まで色がつく、然かも其の色が生々として、目が覺めるやうぢや。造化の力と人間の業は、かうも違うたものか知らん。

ト云ひながら、外へ行きかけるゆゑ、

たね　モシ、父さん。與九郎さんがお出でぢやぞえ。

柿右　與九郎さんとは。

ト思ひ出せぬ體にて振返へり、

オヽ、お店の番頭さんか。うつかりして居たので、失禮をしました。御免なさい。

ト二重に腰をかける。

與九　成程、是でなけりやア、人を驚かす仕事は出來ぬてナ。

たね　今しがたまで、お店の旦那樣もお出で御座んしたぞえ。

柿右　呼んでくれればよいに。

たね　アレ程戸を叩いて呼んだのに、聞え無かつたかえ。
柿右　ちつとも知らなんだ。
たね　それぢやに依つて。町の人は父さんの綽名を夢右衞門と云ひますぞえ。
與九　時に、柿右衞門さん。例の赤繪は出來さうかナ。
柿右　わしが一生涯の仕事としてやつて居りますが、まだ何時の事ともわかりませぬ。
與九　あの離れはこなたの細工場か。
柿右　ハイ、彼處には大切な赤繪の見本や工風の雛形、俺の内證をしまつてあるのぢや。
與九　一寸わしに見せて下され。
ト上手へ行きかけるを、
柿右　細工場の中へ人を入れる事はなりませぬ。
與九　ハテ、素人とは違つて、わしが見たら、又どんな好い智慧が出やうも知れぬ。
ト振拂ひ、開戸に手をかけるを、柿右衞門は取つて突きのけ、戸の前に立ふさがりて、
柿右　柿右衞門の細工場には神々の護りがある。出這入りを許したは、娘のおつうたつた一人、其の他は誰で有らうと、踏み込ませる事はならぬ。

トキット言ふ、與九郎是に氣を呑まれ起上り、

與九　さう言ふ事なら、もう見やうとは言ひませぬ。腹を立てずに居て下され。(ト二重に腰をかける。)

たね　何處もお怪我は御座んせぬか。一酷な父さん故、どうぞ堪忍して下さりませ。

與九　今のはわしが惡かつた。全くわしが惡かつたのぢや。

トこの内柿右衞門戸に錠をおろして、その錠を帶に付ける。

そこで、柿右衞門さん。若しも赤繪が出來たら、一番に誰に見せさつしやるつもりぢや。

ト此の時栗作下手より出て來り、門口に立ち聞きして居る。

柿右　それは言ふまでも無く、二十年此の方お世話になつた五兵衞さんへ一番に見せるのがあたり前ぢや。

與九　イヤ、それは惡い。先づわしに内々話をさつしやれ。他で金主を拵へて、こなたにしつかり儲けさせるがどうぢや。

柿右　折角の御親切ぢやが、金儲けよりも、浮世の義理が大切で御座ります。

與九　そんな流義は今時流行らぬ。とかく、義理よりも、金儲けが大切ぢや。いづれ又其の時の話にしませう。ドレお暇といたしませう。

たね　もうお歸りで御座りまするか。

與九　大きにお邪魔をしました。

　ト下手へ入る。

柿右　あつたら時を費した。わしは上の山へ窯を見に行つて來るぞや。

　ト行きかける。此の時栗作内に入り、

栗作　親方、一寸待つて下さりませ。わつしがちつと話したい事が御座ります。

柿右　何の話か知らんが、閑の時にゆつくり聞かう。

　ト行きかける。

栗作　親方が閑の時とは、一生の間にありやァしない。ほんの僅かの間故、どうぞ聞いて下さりませ。

　ト是にて柿右衞門餘儀なく腰をかける。おたね、栗作の傍へ來りて、

たね　今日は思ふ樣、父さんに言つておくれ。

栗作　人身御供に成つた氣で、何もかも言ひませう。（ト平舞臺へしやがんで、）コレ親方、いつまで有田屋に使はれて居なさる氣だ。年中汚ない形をして、好い物を拵へよう、後の世にも殘る品を

と、夜の目も寢ずに工風して造つた陶器は、皆有田屋の金儲け。こつちの手に殘つたものは、只借金と汗水ばかりだ。其の上に、五兵衞さんの事を、ヤレ伊萬里の王樣だの商人の鑑だのと、人が褒めるに引かへて、親方の事を何と言うと思はつしやる。彼奴は夢右衞門だ、馬鹿親爺だと言つて居りますぞえ。

柿右　何とでも言ふものには言はせておけ。

栗作　ソリヤ、親方はかまふまいが、おつうさんやおたねさんが氣の毒故、少しは人間並の心になり慾を知つて下さりませ。

柿右　能う言ふてくれた。われの意見、仇には聞かぬぞ。併し、能う思うて見い、金を拵へる人は廣い世間に幾人もあるが、百二十年以來、世に絶えた赤繪の皿を造らうと心を碎く者は、たつた一人。また栗作には、柿右衞門の心は分らぬ。おたねにも分るまいが、唯俺を知るものは、おつうばかりぢや。

ト言ひながら門口へ出て、後をも見ずに坂道へ入る。

たね　コレ栗作、大出來であつた。有難う。

栗作　どうぞ此方の氣に入るやう、旨く言ひたいと思つたので、此の通り汗になりました。（ト汗をふ

く。)

たね　氣に入る段か、わしや口の中で、ヨウ〳〵栗作々々と賞めて居ました。

栗作　久振りで、おたねさんの笑ひ顏を見て、斯んな嬉しい事は無い。今日の樣な日に言はずば、又言ふ時が無い、俺の口からは言ひ憎いが、此方の事なア、あれも氣に入つたと、ツイ一寸言うて下さらぬか。

ト是にておたれ急に變つて、

たね　嫌で御座ります。折角だがお斷り申します。

ト向うをむく、栗作むつとして、

栗作　そんなに、此方はわしが嫌かえ。

たね　お前は嫌ひと言ふぢやないが、其の話を始めると、急に嫌氣がさして來る故、二度と言はないやうにしておくれ。

栗作　それほど、嫌なわしが買つてあげた其の帶を、何故毎日〆めて居さつしやるぞ。

トおたれの帶を指して言ふ。

たね　他の帶は汚れると惡い故、それで此の帶ばかり〆めて居るのぢや。

栗作　わしは又、こなたに心があつて、明暮〆めて居てくれるのかと、かげで喜んで居たに。（トがつかりして、）さうして、其の帶の栗梅は、どんな心か知つて居さつしやるか。

たね　オヤ、是が栗梅と言ふのかえ。

栗作　アヽ情ない。それさへ知らずに居やつしやるのか。其の色の栗梅は、こなたの身にまとうて居る心で、思ひを色によせ、買つて進ぜた其の帶ぢや。

たね　そんなんでくれた帶なら、片時も〆めて居るのは嫌ぢや。（ト帶を解き叩きつける。）ソレ返へしましたよ。

ト戸棚の内より他の帶を出して〆める。栗作は恨めしさうに、

栗作　いよ〱是でおたねさんの心が分りました。わしは今から出て行きます。

たね　どうなと勝手にしたがよい。（トおたね花瓶に畫を描いて居る。）

栗作　わしが出て行つたら、親方が困るであらうが、もう我慢が出來ぬ。昨夜も此方が餘り故、もう飛び出さうかと思つて、荷拵へをして置いた。

ト架にのせた古葛籠をおろし、襦袢や足袋をつめ込んで、振りかたげ、帶を丸めて片手に抱へ、

それぢや、モウ出かけますが、どうせわしは生きて居ませぬ。あとで親方があの栗作を殺した

は、何處の誰だと聞かしやつたら、私が殺したとお前返事をして下さい、是から先は、首をくるか氣違ひになるか。おたねさん、左樣なら。

トしほ〳〵として向うへ入る。おたねは立つて門口へ來て見送り、又二重へ上り仕事をして居る。向うよりおつう、風呂敷包みを抱へて出で來り、直に舞臺へ來て、內へ入る。

たね　オヽ姉さん、よう御座んした。

トおつう二重に住ひて、

つう　今、其處で栗作の姿を見かけたが、又お前いさかいをしたのぢやないか。

たね　マア、聞いて下さんせ。あの栗作が私をつけつ廻はしつして、仕樣が無い故、叱つてやつたので御座んす。

つう　あの栗作がお前の氣に入らねば、どんな人がよいのかえ。

たね　わたしやあんな阿房は嫌ひ。お店の平三郎樣見た樣な好い男が好きで御座んす。私も姉さんの樣に綺麗な人の居る側で暮したいとは思ひますが、斯んなお多福だから仕方が無いとあきらめて居ます。

つう　それはお前の心得違ひ、今、私の言ふ事をお聞きよ。

ト合方に成り、

綺麗だとか、姿が好いとかは、ほんの花の一ト盛り、仇に散り行く。それに引替へ、優しい心と正直が男の値打、女の命ぢや。あの怜悧な栗作が、阿房とか、たわけとかに見える程思ひ込んだのは、お前の仕合せ。もしも今に歸つて來たら、必ず優しい言葉をかけ、父さんの許を受けて、夫婦と成つて、仲好う暮しや。あれ程の男をば、不足に思うては成りませぬ。

ト是を聞き、おたね思入あつて、

たね　つひぞ是までそんな話をした事の無いお前が、今日に限つて、わたしへ意見。姉さん、どうかしたので御座んすかえ。

ト言はれて、おつうはハツと心附き、さあらぬ體にて、

つう　どうもしたのでは無いが、心得違ひの無い樣と、先きを案じた今の話。意見などとは思はぬがよい。其の誇りお前に喜ばせるものがある。（ト風呂敷包みの中より花やかなる振袖を出し）此の間お前に逢つた時、振袖が着て見たいと、羨ましさうに言うて居た故、好いのでは無いけれど、私の振袖、是をお前にあげませう。

たね　あら、姉さん。わたしやお前の振袖を貰はうと思うて、言うたのぢや御座んせぬ。どうぞ持つ

て歸つて下さりませ。

つう　わたしはまだ何枚も持つて居る故、遠慮せずと取つてお置き。

たね　さうかえ。それぢやア、すまぬけれど、戴いて置きませう。（ト受け取つて、押戴き、）立派な振袖だね。わたしに似合ふだらうかねえ。

つう　一寸其の上へ着て御覽。

たね　着て見ても好いかえ。

ト振袖を着て見る。おつう、鏡袋を出して、映して見せ。

つう　箸折れ鏡の姉妹二人。（ト思入にて言ふ。）

たね　馬上にも衣裳とは、此の事だねえ。（ト喜んで、振袖を脱ぎ、手早くたゝみ、）姉さん、有難う御座ります。（ト禮を言ひ、思入あつて、）シタガ、姉さんは是をわたしに下さるばかりに、わざ〳〵歸つて來たのかえ。

つう　イヽエ、父さんに少し話があつて來ました。

たね　生憎、父さんは、上の山へ窯を見にゆかしやつたが、もう歸つて來る時分で御座んす。（ト日脚を見て、）もう八つ時前。わたしは、父さんの酒買うて來ねばならぬが、お前まだ急に歸るので

つう　御座んすまいな。

たね　今日はさうして居られぬ故、お父さんにお目にかゝつたら、直に歸ります。

　　　それぢやア、今日はもう逢へないかも知れないが、四五日中にお店へ行つて逢ひませう。（ト振袖た奥へ仕舞ひ、德利を下げて、平舞臺に下り、）姉さん、ゆつくりしてお出でなさい。

ト向うへ入る。おつうは後を見送りて、

つう　もうお前と逢ふ時はありませんよ。

ト顏を押へる。此の時坂道より柿右衞門元氣よく笑ひを浮かべ出で來り内に入り、

柿右　オヽ、おつうか。よう來たなア。喜んでくれ。今日までわしがやつて見た赤繪の燒方は、十の九通り悉く皆やり損うたが、今日上の山へ行き、始めて窯の築き方が惡かつたに心づき、どうして今まであれが氣づかなんだか、此の祕傳を見出したからは、わしが仕事も成就に近づいた。喜んでくれ〳〵。（トしきりに言ふ。）

つう　それはまア、嬉しい事で御座んす。さうして、何時頃出來ます。

柿右　さうだなア。窯を築くに一ト月。夫れから、見本を拵へて火を入れるには二タ月。（ト考へて、）今から三月も經てば、明朝の錦手にも劣らぬ赤繪が、日本で出來るであらう。今年の暮には、

そなたにも欲しいものを買つてやるぞ。

つう　私は何にも入りませぬが、妹や栗作に良い着物を着せてやつて下さんせ。

柿右　着せてやるとも／＼。併し、二人の事よりも、まづそなたの嫁入支度からせねばならぬ。長持、簞笥は七棹、八棹、縫模樣の振袖や綾縮緬の打掛け小袖。併し、そなたは祝言の白小袖が、一番能く似合うであらう。

つう　スリヤ、あの白無垢が。（ト思入。）

柿右　早うその姿が見たいわえ。何にせい來春からは、運が開き、仕合せの鉢合せぢや。

つう　父さん、わたしやもう歸らねばなりませぬ。

柿右　わしもゆつくり話して居たいが、今日は是から大事の仕事をせねばならぬ。五六日中に又出直して來てくれ。

つう　とても五六日中には出て來られませぬ。

柿右　そんなら、來月の十日は、そなたの母の七回忌。朝から待つて居るぞや。

つう　イエ／＼、待つて居て下さりますな。事に寄ると、來られぬかも知れませぬ。

柿右　母の忌日にも來られぬと言ふは、ア、聞えた。五兵衛さん夫婦の衆へ氣兼ねしてゞあらう。そ

れなら、おたねを断りにやる程に、遠慮無しに出て來やれ。そんなら、わしは細工場へ行くが、そなたもおそうならぬうち歸りや。

ト平舞臺へ下り、上手へ行き、錠を出して、細工場の戸を開ける。此の時内にて瀬戸物の落ちて破れる音聞える。

つう　何かこはれましたぞえ。

ト平舞臺へ下りる。柿右衛門細工場へ入り、こはれた茶碗を持つて出て、

柿右　おつうや。コレ見や。燒物はもろいものぢや。

つう　其のよい話に引きかへて、私が此處へ來る途で、新村の半兵衛さんが門口に立つて居ましたが、あの人も娘さんに別れてから、急に年を取りましたなア。

柿右　それでも半兵衛は生きて居られるだけがゑらい。わしならとても命はつゞかぬ。

つう　あの娘さんは、私の手習朋輩。おとなしい人であつたが、思ふ男に棄てられて、有田川へ身を投げたは、よく〳〵の事で御座んせう。

柿右　アヽ氣の毒ぢや。併し生き長へて、人に笑はれ、親にまでも恥かゝせ、不孝の上塗りするよりも、死んだ方がはるかに優ぢや。

つう　スリヤ、死んだ方が、優で御座んすか。（ト思入あつて、）もう其の話は、やめにしやう。あの娘も、お前と同じ名であつた。

柿右　とても死ぬなら、遠くへゆかいで、ツイ鼻の先きの川へ身を投げると云ふ事があるものか。

つう　ほんに矢ッ張りおつうで御座んしたなア。

柿右　おつうはおつうでも、俺のおつうとは大違ひぢや。

ト是にて、おつう思入あつて、

つう　それよりも女の方が。

柿右　必ずこはれぬ用心ぢや。ハヽヽヽ。

ト笑ひながら細工場の戸を内より締める。

つう　父さん。許して下さんせ。（ト柿の木に倚りかゝりて泣く。）瀬戸物よりも脆い〳〵女の心。わたしやもうこはれて居ますぞえ。お前に恥をかゝせぬやう他國へ行つて死にまする。今日からおつうは世に無い者と思うて居て下さんせ。（ト二重に上りて、）斯う言ふ事に成つたのも皆わたしが心得違ひから、死んだ後で、父さんのかなしいお顔が目に見えるやうぢや。悉しい譯は書かずとも、有田屋さんに居られぬ譯、一筆書いて父さんへ。奥には硯も筆もあらう。

ト奥へ入る。向うより栗作葛籠を擔りかたげ、帶を抱へて出て來り内を覗いて入り、葛籠を元の架へあげ、帶を二重の戸棚へ仕舞ひ、轆轤の前へ坐りて、仕事にかゝらうとして立ち上り風呂敷の幕を一杯に張りて、姿の隱くるやうにして仕事をして居る。よき程に、奥よりおつう書置を持つて出で來り神棚へ右の書置をのせ、平舞臺へ下りて、上手へ向ひ、

父さん、御恩を仇にしてすまぬが、どうぞ許して下さんせ。

ト伏拜む事あつて、足早に向うへ入る。栗作風呂敷の蔭より出で來り細工場の戸を烈しく叩き。

栗作　親方々々。

ト呼ぶ。戸を開けて柿右衞門顏を出し、

柿右　借金取りなら、斷つて歸せ。(ト又戸を閉めやうとする故)

栗作　親方、借金取りぢやないよ。今おつうさんが出かけて行つた。

柿右　おつうは伊萬里へ歸つたのぢや。何を仰山さうに騷ぎ居るのぢや。

栗作　唯歸つたのならよいが、どうも樣子が變で御座りました。

ト是にて柿右衞門思はず前へ出て、

柿右　おつうの樣子が變であつたとは。

栗作　一寸お待ちなさい。神棚へ何かのせたやうであつた。(ト栗作神棚より書置を持つて來り、)親方、手紙だ。

ト是を柿右衞門受け取り、口の中で讀み悧りして、

柿右　斯う言ふ苦勞があつたとは、今の今まで知らなんだ。われはおつうのあとを追駈けろ。

栗作　合點だ。

ト駈け出して向うへ入る。此の前より五兵衞下手より出で來り、垣根の蔭に立聞きして居て、此の時内へ入り、

五兵　おつうが家出をしたと言ふが、全くの事かい。

柿右　オヽ、五兵衞さんよい處へ來て下さりました。どうぞ是へ上つて下さりませ。

ト兩人二重に住ひ、

五兵　此方の持つて居るは、おつうの書置か。シテどんな事が書いて御座るな。(ト心許なき思入。)

柿右　委しい譯は書いて御座りませぬが、自分の心得違ひから有田屋さん親子の仲に不和を起させて濟まぬ故、遠方へ姿を隱すと書いた後は、親不孝の詫言ばかり。全體是はどうしたので御座ります。

ト是にて五兵衞安堵の思入にて、

五兵　三里離れた有田と伊萬里。こなたは何も知るまいが、平三郎とおつうとはとうから好い仲になつて居たのだ。

ト是にて柿右衞門驚き、

柿右　スリヤ、あの不義をして居ましたか。（ト面目無き思入。）

五兵　それ故、平三郎を長崎の店へやつたが、それ故おつうが家出したのであらう。

ト此内柿右衞門思案をして、

柿右　娘の不埒は幾重にもお詫を致します。それに就て、お願ひが御座ります。どうぞおつうを助けてやつて下さりませ。

五兵　どうして助けよと言はつしやるのだ。

柿右　他に道は御座りません。おつうと平三郎殿と祝言させて下さりませ。親の口から申し憎うは御座りますが、わしには過ぎたあの娘、まんざら釣合はぬ夫婦でも御座りませぬ。

五兵　成る話なら、さうもして助けてやりたいが、是ばかりは親の自由にも成らぬ。

柿右　そんなら、平三郎殿が不承知故にならぬと言はつしやりますか。さう言ふ譯なら、平三郎殿に

逢ひお願ひ致して參ります。

五兵　平三郎に逢つた所で無駄な話だ。實は、他から緣談が整ひかけて居る所ぢや。

柿右　エッ。

五兵　それぢやに依つて、二人を添はせる事が出來ぬ。其の替りおつうの手切金として百兩、此方に進ぜやう。

柿右　イヤ、金で賣る娘では御座りませぬわえ。（ト財布より金を摑み出して）此の間平三郎殿から借りて來た金の殘り。持つて居るさへ心の汚れぢや。（ト平舞臺に叩きつける。）

五兵　さう言ふこなたの心では、わしも話の仕樣が無い。ドレ歸りませう。

ト立ちかけるを柿右衞門止めて、

柿右　待つて下さりませ。何處の親も子故の闇に迷ふ習ひ。意地も張りも棄てました。平三郎殿に氣に入らぬ娘なら一生涯妻に持つて下されとは言ひませぬ。一年か半年でもかまひませぬ故、おつうを嫁にすると、どうぞ仰言つて下さりませ。其の一言が娘の命で御座ります。其の代りにわしの一生は、此方に差上げます。額の汗も手の力も五本の指が骨になるまで、此方のために働きませう。慈悲ぢや。情ぢや。五兵衞殿。どうぞ叶へて下さりませ。

ト疊に頭をすりつけて頼む。

五兵　假令何と言はつしやつても、それ斗りはお斷りぢや。

柿右　サ、此方の氣には入るまいが、親子二人を助けると思ひ、添はせてやつて下さりませ。

五兵　無駄な話ぢや。止しにさつしやい。

柿右　スリヤ、是程にお願ひ申しても。

五兵　氣の毒ぢやが、お斷りぢや。

柿右　ムヽ。

ト此の時向うより栗作出で來り直に內へ入り、

栗作　おつうさんの姿がさつぱり見えませぬ。

柿右　そんなら、もう行方が知れぬか。

五兵　わしも早速心あたりを捜して見よう。（ト平舞臺へ下り、）併、柿右衛門さん、もし二人を夫婦にしないで、おつうを助ける道があらば、何時でも話に來さつしやれ。どんなにも骨を折りませう。わしも他人の事とは思はれぬ。

ト五兵衛向うへ入る。

栗作　今の口振りで大方分つた。有田屋の身代何十萬兩拵へてやつた上、大事のおつうさんを疵物にされ、此方は何と思はつしやるのだ。

柿右　恩も義理も知らぬ五兵衛。今日限り手を切つて、柿右衛門が腕一本であの身代を潰してくれるわ。

ト平舞臺へ下り、きつと向うへ思入。此の時おたれ向うより酒を買つて出で來り、此の體を見て、

たね　父さん、どうしたので御座んす。

柿右　おつうは家出をした。

たね　エツ。

ト徳利を落す。柿右衛門は書置を投げ遣り、振り向きもせず細工場へ入る。栗作とおたれは書置を讀む。舞臺は段々暗く成り、柿の葉しきりに落ちる。此の仕組よろしく。

幕

大詰　有田皿山丸窯の場

役名　　酒井田柿右衞門、同娘おたね、弟子栗作、有田屋五兵衞、番頭與九郎、手代傳六、窯主利右衞門、同善五郎、同文藏。

有田皿山丸窯の場　本舞臺上手寄にだら〳〵山、平舞臺より山の上へかけて斜めに丸窯を拵へ、屋根の板をはづし、柱のみ殘つて居る松薪少々窯の中に燃えて居る、平舞臺下手に藁葺の屋根を見せ、向う一面皿山、所々に陶器窯灯入の書割、後に上手の空へ火の手あがる誂へあり、都て有田皿山丸窯の體。玆に柿右衞門、前幕よりはずつと老けたる拵へ、頭髮も大方は白くなり、着附も汚れ餘程疲勞したる體にて窯の焚口に寄り、もれ出る眞赤な火を半身に受け火の色を見詰めて居る。舞臺を闇黑になし、時の鐘に、一としきりサッと本雨の音を聞かせ段々かすめて幕開く。

ト雨音全く止み、木枯の音凄じく聞える。

柿右　よい鹽梅に時雨は止んだが、いかう冷えるので火氣がのろい。此の工合ではまだ一タ時程焚かねば成らぬ。（ト下手に向ひ、）おたね〳〵。

ト呼びながら薪を窯の口に燻べる。火氣又強く成る。此の中正面の上手ポッと明るくなり舞臺も段段明るくなる。此の時おたね下手より出で來り上手の正面を指して、

たね　父さん、あの明るいのは何で御座んせうな。

柿右　月が出るのであらう。

たね　何言はしやんす。今夜は闇ぢやわいな。

柿右　そんなら火事であらう。あそこで無駄に焚く火を此處へ貰ひたいものぢや。

たね　ほんにさうで御座んす。さうして今呼ばしやつたのは、何の用ぢやえ。

柿右　急いで源助の内へゆき、松薪を百束直に寄越してくれるやう頼んで來てたも。窯があがらば、薪代を倍にして拂ひますと、譯を話して頼んだら貸してくれぬ事はあるまい。

たね　そりや、父さん、無駄だから止した方がよう御座んす。晝間もさう言つて頼んだけれど、現金なら賣るが、貸す事は成らぬと愛嬌の無い返事。幾度言つても同じ事で御座んせう。

柿右　そんなら、藤助の所へ行き、幾ら高くてもかまはぬと言つて頼んで見や。

たね　幾ら頼んで見てもお金の無いのを知つて居る故、聞入れてはくれませぬ。

柿右　假令何と言捺へてなと、薪を買はねば、大事の窯があがらぬわい。

たね　そんな苦しい思ひを仕やうよりは、いつそもう打やつてしまはしやんせ。

柿右　何を言ふぞい。片時忘れぬおつうの敵、取つてやらねば成らぬ。

たね　ほんに今日は姉さんが家出をしてから百日目、何處に居やしやんす事ぢややら。

柿右　ハテ、何處に居るものか。死んだ者と思つて居よ。

ト兩人思入あつて、

たね　先ッきにから栗作が見えぬが、何處へ行き居つたぞ。

柿右　栗作は內で寢てぢやわいなア。

たね　何ぢや。寢て居る。

柿右　三日三晩ちつとも寢ずに、父さんの手傳ひをしたので、綿の樣に疲れて休んでぢや。

たね　今日は幾日ぢや。

柿右　十二月の二十日ぢやわいな。窯へ火を入れる五日前から、父さんは一度も眠らず、血氣盛りの栗作でさへ、倒れて仕舞うた位故、ヒヨツとお前が倒れでもしたら、わたしや何としませうぞ。

たね　さう心配せずともよい。此の窯があがらぬ中は、わしは死なぬ。そんな事を言つて居る中に、薪はずん〱燃えてしまふ。一ッ走り行つて來てくりやれ。

柿右　叶はぬまでも、賴んで見ませう。

たね　早うせぬと、間に合はぬぞよ。

ト是にておたね急ぎ下手へ入る。柿右衞門薪をくべる。火氣又立つ。正面の火の手明るくなるに從

ひ舞臺もまた段々明るくなる。よき程に向うより番頭與九郎、羽織、着附、尻端折、ぱつち、雪駄にて出で來り、直に舞臺に來りて、

與九　柿右衛門さん、窯はまだあがりませぬか。

トいひながら四邊を見まはして思入。

柿右　薪さへあれば、一時ばかりであがる所を見て下され。此の通りの始末ぢや。

ト僅かの薪を指して言ふ。

與九　さて〳〵、氣の毒な事ぢや。なんとわしが薪代を貸しませう。

柿右　イヤ〳〵、有田屋さんから鐚一文でも借りませぬ。

與九　イヤ〳〵、有田屋では御座らぬ。此の與九郎が金ぢや。併し商人がたゞで貸すと言ふ譯には行かぬ。こなたが燒いて居る赤繪をわしの手一つで賣らせてくれるなら、十兩でも二十兩でも、右から左へ貸して進ぜる。大方さうと思つたから、證文を書いて來た。（ト懷中より書附を出し、）是へ金高と此方の名を書き、判を捺せばよいのぢや。ソレ見さつしやれ。薪はもう是だけしか無い。此の證文へ判を捺し、此の窯の品物を活かす心は御座らぬか。

ト證文と金子を突き附ける。柿右衛門手を出しかけて思ひ直し、

柿右　折角ぢやが、止しにしませう。

與九　此方も餘程分らぬ人ぢや。（ト向うを見て、）彼所へ來るは、どうやら内の旦那らしい。柿右衛門さん、今わしが言つた事は、旦那へ言はずに置いて下さい。

柿右　五兵衛さんに物言ふ用は御座らん。

ト窯の火を見て居る。與九郎安心せし思入にて證文と金とを納める。此の時有田屋五兵衛、羽織、着流し、頭巾を頸巻にして出で來り、與九郎を見て、意外の思入。

五兵　番頭どんは何しに此處へ來やしやつた。

與九　へイそれは、柿右衛門の窯の樣子、どんな事かと心配して、一寸見に參りました。

五兵　此の寒いのに夜道をわざ〳〵御苦勞であつた。（ト上手の捨石に腰をかけて、）時に柿右衛門さん、聞けば此方も大層詰まつて居るさうぢやが、長年の間店の仕事をしてくれて爲にもなつた此方故、餘處に見て居る譯にはゆかず、わざ〳〵出かけて來ました。もう大概に我を折つて、元々通りに成らつしやらぬか。

柿右　此方に會ふのはまだ早い。會つてよい時には、わしの方からあがります。

五兵　其の瘠我慢は止しにさつしやれ。現在薪を買ふ金に差支へ、此方の娘が藤助の内で賴んで居る

を見かけて來た。そんな苦しい思ひをせずとも、わしに賴むと一言言へば、松薪の千貫や二千貫は、立ちどころに積んで進ぜる。アレ見さつしやれ。方々に火を焚いて居る有田中の窯も今では五兵衞の品物ぢや。其の中に、此方一人四方に敵を受け、何でやつてゆかれるものか。身の爲め思はゞ、早く甲を脱がつしやれ。其の代り此方が造つた燒物は、皆わしのものとして一年百兩の給金で生涯此方を抱へませう。ナント番頭どん、わしの扱ひは惡うは御座るまいがの。

與九　お手厚いお扱ひ、流石大店の旦那で御座ります。是では柿右衞門さんも折れぬ譯にはゆきますまい。

五兵　柿右衞門さん、それで承知をさつしやるか。

ト言へども、柿右衞門は返事もせずに脇を向く。與九郎思入あつて、

與九　もし旦那、鳥渡お顏を拜借。

ト五兵衞を連れて花道よき處まで行き、

お止しなされませ。餘程變で御座ります。來年の春になり陽氣がほかついて參りましたら、立派な氣違ひになりまする。

五兵　併し、心配なは彼奴の赤繪だ。

與九　それは大丈夫。何時まで立つても出來る氣遣ひ無し。矢張り夢右衞門の夢で御座ります。

五兵　それならよいが、もしその夢が實となつたら、何萬兩と言ふ損ぢや。

與九　なんの御運のよい旦那樣。その御心配には及びませぬ。

五兵　わしもさうとは思ふがの。（ト正面の火の手を見て、）あの火の手は火事らしいが、伊萬里ぢやあるまいか。

與九　もちつと近くで御座りませう。

五兵　何しても氣になつてならぬ。そなたは大急ぎで歸つて下され。

與九　さうして、旦那樣は。

五兵　わしはまだ柿右衞門に話がある故、かまはず先へ行つて下され。

與九　何なら、お待ち申して居りませうか。

五兵　それには及ばぬ故、少しも早く行かつしやい。

ト是にて與九郎跡に心の置ける思入にて向うへ入る。五兵衞、柿右衞門の上手に腰をかけ、

今、わしが話す事聞いてびつくりさつしやるな。おつうは先月二十日の夜文字ヶ關の沖合で舟から身を投げ死んだぞや。

柿右　そんなら娘は死にましたか。（トジツと思入。）

五兵　それも今日まで何處の誰やら知れなかつたが、其の舟の船頭が鏡袋を持つて來て、こんなものがありましたと言ふを見れば、おつうの品、何より確かな身投の證據。あの鏡袋はわしの方へ貰つて置き、寺へ納めて供養をしてやりますぞ。

柿右　さうして平三郎殿は、どうさつしやりました。

五兵　悴は近い内によんど處ない都合で、ある武士の娘と祝言をするつもりぢや。

柿右　スリヤ祝言を。ム、。

ト口惜しき思入。五兵衞は柿右衞門の樣子をジツと見て、

五兵　おつうが死んだと聞いた時には、わしでさへ涙が出たに、なんで此方は泣いてやらぬ。

柿右　わしは涙が御座らぬ。心も眼も乾き切つて居る。今はせねばならぬ仕事が御座る。その仕事を仕遂げた時、娘の爲めに泣いてもやり、又此方に會ひに行く、其の時ぢや。それまでは、五兵衞さんに物言ふ用は御座りませぬ。

ト窯の口に向ひ火を眺めて居る。

五兵　娘の死んだを嘆きもせず、一心不亂に凝り固つた此の樣子では、もしやすると。

ト不安の思入。此の時下手よりおたれ出で來りて、

たね　お店の旦那樣。お出でなされませ。

ト挨拶する。柿右衞門振向きて、

柿右　オヽ、おたね。どうであつた。

たね　何處へ行つて頼んで見ても、一把の薪も貸してはくれませぬ。

柿右　矢張いけなかつたか。

ト落膽の思入。又五兵衞は下手へ來て、

五兵　一寸來さつしやれ。（トおたれを下手へ連れ行きて、）柿右衞門とは長年の馴染故、何事も勘辨して元の通り仕事をさせ、百兩の給金やらうと、今親爺に話した所ぢや。

たね　旦那樣。そりや無駄で御座ります。父さんが承知をする氣遣ひは御座りません。

五兵　でもわしが言ふ事を聞かぬ時は、そなたも共に餓死せねばならぬぞよ。幾ら强情な親爺でも、其方がなんとか話したら、心も和らぎ其の氣にならう。後に又わしが來る故、それ迄によく話して置かつしやれ。其方は中々怜悧な者ぢや。

ト五兵衞あとに思入あつて向うへ入る。おたれ思案して柿右衞門の傍へ寄り、

たね　モシ父さん、其の窯があがらなかつたら、是から先はどうさつしやるえ。

柿右　又遣り直すのぢや。幾度でも出來るまでやり直すのぢや。

たね　三度窯を燒損へば、どんな身代でも潰れると言ふぢや御座んせぬか。いくら遣り直すと言はしやんしても、家は人手に渡して仕舞ひ、有つたものは賣つて仕舞ひ、明日の命も覺束ないぞえ、

柿右　それほどにつまつて居るのか。

たね　あいなア、せめて燒き損うた物なりと、お金にさせて下さんすりや。又どうにか成るけれど、夫れは成らぬとお前の言葉故、此の上仕様は御座んせぬ。大事の大事の此の窯さへ屋根の板は焚いて仕舞ひ、見に來る人の物笑ひ、所詮叶はぬ望なら、今の中に心を替へ、五兵衞さんの言ふ事を聞き、氣樂に暮して下さんせ。

ト是を聞き、柿右衞門口惜しく又腹立たしき思入にて、

柿右　五兵衞さんの言ふ事聞けとは、敵に魂を賣れと言ふのか。怨も望も棄てゝ仕舞へと言ふ事か。人の娘をなぐさんで殺して仕舞うた悴の親。助ける術もありながら、見殺しにしたあの鬼から給金貰うて氣樂にせよとは、わりやどの口でぬかし居つた。まだわれは知るまいが、おつうは海へ身を投げて魚の餌食に成つたぞえ。

たね　そんなら、姉さんは死なしやつたかいなア。（ト泣き伏す。）

柿右　オヽ、おつうは死んだが、平三郎は生きて居る。五兵衛も生きて居る。此の柿右衛門も生きて居る間、有田屋の暖簾あのまゝにして置かぬ。いかに心が無ければとて、そなたもわしが娘ぢやないか。敵に從へとは、何と言ふ料簡ぢや。一つ種の姉妹でも、かうも心が違ふものか。

ト言はれて、おたれ柿右衛門にすがり付き、

たね　父さん、許して下さんせ。お前に樂がさせたさに、惡い事を言ひました。皆私が至らぬ故、是から心を入れかへて、死んだ姉さんの樣に父さんに優しうします。勘辨して下さんせ。

柿右　よう言ふた。それでこそ、わしが娘ぢや。こちへ寄れ。

ト窯の火の影にておたれの顏を見て、

一對揃うた姫皿も、一つは先へ缺けて仕舞ひ。掛替の無い親の祕藏、大切にしてくれよ。

ト親子の愛情こまやかなる體よろしくあつて、窯口を見やり、

斯うしては居られぬ。わしが薪屋へ出かけて行つて、何とか言うて賴んで見やう。其方は栗作を此處へ呼び、火を消さぬやう二人で番をして居やれ。

ト立ちあがり、

此の窯の火が燃えて居る間は、わしが望みも燃えて居るのぢや。必らず火を消してはならぬぞよ。

ト言ひ置いて下手へ入る、おたねは下手の奥に向ひ、

たね　栗作、早う起きておいで。

ト呼ぶ。此の時下手にて、

栗作　オーイ。

ト返事する。窯の前に腰をかけて、

たね　姉さんに貰うた振袖が、今は形見と成つたかいなア。

ト泣いて居る。栗作眼をこすりながら出て來り、

栗作　おたねさん。お前はなんで泣いて居るのぢやえ。

たね　姉さんが亡くなつたぞえ。

栗作　エヽ、おつうさんが死んだ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

栗作　父つさんが歸るまで此處に番をしておいで

ト立ちかけるを栗作止めて、

栗作　わし一人ぢや、薄氣味がわるい。お前も此處に居て下さい。ハテマア、此處に居て下さいと言ふに。

ト兩人窯口に差向ひて腰をかけ、

おたねさんはわしをけじ〳〵か毛蟲の樣に嫌はつしやるが、わしはお前を親より大事に思うて居るぞえ。ソリヤ、猫でさへ毛嫌ひするのだから、人に好き嫌ひのあるのはあたり前だが、其の代りには、又人は思ひなしで、どうでも成るものぢや。こんな男のわしでも、何處に好い處があるかも知れぬ。そこを見つけて好きになつて下さらぬか。是程思ふわしが心を少しは察して、優しい言葉をかけて下さらぬか。

ト此の間おたねは火かきで窯の火をかき起しながら聞いて居て、

たね　わたしや又思へば思ふ程お前が厭になるのぢやもの。

栗作　わしはよく〳〵因果な生れだ。（ト腕組をして考へ込む。）

たね　栗作さん、薪を取つておくれ。

栗作　よし〳〵。

ト氣輕に立つて、ありつたけの薪を窯の口にくべて、

おたねさん、もう薪は是れだけしか無いぞや。

ト是を聞いて、おたれ思入あつて、

たね　わたしやお前が好きに成つたと言うでは無いが、もう毛嫌ひをしては居られぬわいなア。

栗作　何と言はつしやる。

たね　惚れた同士が夫婦になると限つた譯でもない事故、ツイ一通りの夫婦になるには、お前とわたしでなられぬ譯も御座んすまい。

栗作　エッおたねさん、ソリヤ本氣かえ。

たね　お前に根負けがしたわいな。

栗作　わしと夫婦に成つて下さるかえ。（ト喜んで傍へ寄る。）

たね　成る事は成るけれど、わたしの賴む事も聞きて下さんすか。

栗作　聞く段かいな〳〵。お前の賴みとは分つて居る。よい着物を拵へて、我儘をさせてくれであらう。そんな事は何でも無い。朝はわしが先へ起きて、寢所の中で御飯を喰はせますぞや。

たね　イエ〳〵。わたしの事ぢやない。父さんが一心碎いて居る赤繪、お前は出來ると思ふかえ。

栗作　わしはどうだかと氣遣ひでなりませぬ。

たね　わたしもさうは思うては居るが、父さんが止める心が少しも無い故、お前と二人で父さんを助けてあげねばならぬぞえ。
栗作　ソリヤ、言はずとも知れた事ぢや。お前の父さんはわしにも父さんぢや。
たね　よう言うて下さんした。それが本統なら、お前と夫婦に成りませう。
栗作　忝い〳〵。併し、あれ程嫌つて居たお前がかう急に變つて來たは、おつうさんの引き合せかも知れぬ。
たね　併し、今直ぐではないぞえ。
栗作　急ぎはしません、そんなにゐろう急ぎはしません。
たね　其の替りあれを貸しておくれ。
栗作　あれとは。
たね　お前が内證で溜めてあるお金を父さんに貸してあげておくれ。
ト是を聞き栗作當惑の思入にて、
栗作　持つて居さへすりやア安い事ぢやが、わしの金はもう一文も無い。
たね　あのお金を何時何に使うて仕舞うたのぢやえ。

栗作　言うては成らぬと親方に口止はされたが、言はねばお前の得心がいくまい故、打ち明けて言ひますが、わしが溜めた金は殘らず親方の手へ渡し赤繪の元手に成つて仕舞ました。

たね　そんなら出來ぬと知りながら、溜めたお金を父さんへ貸してあげて下さんしたか。（ト思入あつて、）栗作さん、今こそ本統にお前の女房ぢや。

栗作　おたねさん、何にも言ひませぬ。

ト兩人手を取り合ひて思入。此の話の中に窯の火消えて仕舞ふ。二人心づかずに居る。此の時下手より柿右衞門腕を組みながら出て來る。兩人分れて、

たね　父さん、どうで御座んしたえ。

柿右　何處へ行つてもことわられた。町の人はわしが事を氣違ひぢやと言うて笑ひをつた。わしが此の南河原へ始めて窯を築いた頃は、此の有田はさびれ果て、見る影もなかつたを、南京燒の祕傳を教へ再興した有田の繁昌。此の土地に取つてはわしは恩人ぢや。その柿右衞門を氣違ひ呼はり。あゝ義理も恩も無い世の中ぢや。

ト窯の火の消えたを見て、

二人は何をして居つた。此の窯の火が消えたら、柿右衞門が望も消え、命も消えるを知りなら

ぬか。

ト是にて兩人もびつくりして薪を取りにゆき、

栗作　もう薪が無かつた。

柿右　そこらの古木を持つて來い。

栗作　合點ぢや。

ト柱を引きぬいて、窯にくべる。けれど濕つて居て燃えあがらず。

たね　さつきの雨でちつとも火氣がたゝぬわいな。

柿右　今一時か二時となり、僅かな薪のないために、我が望も叶はぬか。可愛い娘は海へ身を投げ、千辛萬苦の窯の火は落ち、神も佛も天道樣も御座らつしやらぬか。

トどうと成る。おたれ傍により、

たね　父さん、しつかりして下さんせ。

ト介抱して居る。此の時向うより以前の五兵衛、窯主利右衛門、善五郎、文藏を連れて、足早に出で來り、

五兵　柿右衛門、さつきの返事はどうぢや。それ次第で薪を運ばせやうと思ひ此の衆をつれて來た。

利右　コリヤ、窯の火が。

利右
善五　落ちたぞよ。

ト是にて柿右衞門きつと成り、

柿右　假令窯の火は消えても、此の胸の火が消えぬ中は、五兵衞さんから一把の薪も貰ひませぬ。

五兵　まだ痩我慢を言つて居るのか。

善五　愈々こなたは。

善五
文藏　氣違ひぢや。（ト嘲り笑ふ。）

たね　モシ父さん、お前が一心籠めた窯。ヒヨツと一つでも出來て居たなら、物怪の幸ひ。

栗作　さうぢや〳〵。念晴しに口を開けて見ませう。

ト栗作、おたれにて目塗を剝がし、窯の口をあけ、出來損ひの燒物を取り出して見て、がつかりして居る。此の前から正面の火の手愈々盛んに成り、今は天を焦す程に成る。向うより序幕の手代傳六、向う鉢卷にて片肌ぬぎ、提灯を持つて息を切つて走り來りて、

傳六　旦那樣、大火事で御座ります。

五兵　伊萬里が火事か、さうして内は。

傳六　お店は大丈夫で御座りますが、中里樣が丸燒で、私が御見舞ひに參りましたら、系圖を燒いて仕舞つたと仰言つてゞ御座りました。

五兵　系圖を燒いた。アノ系圖を。

ト是を聞き、五兵衞びつくりして、

傳六　まだも一つえらい事が御座ります。若旦那が燃えさかる火の中へ飛び込んで。

ト がつかりした思入。

五兵　燒け死んだか。

傳六　ハイ。

五兵　アノ火の中へ。

ト正面の火の手を見て、ぼんやりと成る。

たね　父さん、平三郎さんも死なしやつたといなア。

柿右　オヽ、おつうは海へ、平三郎殿は火の中。ムヽ。

ト思入あつて立ちあがる。此の時栗作窯の中より金銀五色にて畫きたる皿を見附けて持ち來りて、

栗作　親方コレ見さつしやれ。

ト柿右衞門に渡せば受け取り見て、

柿右　オヽ、是ぢや。

五兵　エツ。

柿右　十年此の方、夢に見た赤繪が出來た。

ト嬉し泣きに泣く。五兵衞ツカ〳〵と寄るを睨みつけて、

五兵衞さん、此の皿は娘の命。わしが涙。千萬無量の思ひを籠めて燒き上げた日本の寶、末代の光り、赤繪の祕傳と諸共に、こなたの命はわしが握つた。

五兵　柿右衞門さん、重々わしが惡るかつた。

ト平舞臺に坐る。柿右衞門は眼の前におつうを見る如き思入にて、

柿右　おつう。われが敵は取つてやつたぞ。

ト皿をおたれに渡し兩手を面にあてゝ泣く。おたれ、栗作は其の左右に縋る。五兵衞は悔悟の思入にて突伏して仕舞ふ。火の手はます〳〵强く舞臺一面眞赤に見へる。上手の奥にて遠く早鐘を聞かせて。

幕

榎本虎彦略傳

父榎本虎彦は慶應二年正月十日和歌山市の一隅に生れた。祖父に依り家財を蕩盡された父の家は、父が生れた時は赤貧洗ふが如き境遇にあつたので、十分なる教育を受ける事は出來なかつた。父は自力に依り鄕里の師範學校を出ると、直ぐ直川村在のとある小學校の教員となつて、生活費を求めねばならなかつた。父としては都會に出て自己の目的たる文學に依つて、身を立てたいと云ふ心願は、その頃よりあつたが生活狀態は到底許さうとしなかつたので、止むを得ず鄕里の學校にその身を置いて、機會を待つより外は無かつたのである。然し容易にその機は惠まれて來なかつた。却て益々上京の目的から遠ざかつて行つた。それは父が更に山奧の分教場の主任兼教員として行つた事である。其邊は可成村里より離れて居る處であつた。二三十人の生徒の教員であつた父は、その山奧に半年間の寂しい生活を續けたが、どうしても父の心より文學者たらんとする志は消えなかつた。「どうしても東京

へ行きたい」と云ふ思ひで絶えず彼の頭を惱まして居た。然し遂に大なる決心をして鄕里を出る事にした。敎員としての生活から、全然離れて鄕里から出ると云ふ事は、父の境遇としては非常な無理があつたらしい。生活保證の無かつた父としては、老いたる父親を唯一人鄕里に殘して東京へ行く事は、隨分無謀の行爲であつたらしいが、そのために心願である文學志望を棄て去るには忍び無かつた。遂に祖父の了解を得、凡てを將來に任して鄕里から離れて仕舞つた。それは父が二十一歲の時であつた。

未來を夢見つゝ遠い浪路を越して、横濱の埠頭に着いた父は旣に望の達した如く如何に雀躍して喜んだ事であらう。始めて接した此の新文化の都會の人となる事は非常な喜悅であつたらしい。若い父の血は燃えた。假令如何なる艱難辛苦をしようとも必らず自分は文壇の覇將とならねばならないと思つた。それと同時に故鄕に淋しく成功を願つて居る親の事を考へると父はどうしても目的を貫徹して喜びを與へねばならないと思つた。間も無く、父は有名な文學者の門弟たらんと、同鄕の先輩である日報社長關直彥氏を訪れた。再三氏の家を訪れて遂に會ふ事が出來た父は、氏の紹介に依り當時一方の權威者であつた福地櫻癡氏の池の端の邸宅を訪れたが、容易に田舍出の一書生に面會さへしなかつた。幾度か足を運んだ事であつたらう。然し父は己が目的を棄て去らうとはしなかつた。或る時は門

の傍に一夜を過して氏と面會する機會を待たうとした事もあつたと、父自身が云つた事があつた。當時文學者として、一面政治家として豪奢を極めて居た櫻癡氏は絕えず遊里の人となつて、耽溺にその日〱を送つて居たので、容易の事では面會出來なかつた。若し氏の夫人の同情を得て、氏との面會を取り計らつて貰はねば、恐らくその機會は無かつたであらう。兎に角、氏と面會する事の出來た父は、熱心に歎願した甲斐あつて氏の門弟となる事を許された。そして氏の勤めて居る日報社へ、記者見習として入社する事になつた。斯くして東京に於ける生活の第一步は始まつた。

そして苦しいながら多少共生活の保證が定まつてから、父は新聞社の激務の餘暇に、當時芝增上寺附近にあつたとか云ふイーストレーキ氏の許に通ひ、英語學を修める事に執心した。その間作品を作つて只管文壇への第一步を築かうとして居た。

明治二十三年、櫻癡氏が新たに劇場改革の名の下に木挽町に建てられた歌舞伎座に立作者として、經營者として入る事になつたので、門弟である父も氏の部下として行く事になつた。當時劇界に竹柴派が勢力を振つて居た如く、矢張歌舞伎座の作者部屋も殆ど彼等の勢力範圍であつたので、門外漢の父はどの樣に嘲笑輕蔑された事であらう。然し一旦決した文學者志望の目的に到達するまでは、どの樣に輕蔑されやうとも忍ばねばならないと思つた。因習惡風のある劇場生活は、稍ともすると父の心

に失望を與へた。幾度か飛び出さうとしたらしい。因習に凡てを束縛する劇場の空氣は父に堪へられなかつた。然し親の事を思ふと何事も辛棒して時機を待つより外は無かつた。斯くて、一年二年と劇場の人となつて生活する内に表面環境と妥協する様になつた。然し彼等と同じ生活境遇に甘じては居なかつた。唯それは方便にすぎなかつた。その間漸次竹柴派は益々その勢力を擴げて行つた。そして遂に櫻癡派と竹柴派との間に面白くない事が起つたらしい。父は斷然劇場生活を離れて仕舞つた。

そして櫻癡氏が主筆となつたやまと新聞社（當時日の出新聞？）の記者として入社した。薄給の記者生活に入つた父は、可成りに忙しいその生活の餘暇に多くの小說を書いて、櫻癡氏の名で出版して勉學の費用と生活費にあてゝ居た。「みだれ燒」「薄命の花」等の小說はその當時の作品であつた。

然し間も無く父は再び劇場の人となる事になつた。折柄人氣役者として神田三崎座に評判をとつて居た女役者市川九女八の附作者となつたのである。短い年月であつたが彼女のために可成りの脚本を書いて提供して居た。「安宅の關」（勿論今日市川中車の演るのとは多少違ふさうだ。）は彼女のために書いたものであつた。そして一方に生活のためか土佐の土陽新聞に長篇小說を發表して文筆を練つて居た。

その後多分明治三十一年再度歌舞伎座へ歸つた。その時は櫻癡氏一派のみの作者に依つて占められ

て居たので、比較的心持よく働く事が出來たらしい。それ以來父は極度の生活上の辛苦はあつたが、一意專心劇場のために力を盡して働いた。然し新作の上演は主に立作者であつた櫻癡氏の作品のみであつたので、明治三十七年「安宅の關」を改作して上演するまでは、たゞ氏の代作か手助けをするにすぎなかつた。然し、三十七年以後櫻癡氏の死ぬまでの間、四五種の作品を書いて上演して居るが格別評判されるものは無かつた。たゞ中村芝翫のやつた「南都炎上」は史劇として纏まつたものとしてやゝ評判された。

明治四十年一月櫻癡氏が死んだので、歌舞伎座に立作者が無くなつたので、その門弟として長い間座のために努力して來た父は、當然その地位に坐る事になつた。此處に於て父は假令文壇の覇將とならうとした過去の夢は實現されなかつたが、當時第一位の劇場の立作者としての地位を得る事が出來た。そしてある程度までは自由に自分の作品を發表する事が出來る樣になつた。

父が立作者となつたその與行にやつた仕事は、以前小說として發表した「みだれ燒」の脚色であつた。梅幸、芝翫、羽左衛門等に依つて演じられた此の脚本は、非常な好評を博し當時としては珍らしい程の大入をとつた。斯くして父の立作者としての門出は華々しいものであつた。

其の後書いた作品の內で「女歌舞伎」「經ケ島娘生贄」「豐臣天秀尼」「都歌舞伎」等は優れたもの

である。中にも大正元年秋仁左衞門のために書いた「名工柿右衞門」の如きは、別して非常な好評を博したもので、父の代表作として永久に殘るものとされて居る。

父が立作者として作品を發表してより、胃癌のために立つあたはず、遂に大正五年十一月十六日此の世を去るに至つた時までの、十年間に書いた作品は大小五十六種の少數であつた。が絶えず劇場のため劇壇のために心を遣ひ、遂に思ひを殘して死んで行つた程、父の全生活は劇場の爲に捧げられてゐたのである。（榎本茂）

巻末に

「女歌舞伎」は、明治四十一年十月歌舞伎座で、一番目に上演されたものである。桐大内藏は中村歌右衛門（當時芝翫）、烏丸通廣は松本幸四郎（當時市川高麗藏）が扮してゐる。この時には、別に一幕本多中務物見の場といふのが最初にあつて、千姫と通廣との關係がもう少し詳しく說明されてゐたやうである。その本は一昨年の大震災に燒失して了つた。そこで止むを得ず、東京での二度目の上演、大正五年二月新富座の時のやうに、三幕物としてこの卷に收めて置いた。書卸の二幕目が、これでは序幕になつてゐる譯である。併しそれ以外に、書卸のものと殆ど同じである。唯强ひて異つてゐるところを云へば、この本の序幕の初めの方が、書卸の二幕目と多少違つてゐる。それは新富座の時、俳優の都合か何かで序幕を取つて了つた爲に、二幕目の方へ書き加へて、それを序幕にしたからである。それも上演の際にはそのまゝには行はれなかつたのである。それから、これも大詰の初めの方

で、人物の出入が舞臺では、もつと簡單になつてゐたやうである。

「殿樣勘次」は、尾上菊五郎、中村吉右衞門に依つて、明治四十三年七月市村座に上演された。主人公勘次は云ふまでもなく菊五郎である。舞臺に演じられた時は、四幕目に肥前血の瀧の場といふのがあつた。天草討伐軍に加はつた勘次が、大立廻りをやるところである。これは舞臺にかける間際になつて、丁度盆興行ではあり、藪入を喜ばせるやうな場面が必要であつたのだらう。急に書き足したものなのだが、これ亦、震災で燒いて了つたのである。

「來山」は、大正三年六月中幕として歌舞伎座に上演された。小西來山には片岡仁左衞門が扮してゐる。中村又五郎の淸兵衞、市川松蔦の小ふぢ、中村歌右衞門の土岐伊豫守、市川左團次の有村一學、市川段四郎の番頭といふ顏觸だつた。

「鼓の里」は、大正二年六月歌舞伎座の二度目に上演された。片岡仁左衞門が綾小路三位雅信、尾上榮三郎の金春六之丞、市川段四郎の勘兵衞、尾上菊五郎の捨藏、守田勘彌の三之助、尾上菊次郎の當

時実雀）の倉子だつた。

「裏表心曲尺」は、大正二年十月歌舞伎座二番目狂言として、中村歌右衛門のおつや、市村羽左衛門の清次、片岡仁左衛門の藤兵衛、市川中車（當時八百藏）の伊織、市川段四郎の宮内といふ手揃ひの大一座で、上演されたものである。

「名工柿右衛門」は、大正元年十一月歌舞伎座に上演されたものである。片岡仁左衛門の柿右衛門がその持味で爲活した狂言である。作者のものでは、一番度々脚光を浴びるものである。それがいつも仁左衛門の柿右衛門である。それ程仁左衛門はこの作の中に自分を打込んでゐる。ことはつて置きたいのは、大正六年一月の明治座で、二度目にこれを上演した時に、序幕を書き換へてゐる。それはその後行はれてゐる伊萬里海岸の場で、氏の弟子である堀美雄君の手になつたものと記憶してゐる。これには、令息茂君の考へで書卸のまゝを載せてある。

榎本虎彦氏は私の師匠であつた。氏の弟子として、私は歌舞伎座の作者部屋に暫くゐた事がある。

俳し、餘り好い料簡の弟子でなかつた事は、その後私が歌舞伎座を飛び出してから、づる〳〵べつたりに縁が切れて了つたのでも分る。無論私の方が横着だつたのである。そんな譯で、氏とは深入した交渉を持たずに了つたのであるが、氏の令息茂君や、歌舞伎座時代の兄弟子である堀美雄君とは、それからずつと親しい交際を續けてゐる。

さうして、先生の作を纏めて、一冊の本にする事になつたのも、茂君に私が相談して、堀君の贊成を得てやつた事である。本當を云へば、この編纂の事も、堀君にやつて貰ふのが一番いゝと思つたのであるが、同君はその後文筆の方面を見限つてゐるやうだし、一つはこのセリースの話があつて、その中へ入れるといふ事になつたので、私が編纂校訂の事に從つたのである。

この卷を讀んで見れば分るやうに、どの作も大抵それ〳〵粉本がある。さうして多くは多忙の間に座附俳優の爲に書いたものばかりである。從つて作品の價値などよりは、生きた演劇史として見る時に、非常に興味がある。作者も決して藝術的價値を求めてはゐなかつたと思ふ。

堀君といへば、美雄君は、先生に取つて實に得難い助手であつた。明治四十四年あたりからの、先生の作に、どこか若々しい熱情の影の動いてゐるのは、同君の力であるといつても、過言でないと思つてゐる。殊に、先生が不起の病に倒れてからは、この師匠と弟子とは、他人同志が達し得る、最高

とまでは行かないまでも、恐らく最上の友達の世界に、相抱いてゐたのである。堀君を通じて聞いた、最期の半月位前の先生は、不思議な程に輝かされ昂揚された精神の主人であつた。若し、先生があの永久の床から、二度と起き上る事が出來たらば、先生の仕事に必ず本質的なものが、加はつたに相違ないと信ずる。併し、運命はいたづら者とでもいふのだらう。遂に先生は死んで了つた。さうして、その後堀君も歌舞伎座の作者部屋を去つて了つたのである。それを、私は、先生の爲に、本當に惜しむ者である。

今度も、この本の校正を、一度でもいゝから、同君に目を通して貰ふと思つてゐたのだが、特に出版を急ぐ事になつたので、それをやつて貰へなかつたのは殘念であつた。(澁村米藏)

榎本虎彦著作目錄

一　櫻の御所　(三浦荒次郎小櫻姫、明治三十七年四月歌舞伎座初演)　四幕七場
二　安宅の關　(辨慶勸進帳、明治三十七年十一月歌舞伎座初演)　一幕二場
三　小袖幕元祿模樣　(淨瑠璃、明治三十八年四月歌舞伎座初演)　一幕一場

四　堀川夜討（土佐坊昌俊起請文の事、明治三十八年五月歌舞伎座初演）　三幕六場
五　富士太鼓（富士の妻住の江、明治三十八年十一月歌舞伎座初演）　一幕二場
六　南都炎上（平重衡の最後、明治三十九年五月歌舞伎座初演）　四幕五場
七　アラビヤ夜話（喜劇、明治三十九年十一月歌舞伎座初演）　一幕三場
八　大成功（喜劇、明治四十年三月歌舞伎座初演）　三幕七場
九　葵の上（源氏物語、明治四十年十月歌舞伎座初演）　二幕三場
十　二人紳士（喜劇、同　上）　一幕一場
十一　みだれ燒（小花吉五郎五月雨鄕の經緯、明治四十年一月歌舞伎座初演）　五幕十二場
十二　競馬春廼魁（社會劇、明治四十一年一月歌舞伎座初演）　三幕五場
十三　女歌舞伎（桐大内藏烏丸通廣卿、明治四十一年十月歌舞伎座初演）　四幕七場
十四　兒供と犬（喜劇、明治四十一年十月市村座初演）　一幕二場
十五　淸正公（豐臣秀頼加藤淸正、明治四十二年四月歌舞伎座初演）　一幕二場
十六　槍權三重帷子（おさい權三、近松の脚色、明治四十二年七月東京座初演）　三幕六場
十七　猫（滑稽淨瑠璃、同　上）　一幕一場

十八　經ヶ島娘生贄（淸盛の娘、明治四十二年十月歌舞伎座初演）四幕四場
十九　豐臣天秀尼（松ヶ岡天秀尼、明治四十三年一月歌舞伎座初演）四幕八場
二十　殿樣勘次（植木屋勘次、明治四十三年七月市村座初演）五幕八場
二十一　借兒（喜劇、同上）一幕二場
二十二　素人下宿屋（喜劇、明治四十三年八月歌舞伎座初演）一幕一場
二十三　兒煩惱（喜劇、明治四十三年十月市村座初演）一幕一場
二十四　間拔の泥棒（喜劇、明治四十三年十一月市村座初演）一幕三場
二十五　壽の門松（與次兵衞吾妻近松の脚色、明治四十四年一月歌舞伎座初演）三幕六場
二十六　吉野拾遺（楠正儀の妻伊賀の局、明治四十四年四月歌舞伎座初演）三幕四場
二十七　女浪人（松川おのぶ松浦小五郎、明治四十四年六月歌舞伎座初演）三幕九場
二十八　心中宵庚申（お千代半兵衞、近松の脚色、明治四十四年六月歌舞伎座初演）二幕二場
二十九　鎌倉武鑑（菊地三郎安達娘朝霧、明治四十四年十一月歌舞伎座初演）四幕六場
三十　寬永巷談（居合拔平五郎、明治四十五年一月市村座初演）四幕八場
三十一　白拍子祇王（平家物語、明治四十五年四月歌舞伎座初演）三幕四場

三十二　午前九時　（喜劇、明治四十五年七月新富座初演）　一幕一場
三十三　驛鈴　（社會劇、ベルスの鐵案、大正元年九月市村座初演）　二幕三場
三十四　名工柿右衞門　（陶工柿右衞門、大正元年十一月歌舞伎座初演）　三幕三場
三十五　筑紫太刀風　（藤原隆家の娘阿古女、大正二年一月歌舞伎座初演）　三幕四場
三十六　小豆島　（お妻の局佐々木信胤、大正二年四月歌舞伎座初演）　三幕四場
三十七　鼓の里　（鼓師勘兵衞弟子捨藏、大正二年六月歌舞伎座初演）　一幕二場
三十八　鎌倉合戰　（史劇啞娘の戀、大正二年六月本鄕座初演）　三幕六場
三十九　裏表心曲尺　（指物師清次、大正二年十月歌舞伎座初演）　二幕四場
四十　忠孝時雨の松　（松永彈正の娘松蟲林新六、大正二年十一月新富座初演）　三幕四場
四十一　たそや行燈　（たそや紋彌幇間露幸、大正三年二月歌舞伎座初演）　二幕五場
四十二　都一中　（都三中とその娘、大正三年三月歌舞伎座初演）　二幕四場
四十三　來山　（俳諧師來山、大正三年六月歌舞伎座初演）　一幕一場
四十四　都歌舞伎　（都傳内の妻、大正三年十一月歌舞伎座初演）　四幕四場
四十五　榊原高尾　（榊原頼母と三浦屋高尾・大正四年一月歌舞伎座初演）　三幕六場

四十六　蒔繪島臺（おその六三蒔繪師吉兵衛、大正四年一月歌舞伎座初演）　二幕六場

四十七　櫻みだれ（お浦彌七と不動助兵衛、大正四年二月歌舞伎座初演）　二幕三場

四十八　小松屋宗七（櫻みだれの改作、大正四年五月大阪浪花座初演）　二幕三場

四十九　增補山中平九郎（山中平九郎の舞臺、大正四年六月市村座初演）　二幕五場

五　十　豐公大佛供養（明智の娘盛姫、大正四年八月歌舞伎座初演）　二場四場

五十一　妹背の鹿笛（お三輪、大正四年十月歌舞伎座初演）　三幕四場

五十二　井筒業平河內通（生駒の前、大正五年六月歌舞伎座初演）　三幕三場

五十三　新曲安達ケ原（長唄所作事、大正五年八月歌舞伎座初演）　一幕二場

五十四　女武鑑（福島正則の妻、未上演）　二幕四場

五十五　初曆折枝梅（二人孤兒、未定稿）　六幕十一場

五十六　ぬえ退治（未定稿）　一幕一場

五十七　無線電話（喜劇、同上）　同上

五十八　啞娘（喜劇、同上）　二幕四場

五十九　鐵のちぎり（喜劇、同上）　一幕一場

大正十四年六月十五日印刷
大正十四年六月十八日發行
大正十四年六月廿日三版

『世話狂言傑作集』第五巻

定價金参圓

檢印

著作權所作者　榎本茂

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

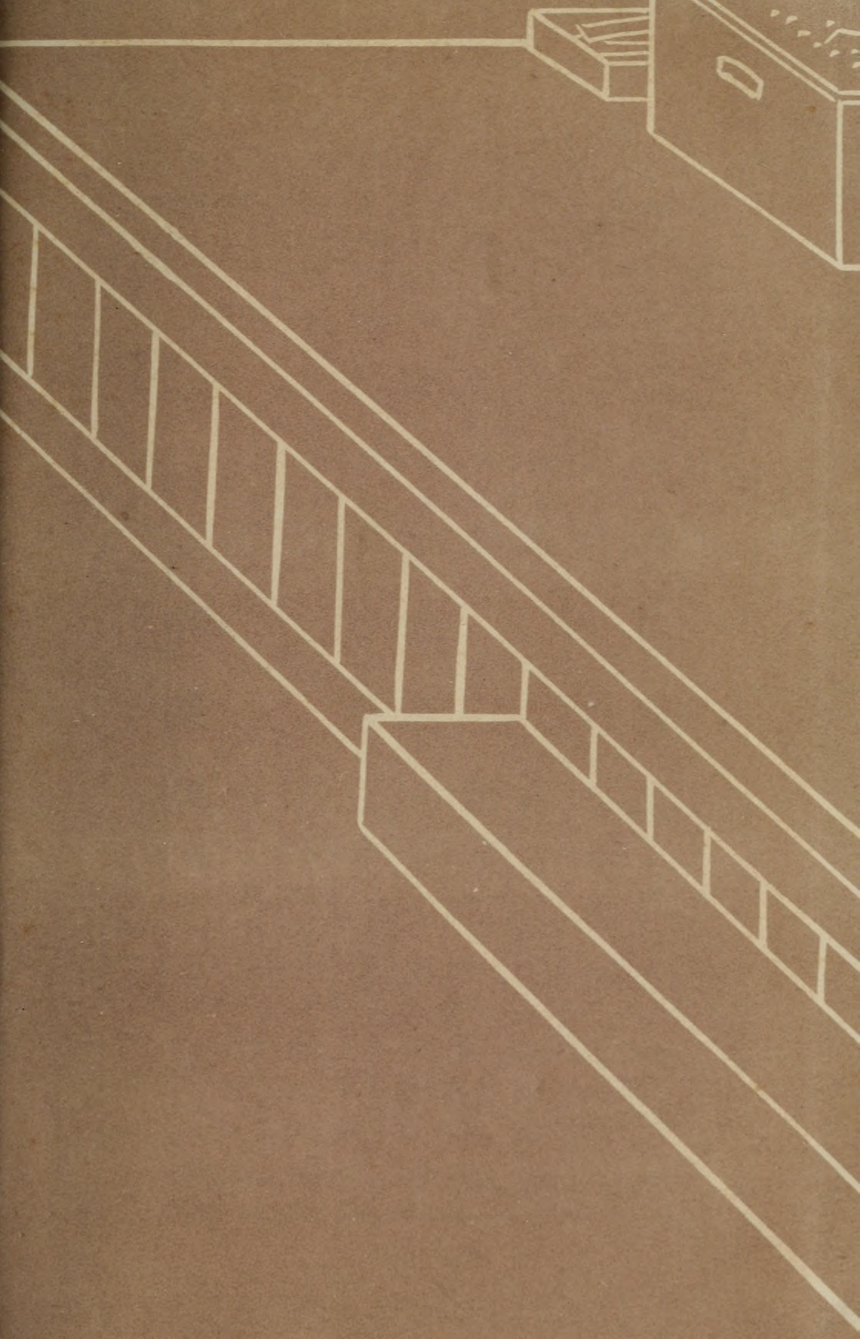
印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武

印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
（電話本局五一番
振替東京一六一七番）

文藝書類

著者	書名	種別	定價	送料
夏目漱石著	彼岸過迄	（長短篇集）	金貳圓	送料十二錢
同著	坊ちやん	（長篇作）	六十六錢	送料四錢
同著	草枕	（同）	七十三錢	送料六錢
同著	夢十夜	（短中篇集）	六十六錢	送料四錢
同著	滿韓處々	（長篇）	六十六錢	送料四錢
同著	思ひ出す事など	（長篇）	七十三錢	送料四錢
同著	倫敦塔	（中短篇集）	七十三錢	送料四錢
同著	切拔帖より	（長短篇集）	壹圓參拾錢	送料六錢
同著	文學評論	（研究書）	貳圓五十錢	送料十二錢



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8195